

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第7号

《研究ノート》

石器石材としての大川原産珪質岩
黒川 忠広

鹿児島県における中世掘立柱建物跡の基礎的研究
―県本土を中心とした集成と若干の考察―
相美 郁恵

鹿児島（鶴丸）城下町の計画性
東 和幸

志布志市高吉B遺跡出土品の分析結果について
調査課第一調査係, (株)パレオ・ラボ, (株)パリオ・サーヴェイ

鹿児島県内出土のガラス玉の化学分析
中井 泉, 柳瀬 和也, 松崎 真弓, 澤村 大地, 永濱 功治

地域の素材を活用した社会科の学習指導
―地域にある遺跡や遺物を活用した歴史の授業を通して―
宗岡 克英

《資料紹介》

万之瀬川下流の上水流遺跡出土東南アジア陶器の資料紹介
上床 真

収蔵遺物保存活用化事業
―堅野（冷水）窯跡の再整理を中心に―
調査課第一調査係

京田遺跡出土木簡のレプリカ製作
―墨書の再検討と実測図の修正―
調査課第二調査係

平成 25 年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2014. 6

『縄文の森から』第7号 目次

《研究ノート》

石器石材としての大川原産珪質岩

黒川 忠広・・・・・・・・ 1

鹿児島県における中世掘立柱建物跡の基礎的研究 ―県本土を中心とした集成と若干の考察―

相美 郁恵・・・・・・・・ 9

鹿児島（鶴丸）城下町の計画性

東 和幸・・・・・・・・ 25

志布志市高吉B遺跡出土品の分析結果について

調査課第一調査係

(株)パレオ・ラボ, (株)パリノ・サーヴェイ・・・・・・・・ 33

鹿児島県内出土のガラス玉の化学分析

中井 泉, 柳瀬 和也, 松崎 真弓, 澤村 大地, 永濱 功治・・・・・・・・ 45

地域の素材を活用した社会科の学習指導

―地域にある遺跡や遺物を活用した歴史の授業を通して―

宗岡 克英・・・・・・・・ 51

《資料紹介》

万之瀬川下流の上水流遺跡出土東南アジア陶器の資料紹介

上床 真・・・・・・・・ 57

収蔵遺物保存活用化事業 ―豎野（冷水）窯跡の再整理を中心に―

調査課第一調査係・・・・・・・・ 65

京田遺跡出土木簡のレプリカ製作 ―墨書の再検討と実測図の修正―

調査課第二調査係・・・・・・・・ 83

平成25年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87

石器石材としての大川原産珪質岩

黒川 忠広*

Siliceous rocks from Okawara as materials for stone implements

Kurokawa Tadahiro

要旨

遺跡から出土する石器石材は多彩である。良質な黒曜石や安山岩などは、遠隔地から運び込まれているものもあり、これらの石材を求めた人々の交流や交易を窺い知ることが出来る。小稿では、まず、鹿児島県曾於市財部町大川原周辺で産出される大川原産珪質岩を採取し、母岩を特徴ごとに分類を行って紹介する。このことで、石材を通じた人の行動やモノの流通・交易の解明につなげる基礎資料とする。次に、縄文時代早期の遺跡出土資料と比較を行い、従来漠然と言われていた縄文時代早期における石器石材としての大川原産珪質岩の利用について明らかにした。

キーワード 石材産地 大川原 珪質岩

1 はじめに

遺跡から出土する石器は、様々な石材から作られ、これらの産地を調べ網羅することにより、人の行動やモノの流通、交流や交易を窺い知ることが出来る。

筆者は、大隅地方で東九州自動車道建設に伴う発掘調査に従事し、多くの石材を実見する機会を得ている。これらの遺跡からは、腰岳産や姫島産の黒曜石や良質な安山岩など、遠隔地より運び込まれた石材も数多く出土し、当時の人々の行動や交流の一端が窺える。その一方で、鹿児島県産と思われる石材も豊かであり、多様な石材選択に人々の柔軟性も窺える。だが、これらの内、原産地が踏査や分析により明確になっている石材は一部に限られ、産地不明の石材も数多く存在している。筆者は、この問題を解決するために、河川を主に踏査して石材を採取してきている。小稿ではこれを紹介し、今後の石材研究の一助としたい。

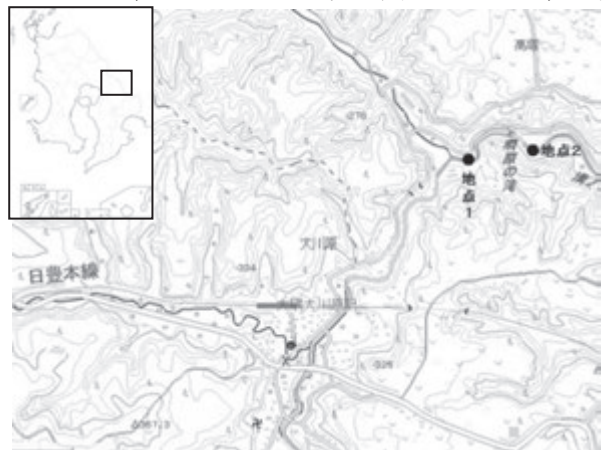
2 採取地点と石材の特徴

今回、石材採取を実施した地点は、宮田栄二氏がチャート原産地として紹介している曾於市財部町大川原である(宮田 2002)。この大川原は、溝ノ口川によって形成された大川原峽の川原であり、その溝ノ口川は大淀川の支流である。少し下流には、桐原の滝があり、曾於八景として著名な場所で、この川は、庄内川を経て大淀川に合流する。その南方には横市川があり、これも都城盆地で大淀川に合流する。なお、宮田氏によると明治 14 (1881) 年第二回内国勸業博覧会出品の火打石の産地の一つに日向国諸県郡横市村があり、「石器として使用可能な石材が眠っている可能性」が指摘されている(宮田 2003)。

今回、旧横市村を流れる横市川についても踏査を行ったが、石英塊も含め珪質岩を採取することは出来なかった。

はじめに、採取地点を第 1 図に示す。地点 1 は大川原キャンプ場前。地点 2 は、桐原の滝下流の川原である。大川原から上流の栗谷川と木和田川についても採集を試みて踏査を行ったが、目的とする石材は採集できなかった。このことを鑑みると、珪質岩は霧島市黒石岳北東部斜面には良質なものは産出されず、大川原より下流に存在していることが考えられる。

次に、採取石材の大きさは、地点 1 が拳 1 個程度のものが多く、地点 2 は、拳 1 から 2 個程度のものが採取出来る。そして、地点 2 周辺のほうが地点 1 よりも多く採取出来る。また、次に述べる特徴の石材 I 類から V 類の全てを両地点で採取する事が出来た。このことから、石材としてのバリエーションが多いことが予見される。次に、採取石材の名称について述べていきたい。今回の採取地点は、宮田氏によって既に紹介されており、石材



第 1 図 採取地点 1・2 の位置

*鹿児島県教育庁文化財課



写真1 地点1の様子



写真2 地点2の様子

の特徴は、「川原で採集できるチャートは、剥離面が光沢がなく比較的ざらついた面となるのが特徴」であると述べ、「前原和田遺跡の、旧石器時代石器に使用されているチャートは、肉眼観察によると距離的に近い大川原産と推定」されている(宮田 2000)。今回は、この石材を珪質岩として報告していきたい。その理由は、チャートと珪質頁岩について、両者の区別が肉眼観察では困難な点である(註1)。母岩の状態では比較的判断し易い資料もあるが、剥片ともなると容易ではなく、判断する立場では、両者の狭間で判断は揺れ動く。そのため、小稿では珪質岩を定義し、広義の意味で珪質岩という名称を用いていきたい。よって、小稿で述べる珪質岩とは、珪質すなわちシリカ(SiO_2)に富んだ堆積岩を指す。チャートであるか否かの境界は漸移的で、シリカ含有率90%以上のものが一般的にチャートに分類される。だが、両者を肉眼で区別することは難しい。色調に関しても多様である。このため、大川原周辺で採取した石材に関しては、チャートと珪質頁岩とをあえて分類せず、同一産

地の珪質に富んだ堆積岩として一括りにしたい。重要なことは、チャートであれ珪質頁岩であれ、大川原周辺を原産地に持つ遺物群を同定することであり、このために必要な情報を掲載する目的を優先させた。よってこれ以降、大川原周辺で採取したこれらの石材について、大川原産珪質岩と称して述べていきたい。

さて、大川原産珪質岩に共通する特徴を述べたい。まず、節理が発達し白色の筋が不規則に入る。風化面は白色から乳白色を呈する。次に、割れ口は光沢があまりなく粒状感があり、ざらついて見える。この特徴を基本とし、この他、採取した石材を幾つかの特徴ごとに分類することが出来た。なお、付言しておくが、これは採取した石材のみによるものであり、採取資料が増加すれば必ずとそのバリエーションも増加する点は留意したい。

I類は、自然面の色調は白色から乳白色で、部分的に青灰色が見られる。剥離面はざらつき、黒色の強い青灰色で白色の節理が不規則に入る。両面共に、節理には茶褐色の薄い膜状の不純物層が入る。

II類は、自然面がI類に類似し、白色の縞模様が入る。剥離面は、あまりざらつかずに青灰色で、白色の節理が不規則に入る。さらに、青灰色を基調とした濃淡のある縞模様が見られ、部分的には乳白色を呈する縞模様もある。両面共に、節理には茶褐色の薄い膜状の不純物層が入る。I類と比べて黒色が弱く灰色味が強い。この類は、今回の踏査で最も多く見られた石材である。

III類は、自然面が白色から茶褐色味を帯びる。自然面と剥離面との境には、より茶色の強い薄い層が見られる。剥離面は、茶色味がかかった青灰色で白色の節理がわずかに筋状に入る。I・II類にも見られる茶褐色の不純物層は明瞭で、この部分の珪質は弱い。印象として、緑色を混合したような色調であり、茶緑色とでも表現しておきたい。

IV類は、自然面の色調は白灰色からやや黄色みを帯びた白灰色で、黒や茶の粒々が観察できる。剥離面は、白・青灰色の筋が入り、鉄錆状の薄い膜が部分的に層状に入る。今回採取した石材の中で最も質が悪い。

V類は、自然面の色調はI・II類に近い乳白色を呈する。剥離面は青灰色で、節理の筋は細くてあまり目立たない。このためであろうか、緻密な印象がある。良質な部分を有し、表面にある風化面の乳白色と剥離面の緻密な青灰色とのコントラストが強く感じられる。

3 周辺遺跡の石材分類

ここでは、大川原周辺の発掘調査された遺跡での石材分類について紹介してみたい。

(1) 土合原遺跡(末吉町教委 1990)

縄文時代早期の石鏃製作跡が確認された遺跡である。報告書では、チャートを5つに分類している。淡緑色の

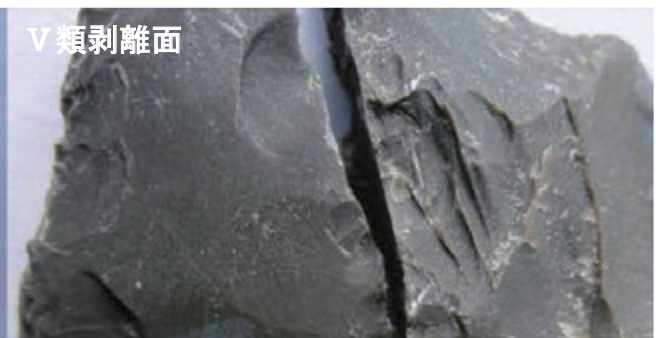
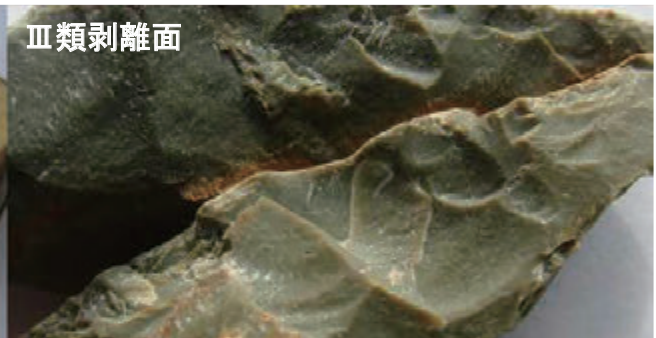
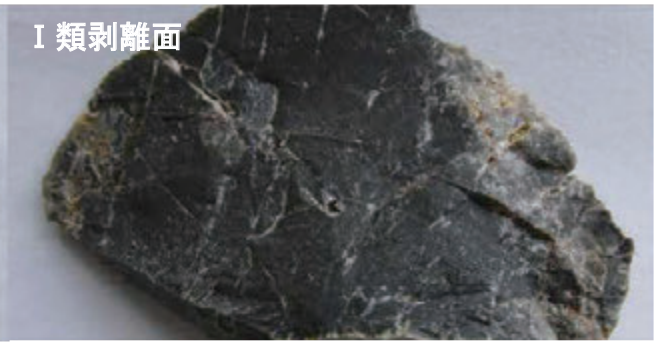


写真3 I～V類自然面と剝離面の状況(採集資料による)

もの、透明感のある灰白色、光沢のある緑灰色、光沢の無い灰色、淡緑色に黒色が筋状に走るもので、さらに黒色の頁岩もあるとされる。

(2) 前原和田遺跡 (鹿埋セ 2002)

頁岩は細分されていないが、チャートはAからDに4分類されている。Aは青灰色を呈し、黒い縞模様が見られる。やや質が悪い。Bは、白っぽい色調を呈し、濃紺色の線が無秩序に見られる。白と紺の割合は不安定である。Cは、濃い青灰色を呈し、白い縞模様が若干見られる。良質。Dは、緑色を呈し、フィッシャーなどに黄色い成分の付着が認められる。なお、報告書第39図71はチャートで73は頁岩と、同様の石材であるが僅かな質の違いで異なる類に属するなど、両者を判断することの難しさが表れている。

(3) 城ヶ尾遺跡 (鹿埋セ 2003)

チャートは、淡緑色～白色の節理が目立つものと、白色に黒色の筋が入る良質の石材がある。

頁岩は、節理を多く内包する淡緑色頁岩や青灰色の珪質頁岩、光沢のない硬質の頁岩を包括している。また、おおむね淡緑色の節理を多く内包する頁岩が主体を占めているとされている。

(4) 桐木耳取遺跡 (鹿埋セ 2005)

頁岩をI～IV類に細分している。このうち珪質はII類に属し、4つに細分される。SH2Aは粒状感がなく、油脂光沢が強いもの、SH2Bは粒状感がなく、油脂光沢がほとんど無いもの、SH2Cは粒状感があり、油脂光沢がほとんど無いもの、SH2Dはやや粗雑で節理が発達するもの、と分類されている。なお、縄文時代早期の石器に関して、この分類を観察表などで確認することが出来なかった。

(5) 蕨野B遺跡 (鹿埋セ 2007)

頁岩とチャートをそれぞれ3種類に分類している。SH1は珪質分に非常に富み、油脂光沢のある頁岩。SH2は珪質分にはやや富むが油脂光沢があまりない頁岩。SH3は珪質分がほとんどなく無光沢で、節理は発達せず緻密で良質のもの。いわゆる硬質頁岩。

4 遺跡出土の大川原産珪質岩

それでは、大川原産珪質岩がどの程度利用されていたのかを見ていきたい。対象地域は大隅半島を南北に走る東九州自動車道建設に伴い発掘調査された遺跡群及び志布志から都城を目指して建設中の地域高規格道路建設に伴い発掘調査された遺跡群で、時代は薩摩火山灰層とアカホヤ火山灰層に挟まれた層のうち、P11がある場合はその下位で出土した資料としたい。この場合、南九州貝殻文土器から押型文土器、平椀・塞ノ神式土器の一部までを含むことになり、時期の絞り込みとしては不十分である。報告書によっては層位を意識した掲載を行っている場合もあるが、今回は、大川原産珪質岩を確認する

ことを優先した(註2)。

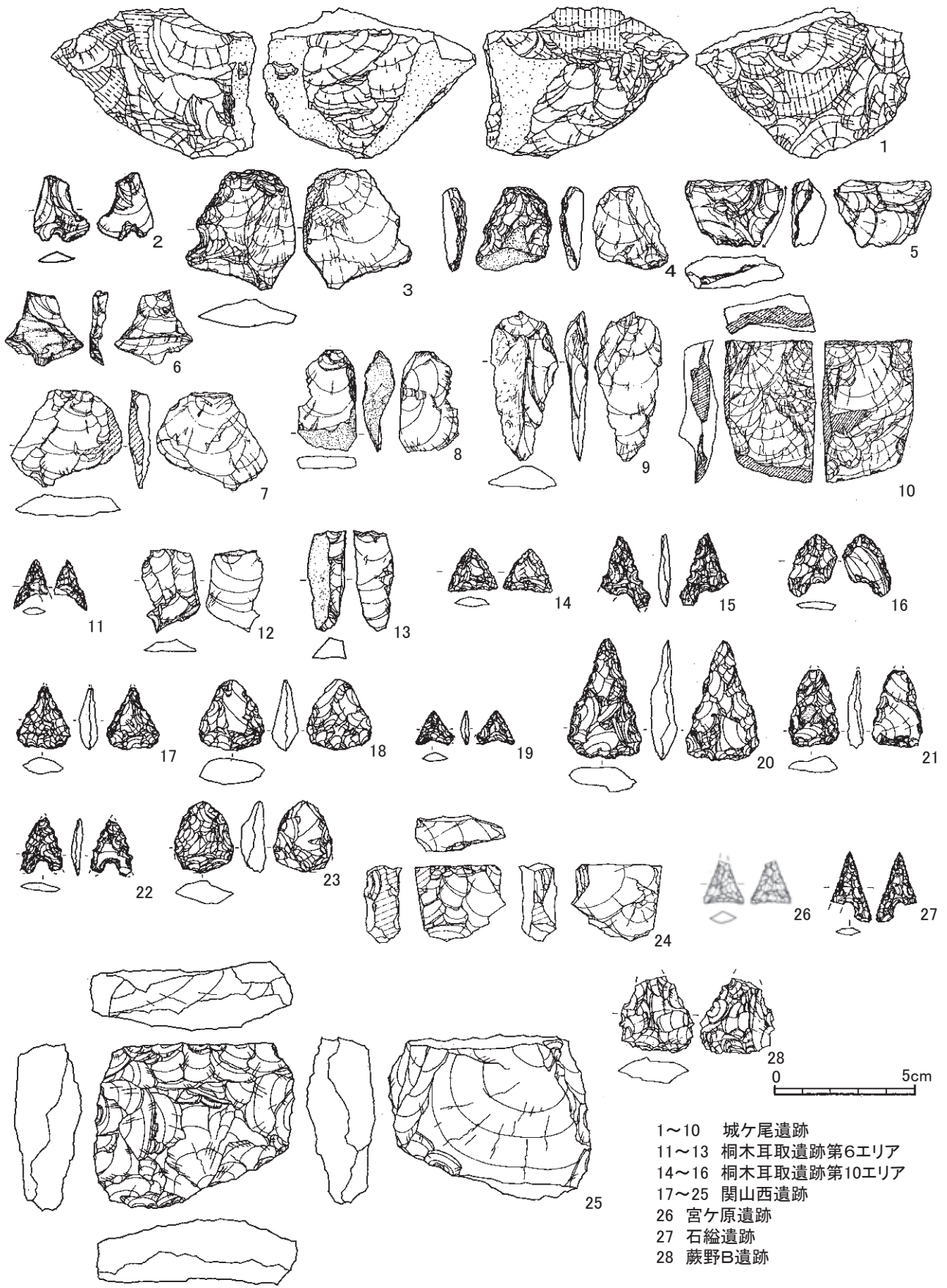
第2図は実見及び分析を行った遺跡の位置図である。順に紹介していきたい。

霧島市城ヶ尾遺跡では、VIII層から大川原産珪質岩II類の石核が出土している(第3図1・報第390図33)。打面を転移させながら剥片剥離を行っている。また、VI・VII層出土石器では石鏃の他に挟入石器(第3図2・3・報第414図386・388)やスクレイパー(第3図4・報第416図399)も出土している。石器製作をうかがわせる資料として、剥片も図化されており、大川原産珪質岩の剥片も見られる(第3図6～10・報第446図593・596・597・599・602など)。剥片に関しては、当然ながら未掲載資料も膨大で、この中にも大川原産珪質岩は多量に含まれる。さらに、これらの中には原石を荒割りしたと思われる大振りの剥片も見られ、節理が多い石材のため、無秩序に剥片剥離を行わざるを得ない特徴が出土遺物からも窺える。出土土器から、ある程度の時間幅が存在するが、縄文時代早期の石器製作跡としての様相も窺える遺跡である。なお、剥片類には大川原産珪質岩に類似するが、剥離面のざらつき感や光沢感が若干異なる資料も多く、あるいは、城ヶ尾遺跡周辺に未発見の珪質岩産地があるかもしれない。

曾於市桐木耳取遺跡では、第IV文化層第6エリアに石鏃1点(第3図11・報第446図1209)、第10エリアに3点見られた(第3図14～16・報第482図1632・報第484図1676・報第485図1710)。全体量からするとごく僅かといえる状況である。



第2図 遺跡位置図



第3図 遺跡出土の大川原産珪質岩

曾於市関山西遺跡では、Ⅶ層から石鏃7点（第3図17～23・報第58図6・7・13・19，報第59図35，報第60図44，報第61図67），石核2点（第3図24・25・報第64図89・報第65図91）が確認できた。報告書に掲載された石鏃は、Ⅷ層21点，Ⅶ層47点，Ⅵ層1点の69点で、Ⅶ層出土石鏃の石材別点数は黒曜石14点，チャート24点，頁岩6点，メノウ系3点である。大川原産珪質岩製の7点の石鏃はチャート24点に含まれ、29.1%が大川原産珪質岩ということになる。だが、未報告の石鏃もいくらか見られることから、実際の割合はこれより少なくなる。さらに、Ⅰ類からⅣ類製の石鏃が確認でき、産地でのバリエーションが石器石材としても確認できる。石核はⅡ類である。片面を中心に求心状に剥片を剥離している。この他にも、未報告の剥片中に大川原産珪質岩を確認できた。ただし、剥離面に光沢があり油脂状を呈する非大川原産珪質岩の方が多い状況であった。

曾於市宮ヶ原遺跡Ⅵ層から、Ⅱ類の石鏃が1点出土している（第3図26・報第72図517）。

鹿屋市石縊遺跡では、Ⅱ類の石鏃が1点確認できた（第3図27・報第27図48）。また、水晶製の石鏃があり、高隈周辺で水晶が産出されることを考えると、地元石材の利用事例の一つとして注目される（註3）。

志布志市蕨野B遺跡では、石器の出土状況から4つのエリアが設定され、このうちエリア1で大川原産珪質岩Ⅴ類製の石鏃（註4）が1点確認できた（第3図28・報第107図440）。この遺跡は、報告書でも指摘されているように、チャートの利用頻度が高いようである。剥片類を実見したが、大川原産珪質岩剥片はⅤ層資料に数点しか確認できず、剥離面に光沢があり油脂状を呈するものや、白色や黒色あるいは紺色などの縞模様を有する非大川原産珪質岩がはるかに多く出土している。

このように見ていくと、旧石器時代に限らず縄文時代早期においても大川原産珪質岩は石器石材として用いられていたことがわかる。また、遺跡から石核が出土するなど、石材として十分認識されていたことも明らかとなり、城ヶ尾遺跡や関山西遺跡のように、大川原産珪質岩を用いた石器製作遺跡の存在も確認できた。今回は、一部の遺跡を抽出して大川原産珪質岩製石器の有無を確認する資料調査を行ったが、この調査をより広範囲に行うことで、大川原産珪質岩の出土分布図はより具体的に当時の様相を示すものと思われる。

さて、大川原産珪質岩の次に同様の石材産地としては、球磨川流域がある。今回の分析では、大川原以外として一括して取り扱ってきたが、球磨川産のものは、大川原産と比べ珪質が強く、一般的にチャートで知られる。特徴は、白色と黒色あるいはその中間色で構成される縞模様が見られる点である。また、大川原産珪質岩と比べて剥離面は光沢があり油脂状を呈しており、比較的識別が

容易である。この産地は、広く人吉周辺あるいは球磨川流域と言われている。人吉周辺や球磨川流域というと、鹿児島県から離れたイメージがあるが、同様の石材は鹿児島県に隣接する桑ノ木津留周辺でも採取する事が可能であり、「桑ノ木津留一帯などで珪質岩が産出」とある指摘に符合する（藤木2004）。確認のために、石材採取を行ったものが写真4である。飴色の黒曜石として特徴が述べられる黒曜石と共に採取することが出来た。また、周辺からは石英塊や珪質岩も産出し、石器石材産地としての桑ノ木津留は豊かである（写真5）。いずれにせよ、東九州自動車道関連遺跡群から見れば、霧島連山の向こう側に位置する産地である。原産地について気になる点としては、関山西遺跡や蕨野B遺跡のようにいわゆるチャートが多量に出土する遺跡で、剥離面にやや光沢があるがざらつき感があまりない大川原産珪質岩に類似する資料が見られることである。未発見の石材産地がこれらの遺跡周辺に眠っていることを暗示しているのかもしれない。



写真4 桑ノ木津留採取地点の様子

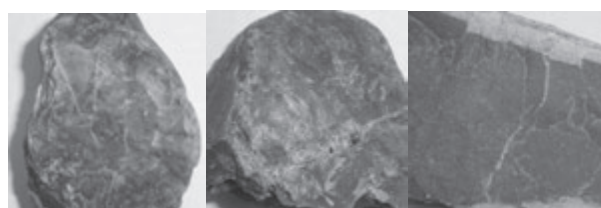


写真5 桑ノ木津留の採取石材

5 おわりに

溝ノ口川流域で採取した大川原産珪質岩について紹介してきた。今回、採取した資料をⅠ～Ⅴ類に分類し、各遺跡の縄文時代早期該当層の出土資料を実見した結果、遺物においてもⅠ～Ⅴ類を確認することが出来た。また、石核や剥片が遺跡から出土しており、石器製作が実際に行われている点、すなわち、縄文時代早期においても石器

石材として利用されていたことが明らかとなった。だが、周辺には同様の石材で、且つ良質な石材産地が未発見のまま存在していると思われる。筆者が改めて言うまでもなく、今回の踏査だけでは十分とは言えない。例えば、緑色の強い珪質岩による製品も各遺跡出土資料中に見られたが、これに該当する石材を採取することは出来なかった。大隅周辺に存在するのか、あるいは球磨川などの遠隔地に産出するのか、今後の課題である。

大隅半島には、垂水市小浜や錦江町長谷（旧大根占町長谷）の黒曜石、鹿屋市高隈山麓周辺の水晶や瑪瑙・玉随系の産地がある。当該地域における縄文時代の調査では、大分県姫島産の黒曜石が出土し、立神勇志氏により「鹿児島県の東側及び種子島に分布の偏りがある傾向」と指摘もされている（立神 2002）。また、石材に関して宮田氏は、「黒曜石以外の石材も同様に原産地の追求が実施されることで、石材と集団の関係がいっそう明確」になると述べ、「さらに当時の集団の行動領域や石材の供給・消費・交換など石材研究を深めることで、当時の生業の解明に一步步近づいていく」という指摘がある（宮田 2002）。より広域的な視点による流通も念頭に置きつつも、在地産石材の利用率から見る中・小地域的な石材流通を知る上で半島という地形は有効な地域でもある。今後も踏査を続け、当時の様相解明につなげていきたい。

筆者と大川原産珪質岩との出会いは、曾於郡大崎町天神段遺跡でのことであった。旧石器時代から中・近世に至るまでの複合遺跡で、夥しい数の遺構や遺物が出土する中で、白色の風化面を有するチャートのような珪質頁岩のような石材が目にとまった。以来、これらの産地について宮田氏の論稿を参考にしながら、河川を踏査して小稿を完成させることが出来た。不勉強な点をご指摘いただき、今後には生かし精進していきたい。

小稿執筆に際し、成尾英仁氏、長野眞一氏、寒川朋枝氏、馬籠亮道氏よりご教示をいただいた。また、石材採集には、我が子の協力も得た。末筆ではあるが感謝し校了とした。

【註】

- 1 肉眼観察については、和田るみ子氏が「色調や粒度、珪質化の度合い、層序、節理など外観的特徴を要素化できることから、現時点で考古学に取り入れられる堆積岩の原産地分析の方法はこれが最良と思われる」と指摘している（和田 2009）。筆者も小稿執筆に際してはこの立場をとる。
- 2 本来であれば、石器組成や石材別出土点数などの基礎資料を基に、構成割合などを示さなくてはならない。だが、これらの分類・選別作業や報告書掲載の方法は一律でなく、報告書から出土点数等を読み解くことが出来なかった遺跡もあつ

た。今回は、これらについて確認する十分な時間が無く断念した結果となったが、自戒の念を込めて、こういった基本的なデータの掲載方法などについて今後十分に考えなくてはならない。

- 3 高隈周辺で水晶が産出され石器石材として利用されている点は宮田氏が既に指摘されている。筆者も、高隈周辺の河川で複数の採取地点を確認している。これらの紹介は稿を改めて行う予定である。
- 4 報告書では、石鏃とされているが、重量があり大振りな剥離で成形されていることから尖頭状石器の可能性もある。

【引用・参考文献】

- 立神勇志 2002 「鹿児島県の縄文時代早期における姫島産黒曜石製石器出土遺跡の紹介」『鹿児島考古』第 36 号
鹿児島県考古学会
- 日隈健一 1991 「9-1 財部町」『鹿児島県 地学のガイド(下)』
鹿児島県地学会
- 藤木 聡 2004 「縄文時代の矢岳越え」『南九州縄文通信』
No.15 南九州縄文研究会
- 宮田栄二 1994 「鹿児島県における石器の材質」『大河』
第 5 号 大河同人
- 宮田栄二 2002 「鹿児島県の非黒曜石原産地について」
『Stone Sources』No.1 石器原産地研究会
- 宮田栄二 2003 「火打石と石器石材」『Stone Sources』No.2
石器原産地研究会
- 和田るみ子 2009 「南九州市神殿宮ノ上を原産地とする石器石材とその分布に関する予察」『南九州縄文通信』No.20
南九州縄文研究会・新東晃一代表選歴記念論文集刊行会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002 『前原和田遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (39)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『城ケ尾遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (60)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 『桐木耳取遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (91)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007 『葦野B遺跡ほか』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (109)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 『関山西遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (126)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011 『石縊遺跡ほか』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (164)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 『宮ケ原遺跡ほか』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (173)
- 末吉町教育委員会 1990 『土合原遺跡』
末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書 (9)

鹿児島県における中世掘立柱建物跡の基礎的研究

— 県本土を中心とした集成と若干の考察 —

相美 郁恵[※]

Basic study of medieval embedded-pillar building in Kagoshima Prefecture

Sagami Ikue

要旨 近年、鹿児島県内では中世の掘立柱建物跡の検出例が増加している。ところが現在まで鹿児島県内全域を対象とした中世掘立柱建物跡の研究はあまりなされていない。そこで本稿では中世掘立柱建物跡の基礎的研究として、鹿児島県本土を中心とした集成と分類を行った。その結果、鹿児島県本土においてもっとも普遍的な平面プランは、側柱のみで2間×3間の底がないもので、それらの面積は17~23 m²がもっとも多いことがわかった。また、中世の集落跡が確認され、掘立柱建物跡が数多く検出されている薩摩半島北部と南部を比較することで、地域によって平均寸法に差が認められることもわかった。

キーワード 鹿児島県 中世 掘立柱建物跡 集成

1 はじめに

平成23年度、曾於郡大崎町天神段遺跡の発掘業務に携わり、様々な時代の遺物や遺構を数多く目にする機会に恵まれた。

その中でも、古代~中世と考えられる掘立柱建物跡を、多数の柱穴群から検出できたときの感動はひときわ印象に残っている。このことをきっかけに、中世の建物や集落の様相に興味を覚えるようになった。

そこで本稿では、鹿児島県本土における中世の掘立柱建物跡を規格・規模などの点から分類・集成し、平面プランや面積の比較を行いたい。また地域によってその様相に違いがあるのかどうかを検討してみたい。

2 研究略史

近年、南さつま市芝原遺跡や上水流遺跡、南さつま市・日置市農業開発総合センター遺跡群、日置市市ノ原遺跡第3・4地点など、鹿児島県内では中世の掘立柱建物跡の検出例が増加している。

ところが、これら掘立柱建物跡を対象とした研究は少ない。以前、全国の掘立柱建物跡の検討をする際に、鹿児島県内の遺跡を取り上げた宮本長二郎氏の研究(宮本1998)や、各々の調査報告書の中で、時期や主軸方向などの検討がなされている程度である。つまり、県内全域を扱った中世掘立柱建物跡に関する研究はあまりなされていないのが現状である。

なお、古代の掘立柱建物跡については、上床真氏が集

成と分類を行った研究がある(上床2006)。また、中世において掘立柱建物跡とともに集落を構成する竪穴建物跡に関しては、堂込秀人氏の研究がある(堂込1999)。

3 研究の方法

まず、平成24年度までに刊行された鹿児島県本土の報告書をもとに、中世の掘立柱建物跡が検出されている遺跡を抽出し、遺跡ごとに棟数を集成した(第1表)。

報告書によっては、建物跡の時期について「古代~中世」、あるいは「中世~近世」とされるものもあったが、それらも示してある。

次に、報告書において平面プランが明記されてあるものを抽出し、計測値を第2表に示した。基本的には報告書に掲載されたプランを用いたが、平・断面図をもとに建物の規模を再検討したものもある。なお、掘立柱建物跡の遺構記号は「SB」に統一した。

「梁行」・「桁行」の実長はそれぞれ2本の長さの平均を出し、柱間の長さは、間数で割った。「方向」は筆者が報告書から判断し、「方位」は報告書から引用した。「柱穴状態」のピットの径と深さは、報告書から判断できるものはその平均値を計測し、判断できないものは記載された情報を示してある。なお、報告書から情報が得られなかったものは空欄にしてある。

最後に、平面プラン・間数・柱穴状態・面積などの項目ごとに検討を行う。さらに、掘立柱建物跡の地域差の有無についても検討を行う。

なお、本稿における分類方法や分類項目については宮崎県都市における中世掘立柱建物跡の類型化を行った

第1表 鹿児島県本土における中世掘立柱建物跡 検出遺跡一覧 (2013年度刊行分まで)

市町村名	遺跡名	棟数	備考
鹿児島市	湯屋原	15	古代～中世
	北麓	1	
	谷山城跡E	10	
	地頭飯屋跡	5	
	加栗山	2	
指宿市	苦辛城跡	27	
	橋幸丸川	2	
南さつま市	村原(祐ノ原)	3	
	上ノ城	8	
	上加世田 I	4	
	山野原	1	
	小園	4	
		1	
	西之齋	1	
	白糸原	3	
	馬塚松	24	
	市堀	8	
	諏訪幸田	11	
	持林松	4	
	上水流	32	
	諏訪脇	12	古代～中世
	油免	1	
	渡畑	1	中世～近世
	芝原	33	
南九州市	平山城	2	
	林川(南林川)	1	
	知覧城跡	4	
	馬場田	2	
	川辺郷地頭飯屋跡	4	
	古市	1	古代～中世
日置市	赤井田A	5	
	伊作城跡	1	
	山ノ脇	10	
	上ノ平	3	
	古里	12	
	吹上小中原	9	
	向橋城	3	
	市ノ原第4地点	27	古代～中世
	市ノ原第3地点	19	古代～中世
		3	
いちき 串木野市	串木野城跡	3	
	鍋ヶ城跡	1	
	安茶ヶ原	20	
薩摩川内市	梶城跡	9	
	鶴ヶ岡城跡	5	
	妻之浦貝塚	1	
	成岡	11	古代～中世
	西ノ平	14	古代～中世
	上野城	32	
	大島	1	
	霧井田	5	古代～中世
	川登	15	中世～近世
	上新田	2	
	山仁田	3	中世～近世
出水市	山口	37	
	松尾城跡	2	
	大塚	10	
阿久根市	外島	4	
	上野畑・広段	2	中世～近世
伊佐市	寺山・牟ノ宮	2	
	平泉城跡	10	
	馬場A	1	
	辻町 I	2	
	新平田	24	
	下鶴	14	中世～近世
さつま町	松尾城及び宗功寺2	2	
	諏訪原	1	
	寺屋敷	1	
	宮ノ前	1	
	山崎野町跡入地点	1	古代～中世
給良市	虎居城	19	
	外園	25	
	小瀬戸	2	
	保養院	4	
	高井田	1	
霧島市	市頭A・C	23	
	中福良	1	
	山神	4	
湧水町	中尾田	8	
	山崎B	7	古代～中世
垂水市	宮下	1	
	中ノ原	3	
鹿屋市	川の上・中ノ丸	4	
	領家西・天神平溝下	9	中世～近世
肝付町	高山城跡周辺地	3	
	田平下	1	
曾於市	榎木耳取	4	
	間山西	2	古代～中世
	狩俣	5	
	長田	4	
志布志市	前谷	4	
	志布志城跡 II	2	
	志布志城跡 3	3	
	県本土検出棟数合計	700	

外山隆之・原田亜紀子両氏の研究(外山・原田 2004)に拠るところが大きい。

4 分類と集成

(1) 掘立柱建物跡の分類

集成をもとに、平面プランから掘立柱建物跡を以下のような項目で分類した。

ア) まず、身舎の柱穴配置状態から、I～III類に分類する。

I類：身舎の柱穴が側柱のみの掘立柱建物跡

II類：身舎の柱穴が側柱とその内側に持つが、いわゆる総柱にはならない掘立柱建物跡

III類：身舎の柱穴が側柱と内側すべてに配置されるいわゆる総柱掘立柱建物跡

イ) 間数は現状での柱間を数え、カッコ内に梁・桁の順で表記する。

ウ) 最後に庇の有無や面数から a～e 類に細分する。

ただし、庇の付く位置が梁面か桁面かどうかは今回考慮しない。

- a：庇が存在しない
- b：庇が1面に付く
- c：庇が2面に付く
- d：庇が3面に付く
- e：庇が4面に付く

具体的な表示例として、「側柱のみで2間×3間の庇無し建物」は「I(2*3)a」となる(第1図参照)。

(2) 集成と検討

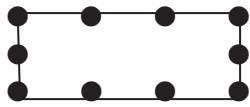
上記の方法で第1表の掘立柱建物跡を分類すると、報告書内でプランがはっきり示されていることで、分類できた掘立柱建物跡が、全700棟のうち638棟であった。この638棟を対象に、各項目について検討を行いたい。

柱穴状態については、側柱のみで構成されているI類が最も多く(542棟)、全体の84.9%を占めた。内側に柱穴を持つII類は53棟(8.3%)、総柱となるIII類は43棟(6.7%)であった(第2図)。

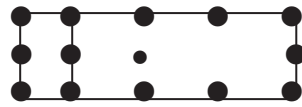
間数については、2間×3間が最も多くて305棟になり、全体の47.8%と約半数を占める。次いで2間×2間が105棟(16.4%)、そして1間×2間が66棟(10.3%)と続くが、残りは少数となる(第3図)。

庇の有無については、庇がないa類が520棟と最も多く、81.5%を占める。次いで1面庇のb類が63棟(9.8%)、2面庇のc類が29棟(4.5%)、3面庇のd類が12棟(1.9%)、4面庇のe類は14棟(2.2%)であった(第4図)。

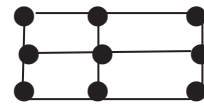
以上の結果から、鹿児島県本土における中世の掘立柱建物跡でもっとも多い平面プランは、側柱のみ(I類)で2間×3間(2*3)の庇がないa類、すなわちI(2*3)aとするものであり、棟数は217棟となり、34%で



I 類 2×3 庇なし→I (2×3)a

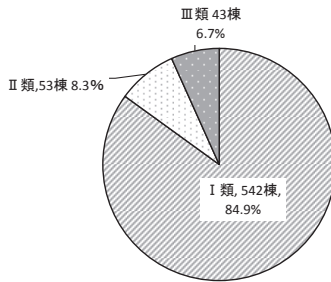


II 類 2×3 一面庇→II (2×3)b



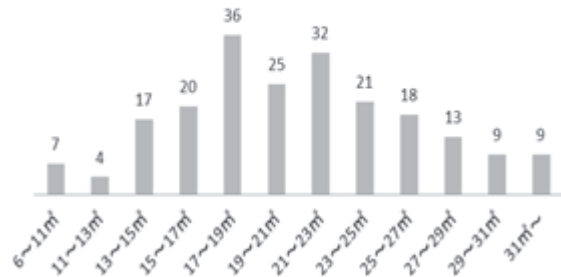
III 類 2×2 庇なし→III (2×2)a

第1図 掘立柱建物跡平面プラン分類図

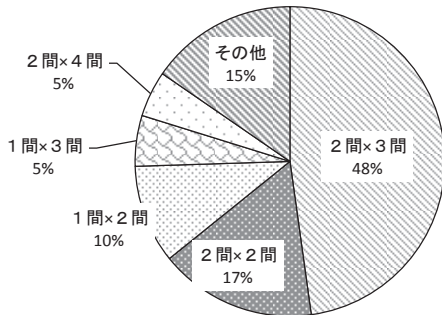


第2図 柱穴配置状態比率

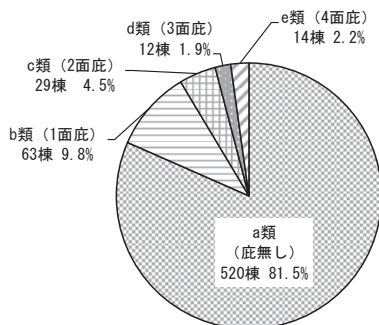
グラフ1 I (2*3)aタイプの面積表



第5図 I (2*3)aタイプの面積細分表



第3図 間数比率



第4図 庇の有無比率

あった。

次に、この最も多い平面プランであるI (2*3)aの中から面積が割り出せた211棟を2㎡ごとに分類してみた(第5図)。

その結果、同じ平面プランであるにもかかわらず、面積にばらつきがみられることがわかった。最小値は日置市市ノ原遺跡第3地点SB6の6.5㎡、最大値はさつま町虎居城跡C地点SB8の42.78㎡であり、平均値は20.52㎡であった。また、17~23㎡が最も多いことが看取できる。

ただし、これら掘立柱建物跡が検出された遺跡は、集落遺跡もあれば山城も含まれており、遺跡の性格は考慮されていない。

また、都城市における同じ平面プランの面積も15~27㎡が最も多く(外山・原田 2004)、鹿児島県本土の結果と類似していることがうかがえる。

5 考察

上述したように、今回集成した掘立柱建物跡には集落を構成するものもあれば、山城のものもある。また、台地部に立地するものもあれば平野部に立地するものもあり、一つの遺跡の中で10棟以上検出されたところもあれば、1棟のみの遺跡もある。そのため、項目をしぼって分析を行うことで、より細かな様相が見えてくると考える。

そこで今回は、掘立柱建物跡における地域差の有無についての予察として、中世の集落跡が確認されており、掘立柱建物跡が数多く検出された薩摩半島北部（北薩）と薩摩半島南部（南薩）を比較してみたい。

北薩では伊佐市大口の大口盆地に位置する馬場A・辻町1・新平田・下鶴の四遺跡を取り上げる。

南薩では日置市吹上町から南さつま市金峰町にかけて広がる農業開発総合センター遺跡群（以下農業センター遺跡群）の中から、中世の掘立柱建物跡が検出された古里・吹上小中原・馬塚松・市堀・諏訪牟田・諏訪脇の六遺跡を取り上げる。また、同じく南薩の南さつま市加世田から金峰町にかけて広がる万之瀬川流域遺跡群の持躰松・上水流・渡畑・芝原・村原（柗ノ原）・上加世田・白糸原の六遺跡についても検討する。

なお、新平田遺跡の報告書の中で行われている掘立柱建物跡の時期差についての検討（堂込 1997）と農業センター遺跡群における古代から中世における遺構の軸方向についての東和幸氏による研究（東 2012）も参考にした。

この三つの地域で共通することは、鹿児島県本土の集成結果と同様、2×3の間数の割合が最も多いということである。そこで、間数2×3の面積比較をそれぞれの地域で行ってみたい。ただし、柱穴状態や庇の有無などは考慮しない。

（1）北薩 大口盆地周辺（第6図参照）

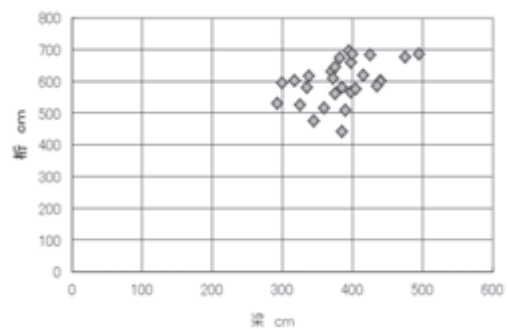
新平田遺跡は伊佐市大口平出水向江字新平田に存在する。平出水川によって形成された山間部の沖積地にあり、標高は約208mである。中世前期の集落遺跡で、多様な遺構と数多くの建物跡が検出されている。

新平田遺跡の位置する平出水（平和泉）は、島津荘の流通路として歴史的に重要な位置にあることが推定されており、遺物の多様さと内容から一般的集落とは考えられないとされている（大口市教委 1997）。報告者は、物資の中継地・集積地として「宿」の機能をもった施設と位置づけている。

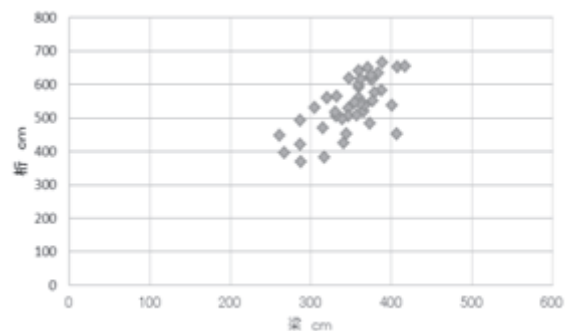
掘立柱建物跡は34棟検出され、そのうち最大のものはSB6の59.16㎡である。2×3間のプランのものは20棟で、全体の58.8%を占める。

馬場A遺跡は伊佐市大口平出水字馬場に所在する。大口盆地中央より一段高い、平出水川によって形成された山間部の小沖積地に位置し、標高は約211mである。掘立柱建物跡は1棟検出されており、プランは1間×3間であった。

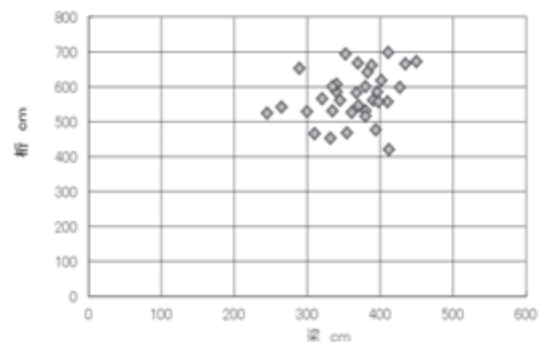
辻町遺跡は伊佐市大口市平出水字辻町に所在する。北側の標高420mの山地から南東側に舌状に延びる尾根の先端部に位置し、遺跡の標高は約212mである。遺跡の東側を辻町1遺跡、西側を辻町2遺跡と呼称している。



第6図 北薩 大口盆地周辺 2×3



第7図 南薩 農業開発総合センター遺跡群 2×3



第8図 南薩 万之瀬川流域 2×3

掘立柱建物跡は2棟検出されており、プランがはっきり示されてあるものは1棟で、2間×3間であった。

下鶴遺跡は伊佐市大口下殿字下鶴に所在し、羽月川右岸の標高約171mの河岸段丘に立地する。掘立柱建物跡は14棟検出され、そのうち2間×3間は7棟で全体の50%を占める。

これら四つの遺跡で検出された掘立柱建物跡51棟のうち、間数が2×3のものは28棟であり、全体の54.9%を占める。平均寸法は梁行384.55cm、桁行596.70cm、面積23.08㎡であった。

県本土の平均面積が20.52㎡なので、大口盆地周辺遺跡群の掘立柱建物跡は規模が大きいことがわかる。しか

しながら遺跡単位でみると、新平田遺跡の平均寸法が梁行 374.40 cm、桁行 581.50 cm、面積 21.85 m²であるのに対し、下鶴遺跡の平均寸法は梁行 415 cm、桁行 642 cm、面積 26.70 m²で大きさに差があり、下鶴遺跡の数値が全体の平均値を高くしていることが分かる。¹⁾

(2) 南薩 農業センター遺跡群 (第7図参照)

古里遺跡は日置市吹上町大字和田字古里に所在し、標高約 53m である。北側と西側が台地の縁辺部となる。掘立柱建物跡は 12 棟検出している。そのうち間数が 2×3 のものは 11 棟で、全体の 92% を占める。

吹上小中原遺跡は日置市吹上町湯之浦に所在する。農セの遺跡群の中で最も北にあり、標高 55m の独立した台地に位置する。掘立柱建物跡は 9 棟検出している。そのうち間数が 2×3 のものは 3 棟で、全体の 33% である。

馬塚松遺跡は南さつま市金峰町大野字馬塚松に所在する。平坦面の標高は約 42m である。掘立柱建物跡は 24 棟検出している。そのうち間数が 2×3 のものは 12 棟であり、全体の 50% を占める。

市堀遺跡は南さつま市金峰町大野字市堀に所在し、標高約 40m の西側に傾斜する尾根に立地する。掘立柱建物跡は 8 棟検出している。そのうち間数が 2×3 のものは 3 棟で全体の 37.5% である。

諏訪牟田遺跡は南さつま市金峰町大野字諏訪牟田に所在する。大野原台地の中央部北側に位置し、標高 49m である。掘立柱建物跡は 11 棟検出されており、間数が 2×3 のものは 10 棟で、全体の 91% を占める。

諏訪脇遺跡は南さつま市金峰町大野字諏訪脇遺跡に所在する。台地のほぼ中央部に位置し、南西方向に緩やかに傾斜している。掘立柱建物跡は 12 棟検出されており、間数が 2×3 のものは 4 棟で、全体の 33% である。

農業センター遺跡群で検出された掘立柱建物跡は 76 棟で、そのうち 2 間×3 間のものは 46 棟であり、全体の 60.5% を占める。

平均寸法は梁行 350.10 cm、桁行 539.90 cm、面積 19.09 m² である。県本土の平均面積 20.52 m² と比較すると、若干小さめの規模である。なお、第 7 図から梁行 350~380 cm に、桁行は 500~700 cm に集中していることが看取でき、農業センター遺跡群から検出された掘立柱建物跡は同じ規模のものが多く傾向がわかる。

(3) 南薩 万之瀬川流域遺跡群 (第8図参照)

持躰松遺跡は南さつま市金峰町宮崎の万之瀬川下流右岸の自然堤防上に立地し、標高約 4 m である。中世の掘立柱建物跡は 4 棟検出されており、2 間×3 間のものは 1 棟である。

上水流遺跡は南さつま市金峰町花瀬字上水流に位置し、万之瀬川中流の右岸、標高約 6 m の自然堤防上に立地す

る。中世の掘立柱建物跡は 32 棟検出されており、2 間×3 間のものは 14 棟であり、全体の 43.7% を占める。

芝原遺跡は南さつま市金峰町宮崎字芝原に位置する。万之瀬川中流の右岸、標高約 4 m の自然堤防上に立地する。中世の掘立柱建物跡は 33 棟検出されており、2 間×3 間のものは 17 棟で全体の 51.5% を占める。

渡畑遺跡は南さつま市金峰町宮崎の万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。標高約 5 m である。中世の掘立柱建物跡は 1 棟検出されており、プランは 3 間×3 間の総柱型であった。

村原(榕ノ原)遺跡は南さつま市加世田村原の万之瀬川と加世田川の合流地点西岸の標高約 38m の独立丘陵上に位置する。中世の掘立柱建物跡は 3 棟検出されている。1 棟が 2 間×3 間であった。

上加世田遺跡は南さつま市加世田の標高約 25m のシラス台地に位置する。掘立柱建物跡は 4 棟検出されており、2 間×3 間のものは 1 棟であった。

白糸原遺跡は南さつま市金峰町宮崎字白糸原の宮崎台地の先端に位置する。標高約 20m の舌状台地で、万之瀬川の西岸にあたる。掘立柱建物跡は 3 棟検出されているが、2 間×3 間とはっきりわかるものはなかった。

万之瀬川流域遺跡群で検出された中世の掘立柱建物跡は 80 棟で、そのうち 2 間×3 間のものは 34 棟であり、全体の 42.5% であった。

平均寸法は梁行 363.65 cm、桁行 571.30 cm、面積は 20.86 m² であり、県本土の平均面積とほぼ同規模であることがわかる。

(4) 小結

以上、地域ごとに様相をみてきた。ここでは三つの地域を項目ごとに比較してみたい。

2 間×3 間のプランは、大口盆地周辺では全体の 55%、南薩では農業センター遺跡群が全体の 60.5%、万之瀬川流域遺跡群が 42.5% であった。県本土の平均が 48% であるため、大口盆地周辺や農業センター遺跡群では 2 間×3 間がより一般的なプランだったといえる。

寸法については、農業センター遺跡群の桁行が他の二つの地域と比べ短い。面積については、南薩の二つの地域がほぼ同じ広さなのに対し、大口盆地周辺は平均 3 m² ほど大きい。この結果は、下鶴遺跡において他の地域よりも梁行が長いものが存在するためと考える。

このように平均寸法には地域によって差が認められることがわかった。今回は遺跡の性格などを考慮せずに検討を行ったため、検討の結果あらわれた寸法の差が実際に地域差となるのかは現段階では断定できない。今後、出土遺物から遺跡の性格を考えたり、他地域を含めて比較を行ったりすることで、答えを導き出せると考える。

6 まとめと今後の課題

今回、鹿児島県本土における中世の掘立柱建物跡を集成することで、現在確認されている掘立柱建物跡の棟数を把握することができた。そして、それらを分類することによって、鹿児島県本土における一般的な平面プランなどを導き出すことができた。

さらに、北薩の大口盆地周辺と南薩の農業センター遺跡群・万之瀬川流域遺跡群の様相を比較することで、地域において差があることがわかった。

今後の課題としては、大隅半島から検出された中世の掘立柱建物跡も含めて検討することである。現時点では対象資料が少なく、まずは調査事例の増加を期待することになるが、前述したように大崎町天神段遺跡で中世に位置づけられると考えられる掘立柱建物跡がまとまって検出されており、報告が期待される。

また、今回は集落遺跡を検討対象としたが、今後は中世山城跡の掘立柱建物跡と集落遺跡との比較も行う必要がある。また、低地や台地など立地の違いによって様相に違いが認められるかどうかとも検討課題となろう。

今回は集成・分類と若干の考察にとどまったものの、本稿が中世掘立柱建物跡の研究、さらには中世の集落研究の一助となれば幸いである。

註1) 下鶴遺跡の場合、掘立柱建物跡の時期が中世～近世とされていることから、下鶴遺跡の平均寸法が大きい要因の一つとして近世のものが含まれていることも考えられる。

謝辞

本稿は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの職員研修の一環である2012年度実務向上研修での発表をもとに加筆・訂正を行ったものである。その際、指導担当でありました関明恵氏と西園勝彦氏には多くのご指導・ご指摘を頂きました。記して感謝申し上げます。

【引用・参考文献】 ※集成に引用した報告書は割愛した

- 浅川滋男・箱崎和久(編)2001『埋もれた中近世の住まい』同成社
- 上床真 2006「薩摩・大隅の掘立柱建物に関する若干の検討—古代掘立柱建物の集成・分類を中心として—」『Archaeology from the South』鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会
- 澁谷俊彦 1989「中世の掘立柱建物について～岡山県の場合～」『日本建築学会中国支部研究報告集』第15巻
- 澁谷俊彦 1990「中世掘立柱建物の研究 1間×3間型の成立展開」『日本建築学会大会学術講演梗概集』
- 澁谷俊彦 1993「中世掘立柱建物の研究～岡山県北部～」『平成5年度日本建築学会近畿支部研究報告集』
- 高橋與右衛門 1992「発掘された中世の建物跡」『北の中世』

- 日本エディタースクール出版部
- 堂込秀人 1997「第6節まとめ」『新平田遺跡・辻町B遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
- 堂込秀人 1999「中世南九州の堅穴建物跡」『南九州城郭研究』創刊号 南九州城郭研究会
- 東北中世考古学会(編)2001『掘立と堅穴 中世遺構論の課題』東北中世考古学叢書2 高志書院
- 外山孝之・原田亜紀子 2004「都城市における中世掘立柱建物跡の類型化」『宮崎考古』19 宮崎考古学会
- 東和幸 2012「古代から中世における遺構の方向—農業開発総合センター遺跡群を事例として—」『縄文の森から』5 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 宮本長二郎 1998「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間』中央公論社
- 【検討に用いた報告書】**
- 大口市教育委員会 1996『馬場A遺跡・辻町1遺跡・辻町2遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 大口市教育委員会 1997『新平田遺跡・辻町B遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005a『窪見ノ上遺跡・建石ヶ原遺跡・古里遺跡・西原遺跡・吹上小中原遺跡・馬廻遺跡・三反牟田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(83)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005b『白糸原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(86)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2006『馬塚松遺跡・市堀遺跡・大門口遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(97)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007a『諏訪牟田遺跡・南原内堀遺跡・鍛冶屋堀遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(112)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007b『持鉢松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008a『上水流遺跡2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008b『諏訪脇遺跡・宗円堀遺跡・神原遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(122)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011a『渡畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(159)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011b『下鶴遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(163)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『芝原遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(170)
- 加世田市教育委員会 1977『村原(柁ノ原)遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 加世田市教育委員会 1985『上加世田遺跡I』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

第2表 掘立柱建物跡一覧

市町村	遺跡名	遺構番号	規模 (縦×横)	底の有無など	分類	方向	方位	梁行(cm)			桁行(cm)			面積		柱穴状態		標高	報告書
								表長	底合	柱間	表長	底合	柱間	身合	柱数	PIT径(cm)	PIT深(cm)		
鹿屋市	湯屋原	SB1	2×3		I (2×3) a	東西	N65° W	375		187.5	650		216.6	24.38	9		30~60	L=131~135m 郡山町2 2003	
		SB2	1×3		I (1×3) a	東西	N66° W	275		275.0	500		166.6	13.75	8		25		
		SB3	2×5		I (2×5) a	南北	N20° E	425		212.5	1000		200	42.50	14		40~50		
		SB4	2×3		I (2×3) a	南北	N35° E	300		150.0	480		160	14.40	9		20~30		
		SB5	2×3		I (2×3) a	東西	N67° W	315		157.5	550		183.3	17.33	7		20~30		
		SB6	2×3	三面庇	I (2×3) d	南北	N7° E	400	600	200.0	550	650	200	22.00	24		50~70		
		SB7	2×3	一面庇(北)	I (2×3) b	東西	N1° E	350	460	175.0	600		200	21.00	11		15~60		
		SB8	2×3		I (2×3) a	南北	N4° E	300		150.0	500		166.6	15.00	10		15~70		
		SB9	2×2		I (2×2) a	南北	N40° W	400		200.0	450		225	18.00	7		15~70		
		SB10	2×3		I (2×3) a	東西	N48° W	400		200.0	500		166.6	20.00	10		30~60		
		SB11	2×3		I (2×3) a	南北	N47° E	375		187.5	475		188.3	17.81	10		30~70		
		SB12	2×3		I (2×3) a	東西	N47° W	350		175.0	480		160	16.80	15		30~70		
		SB13	2×3 a		I (2×3) a	東西	N77° W	350		175.0	320 a		160	11.20 a	6		25~40		
		SB14	2×3		I (2×3) a	南北	N44° E	475		237.5	600		200	28.50	12		20~40		
		SB15	不明							200.0				175		10			15~50
鹿屋市	北麓	SB1	4×4	総柱建物	Ⅲ (4×4) a	東西	N5° W	820		205.0	830		207.5	68.06	25	50.52	19.35	L=6m 鹿児島市21 1996	
		SB2	1×2		I (1×2) a		N54° W	400		400.0	850		425	34.00					
	谷山城跡 E地点	SB2	1×1		I (1×1) a		N49° E	320		320.0	420		420	13.44					L=26m 鹿児島市31 2000
		SB3	2×2		I (2×2) a		N14° E	450		225.0	550		275	24.75					
		SB4	1×2		I (1×2) a		N28° E	400		400.0	560		280	22.40					
		SB5	1×2		I (1×2) a		N62° W	320		320.0	800		400	25.60					
		SB6	1×1		I (1×1) a		N76° W	400		400.0	450		450	18.00					
		SB7	1×1		I (1×1) a		N34° E	380		380.0	570		570	21.66					
		SB8	2×2		I (2×2) a		N24° E	820		410.0	860		430	70.52					
		SB9	1×2		I (1×2) a		N65° W	640		640.0	700		350	44.80					
		SB10	1×2		I (1×2) a		N26° E	380		380.0	920		460	34.96					
	地頭仮跡跡	SB5	2×2		I (2×4) a	南北	N1° E	402.5		201.3	832.5		208.12	33.51	9	88.5	85	L=114m 鹿児島市44 2006	
		SB6	2×3	総柱建物	Ⅲ (2×3) a	南北	N6° W	500		250.0	610		203.3	30.50	12	75	91.6		
		SB7	2×3	間仕切柱あり	Ⅱ (2×3) a	東西	N92° E	405		202.5	610		203.3	24.71	10	72	66.25		
		SB8	2×3	総柱?	Ⅲ (2×3) a	東西	N87° E			233.0			205		10	61	72.75		
加栗山 茶山城跡	SB1	1×3		I (1×3) a	南北	N1° E	400		400.0	600		200	24.00	7	30~40	28~34	L=173m 県16 1981		
	SB2	2×2	一面庇(南)	I (2×2) b	東西	N19° W	420	510	210.0	500		250	21.00	12	20~34	30~55			
鹿屋市	若手城跡	SB1	2×5		Ⅱ (2×5) a	南北	N7° W	407.5		203.8	977.5		195.5	39.83	15	45.6	63.26	L=133m 県27 1983	
		SB2	1×2		I (1×2) a	東西	N10° W	355		355.0	456.5		228.25	16.21	6	39.83	55		
		SB3	2×4	下屋(北)	I (2×4) a	東西	N103° W	401.5	521.5	200.7	850.5		212.6	34.15	18	42.9	72.7		
		SB4	2×3		I (2×3) a	東西	N92° W	383		191.5	673.5		224.5	25.80	10	42.7	58.4		
		SB5	2×4	下屋(西)	I (2×4) a	南北	N55° W	390	525	195.0	925		231.2	36.08	21	65.6	70.5		
		SB6	2×4	下屋(東)	Ⅱ (2×4) a	南北	N10° W	385	515	192.5	837		209.2	32.22	18	57.5	68.2		
		SB7	3×6		Ⅱ (3×6) c	南北	N14° W	422	545	140.6	1316.5		219.4	55.56	35	52.5	74.4		
		SB8	2×3		I (2×3) a	南北	N1° E	386.5		193.3	630.5		210.16	24.37	10	45.1	51.4		
		SB9	2×3	下屋(東)	I (2×3) a	南北	N15° W	472	565.5	236.0	655		218.3	30.92	14	48	58.14		
		SB10	2×5	下屋(東)	Ⅱ (2×5) a	南北	N11° W	501	616	250.5	1012.5		202.5	50.73	21	79.1	88.4		
		SB11	2×3		I (2×3) a	南北	N14° W	399.5		199.7	576.5		192.1	23.03	10	42.6	55.3		
		SB12	2×5	下屋(南)	Ⅱ (2×5) a	東西	N103° W	378	460.5	189.0	975		195	36.86	21	45.4	56.8		
		SB13	2×5	下屋(南西)	Ⅱ (2×5) a	南北	N19° W	516	714.5	258.0	1036		207.2	53.46	21	59.5	66.1		
		SB14	2×3	下屋(西南)	Ⅲ (2×3) a	南北	N17° W	361	464	180.5	645.5	754.5	215.6	23.30	19	57.1	82.1		
		SB15	2×4		Ⅱ (2×4) a	東西	N101° W	368		184.0	488		122	17.96	13	43.3	61.3		
		SB16	2×5	下屋(西面)	Ⅱ (2×5) a	東西	N113° W	389.5	619.2	194.7	980	1208	196	38.17	34	63.3	66.5		
		SB17	2×3		I (2×3) a	南北	N19° W	397		198.5	594.5		198.1	23.60	10	46.4	64.6		
		SB18	1×2		I (1×2) a	南北	N11° W	202.5		202.5	418		209	8.46	6	46.0	60.6		
		SB19	2×4	下屋(東西)	Ⅱ (2×4) a	南北	N26° W	504.5	749	252.2	797		199.2	40.21	24	45.9	54.2		
		SB20	2×4	下屋(西)	Ⅱ (2×4) a	南北	N30° W	502	656.5	251.0	1080		270	54.22	20	46.1	58		
		SB21	2×5	下屋(北東西)	Ⅱ (2×5) a	南北	N29° W	511.5	750	255.7	995	1066	199	50.89	34	41.7	59.2		
		SB22	2×5	下屋(南北)	Ⅱ (2×5) a	東西	N125° W	436	613.5	218.0	1055.5		211.1	46.02	27	42.9	57.2		
		SB23	3×5		I (3×5) a	南北	N33° W	602		200.6	943.5		188.7	56.80	24	41.9	60.5		
		SB24	2×3		Ⅱ (2×3) a	東西	N120° W	399.5		199.7	609		203	24.33	11	36	42		
		SB25	2×3	下屋(南)	I (2×3) a	東西	N124° W	389	525	194.5	658.5		219.5	25.62	13	46	52.5		
		SB26	2×5	下屋(西)	Ⅱ (2×5) a	南北	N132° W	431	602	215.5	1003.5		200.7	43.25	24	45.3	54.9		
		SB27	2×3		I (2×3) a	東西	N114° W	424.5		212.2	671		223.6	28.48	10	29.9	36.6		
指宿市	橋牟礼川	SB1	不明	庇										8			L=14m 指宿市9 1991		
		SB2	不明											3					
南さつま市	村原 (権ノ原)	SB1	2×3		I (2×3) a	東西	N50° E	369.7		183.5	665.6		218.3	24.61	10	50.1	81.9	L=30~32m 加世田市1 1977	
		SB2	2×5	二面庇(東西)	Ⅱ (2×5) c	南北	N36° E	508	735.1	253.8	1005		200	51.05	27	40.7	63.6		
		SB3	2×4	二面庇(南北)	I (2×4) c	南北	N40° E	540.4	720.8	262.5	870		217.5	47.01	21	30.1	31.2		
	上ノ城	SB1	1×2		I (1×2) a	南北	N26° E	300		300.0	375		187.5	11.25	6	25~30	25~60	L=47m 加世田市2 1980	
		SB2	1×1		I (1×1) a	東西	N48° E	360		360.0	420		420	15.12	4	30~35	35~70		
		SB3	2×3	一面庇(南)	I (2×3) b	東西	N50° E	390	490	195.0	560		186.6	21.84	14	25~40	30~75		
		SB4	2×3		I (2×3) a	南北	N55° E	400		200.0	540		180	21.60	11	20~35	30~60		
		SB5	1×4(1×3)	二面(東西)三面(東西南)	I (1×4) c	南北	N54° E	370	570	370.0	740(620)	740	200	27.38 (22.94)	20	25~55	50~95		
		SB6	1×3		I (1×3) a	東西	N54° E	350		350.0	500		166.6	17.50	8	25~35	30~70		
		SB7	1×2		I (1×2) a	南北	N57° E	390		390.0	270		135	10.53	6	20~40	30~60		
	上加世田1	SB8	1×2		I (1×2) a	東西	N60° E	400		400.0	440		220	17.60	6	40~45	30~60	L=25m 加世田市3 1985	
		SB1	2×2		I (2×2) a	東西	N7° E	327.5		163.7	365		182.5	11.95	8	30~50	35~75		
		SB2	2×3		I (2×3) a	東西	N35° W	397.5		198.7	555		185	22.06	10	40~70	48~68		
		SB3	2×2		I (2×2) a	東西	N63° E	205		102.5	300		156	6.15	8	28~54	47~64		
	山野原	SB4	2×2		I (2×2) a	東西	N55° W	337.5		168.7	395		197.5	13.33	8	30~48	40~80	L=24m 金峰町5 1995	
SB1		α×3	不明										5	40~50	90~130				
小苗	SB1	2×2		I (2×2) a	南北	N24° E	410		205.0	560		186.7	22.96	10	30~80	40~80	L=37m 金峰町11 2000		
	SB2	α×3	不明																

市町村	遺跡名	遺構番号	規模 (縦×横)	底の有無など	分類	方向	方位	実長 (cm)			幅行 (cm)			面積		柱穴状態		標高	報告番	
								実長	底含	柱間	実長	底含	柱間	身舎	柱数	PIT径 (cm)	PIT深 (cm)			
南さつま市	馬塚松	SB1	2×3	四面庇	Ⅱ (2×3)e	南北	N12° E	388.75	608	194.0	665	879	221	25.85	28	40.45	54.36	L=41~44m	埋七97 2006	
		SB2	2×3	総柱建物	Ⅲ (2×3)a	南北	N16° E	361		130.5	447		149	11.67	12	23.17	21.67			
		SB3	2×3		I (2×3)a	南北	N18° E	287		143.0	493.5			164.5	14.16	9	25.11			39.33
		SB4	2×3		I (2×3)a	南北														
		SB5	1×2	一面庇 (北)	I (1×2)b	南北		N47° E	273.5	266	269.0	351	479.5	234	9.60	7	28			15.8
		SB6	2×3		I (2×3)a	南北														
		SB7	1×3	二面庇 (南北)	I (1×3)c	南北		N25° E	354.5	347.5	351.0	561.5	650.75	187.17	19.91	13	38.38			56.88
		SB8	1×3		I (1×3)a	南北		N21° E	359.25		359.2	602		200.67	21.63	8	26.13			39
		SB9	1×3		I (1×3)a	東西		N63° W	316.75		316.8	565.5		188.5	17.91	8	24.88			38.88
		SB10	2×3		I (2×3)a	東西		N63° W	388		194.0	582.5		194.17	22.60	10	26.8			30
		SB11	1×3		I (1×3)a	東西		N65° W	312.25		312.3	488		162.67	15.24	8	41.75			45.5
		SB12	1×3		I (1×3)a	東西		N56° W	334.75		334.8	571.5		190.5	19.13	8	27.13			51.63
		SB13	2×3		I (2×3)a	南北														
		SB14	1×2		I (1×2)a	南北		N49° W	358		358.0	419		209.5	15.00	6	23			36.83
		SB15	2×3		I (2×3)a	東西		N62° W	383.75		191.8	635	723	211.67	24.37	14	29.3			31.6
		SB16	2×3	一面庇 (東)	I (2×3)b	東西		N76° W	286.5	295	143.3	419.5	576.83	139.83	12.02	12	20.2			14.2
		SB17	2×3		I (2×3)a	東西		N78° W	370.5	405.5	185.3	649.5	672.5	216.5	24.06	24	47.3			50.9
		SB18	1.2×3.0	庇あり	I (2×3)a	東西		N78° W	183		183.0	550	731	183.33	10.07	11	26.9			36.5
		SB19	2×3		I (2×3)a	東西		N80° W	367	445	183.5	538.5	616.5	179.5	19.76	17	26.9			36.5
		SB20	2×3	三面庇 (北東西)	I (2×3)d	東西		N79° W	361	446	180.5	543	713	181	19.60	19	27.6			40
		SB21	2×3	二面庇 (東南)	I (2×3)c	東西		N90° W	339	409	169.5	497.5	567.5	165.83	16.87	14	32			41.44
		SB22	2×3	一面庇 (北)	I (2×3)b	東西		N81° W	379	479	189.5	576		192	21.83	15	28.64			38.73
		SB23	不明																	
		SB24	2×3		I (2×3)a	東西		N86° W	407		203.5	453		184.33	18.44	10	28.2			34.4
市場	SB1	2(?)×3	三面庇 (北東南)	I (2×3)d	南北		296	386	148.0	564.5	726	188.1	16.71	17	26.8	29.25	L=42m	埋七97 2006		
	SB2	2×3	三面庇 (北東西)	I (2×3)d	東西		377	475	188.5	551.5	852	183.8	20.79	20	30.6	39.3				
	SB3	2×3	三面庇 (北東西)	I (2×3)d	東西		360	423	180.0	640	1062	213.3	23.04	18	33.2	36.3				
	SB4	2(?)×2	二面庇 (東南)	I (2×2)c	南北		331.5	421.5	165.7	413.5	417	206.75	13.71	12	26.83	26.1				
	SB5	2×3		I (2×3)a	東西		331.5		165.7	505.5		168.5	16.76	9	25.5	20.7				
	SB6	2(?)×2		I (2×2)a	南北		308		154.0	429		214.5	13.21	6	32.3	24.8				
	SB7	1×2		I (1×2)a	東西		362.5		362.5	375		187.5	13.59	6	29	15.6				
SB8	1×1		I (1×1)a	東西		219		219.0	284.5		284.5	6.23	4	25.5	12					
諏訪牟田	SB1	2×3		I (2×3)a	東西		330.5		165.0	517		172	17.09	10	37.1	33.6	L=50m	埋七112 2007		
	SB2	2×3		I (2×3)a	東西		357.5		178.0	508.5		169.5	18.18	10	31.5	33.9				
	SB3	2×3		I (2×3)a	東西		344.5		172.0	452.5		150.8	15.59	10	35.2	27.4				
	SB4	2×3		I (2×3)a	東西		373		186.5	483		161	18.02	10	87.6	66.8				
	SB5	2×3		I (2×3)a	東西		315.5		157.0	470.5		156.8	14.84	10	43.5	38.2				
	SB6	2×3		I (2×3)a	東西		288		144.0	368		122.7	10.60	10	31.9	23.1				
	SB7	2×3	三面庇 (北東西)	I (2×3)d	東西		376	467	188.0	614	801	204.7	23.09	22	31.9	56.2				
	SB8	2×3	三面庇 (北東西)	I (2×3)d	東西		375.5	474.5	187.0	628	834	209.3	23.58	22	25.1	35.9				
	SB9	2×3		I (2×3)a	東西		354.5		177.3	547.5		182.5	19.41	10	40.4	22.8				
	SB10	2×2		I (2×2)a	南北		351		175.5	317.5		158.8	11.14	8	25.6	19.5				
SB11	2×3		I (2×3)a	南北		417.5		208.0	655.5		218.5	27.37	10	21.8	17.9					
持軒松	SB1	2×3		I (2×3)a	東西		300		150.0	528.5		176.1	15.86	10	33.9	34	L=3~4m	埋七120 2007		
	SB2	2×5	二面庇 (南北)	Ⅱ (2×5)c	東西		355.5		177.7	964.5	1101	192.9	34.29	23	30.5	26.2				
	SB3	2×2		I (2×2)a	南北		204		102.0	308		154	6.28	9	26.7	13.3				
	SB4	1×1		I (1×1)a	南北		111		111.0	257.5		257.5	2.86	4	27.1	20				
上水流	SB1	2×3	下屋二面(東南)三面庇(北西南)	I (2×3)d	南北		382.5	684.5	191.3	640.5	883.5	213.5	24.50	27	27.8	30.5	L=2~5m	埋七121 2008		
	SB2	2×3	一面庇 (南)	I (2×3)b	東西		367.5	494.5	183.7	581	605	193.6	21.35	14	27.2	28.3				
	SB3	2×3	二面庇 (南北)	I (2×3)c	南北		394	432.6	197.0	476	709	158.6	18.75	21	38.5	36.5				
	SB4	2×2	一面庇 (北)	I (2×2)b	南北		414.5		207.2	396	527	198	16.41	16	34.3	23.1				
	SB5	2×2	総柱建物?	Ⅲ (2×2)a	東西		366		183.0	473		236.5	17.31	20	35.3	33.4				
	SB6	2×2	総柱建物	Ⅲ (2×2)a	東西		585.5		292.8	643.5		321.75	37.68	19	35.2	35				
	SB7	2×3		I (2×3)a	南北		331.5		165.8	451.5		150.5	14.97	11	32.1	34.8				
	SB8	2×3	一面庇 (南)	I (2×3)b	南北		352		176.0	692	844	230.6	24.36	12	25.9	23.1				
	SB9	2×4	一面庇 (南)	Ⅱ (2×4)b	南北		442.5		221.3	818	917.5	204.5	36.20	21	28.9	33.5				
	SB10	2×3	四面庇	I (2×3)e	南北		401.5	497.5	200.8	616.5	843	205.5	24.75	26	34.1	38.3				
	SB11	2×3		I (2×3)a	南北		354.5		177.3	467		155.6	16.56	10	37.4	35.9				
	SB12	2×2	総柱建物	Ⅲ (2×2)a	東西		501		250.5	552.5		276.25	27.68	11	36.2	35.1				
	SB13	2×2	一面庇 (北)	I (2×2)b	南北		365.6		182.8	462.5	646.5	231.25	16.91	11	28.7	20.9				
	SB14	2×3	二面庇 (東西)	Ⅱ (2×3)c	南北		289.5	603.5	144.8	651.5		217.16	18.86	17	23.6	28.4				
	SB15	2×2	庇, 下屋あり	I (2×2)b	東西		350	633	175.0	354.5	597.5	177.2	12.41	19	32.1	23.7				
	SB16	2×2		I (2×2)a	東西		289		144.5	314		157	9.07	7	30.1	37.7				
	SB17	1×3		I (1×3)a	南北		329		329.0	569		189.6	18.72	8	72.3	43.5				
	SB18	2×3		I (2×3)a	南北		412		206.0	420		140	17.30	10	62.3	43.2				
	SB19	2×3		I (2×3)a	東西		411		205.5	697		232.3	28.65	9	29.7	24.8				
	SB20	2×2	下屋?一面庇 (西)	I (2×2)b	南北		333	532	166.5	500		250	16.65	14	35.3	20.9				
	SB21-1	2×3	二面庇 (南北)	Ⅱ (2×3)c	南北		360.5	376.75	180.3	526.5	773.5	175	18.98	24	38.3	35.5				
	SB21-2	2×3		I (2×3)a	南北		244.5		122.3	524		174.6	12.81	9	38.8	49.8				
	SB22	1×2		I (1×2)a	東西		345		345.0	333.5		166.75	11.51	10	28.4	23.7				
	SB23	2×3	総柱建物	Ⅲ (2×3)a	南北		396		198.0	585		195	23.17	12	39.1	34.8				
SB24	1×2		I (1×2)a	南北		235		235.0	308		154	7.24	6	31.1	27.45					
SB25	1×3	二面庇 (東西)	I (1×3)c	南北		381.5	833.5	381.5	695		231.6	26.51	19	36	35.2					
SB26	1×2		I (1×2)a	東西		268		268.0	448		224	12.01	6	35.5	37.1					
SB27	1×1		I (1×1)a	東西		302		302.0	327		327	9.88	4	38.7	24.3					
SB28	2×3	総柱建物	Ⅲ (2×3)a	東西		427		213.5	596.5		198.8	25.47	12	37.2	27.6					
SB29	2×2	三面庇 (東西南)	I (2×2)d	南北		378.5	556	189.3	417	506.5	208.5	15.78	19	39.1	40.5					
SB30	1×2	一面庇 (北)	I (1×2)b	東西		230	363	230.0	366.5		183.25	8.43	8	33.3	30.8					
SB31	1×2		I (1×2)a	東西		366.5		366.5	468		234	17.15	8	37.8	26.9					

市町村	遺跡名	遺構番号	規模 (縦×横)	底の有無など	分類	方向	方位	実長 (cm)			軒行 (cm)			面積 身舎	柱状状態 柱径 (cm)	柱深 (cm)	標高	報告番		
								実長	底含	柱間	実長	底含	柱間							
南さつま市	油免	SB1	1×2α	調査区外にのびる			南北	400		400.0	-	-		5α	70	110	L=22m	埋七148 2010		
	渡畑	SB1	3×3	総柱建物	Ⅲ (3×3) a		南北	465		155.0	550	183.3	25.58	16	20~70	10~40	L=5m	埋七159 2011		
	芝原	SB1	2×3			I (2×3) a		東西	345		172.5	560	186.6	19.32	10	30前後	14~76	L=5m	埋七170 2012	
		SB2	2×3			I (2×3) a		南北	388		190.0	660	220	25.61	9	34前後	12~26			
		SB3	2×3			I (2×3) a		東西	320		160.0	565	188.3	18.08	10	40前後	16~58			
		SB4	2×3			I (2×3) a		東西	450		225.0	670	223.3	30.15	9	40~50	22~43			
		SB5	2×2			I (2×2) a		東西	390		195.0	405	202.5	15.80	8	30前後	6~26			
		SB6	2×3			I (2×3) a		東西	380		190.0	530	176.6	20.14	10	30~40	20~64			
		SB7	2×4			I (2×4) a		東西	410		205.0	840	210	34.44	11	30~60	12~71			
		SB8	2×3			I (2×3) a		東西	340		170.0	585	195	19.89	10	40~50	22~62			
		SB9	1×4			I (1×4) a		東西	355		355.0	835	208.7	29.64	10	30前後	15~43			
		SB10	2×3			I (2×3) a		東西	310		155.0	465	155	14.42	10	40前後	24~39			
		SB11	2×3			I (2×3) a		東西	335		167.5	530	176.6	17.76	10	40前後	16~43			
		SB12	2×3			I (2×3) a		南北	340		170.0	605	201.6	20.57	10	30前後	11~46			
		SB13	2×3			I (2×3) a		南北	380		190.0	600	200	22.80	10	35前後	11~42			
		SB14	2×3			I (2×3) a		東西	370		185.0	545	181.6	20.17	10	40~50	13~67			
		SB15	2×3			I (2×3) a		南北	380		190.0	515	171.6	19.57	10	35~50	16~63			
		SB16	柱穴列						320			450		14.40	6?		20~45			
		SB17	柱穴列						355			530		18.82	21	30前後	9~44			
		SB18	2×2				I (2×2) a		東西	395		197.5	375	187.5	14.81	8	60前後			19~48
		SB19	2×3				I (2×3) a		東西	435		217.5	665	221.6	28.93	10	50~70			17~45
		SB20	2×3		二面庇 (南北)		I (2×3) c		東西	265	455	132.5	540	180	14.31	19	30前後			15~53
		SB21	3×5		総柱建物	Ⅲ (3×5) a		東西	600		200.0	995	199	59.70	24	40~60	9~80			
		SB22	2×3				I (2×3) a		東西	410		205.0	555	185	22.76	9	30~40			8~67
		SB23	1×1				I (1×1) a		南北	385		385.0	365	365	14.05	4	30~50			21~43
		SB24	3×3		総柱建物	Ⅲ (3×3) a		南北	590		196.6	615	205	36.29	16	40~60	20~71			
		SB25	2×3				I (2×3) a		南北	390		195.0	560	186.6	21.84	10	40前後			13~34
	SB26	2×2		一面庇 (南)		I (2×2) b		南北	250		125.0	340	170	8.50						
	SB27	1×2				I (1×2) a		南北	355		355.0	360	180	12.78	5	35前後	15~23			
	SB28	2×2				I (2×2) a		南北	385		192.5	390	180	15.02	8	30~40	16~34			
	SB29	2×2		総柱建物	Ⅲ (2×2) a		東西	395		197.5	400	200	15.80	8	30前後	12~51				
	SB30	2×2		総柱建物? 二面庇 (南北)	Ⅲ (2×2) c		南北	350		175.0	420	570	210	14.70	16	30前後	16~37			
	SB31	2×3		二面庇 (南北)		I (2×3) c		東西	335	495	167.5	600	190	20.10	17	40~50	13~60			
	SB32	2×2				I (2×2) a		東西	310		155.0	350	175	10.85	8	40前後	14~49			
	SB33	不明						320		160.0				4		13~28				
	南九州市	平山城	SB1	2×3	一面庇 (東)		I (2×3) b	東西	460		230.0	650	755	216.6	29.90	9	20~40	30~50	L=90m	川辺町1 1984
			SB2	2×3			I (2×3) a	南北	412		206.0	686		228.6	28.26	7	25	30		
		林川(向林川)	SB1	2×2	一面庇 (北)		I (2×2) b								11			L=135m	知覧町6 1994	
		知覧城跡	SB1	2×3	三面庇 (東西南)		I (2×3) d		南北							23	89	77		
SB2			2×3			I (2×3) a		東西	390		590			23.01				L=171m	知覧町12 2006	
SB3			3×3			I (3×3) a		南北	590		620			36.58						
SB4			2×3			I (2×3) a		南北	400		720			28.80						
馬場田		SB1	2×2			I (2×2) a		東西	470		235.0	440	220	20.68	7	47	90	L=55m	南九州市3 2009	
		SB2	2×3α	二面庇 (北東)		-		東西	300	400	150.0		150		16	29	54			
川辺郷 地頭仮屋跡		SB1	2×3?					南北	200		200.0	600	200	12.00	9	40.8	21.1			
		SB2	1×3			I (1×3) a		南北	300		300.0	650	216.6	19.50	7	56.8	44.2	L=50m	南九州市4 2010	
		SB3	5×6			I (5×6) a		南北	1100		220.0	1400	233.3	154.00	33	69	58.6			
	SB4	5×7			I (5×7) a		南北	920		184.0	1280	182.8	117.76	42	47.9	56.2				
古市	SB1	3×5	総柱建物	Ⅲ (3×5) a		東西	520		173.3	899.5		179.9	46.77	23	55.3	55.2	L=38m	埋七89 2005		
日置市	赤井田A	SB1	2×2α														L=18m	吹上町14 2002		
		SB2	2×α																	
		SB3	2×2			I (2×2) a														
		SB4																		
		SB5	2×3			I (2×3) a														
	伊作城跡	SB1	2×2			I (2×2) a	東西	312		156.2	390	195	12.17	8			L=47m	吹上町15 2003		
	山ノ脇	SB1	2×5	下屋 (北東西)		I (2×5) a	南北	N20° E	410	610	205.0	1089	1189	217.8	44.65	30	46	58		
		SB2	2×5	四方向に下屋, 一面庇 (北)		Ⅱ (2×5) b	東西	S77° E	404	824	202.0	916	1216	183.2	37.01	39	42	54		
		SB3	2×3	一面庇 (北)		I (2×3) b	東西	N84° E	408	508	204.0	688	229.3	28.07	14	37	30			
		SB4	2×3			I (2×3) a	東西	N85° E	312	156.0	562	187.3	17.53	9	44	38				
SB5		2×5	下屋 (北西南)		Ⅱ (2×5) a	東西	N84° E	478	718	239.0	1064	1184	212.8	50.86	36	66	55	L=93m	埋七58 2003	
SB6		不明	下屋 (西南)				N13° E			190.0		220		14α		56	40			
SB7		2×5	総柱建物 一面庇 (東)		Ⅲ (2×5) b	南北	N18° E	372	452	186.0	978	195.6	36.38	21	44	35				
SB8		2×2	一面庇 (西)		I (2×2) b	南北	N18° E	348	418	174.0	628	314	21.85	13	30	34				
SB9		2×2			I (2×2) a	南北	N17° E	354		177.0	384	192	13.59	9	30	34				
SB10		2×2			I (2×2) a	南北	N3° E	255		127.5	370	185	9.44	11	35	34				
古里	上ノ平	SB1	2×3	一面庇 (西)		I (2×3) b	東西	N120° E	386	-	193.0	587.5	691.5	195.8	22.68	13	30.8	26.4	L=90m	埋七70 2004
		SB2	2×4			I (2×4) a	南北	N40° E	337.5	-	168.7	690	172.5	23.29	12	27.2	37.7			
		SB3	1×1			I (1×1) a	東西	N30° E	143.5	-	143.5	147.5	147.5	2.12	4	27.9	19.5			
	古里	SB1	2×3			I (2×3) a	東西	373.5		186.8	621	207	23.19	10	40	56				
		SB2	2×3			I (2×3) a	南北	320		160.0	560	186	17.92	10						
		SB3	2×3 (1×3)	一面庇 (北)		I (2×3) b	東西	355.5	505.5	177.7	550.5	654	183.5	19.57	12	30	32			
		SB4	2×3			I (2×3) a	東西	366		183.0	518.5	172.8	18.98	9	32	27				
		SB5	2×3			I (2×3) a	東西	360		180.0	592.5	197.5	21.33	10	49	62				
		SB6	2×3			I (2×3) a	東西	304.5		152.3	531	177	16.17	10	34	41				
		SB7	2×3			I (2×3) a	東西	320		160.0	560	186.6	17.92	8						
		SB8	2×3			I (2×3) a	東西	360		180.0	560	186.6	20.16	10						
		SB9	2×3		一面庇 (南) or 柱		I (2×3) b	南北	400.5		200.3	538.5	179.5	21.57	11	44	51			
SB10	2×3		一面庇 (東)		I (2×3) b	南北	346.5	432.75	173.3	529	176.3	18.33	14	41	39					
SB11	2×3			I (2×3) a	東西	360		180.0	600	200	21.60	10								
SB12	2×3		三面庇 (北東西)		I (2×3) d	東西	348	436.5	174.0	618	783	206	21.51	22	33	44				

市町村	遺跡名	遺構番号	規模 (梁×桁)	庇の有無など	分類	方向	方位	梁行 (cm)			桁行 (cm)			面積 平方	柱状状態			標高	報告番
								実長	底含	柱間	実長	底含	柱間		径	径	径		
吹上小中原		SB1	2×3 (1×3)	一面庇 (西)	I (2×3)b	南北		429	479	214.5	650		216.6	27.89	12	24	43.75	L=55m	埋せ83 2005
		SB2	1×1		I (1×1)a	東西		125		125.0	228		228	2.85	4	19.5	34		
		SB3	2×3 α (1×3 α)	一面庇 (南)	I (2×3)a	東西		440	560	220.0	632		210.6	27.81	9	23.5	36.5		
		SB4	2×3	一面庇 (南)	I (2×3)b	東西		408	508	204.0	653		217.6	26.64	14	23.8	29		
		SB5	2×3	四面庇	II (2×3)e	東西		362	602	181.0	617	902.25	205.6	22.34	28	31	25.5		
		SB6	2×3 (1×3)		I (2×3)a	南北		438		219.0	687		229	30.09	8	26	44		
		SB7	2×3		I (2×3)a	東西		347		173.5	506		168.6	17.56	10	30	35		
		SB8	2×3 (1×3)		I (2×3)a	南北		335		167.5	529		176.3	17.72	8	30	38		
		SB9	2×3 (1×3)	一面庇 (東)	I (2×3)b	南北		393	513	196.5	595		198.3	23.38	12	29	52.5		
向樟城		SB1	1×2	一面庇 (西)	I (1×2)b	東西		392		392.0	443	643	221.5	17.37	9	41.11	51.13	L=52m	埋せ129 2008
		SB2	2×3		I (2×3)a	東西		359		179.5	605		201.6	21.72	10	31.1	38.56		
		SB3	2×3		I (2×3)a	南北		335		167.5	543		181	18.19	10	34.2	30.7		
市ノ原第4		SB1	1×4		I (1×4)a	南北	N7° E	279		279.0	681		170	19.00	10	43	46	L=46 ~53m	埋せ130 2009
		SB2	1×2		I (1×2)a	東西	N10° E	305		305.0	341		170	10.40	6	31	40		
		SB3	1×2		I (1×2)a	南北	N7° E	199		199.0	366		183	7.28	6	44	54		
		SB4	1×2		I (1×2)a	東西	N77° W	270		270.0	364		182	9.83	6	49	66		
		SB5	1×1		I (1×1)a	東西	N75° W	199		199.0	276		276	5.49	4	35	40		
		SB6	1×2		I (1×2)a	東西	N70° W	168		168.0	412		206	6.92	6	35	44		
		SB7	1×2		I (1×2)a	東西	N60° W	149		149.0	228		114	3.40	6	37	56		
		SB8	2×3		I (2×3)a	東西	N70° W	365		182.0	625		208	22.81	7	47	61		
		SB9	2×3		I (2×3)a	南北	N50° E	366		183.0	598		199	21.89	10	40	45		
		SB10	1×2		I (1×2)a	東西	N50° E	138		138.0	379		189	5.23	6	27	63		
		SB11	1×2		I (1×2)a	東西	N5° E	160		160.0	242		121	3.87	6	31	48		
		SB12	1×2		I (1×2)a	東西	N70° W	138		138.0	411		205	5.67	6	35	27		
		SB13	2×2		I (2×2)a	南北	N10° E	354		177.0	356		178	12.60	8	35	49		
		SB14	2×2		I (2×2)a	南北	N10° E	350		175.0	421		210	14.74	8	44	59		
		SB15	2×2		I (2×2)a	南北	N10° E	348		174.0	403		201	14.02	8	38	55		
		SB16	2×3		I (2×3)a	南北	N5° E	341		170.0	564		188	19.23	10	39	39		
		SB17	1×2		I (1×2)a	南北	N5° E	218		218.0	410		205	8.94	5	41	73		
		SB18	1×2	一面庇 (南)	I (1×2)b	東西	N60° W	198	298	198.0	410		205	8.12	9	33	23		
		SB19	1×2		I (1×2)a	東西	N60° E	201		201.0	347		173	6.97	6	35	52		
		SB20	1×4		I (1×4)a	東西	N42° W	153		153.0	440		110	6.73	10	40	39		
		SB21	2×2	総柱建物? 東柱あり?	II (2×2)	東西	N42° E	342		171.0	486		243	16.62	9	41	53		
		SB22	1×3		I (1×3)a	東西	N45° W	382		382.0	569		189	21.74	8	57	53		
		SB23	2×2		I (2×2)a	東西	N50° E	272		136.0	394		197	10.72	6	46	53		
SB24	2×3		I (2×3)a	南北	N58° E	432		216.0	709		236	30.63	9	36	43				
SB25	2×2		I (2×2)a	南北	N65° E	255		127.0	454		227	11.58	8	43	35				
SB26	2×2		I (2×2)a	南北	N70° W	311		155.0	412		206	12.81	8	50	40				
SB27	2×1 α	四面庇?		東西	N60° E	362	506	181.0	181 α	251 α	6.55 α	16	37	45					
市ノ原第3		SB1	2×3		I (2×3)a	南北		330		165.0	523		174	17.26	10	31.1	53.7	L=44m	埋せ140 2009
		SB2	2×3		I (2×3)a	南北		274		137.0	683		228	18.71	10	32.8	57.5		
		SB3	2×3		I (2×3)a	南北		324		162.0	611		204	19.80	10	32.1	43.2		
		SB4	2×3		I (2×3)a	南北		411		205.0	451		150	18.54	10	29.5	48.8		
		SB5	2×3		I (2×3)a	南北		330		165.0	561		188	18.51	9	30.2	48.8		
		SB6	2×3		I (2×3)a	東西		261		130.5	249		124	6.50	8	33.1	59.9		
		SB7	2×2		I (2×2)a	南北									7				
		SB8	2×2	一面庇 (南)	I (2×2)b	南北									11				
		SB9	1×2		I (1×2)a	東西									6				
		SB10	1×2	一面庇 (北)	I (1×2)b	東西									9				
		SB11	1×2		I (1×2)a	南北									5				
		SB12	1×2		I (1×2)a	南北									10				
		SB13	1×2		I (1×2)a	南北									6				
		SB14	1×1		I (1×1)a	南北									5				
		SB15	1×2		I (1×2)a	東西									5				
		SB16	1×2		I (1×2)a	東西									6				
		SB17	1×2		I (1×2)a	東西									6				
		SB18	1×1		I (1×1)a	南北									4				
		SB19	1×2		I (1×2)a	東西									7				
串木野城跡		SB1	2×3		I (2×3)a	南北		360		180.0	530		176.6	19.08	9			L=160m L=180m L=170m	串木野市 2 2000
		SB2	2×2		I (2×2)a	南北		310		155.0	360		180	11.16	8				
		SB3	2×2 α			南北		400		200.0				4					
縄ヶ城跡		SB1																	市来町 4 1997
安茶ヶ原		SB1	2×3	四面庇	II (2×3)e	東西	N20° E	390	594	195.0	662.5	872.5	220.8	25.84	30	47.7	37.6	L=25m	埋せ118 2007
		SB2	2×3	四面庇	II (2×3)e	東西	N16° E	370	550	185.0	542.5	727.5	180.3	20.07	30	39.3	39.1		
		SB3	1×3	一面庇 (北)	I (1×3)b	東西	N7° E	326.2	387.4	326.2	461.5		153.8	15.05	16	63.75	55		
		SB4	2×2	一面庇	II (2×2)b	南北	N22° E	312.5		156.3	337.5	407.5	168.75	10.55	11	35	33.9		
		SB5	2×4	一面庇 (北)	II (2×4)b	東西	N22° E	377	472	188.5	813.3		162.6	30.66	20	33	31		
		SB6	1 α × 2 α	一面庇 (東)		N30° E									7	32.4	32.5		
		SB7	2×2		I (2×2)a	南北	N15° E	318		159.0	458		229	14.56	8	38	46		
		SB8	1×2		II (1×2)a	東西	N10° E	328.3		328.3	327.5		163.75	10.75	7	39	37.5		
		SB9	2×3	総柱建物	III (2×3)a	南北	N8° E	341.25		170.6	491.6		163.8	16.78	12	39.9	38		
		SB10	2×3		I (2×3)a	東西	N74° E	343.75		171.8	468.3		156.1	16.10	10	33.5	41.2		
		SB11	2×2 α			南北	N28° E	327.5		163.8					6	35.1	34		
		SB12	2×3		I (2×3)a	東西	N80° W	321.25		160.6	496.6		165.5	15.95	11	32.9	38.8		
		SB13	2×3	総柱? 東柱?	II (2×3)a	東西	N60° W	303.75		151.8	595		198.3	18.07	12	32.8	34.1		
		SB14	2 α × 3 α			南北	N36° E	365		182.5	520		173.3	18.98	7	30.7	29		
		SB15	2×3	総柱? 東柱?	II (2×3)a	東西	N60° W	315		157.5	385		128.3	12.13	12	29	33		
		SB16	2×3		I (2×3)a	東西	N22° E	290		145.0	336.6		112.2	9.76	9	28.8	33.8		
		SB17	1 α × 2 α			東西	N85° W			185.0			217.5		4	35.75	30.25		
		SB18	2×3		I (2×3)a	東西	N75° W	358.75		179.3	531.6		177.2	19.07	14	29	34		
		SB19	2×2		I (2×2)a	東西	N2° E	388		194.0	455		227.5	17.65	8	31.75	27.28		
		SB20	1×2		I (1×2)a	南北	N5° W	236.6		236.6	385		192.5	9.11	6	28.1	36.5		

市町村	遺跡名	遺構番号	規模 (梁×桁)	庇の有無など	分類	方向	方位	梁行(cm)			桁行(cm)			面積		柱穴状態		標高	報告番		
								実長	庇含	柱間	実長	庇含	柱間	身舎	柱数	PIT径(cm)	PIT深(cm)				
いちき串木野市	檜城跡	台地部	SB1	1×2	四面庇	I (1×2)c	東西		236	498	236.0	427.5	764	213.75	10.09	19	36.2	42.9	L=50m 埋せ155 2010		
			SB2	1×1		I (1×1)a	東西		213		213.0	404		404	8.61	4	33	44.8			
			SB3	1×3		I (1×3)a	南北		204		204.0	348		348	7.10	6	38.2	67.5			
		SB4	2×5	総柱建物、二面庇(東西)	III (2×5)c	南北		543	763	271.5	991.5		198.3	53.84	28	48.3	83.72				
		SB5	1×3	一面庇(南)	I (1×3)b	東西		301	412	301.0	608.6		202.86	18.32	12	48.5	55.4				
		SB6	1×2		I (1×2)a	南北		200		200.0	409		204.5	8.18	6	36.7					
		SB7	2×6	間仕切りあり	II (2×6)a	東西		412		206.0	1286		214.3	52.98	18	37.8	32.5				
	山腹部	SB1	1a×2a					N70° W	174		174.0	330		165	5.74	4	34.25	31.25	L=16m		
		SB2	2×2	一面庇(南)	I (2×2)b	東西		N70° W	255	320	127.5	465.3		232.6	11.87	11	38.45	30.8			
	鶴ヶ岡城跡	鶴ヶ岡城跡	SB1	2×3		I (2×3)a	東西		400		200.0	650		216.6	26.00	11			L=36m		
			SB2	2×3		I (2×3)a	南北		400		200.0	660		220	26.40	10					
			SB3	2×2		I (2×2)a	東西		370		185.0	390		195	14.43	8					
			SB4	2×2		I (2×2)a	東西		365		182.5	385		192.5	14.05	8					
			SB5	1×3		I (1×3)a	東西		157.5		157.5	660		220	10.40	8					
			SB1	2×3	総柱建物	III (2×3)a	南北		N1° W	462.2		231.1	592		197.3	27.36	12	56.1		81.1	L=14m
		成岡	成岡	SB1	2×3		I (2×3)a	南北		N10° W	410		205.0	445		148	18.25	10	15~25	15~60	L=20m 県28 1983
				SB2	2×2		I (2×2)a	南北		N19° W	370		185.0	365		182	13.51	8	25~35	25~50	
SB3				2×5		I (2×5)a	東西		N10° W	380		190.0	600		120	22.80	14	25~50	35~60		
SB4				3×3		I (3×3)a	東西		N14° W	480		160.0	570		190	27.36	12	30~60	30~60		
SB5				1a×3a					N38° 30' W						5	25~60	30~40				
SB6	2×3				I (2×3)a	南北		N26° W	320		160.0	640		213.3	20.48	9	25~50	20~65			
SB7	2×2			総柱建物 西側柱穴不明	III (2×2)a	東西		N25° 30' W	290		145.0	510		255	14.79	8	25~35	10~35			
SB8	2×2				I (2×2)a	東西		N1° 30' E	315		157.5	435		217.5	13.70	7	30~50	15~55			
SB9	2×2				I (2×2)a	東西		N30° 30' E	360		180.0	450		225	16.20	7	30~45	25~50			
SB10	1×3				I (1×3)a	南北		N9° 30' E	200			485		161.6	9.70	7	35~50	20~60			
SB11	2×2				I (2×2)a	東西		N3° 30' E	325		162.5	440		220	14.30	8	35~50	20~60			
西ノ平	西ノ平	SB1	3×5a		東西		N4° W			200.0		200		80~90			L=22~26m 県28 1983				
		SB2	2×5		I (2×5)a	東西		N2° E	440		220.0	1040		208	45.76	14		60~100			
		SB3	2×3	総柱建物	III (2×3)a	南北		N12° W	400		200.0	600		200	24.00	12					
		SB4	1×2		I (1×2)a	南北		N11° W	300			600		300	18.00	6		40~70	30~50		
		SB5	2×3		I (2×3)a	東西		N34° W	360		180.0	600		200	21.60	10		30~40	30~70		
		SB6	2×3		I (2×3)a	東西		N25° W	295		147.5	570		190	16.82	10		25~30	10~80		
		SB7	2×3		I (2×3)a	東西		N44° W	310		155.0	380		126.6	11.78	10		20~35	20~50		
		SB8	2×3		I (2×3)a	東西		N25° W	300		150.0	480		160	14.40	10		40~70	40~80		
		SB9	2×3		I (2×3)a	東西		N28° W	320		160.0	540		180	17.28	10					
		SB10	2×3	総柱建物	III (2×3)a	南北		N31° W	295		147.5	535		178.3	15.78	12		30	20~50		
		SB11	2×3	東から2列目は中央に柱	II (2×3)a	東西		N62° W	360		180.0	600		200	21.60	11		20~60	30~80		
		SB12	2×3		I (2×3)a	東西		N39° W	320		160.0	440		146.6	14.08	10		40~70	40~70		
		SB13	2×3		I (2×3)a	東西		N39° W	335		167.5	440		146.6	14.74	10		30~40	20~80		
		SB14	2×5	一面庇(南)	II (2×5)b	東西			400	600	200.0	980		196	39.20	21		18~24	15~30		
薩摩川内市	上野城	SB1	2×2	半間作りだし(北)	II (2×2)a	南北		N43° W	445		222.5	503	618	251.5	22.38	12	43	44.5	L=40m 埋せ68 2004		
		SB2	2×2	総柱建物	III (2×2)a	東西		N56° E	250		125.0	335		167.5	8.38	9	29	39.5			
		SB3	2×2		I (2×2)a	南北		N13° W	292		146.0	382		191	11.15	8	28.8	32.5			
		SB4	2×2	下屋半間(北)	I (2×2)a	南北		N12° W	410	622	205.0	437	477	218.5	17.92	9	45.8	36.8			
		SB5	2×2	一面庇下屋半間(北) 総柱建物	III (2×2)b	南北		N27° W	357		178.5	360	432	180	12.85	12	26.08	36.5			
		SB6	2×3 または3×3	半間(北) 四半間(西) 下屋	III (2×3)a	東西		N66° E	370.5		123.5	414.5		138.1	15.36	22	29.3	31.5			
		SB7	2×3		I (2×3)a	東西		N74° E	395		197.5	640		213.3	25.28	10	32.9	26.6			
		SB8	2×3		I (2×3)a	東西		N72° E	320		160.0	470		156.6	15.04	9	28.6	37.8			
		SB9	2×3		I (2×3)a	南北		N17° W	290		145.0	435		145	12.62	10	26.9	29.2			
		SB10	2×2		I (2×2)a	南北		N18° W	417		208.5	540		270	22.52	8	25.5	45.12			
		SB11	2×3		II (2×3)a	南北		N13° W	350		175.0	562		187.3	19.67	10	30.2	36.4			
		SB12	2×3	下屋(北・西)	I (2×3)a	東西		N76° E	355	440	177.5	573	645	191	20.34	18	24.4	27.6			
		SB13	2×3	下屋(北・東・南)	I (2×3)a	南北		N16° W	373	420	186.5	590	730	196.6	22.01	22	25.31	34.59			
		SB14	2×3	下屋(北・西)	I (2×3)a	東西		N67° E	392	497	196.0	528	630	176	20.70	18	38.27	39.44			
		SB15	2×3	総柱建物	III (2×3)a	東西		N69° E	355		177.5	521		173.6	18.50	12	28.6	45.9			
		SB16	2×3	下屋(北・西)	I (2×3)a	東西		N79° E	450	538	225.0	770	895	256.6	34.65	18	32.7	57.6			
		SB17	2×2		I (2×2)a	東西		N69° E	282		141.0	340		170	9.59	8	25.75	27			
		SB18	2×2		I (2×2)a	東西		N80° E	263		131.5	335		167.5	8.81	8	25.5	32.12			
		SB19	2×3	下屋(東・南)	I (2×3)a	東西		N68° E	320	413	160.0	555	650	185	17.76	18	25.6	35			
		SB20	2×3	下屋(北・西)	I (2×3)a	東西		N66° E	420	540	210.0	750	850	250	31.50	18	34.2	55.05			
		SB21	2×3		I (2×3)a	南北		N25° W	365		182.5	610		203.3	22.27	10	51	52.1			
		SB22	2×3		I (2×3)a	東西		N55° E	375		187.5	785		261.6	29.44	10	41.1	63			
		SB23	2×3	総柱建物	III (2×3)a	南北		N34° W	225		112.5	480		160	10.80	12	34.75	47.6			
		SB24	2×3		I (2×3)a	南北		N26° W	430		215.0	730		243.3	31.39	10	45.4	49.6			
		SB25	2×2		I (2×2)a	東西		N58° E	295		147.5	400		200	11.80	8	31.25	40.75			
		SB26	2×3	下屋(東西南北)	II (2×3)a	東西		N72° E	437	715	218.5	730	1024	243.3	31.90	28	30.67	41.42			
		SB27	2×2		I (2×2)a	東西		N63° E	323		161.5	360		180	11.63	8	24.37	35.87			
		SB28	2×3		I (2×3)a	南北		N27° W	385		192.5	745		248.3	28.68	10	36.5	50.5			
		SB29	2×2		I (2×2)a	南北		N20° W	375		187.5	532		266	19.95	8	33.62	44			
		SB30	1×2		I (1×2)a	東西		N70° E	212		212.0	290		145	6.15	6	28.6	35			
		SB31	2×3	下屋(西南)	II (2×3)a	東西		N72° E	420	530	210.0	728	870	242.6	30.58	18	33.73	47.8			
		SB32	2×3	下屋(東南)	II (2×3)a	東西		N70° E	425	540	212.5	770	870	256.6	32.73	18	33.35	48.5			
		大島	大島	SB1	2×3		I (2×3)a	南北		N29° W	351		175.5	653		217.6	22.92	9		22.1	32.7
SB1	2×3				I (2×3)a	東西			319		159.5	463		156	14.77	10	31.2	42.29			
SB2	1×3			一面庇(南)	II (1×3)b	南北			314		314.0	505	605	169	15.86	12	34.83	57.67			
SB3	2×3				I (2×3)a	東西			393		196.5	576		193	22.64	10	33.4	49.33			
SB4	2×2				I (2×2)a	東西			378		189.0	385		193	14.55	8	31.13	27			
SB5	2×3		I (2×3)a	東西			404		202.0	488		163									

市町村	遺跡名	遺構番号	規模 (梁×桁)	庇の有無など	分類	方向	方位	実長 (cm)		桁行 (cm)		面積	柱穴状態		標高	報告書		
								実長	庇含	柱間	桁間		身舎	柱数			PIT径 (cm)	PIT深 (cm)
川骨		SB1	2×4or2×3	総柱建物a一面庇 (南)			南北	396.2		198.1	775		193.7	30.71	14	73.2	63.4	
		SB2	1×5	一面庇 (北)	I (145)b	東西		368	550.5	368.0	1018		203.6	37.46	16	32.5	30.75	
		SB3	2×5	総柱建物	III (245)a	南北			372		180.0	1038		207.6	38.61	16	52.75	32.75
		SB4	2×3		I (243)a	東西			341		170.5	469		156.3	15.99	9	41.8	29.7
		SB5	2×5	二面庇 (東西)	II (245)c	南北			415.5	620.5	207.7	1028		205.6	42.71	27	40.9	33.6
		SB6	2×3	一面庇 (南)	I (243)b	東西			360	447.5	180.0	549.6		183.2	19.79	14	29.6	29.5
		SB7	1×3		I (143)a	東西			402.5		402.5	617.5		205.8	24.85	7	31.4	33.2
		SB8	1×3		I (143)a	南北			292.5		292.5	662		220.6	19.36	8	144.7	60.1
		SB9	1×1		I (111)a	東西			236.5		236.5	397.5		397.5	9.40	4	124.5	49.7
		SB10	1×2		I (142)a	南北			282.5		282.5	412.5		206.25	11.65	6	65	52.6
		SB11	1×2		I (142)a	南北			360	360.0	512.5		256.25	18.45	6	87.5	39.1	
		SB12-1	1×2		I (142)a	南北			295		295.0	400		200	11.80	6	48.3	34.1
		SB12-2	2×3	一面庇 (西)	I (243)b	東西			402.5		201.3	600	780	200	24.15	11	74.5	41.2
		SB13	3×4	側柱	II (344)a	南北			446.6		148.8	810		202.5	36.17	14	104.2	53.7
SB14	2×2	側柱	II (242)a	南北			386.6		193.3	519		259.5	20.06	8	73.6	60.3		
上新田		SB1	2×5	一面庇 (南)	I (245)b	東西		475	615	230.0	1140		220	54.15	20	37.7	35.1	
		SB2	1×1		I (111)a	東西		235		235.0	315		315	7.40	4	26.04	27.44	
山仁田		SB1	2×3		I (243)a	南北		367		183.5	643		214.3	23.60	8	29	25.6	
		SB2	2×3	総柱建物	III (243)a	東西		385		192.5	636		212	24.49	12	31.7	27.8	
		SB3	2×3		I (243)a	南北		296		148.0	472		157.3	13.97	8	32.6	42.5	
山口		SB1	2×5	一面庇 (南)	I (245)b	南北	N0° W	445		222.5	855	975	171	38.05	17	36	42	
		SB2	2×3	総柱建物 四面庇	III (243)e	南北	N0° W	395	475	197.5	665	785	221.6	26.27	29	42.68	43.1	
		SB3	3×4		I (344)a	南北	N5° W	285		95.0	460		115	13.11	14	26.9	20.6	
		SB4	2×2		I (242)a	南北	N5° W	305		152.5	390		195	11.90	8	27.75	17.1	
		SB5	2×2		I (242)a	南北	N5° W	330		165.0	430		215	14.19	8	30.7	22.7	
		SB6	2×3	総柱建物	III (243)a	南北	N3° W	365		182.5	515		171.6	18.80	12	36.6	34.5	
		SB7	2×3	四面庇	III (243)a	南北	N0° W	405	595	202.5	650	935	216.6	26.33	27	41.8	42.4	
		SB8	2×3		I (243)a	南北	N0° W	290		145.0	475		158.3	13.78	10	25.8	33	
		SB9	2×3		I (243)a	南北	N0° W	310		155.0	580		193.3	17.98	10	28.7	37.2	
		SB10	2×3	総柱建物	III (243)a	南北	N3° W	430		215.0	700		233.3	30.10	12	50	47	
		SB11	2×5	三面庇 (東西南)	I (245)d	南北	N10° W	410	500	205.0	940	1065	188	38.54	31	46.8	57.7	
		SB12	2×2		I (242)a	南北	N10° W	350		175.0	370		185	12.95	8	51	34.6	
		SB13	2×3		I (243)a	南北	N15° W	330		165.0	515		171.6	17.00	10	30	19.7	
		SB14	2×3	総柱建物	III (243)a	南北	N20° W	315		157.5	580		193.3	18.27	12	41	40.7	
		SB15	2×2		I (242)a	南北	N0° W	345		172.5	360		180	12.42	8	22.8	24	
		SB16	2×3		I (243)e	南北	N5° W	410		205.0	690		230	28.29	22	30.5	43.8	
		SB17	2×3		I (243)a	南北	N10° W	450		225.0	780		260	35.10	9	28.5	35.7	
		SB18	2×3		I (243)a	南北	N0° W	300		150.0	520		173.3	15.60	7	25.7	22.1	
		SB19	2×3		I (243)c	南北	N10° W	420		210.0	670		223.3	28.14	16	30.5	46.6	
		SB20	2×2	一面庇 (南)	I (242)b	南北	N2° W	305		152.5	325		162.5	9.91	10	24.2	26.8	
		SB21	2×2	総柱建物	III (242)a	南北	N0° W	275		137.5	275		137.5	7.56	9	36	33.2	
		SB22	2×2	総柱建物	III (242)a	南北	N15° W	285		142.5	370		185	10.55	8	29.6	41.3	
		SB23	2×2	総柱建物	III (242)a	南北	N10° W	290		145.0	325		162.5	9.43	9	31.1	39.4	
		SB24	3×4		I (344)a	南北	N6° E	585		195.0	805		201.2	47.09	14	44	41.7	
		SB25	2×3		I (243)a	南北	N0° W	295		147.5	490		163.3	14.46	10	35.5	36.4	
		SB26	2×3	四面庇	I (243)e	南北	N20° E	420		210.0	630		210	26.46	20	31.15	53.9	
		SB27	2×3		I (243)a	南北	N12° E	285		142.5	545		181.6	15.53	10	27.7	30.8	
		SB28	2×3		I (243)a	南北	N0° W	420		210.0	610		203.3	25.62	8	38.6	41.5	
		SB29	2×3a	三α面庇 (東西北)	I (243a)d	南北	N0° W	360		180.0	560		186	20.16	14	35.7	53.2	
		SB30	2×3		I (243)a	南北	N0° W	280		140.0	380		190	10.64	10	26.4	34.2	
		SB31	2×4		I (244)a	南北	N13° E	375		187.5	545		186.2	20.44	12	31.3	43.4	
		SB32	2×3		I (243)a	南北	N4° W	355		177.5	495		165	17.57	10	29.2	37.8	
		SB33	2×4	四面庇	I (244)e	南北	N24° E	355	500	177.5	705	860	176.2	25.03	27	31.6	38.8	
		SB34	1×3		I (143)a	南北	N0° W	170		170.0	355		118.3	6.04	8	40.5	36.5	
		SB35	2×3		I (243)a	南北	N0° W	490		245.0	655		218.3	32.10	9	33	46.2	
		SB36	2×3	四面庇	I (243)e	南北	N10° W	395	700	197.5	540	920	180	21.33	23	30.2	42.6	
SB37	2×3	二面庇 (東西)	I (243)c	南北	N10° W	480		240.0	570		190	27.36	15	25.7	31			
出水市	松尾城跡	SB1	2×2	総柱建物	III (242)a	東西	N73° W	390.3		195.1	387		193.3	15.10	9	20~70	40~75	
		SB2	2×4		I (244)a	東西	N73° W	387.8		193.9	774		193.5	30.02	15	40~130	60~80	
	大坪	SB1	2×3		II (243)a	東西	N73° E	339.5		169.7	707		235.6	24.00	11	18.55	10.8	
		SB2	2×3		I (243)a	東西	N80° E	397.5		198.7	542		180.6	21.54	10	18	7.9	
		SB3	2×3		I (243)a	南北	N13° W	377.5		188.7	655		218	24.73	10	25.2	16.1	
		SB4	2×3	一面庇か?	I (243)b	東西	N85° E	348.5		174.2	550.5		183.5	19.18	10	28.5	22.8	
		SB5-1	1×3		I (143)a	南北	N10° W	202		202.0	649.5		216.5	13.12	8	25.6	20.9	
		SB5-2	1×3		I (143)a	南北	N10° W	331		331.0	628.5		209.5	20.80	8	26.3	23.3	
		SB6	2×3	四面庇	I (243)e	南北	N4° W	425.5	705.5	212.8	677.5	903	225.8	28.83	28	24.8	23.4	
		SB7	2×3	総柱建物	III (243)a	南北	N6° W	410		203.8	654		214.7	26.81	12	29.8	23.1	
		SB8	2×3		I (243)a	南北	N3° W	416.5		208.2	563		187.6	23.45	10	24	28.6	
		SB9	2×3		I (243)a	東西	N87° E	386		193.0	661		220.3	25.51	10	26.7	32.6	
SB16	2×3	総柱建物	III (243)a	南北	N5° E	504		168.0	330		165	16.63	14	28.28	55			
SB41	1×3		I (143)a	東西	N12° W	138		138.0	448		149.3	6.18	8	32.8	43			
SB119	2×3		I (243)a	東西	N3° W	353		176.5	522		174	18.43	9	37.3	37.5			
SB120	1×2		I (142)a	東西	N7° W	217.5		217.5	397.5		198.75	8.65	8	47.3	44.25			
阿久根市	上野畑・広段	SB1	2×2		I (242)a	東西		286		143.0	405.3		202.6	11.59	8	23.6	13.8	
		SB2	2×5	一面庇 (北)	I (245)b	東西		406	552.4	203.0	973.3		194.6	39.52	21	29.2	24.5	

市町村	遺跡名	遺構番号	規模 (縦×横)	底の有無など	分類	方向	方位	実長 (cm)			桁行 (cm)			面積	柱穴状態		標高	報告書				
								実長	底含	柱間	実長	底含	柱間		身舎	柱数			P11径 (cm)	P11深 (cm)		
伊佐市	寺山・年ノ宮	SB1	2×3		I (2×3) a	東西	N87° W	503		251.5	588.5		196.1	29.60	10	25.9	26.2	L=198m	委町町6 1991			
		SB2	2×3		I (2×3) a	南北	N9° W	397		198.5	626.5		208.8	24.87	10	29.7	33.2					
	平泉城跡	曲輪1	SB1	2×3		I (2×3) a	東西	N57° W	385		192.5	595.5		198.5	22.93	13	37.6	43.07	L=230~ 240m	大口市1 1982		
			SB2	3×3	一面庇 (西) 庇の礎で増し?	I (3×3) b	南北	S34° W	633.5		211.2	590.5		196.83	37.41	20	41.9	48.3				
		SB3	2×3	二面庇 (北・西)	I (2×3) c	東西	N105° W	379.5	440.75	189.5	584	681.33	194.66	22.16	14	39.38						
		SB4	2×4	一面庇 (南)	I (2×4) b	南北	N16° W	400		200.0	784.5		889.5	31.38	14	37.8	44.28					
		SB5	1×1		I (1×1) a	南北		189		189.0	271			5.12	4	48.75	49.25					
		SB6	2×2		I (2×2) a	東西	N80° E	400		200.0	410.5		205.25	16.42	9	41	59.33					
		SB7	3×4	一面庇 (北)	I (3×4) b	東西	N103° W	586.5	706.3	195.5	794.5		198.6	46.60	21	59.6	62.52					
		SB8	2×α					480		240.0			209.5		6	35.33	46.16					
馬場A	SB10	2×4			I (2×4) a	南北	N25° E	500		250.0	726		181.5	36.30	11	38.27	48.27	L=210m	大口市15 1996			
	SB1	1×3		I (1×3) a	東西	N60° W	350		175.0	645		215	22.58	8	29~45	23~53						
込町1	SB1	2×3			I (2×3) a	東西	N75° E	370		185.0	630		210	23.31	8	15~20	10~35	L=212m				
	SB2	2×3or2×4				南北	N20° E			240.0	540	755	180		11	15~30	18~40					
伊佐市	新平田	SB1	2×5		I (2×5) a	東西	N85° E	325		162.5	665		133	21.61	14	18~28	25~45	L=208m	大口市20 1997			
		SB2	3×7		I (3×7) a	東西	N90° E	310		103.3	665		95	20.62	24	16~40	18~45					
		SB3	2×4		I (2×4) a	南北	N3° E	302.5		151.2	695		173.7	21.02	15	15~30	15~40					
		SB4	2×3		I (2×3) a	東西	N82° W	335		167.5	580		195	19.43	10	20~55	35~65					
		SB5	2×3		I (2×3) a	東西	N86° E	317.5		158.7	602.5		200.8	19.13	10	18~40	25~60					
		SB6	4×4or 2×3 (底)				南北	N3° E	747		186.7	792		198	59.16	25	25~60			30~65		
		SB7	2×3		I (2×3) a	南北	N14° E	415		207.5	617.5		205.8	25.63	10	15~30	15~40					
		SB8	2×2		I (2×2) a	東西	N84° W	315		157.5	391.6		195.8	12.34	8	20~60	15~40					
		SB9	2×3		I (2×3) a	南北	N1° E	372.5		186.2	607.5		202.5	22.63	10	28~60	30~40					
		SB10	2×3		I (2×3) a	南北	N1° E	375		187.0	645		215	24.19	10	20~50	15~45					
		SB11	2×3		I (2×3) a	東西	N88° W	425		212.5	682.5		227.5	29.01	10	20~40	15~60					
		SB12	2×2		I (2×2) a	南北	N10° E	387.5		193.7	455		227.5	17.63	8	20~35	10~50					
		SB13	2×3		I (2×3) a	東西	N1° W	397.5		198.7	660		220	26.24	10	20~35	35~45					
		SB14	2×2		I (2×2) a	南北	N12° E	347.5		173.7	340		170	11.82	8	35~60	10~60					
		SB15	3×3		I (3×3) a	南北	N7° E	407.5		135.8	632.5		210.8	25.77	12	15~30	12~45					
		SB16	2×3		I (2×3) a	南北	N4° E	360		180.0	515		171.6	18.54	10	20~45	12~50					
		SB17	2×2		I (2×2) a	南北	N4° E	310		155.0	420		210	13.02	8	20~45	15~55					
		SB18	2×3		I (2×3) a	東西	N81° W	375		187.0	560		186	21.00	10	20~40	30~60					
		SB19	2×3		I (2×3) a	東西	N81° W	385		192.5	580		193.3	22.33	10	20~50	20~60					
		SB20	2×3		I (2×3) a	東西	N83° W	325		162.5	525		175	17.06	10	20~45	30~55					
		SB21	2×3		I (2×3) a	東西	N83° W	397.5		198.7	565		188.3	22.46	10	20~45	25~60					
		SB22	2×3		I (2×3) a	南北	N9° W	440		220.0	602.5		200.8	26.51	10	25~40	25~65					
		SB23	2×3		I (2×3) a	南北	N2° W	337.5		168.7	615		205	20.76	10	25~55	30~95					
		SB24	2×3		I (2×3) a	東西	N86° W	292.5		146.2	530		176	15.50	10	25~35	25~50					
		SB25	2×3		I (2×3) a	東西	N83° W	382.5		191.0	672.5		224.1	25.72	10	25~45	23~75					
		SB26	2×3		I (2×3) a	南北	N6° E	440		220.0	600		200	26.40	10	20~35	8~40					
		SB27	2×3		I (2×3) a	南北	N1° E	345		172.5	475		158	16.39	10	25~45	20~55					
		SB28	2×2		I (2×2) a	南北	N5° W	390		195.0	420		210	16.38	8	20~45	35~65					
		SB29	2×5		I (2×5) a	東西	N89° E	342.5		171.2	557.5		111.5	19.09	14	20~40	20~65					
		SB30	2×3		I (2×3) a	南北	N4° E	385		192.5	440		146.6	16.94	10	20~40	25~50					
		SB31	2×2		I (2×2) a	南北	N1° E	365		182.5	387.5		193.7	14.14	8	15~60	18~78					
		SB32	2×4		I (2×4) a	東西	N90° E	395		197.5	737.5		184.3	29.13	12	25~35	30~45					
		2地点	SB1	2×3		I (2×3) a	東西	N85° W	390		195.0	507.5		169.1	19.79	10	20~40			10~30	L=171m	埋せ163 2011
			SB2	3×3		I (3×3) a	南北	N5° E	507.5		169.1	617.5		205.8	31.34	12	20~45			10~40		
下鶴	下鶴	SB1	2×3		I (2×3) a	東西		475		237.5	675		225	32.06	9	72.6	85.3	L=171m	埋せ163 2011			
		SB2	3×4	一面庇 (北)	I (3×4) b	南北		595		198.3	910	1000	227.5	54.15	18	49.8	43.8					
		SB3	3×4		I (3×4) a	南北		550		183.3	780		195	42.90	13	41.46	35.46					
		SB4	2×3		I (2×3) a	南北		395		197.5	695		231.6	27.45	9	41.3	42.3					
		SB5	2×3		I (2×3) a	東西		495		247.5	685		228.3	33.91	10	37.6	50					
		SB6	2×2	一面庇 (北)	I (2×2) b	南北		450		225.0	570	675	285	25.65	11	51.36	53.9					
		SB7	1×3	一面庇 (北)	I (1×3) b	南北		310		310.0	530	595	176.6	16.43	11	35.72	45.9					
		SB8	3×3		I (3×3) a	南北		590		196.6	705		235	41.60	11	53.27	62.54					
		SB9	2×3		I (2×3) a	東西		300		150.0	595		198.3	17.85	9	38.22	41.11					
		SB10	2×3	一面庇 (南)	I (2×3) b	東西		435	570	217.5	585		195	25.45	14	51.6	50					
		SB11	2×3	一面庇 (西)	I (2×3) b	東西		400		200.0	685	790	228.3	27.40	13	55.23	48.07					
		SB12	2×4		I (2×4) a	東西		395		197.5	810		202.5	32.00	11	45.54	47.09					
		SB13	2×3		I (2×3) a	東西		405		202.5	575		191.6	23.29	10	40.4	52.1					
		SB14	2×2	一面庇 (東) 張り出し (北)	II (2×2) b	東西		400	500	200.0	685	825	342.5	27.40	14	43.42	56.07					

市町村	遺跡名	遺構番号	規模 (縦×横)	底の有無など	分類	方向	方位	実長 (cm)			軒行 (cm)			面積		柱穴状態		標高	報告番	
								実長	底含	柱間	実長	底含	柱間	身舎	柱数	PIT径 (cm)	PIT深 (cm)			
さつ ま 町	松尾城及び 宗功寺2	SB1	2×α					383		191.5			186		6			L=64m	宮之城町5 1995	
		SB2	2×α					396		198.0					5			L=78m	宮之城町6 1995	
	諏訪原	SB1	2×3			I (2×3) a	東西											L=76m	藤原町3 2001	
	寺屋敷	SB1	2×3			I (2×3) a	南北	395		197.5	566		188.6	22.36	9	23~45	12.5~34	L=75m	埋せ161 2011	
	宮ノ前	SB1	2×3			I (2×3) a	南北	325		162.5	544		181.3	17.68	11	25~65	12~35	L=18m		
	山崎野町A	SB1	2×3		一面庇 (北)	I (2×3) b	東西	N60° E	392.5	492.5	196.3	715		238.3	28.06	24	31.75	18.3		
	虎 居 城	B地点	SB1	2×3					N21° W										L=50m	
			SB2	2×3		総柱?間仕切りあり	III (2×3) a	南北	N23° W	605		302.5	670		223.3	40.54	11	38	35.8	
			SB3	1×1			I (1×1) a	南北	N45° W	202.5		202.5	259.5		259.5	6.25	4	62.5	25.5	
		C地点	SB1	3×4			I (3×4) a	東西	N78° W	599		199.6	786		196.5	47.08	12	54.5	44.45	
			SB2	3×4			I (3×4) a	東西	N80° W	582.5		194.1	750		187.5	43.69	14	47.78	31.5	
			SB3	1×2			I (1×2) a	東西	N80° W	183		183.0	395		197.5	7.23	6	58	37	
			SB4	2×3			I (2×3) a	東西	N75° W	400		200.0	630.5		210.1	25.22	9	29.8	46.2	
			SB5	3×3			I (3×3) a	東西	N72° W	452.5		150.8	642.5		214.1	29.07	12	75.75	59.6	
			SB6	3×3			I (3×3) a	南北	N68° W	624		208.0	694		231.3	43.31	9	84.2	58	
D地点		SB7	3×3			I (3×3) a	東西	N63° E	642		214.0	683		227.6	43.85	12	96.58	66.5		
		SB8	2×3			I (2×3) a	東西	N60° W	620		206.6	690		230	42.78	8	97.25	57.62		
		SB1	2×3			I (2×3) a	南北	N32° E	495		247.5	579		193	28.66	10	36.4	37.25		
E地点		SB2	3×3			I (3×3) a	南北	N30° E	452.5		150.3	580		193.3	26.25	14	34.75	33.5		
		SB3	1×2			I (1×2) a	東西	N55° W	320		320.0	427.5		213.75	13.68	8	33.3	31.5		
		SB4	2×3			I (2×3) a	南北	N35° E	392.5		196.3	490		163.3	19.23	11	40.1	29		
G地点	SB1	2×2α						N29° W	406		203.0		195		6	44.3	30.3	L=57m		
	SB2	2×α						N57° W	385		192.5		201		5	39.4	32			
H地点	SB1	1×1			I (1×1) a	南北	N29° E	395		197.5	412		206	16.27	6	33	23.8	L=54m		
外 園	I調査区	SB1	3×4α					N20° E	240		123.3		600α	150	14.40α	12				
		SB2	2×3			I (2×3) a	南北	N31° E	375		187.5	630		210	23.63	9		50~60		
		SB3	2×2			I (2×2) a	南北	N20° E	340		170.0	375		187.5	12.75	8		20~30		
		SB4	2×3			I (2×3) a	東西	N70° W	270		135.0	645		215	17.42	10		20~50		
		SB5	2×3			I (2×3) a	東西	N69° W	345		172.5	545		181.66	18.80	9		20~70		
		SB6	2×2			I (2×2) a	東西	N57° W	310		155.0	395		197.5	12.25	8		20~50		
		SB7	2×α						N30° E	330		165.0				3				
		SB8	2×α						N61° W	380		190.0				3	40	50~60		
		SB9	2×α						N61° W	380		190.0				3		40~50		
	II調査区	SB1	2×3			I (2×3) a	南北	N29° E	425		212.5	610		203.3	25.93	10			60	
		SB2	2×2			I (2×2) a	南北	N30° E	325		162.5	405		202.5	13.16	8			20~60	
		SB3	2×3			I (2×3) a	東西	N70° W	310		155.0	615		205	19.07	10			30~70	
		SB4	2×3α						N25° E	450		225.0		205		7			50~70	
		SB5	2×3			I (2×3) a	東西	N70° W	390		195.0	590		196.6	23.01	8			20~50	
		SB6	2×3			I (2×3) a	東西	N81° W	385		192.5	620		206.6	23.87	8			20~50	
III調査区	SB1	2×3			I (2×3) a	南北	N30° E	305		152.5	550		183.3	16.78	9			30~60		
	SB2	2×2			I (2×2) a	南北	N28° E	305		152.5	365		182.5	11.13	7			25~70		
	SB3	2×2α						N72° W	330		165.0		210		5			20~60		
	SB4	2α×2α						N5° E							4			50~60		
IV調査区	SB1	2×3			I (2×3) a	東西	N60° W	315		157.5	560		186.6	17.64	10			30~50		
	SB2	2α×3						N58° W			660		229		6			30~60		
	SB3	α×3						N58° W			650		216.6		4			40~50		
	SB1	1×1			I (1×1) a	南北	N21° E	170		170.0	190		190	3.23	4			35~70		
	SB2	2×3			I (2×3) a	東西	N80° W	330		165.0	430		143.3	14.19	10			30~40		
V調査区	SB3	2α×4						N8° E			660		165		6				40~50	
小瀬戸	SB1	2×3			I (2×3) a	東西	N70° E	310		153.3	467.5		153.7	14.49	8	52.8	40.6	L=11m	景19 1981	
	SB2	2×3			I (2×3) a	南北	N24° W	310		153.8	468		156.7	14.51	10	47.9	33.4			
	SB1	3×4			I (3×4) a	東西		497.5		165.8	900		225	44.78	14	20~30				
	SB2	1×1			I (1×1) a	東西		200			400			8.00	4			L=8~ 10m	埋せ11 1994	
保業院	SB3																			
	SB4	2×3		一面庇 (東)	I (2×3) b	東西		500			700			35.00						
高井田	SB1	1×2			I (1×2) a	南北		121		121.0	239.5		119.75	2.90	5			L=10m	埋せ35 2002	
市頭A	SB1	2×4			II (2×4) a	東西	N78° E	402.5		201.0	802		200.5	32.28				L=11.5m		
市頭C	SB1	4×7 (4×5)		総柱建物 (二面庇 (南北))	III (4×7) a	南北	N7° E	900		225.0	1400		200	115.40						
	SB2	2×2			I (2×2) a	南北	N3° E	386		193.0	386		193	14.90						
	SB3	2×3			I (2×3) a	南北	N2° E	374		187.0	566		188.6	21.17						
	SB4	2×3			I (2×3) a	南北	N2° E	317		158.5	715		238.3	22.67						
	SB5	2×5		添柱、布張り	I (2×5) a	南北	N10° E	403		201.5	1035		207	41.71						
	SB6	2×3			I (2×3) a	東西	N87° E	313		156.5	485		161.6	15.18						
	SB7	2×4		布張り掘方	I (2×4) a	東西	N80° W	360		180.0	657		164.2	23.65						
	SB8	2×3		布張り掘方	II (2×3) a	東西	N73° W	380		190.0	614		204.6	23.33						
	SB9	1×2			I (1×2) a	東西	N86° W	169		169.0	407		203.5	6.88						
	SB10	1×3			I (1×3) a	南北	N2° E	225		225.0	460		153.3	10.35						
	SB11	2×4			I (2×4) a	南北	N1° E	310		155.0	768		192	23.81						
	SB12	1×2			I (1×2) a	南北	N7° E	184		184.0	320		160	5.89						
	SB13	1×3			I (1×3) a	南北	N5° W	270		270.0	527		175.6	14.23						
	SB14	2×5		主柱間に間柱跡がある	I (2×5) a	南北	N1° E	357		178.5	1007		201.4	35.95						
	SB15	2×3			I (2×3) a	東西	N85° W	432		216.0	605		201.6	28.14						
	SB16	4×7		SB1の立て替え	II (4×7) a	南北	N7° E	778		194.5	1445		206.4	112.42						
	SB18	2×4			I (2×4) a	南北	N7° E	390		195.0	735		183.7	28.67						
	SB19	2×5			I (2×5) a	東西	N87° W	408		204.0	973		194.6	39.70						
	SB20	2×5			I (2×5) a	東西	N83° W	397		198.5	947		189.4	37.60						
	SB21	1×4			I (1×4) a	南北	N11° E	383		383.0	806		201.5	30.87						
SB22	2×4			I (2×4) a	東西	N88° W	402		201.0	796		199	32.00							
SB27	2×2		二面庇 (北東)	I (2×2) c	東西	N60° W	411		205.5	593		296.5	24.37							

市町村	遺跡名	遺構番号	規模 (縦×横)	庇の有無など	分類	方向	方位	実長 (cm)			軒行 (cm)			面積		柱状状態		標高	報告番		
								実長	庇含	柱間	実長	庇含	柱間	身舎	柱数	PIT径 (cm)	PIT深 (cm)				
霧島市	中福良	SB1	2×3		I (2×3) a	東西	N66° W	417		208.5	631		210.3	26.31	10	20~30	40~50	L=188m	牧園町3 1992		
		SB1	2×3		I (2×3) a	南北	N14° E	461.25		227.5	615		210.33	28.37	10	47.2	37.95	L=267m	県7 1977		
		SB2-1	2×2		I (2×2) a	南北	N2° E	263.33		131.3	500		197.5	13.17	8	49.6	29.4				
	SB2-2	1×2		I (1×2) a			N42° W	330		330.0	500		250	16.50	5	53	36				
	SB3	2×3		I (2×3) a			N52° W	361.25		178.8	481.66		160.83	17.40	10	27.4	21.4				
	中尾田 岩山城跡	SB1	2×5	二面庇 (南北)		I (2×3) a	東西	N83° E	394.7	664.9	196.3	997		197.8	39.35	27	34.9	54.8	L=210~ 223m	県15 1981	
		SB2	α×5	庇 (西)						203.0	991.5		198.3		15	47.32	79.74				
		SB3																			
		SB4						N8° W			185.0	608		199.3		6	36.6	75			
		SB5	2×α	庇 (南北)				N86° W	418	688.6	198.0		198		11	44.2	66.2				
		SB6	2×4or2×3	一面庇 (北) / 二面庇 (北東)			東西		400	490	200.0	602		150.5	24.08	16	40~50	50~70			
		SB7	2×2			I (2×2) a	東西	N87° E	209.5		104.7	234.5		117.25	4.91	8	25~30	35~80			
		SB8	2×α					N81° E													
	湧水町	山崎B	SB1	2×5	一面庇 (北)		I (2×5) b	東西	N67° W	428	540.6	216.0	928		183.4	39.72	20	35.8	41	L=207~ 209m	県18 1981
SB2			2×5			I (2×5) a		N23° W													
SB3			2×4	二面庇 (南北)		I (2×4) c	東西	N68° E	366.4	560.4	195.0	861	867.3	215.2	31.55	21	29.7	41.2			
SB4			2×3			I (2×3) a	南北	N30° W	402		201.0	570.6		186.3	22.94	10	28	40			
SB5			2×3			I (2×3) a	東西	N73° E	359		182.0	535		178.3	19.21	9	28	31			
SB6			2×2	一面庇 (南)		I (2×2) b	南北	N63° E	414.6		209.5	440	550	222.5	18.24	11	32	52			
SB7			2×4	二面庇 (南北)		I (2×4) c	東西	N69° E	394	622.1	194.5	848.6	858.8	208.7	33.43	20	65	63			
垂水市	宮下	SB1	2×3	間仕切り柱		II (2×3) a	東西		306		153.0	464		154.6	14.20	11	33.3		垂水市5 2001		
鹿屋市	中ノ原	SB1	2×4	間仕切り		II (2×4) a	東西	N65° W	403.5		201.7	638		159.5	25.74	11	29.1	33.8	L=69m	県52 1990	
		SB2	2×3			I (2×3) a	南北	N28° W	410.2		205.1	741		247	30.40	11	31.5	33.8			
		SB3	2×3	二面庇 (東西)		I (2×3) c	東西	N78° W	406		203.0	755.5	1011.5	251.8	30.67	14	29.5	37			
	川の上・中ノ丸	SB1	1×2			I (1×2) a	南北		207		207.0	380.5		190.25	7.88	6	34.5	26.58	L=70m	鹿屋市74 2004	
		SB2	1×2			I (1×2) a	南北		165		165.0	236		118	3.89	6	30	29.7			
		SB3	1×2			I (1×2) a	東西		173		173.0	394		197	6.82	6	34.6	39.38			
		SB4	2×3			I (2×3) a	東西		261.5		130.7	566.5		188.8	14.81	9	35.3	26.5			
	頤家西	SB1	2×2			I (2×2) a	東西		360		180.0	480		240	17.28	8	24	40	L=132m	埋7141 2009	
		SB2	1×3	四面庇		I (1×3) e	東西		345	542.5	345.0	585	857.5	195	20.18	24	24	40			
		SB3	2×3			I (2×3) a	南北		357.5		178.8	615		205	21.99	10	24	50			
		SB4	1×4			I (1×4) a	東西		120		120.0	982.5		245.6	11.79	10	40	45			
		SB5	1×3			I (1×3) a	南北		80		80.0	580		193.3	4.64	7	40	50			
		SB6	2×3			I (2×3) a	南北		357.5		178.8	600		200	21.45	10	25	30~40			
		SB7	2×4	二面庇 (東西)		I (2×4) c	南北		365	587.5	182.5	755		188.75	27.56	21	25	40			
SB8	2×4	二面庇 (東西)		I (2×4) c	南北		435	670	217.5	845		211.25	36.76	22	25	40					
SB9	2×3			I (2×3) a	南北		370		185.0	570		190	21.09	16	45						
肝付町	高山城跡 周辺地	SB1	2×3	一面庇 (西)		I (2×3) b	東西		392.5		196.2		725		12	30~42		L=25m	高山町10 2005		
		SB2	2×3			I (2×3) a	南北		430		215.0	630		210	27.09	7	37~58				
		SB3	1×3			I (1×3) a	南北		410		410.0	600		200	24.60	7	75~120				
曾於市	田平下	SB1	2×3			I (2×3) a	東西		283		141.5	584.6		194.8	16.54	13	25.4	35.3	L=148m	財部町6 2002	
		SB2	2×3	二面庇 (北西)		I (2×3) c	東西	N58° W	369	450	180.0	600	740	200	21.60	17	27.17	19.4			
	剛木耳取	SB2	1×3a			I (1×3) a	東西	N70° W	302		302.0	449		149.6	13.56	8	29.3	18.87	L=290m	埋791 2005	
		SB3	2×2			I (2×2) a	東西	N118.5° W	326		163.0	396		198	12.91	7	27.1	30.2			
		SB4	2×3			I (2×3) a	南北	N50° W	425.5		212.7	513.5		171.6	21.85	10	26.3	41.7			
	関山西	SB1	2×3			I (2×3) a	東西		532.8		355.2	761.5		253.8	40.57	11	40.8	66.4	L=289m	埋7126 2008	
		SB2	2×3			I (2×3) a	東西		438.3		292.2	682.5		227.5	29.91	10	66	100.7			
	狩俣	SB1	2×3			I (2×3) a	南北	N24° W	426		213.0	606		202	25.82	11	32.4	35.5	L=265m	埋7152 2010	
		SB2	2×3			I (2×3) a	南北	N19° W	358		179.0	665		221.6	23.81	11	34.7	30.5			
		SB3	2×2	柱状建物		III (2×2) a	南北	N34.5° W	228		114.0	253		126.5	5.77	8	24.2	21.7			
SB4		2×3			I (2×3) a	南北	N25° W	240		120.0	443		147.6	10.63	10	35	25.6				
SB5		2×3			I (2×3) a	東西	N79° E	214		107.0	363		121	7.77	10	38.4	28.8				
志布志市	長田	SB1	1×2			I (1×2) a	東西	N4° W	250.7		250.7	468		234	11.73	6	34.3	20.2	L=31m	有明町2 2003	
		SB3	1×2			I (1×2) a	東西	N5° E	264		264.0	454		227	11.99	6	50	54			
		SB8	1×1			I (1×1) a	東西	N2.5° E	267		267.0	327		327	8.73	4	61.5	38.8			
		SB9	1×1			I (1×1) a	東西	N9° E	205		205.0	293		293	6.01	4	39.3	21.5			
		SB1	2×5			I (2×5) a	東西	N60° W	474		237.0	931		186.2	44.13	11	20~30	20~30			
	前谷	SB2	2×3			I (2×3) a	東西	N59.9° W	376		188.0	639.5		213.1	24.05	10	20~30	20~30	L=160m	松山町1 1986	
		SB3	1×3			I (1×3) a	南北	N12° E	378.5		378.5	620.5		206.8	23.49	7	20~30	20~30			
		SB4													4	30~70	70~80				
	志布志 城跡2	曲輪2	SB1	2×3	一面庇 (西)		I (2×3) b	南北	N30° E	400	500	200.0	550		183	22.00	12			L=44m	志布志市2 2008
		曲輪3	SB2	2×3			I (2×3) a	南北	N30° E	400		200.0	570		190	22.80	8			L=47m	
志布志 城跡3	曲輪1	SB1	2×3			I (2×3) a	東西											L=23m	志布志市8 2012		
		SB2	3×3			I (3×3) a															
	曲輪2	SB3	2×2			I (2×2) a													L=36m		

鹿児島（鶴丸）城下町の計画性

東 和幸*

A systematic designing of Kagoshima (Tsurumaru) castle town

Higashi Kazuyuki

要旨

鹿児島（鶴丸）城は慶長6（1601）年に初代藩主島津家久によって築城がはじめられ、これに併せて城下の町割も計画されたと考えられる。設計した人物は鹿児島島の地形を熟知した上で、尾根と海岸線の最も狭い部分を中枢部とし、道に150°の角度を3回とり入れることによって東西南北軸の主要街道に合わせている。直線道に合わせた方形の区画や町の拡大など、綿密な計画の下で町割を行ったことを明らかにする。

キーワード 鹿児島城下 近世初期 地形 東西南北軸 町割 計画性

1 はじめに

前号で筆者は、中世末から近世初頭の各当主がつくった城を追いながら、東西南北軸から地形軸に大きく転換したことを示すとともに、鹿児島城下が壮大かつ緻密な計画性の基でつくられたことを述べた（東2013）。今回は鹿児島城下の町割に主眼を置き、これまでの研究史を踏まえながら、鹿児島（鶴丸）城下町の高度な計画性について述べることにする。

2 鹿児島（鶴丸）城下設計についての先行研究

先行研究については、各研究者の論点はずさないうようにするため、筆者自身の覚書とすることも含め、箇条書きとする^(註1)。また、年代の古い方から順に記したので、後で同様のことを述べている部分については省略した。なお、本稿に関することだけを抽出したので、必ずしも各研究者の最も述べたかった論旨ではないことを断っておく。

(1) 佐多武彦氏の研究（佐多1937）

1937（昭和12）年に記された論文であるが、その後各研究者が述べることのほとんどを指摘している。手に入れにくい論文であるので、佐多氏の論点を箇条書きにして引用する。

ア 「薩摩大隅及び日向の諸県三郡を挙げて管理する一地方の大守の首府を何処に定むべきかを道路網並びに沿海港湾等の関係より考察するに大隅の国分平地か薩摩の鹿児島島の平地の一なるべし」

イ 「先づ全体上此の両地は中心にして日向方面人吉水俣方面或は南隅南薩方面よりする上陸部隊に対して攻勢を取るに際し作戦上尤も便利なり而して大島琉球を配下に容れ舟楫の運用に照らせは国分は港泊なく且つ稍僻在せるを以て此の関係より

鹿児島を可とすべし是れ国分より鹿児島に城下を徒せし大原因なるべし」

ウ 「甲突川等が今の流域と為りしは甚だ古きことに非ざるべし 始めは新照院城山の西端より平ノ中馬場俊寛堀を経て野菜町通り辺より弁天台場に注ぎしものなるべし 往年の大水に草牟田新照院よりの水は皆此の通路を流れたりといふ 其の後大要清滝川の流域に移りて城下の編成に当たり今の形状と成りしものなるべし 故に今の流域は天然の川筋に非ず 西田橋より下流は左岸皆堤防を設け右岸は之を設けず大水に際して対岸に溢る如く設計されたり 是は一には市街地人家櫛比の地域に浸水せざらしむる為めと直接城下第一線の防御線を形成せしものなり 故に十年の役にも官軍之を応用せり」

エ 「照国神社旧南泉院馬場の処に榎の大樹蕃茂せる堤防と外濠ありて二橋を架す北方に在るを大手橋といひ南方に在るを山下橋といへり 而して今の裁判所の角には枳形江戸城の目附ありて上に松樹を栽えたり（是は明治五年臨幸の際撤去せられしと記憶す） 此より東南に俊寛堀あり又御着屋の周囲には堅固なる石壁ありて伊勢殿屋敷花岡屋敷の石垣と共に一種のカポニールを成形したり」 ※[カポニール] = [出丸]

オ 「此より西本願寺昔の黒木屋敷の石垣に続き南一帯は堤防あり 此に連りて東方に小松殿屋敷加治木屋敷米倉の石壁あり其の東に名山堀ありて一層堅固に設備せられたり それより又肝付屋敷入来院屋敷の石壁あり 今の高野山の処より海岸に亘る一帯の堀と之に沿える堤防ありて屋形東方の外濠と石垣とを構成したり高野山の門前に吉野橋あ

*鹿児島県教育庁文化財課

り 今の県庁の門前通所謂屋形の馬場に新橋あり 平佐北郷殿屋敷と琉球館とは自然のカポニールを形成したりき」(註2)

- カ 「造士館の処は太守の居館にて本丸たり 其の西に接せる二の丸跡は二の丸 病院昔時の御厩の処は別に一郭を成せり 而して城山の東半部を禁入山と為し東西南北四十間毎に楠樹を植え本丸二の丸を俯瞰する能はざらしめ今の城山公園茶店の西方に門を構設したり 亦新照院の登り口番屋坂の処にも門を設けり 岩崎谷の侍は直接本丸背後の警衛に任命されたるを以て三月五日の節句の祝九月の放生会等には各戸同時に祝宴を開くを禁せられ居たりという されど新照院の方は番屋坂の門外に侍の居住せしを以て斬る制限なかりしといふ」
- キ 「今の女子師範学校より裁判所に至る広き一郭には各官衙学校皆集まれり 本丸の前なる地域即ち今の市尋校の辺は広場にて空地たり 県庁の処は宮之城屋敷と垂水屋敷なりしといふ」
- ク 「城門を入れは必ず堅固の石壁ありて右か左に曲がり以て城内に進む如くになせり 是は城外より敵人が競うて城門を破毀して突入せんとする氣勢を殺かんが為と亦此に人員を集合して其の人数を計りしを以て枡形と称せりと云う 蓋し平生より此の枡形は幾人収容し得るかを計量せしものなるべし」
- ケ 「枡形の遺跡は新照院なる佐多の屋敷の下岩崎谷の中程道路の屈曲せる処 即ち上の平なる谷山病院中の平なる児玉実良弁護士の処なり 又東方にては聯隊区司令部及び琉球館の石垣に当た所なり」
- コ 「城下町の道路の中には通行の際知らず識らず方角を直角に取違ふ如く経始されたるあり 乃ち石灯笼通り重信下駄店より黒松洋品店前に到る道路は南方に通しあるもいはる屋俊寛堀跡より漸次東に円の四分の一を画き本願寺の前通りに至れば東西に通する道路となるあり 是は熊本城下紺屋町の処にも仙台城下にも之れあり 他の城下にも蓋しあるならん 伝へ云ふ敵人の侵入する時知らず識らず方角を取違ふる為なりと」
- サ 「元来城下に集まる道路は主要地点より一望の下に瞰制せらるる如く編成せらる今城山の西端なる新上橋上辺の高地に立ては北方甲突川に沿ふ道路西田街道田上街道高麗町荒田街道皆之を望見するを得 又磯街道は戦術上の価値少きを以て吉野を通過して重富及び蒲生方面に向ふ道路必要と為る十年役に私学校軍は横川山田吉野よりして城山に進入したり」
- シ 「大着屋の南方より地藏角までには一帯の堤防ありて此に大榎樹繁茂し町家と侍屋敷との境界を為

して自然に防火線を形成し 一面子供の遊処今の小公園と為したりき 而して地藏角より以南は南林寺墓地亦自然に境界を為して防火の効用を為せり 此の間石灯笼通角今の重信下駄店の所には大なる町門ありしが是は明治五年行幸の際撤廃したり」

(2) 唐鎌祐祥氏の研究 (唐鎌 1992)

- ア 歴史地理学的手法を用いて、鹿児島城下の「城下町プラン」を提示。
- イ 上方限・鹿児島城正面・下方限で角度が変わり、鶴が羽を広げ桜島に向かって舞い立とうとしている様子を指摘。
- ウ 吉野橋・新橋堀ノ面と大手橋・山下橋堀ノ面・俊寛堀の内側および城山が、鹿児島城の「内郭」であることを指摘。
- エ 内郭の公的な御門が参勤交代道、千石馬場の始まる枡形御門であることを指摘。



第1図 唐鎌氏による鹿児島城下町プラン(唐鎌 1992)

(3) 中田勝康氏・秋山賢治氏の研究(中田・秋山 1992)

- ア 鹿児島市の城下町形態とその町割りについて整理し、現在の地域用途と道路網への影響と問題点を指摘し、城下町遺産を都市づくりに生かしていく為の基本理念について論述したもの。
- イ 「城山をとりこみ東南の麓一帯に居館を構え、家臣団の屋敷を周囲におき、さらに町人をその外縁部に集住させるという形で、新しい長期的展望で城造り、城下町の形成がはじめられた」
- ウ 「城下町形態は開放型、町割は長方形型短冊型であるが、上級武士屋敷は正方形型である」
- エ 「家久が鶴丸城に移ったころは上町が主な町であったが、唐人なども居留しているほどであったが、近世的な城下町の発展のためには山の迫っている狭い上町だけでは不十分であるので、家久は鶴丸城を築くとともに下町方面の建設にも力を尽くした」
- オ 「甲突川の川筋を改めて埋立を行い、士屋敷・町

屋敷を建てさせた。ただし、西田橋より下流は、左岸は全て堤防を設けたが右岸は設けず、軍事的な必要から大水の際は右岸に水が溢れるように設計された」

カ 「町割の基本は、土屋敷は長方形の短冊型で区画が整然となされているが、町家は埋立等による継ぎ足しのせいもあってか、町割が不規則である。武士を中心とする色合いが濃くでている城下町であるともいえる」

キ 「城下町としては湾港を中心とした町型態で、今で言えばウォーターフロント都市であったと言える」

ク 「川と海とでガードされていたこともあり、道路網は完成度の高い格子状に生まれ、城下町特有のT字路、カギ型路という迷路的な道路が少ない」

(4) 木島孝之氏の研究 (木島 1995)

ア 「薩摩・大隅両国および日向国諸県郡で六十二万石 (後に琉球を加え七十七万石) を有し、加賀前田氏に次ぐ大大名である島津氏の場合、その居城鹿児島城は周知のとおり、所領の規模とは駆け離れて簡素なものである。」

イ 「この鹿児島城の簡素な縄張りがどういう理由によるものかについては、今まで特に検証はされず、一応、次の二つの見解で理解されてきたようである。1- 関ヶ原での敗北を幕府に赦免してもらったため、また大藩ゆえに幕府の警戒を解くための遠慮から簡素な館造りの城に止めた。2- 「城はいらぬ者也、尤堀は之無く候とも事かかぬ也、土程よき堀は之無く候」 (『島津家御旧制軍法 巻鈔下』) という島津義久の言葉に表されるように、島津氏は城を重視しなかった。」

ウ 「本稿では、鹿児島城の縄張りにおける特殊性 (つまり大大名に似合わぬ簡素な縄張りを持つこと) について、それを生み出した要因は何だったのかという問題を、島津氏の権力構造という観点から検証することを目的とする。」

エ 「島津氏の権力体制が豊臣政権への対応を通して義久、義弘の「両殿」体制となり、慶長期には家久を加えた「三殿」体制へ展開し、それが慶長9年 (1604) までは維持されたことを確認した。」

オ 「まず、「居所」をみると、その規模は長辺 175m、短辺 150m程の方形館で、三方は (地表面からの) 高さ 3m程の石垣で固められ、外には幅 15m程の水堀が巡る (南西側の水堀は後に埋められる)。南西面の類線には大きな横矢掛けが設けられ、南東面の虎口は二折れする内枘形虎口となっている。この横矢掛け、内枘形虎口および総石垣の採用は、織

豊系の築城技術を導入した結果と判断される。」

カ 「次に山上の「本丸」・「二丸」についてであるが、現在、「本丸」はNHK送信所となり全く原型を止めておらず、「二丸」は城山公園の駐車場としてかなりの破壊を受けている。そのため山上の縄張りについては全容を解明することは不可能である。ただ「二丸」については、現在ドン広場と呼ばれる部分に遺構が良好な状態で残るため、『元禄九年鹿児島城絵図』と併せて山上の縄張りがある程度推定することができる。」

キ 「「本丸」と「二丸」の配置であるが、『元禄九年鹿児島城絵図』から両者は谷あるいは大空堀によって隔絶していたものと推定される。「本丸」跡であるNHK送信所 (標高 110m強) と「二丸」跡であるドン広場 (標高 100m) の間は低地となり駐車場に使用されている。この低地が本来、谷あるいは大空堀であったと推定される。「本丸」と「二丸」の隔絶した関係は戦国期以来の「南九州型」プランをそのまま引き継いだものである。」

ク 「「二丸」跡に比定されるドン広場の周囲には高さ 6~10mの巨大な土塁が巡る。この土塁は版築にしてはあまりに規模が大きく、また高さや天端の幅が不均等であることから、自然の窪地を掘り込み構築したものと考えられる。土塁の塁線は自然地形に任せたもので横矢掛け等の技術的な工夫はなく、枘形等のテクニカルな虎口もみられない。また、山下の「居所」とは対照的に石垣も用いられていない。この現状からみて「二丸」には、「居所」にみられたような織豊系プランによる改修は施されなかったと判断される。おそらく「本丸」も「二丸」と同類の縄張りであったと推定される。」

ケ 「以上のことから「本丸」・「二丸」は、戦国期以来の「南九州型」プランを持つ上之山城の縄張りを殆ど改修せずに使用したものと推定される。」

コ 「山上は戦国期以来の上之山城の旧式の縄張りをそのまま使用したものであり、そこには積極的な改修の意志は何もないのである。これは単に経済・労力という物理的制約では理解できない問題である。」

サ 「『文政前後城下図』をみると、大竜寺とそれに隣接する武家屋敷の一画が正方形の区画 (120m角) を成している。これは内城の形をそのまま踏襲しているのではないかと思われる。すなわち、現在の大竜小学校の敷地そのものが内城跡ではないかと推定される。内城に関して『島津字伝記大概』に、「築城一重の屋敷」とあることから、この推定はほぼ妥当ではないかと思われる。これらのことから、内城は方 120mの規模を持つ単純な方形館であったと考

えられる。」

シ 「方形館とそれに直交する街区は、典型的な守護所の形態である。直交軸を基本にした守護所の整然とした形態は、古代官衙以来の「政庁の形＝方形」という概念に規定されたものではないかと思われる。大内、武田、大友氏等の伝統的な守護系戦国大名が、戦国期という恒常的な軍事的緊張下においても単純な方形館のスタイルにこだわったのは、形骸化したとはいえ、守護を持つ「公権」の意味を強く意識していたためではないかと考えられる。島津氏は有力国人が割拠する中で成長した戦国大名であるが、自らの権力基盤である国人衆との関係は支配的というよりも契約的なものであった。それは九州征伐における軍団の結束のもろさや朝鮮役における軍役の履行のお粗末さから伺い知れる。この国人衆との関係の脆弱性を補うために、島津氏は伝統的な守護の公権を強く意識し、その結果、居所が典型的な守護所の形態をとったのではないかと推察する。」

ス 「島津氏には、「当主の居所のかたちは、方形館と詰め城であるべき」という、居所に対しての「型」とでもいうべき基本的概念が存在していたことが推察される。」

(5) 松尾千歳氏の研究 (松尾 2005)

- ア 寛文 10 (1670) 年の「鹿児島城下町割図」を基に、建設当時に近い城下を復元。
- イ 黄門様 (18 代家久) の頃、城山の麓から俊寛堀付近に流れていた川を清滝川の流れに代え、さらに現在の甲突川に改められたのが 17 世紀後半であることを指摘。
- ウ 市役所前の電車通りとその延長線上に、高さ三間半 (約 6.3m)、長さ五百間 (約 900m) の護岸が築かれていたことを指摘。
- エ 現在の易居町辺りに出島形式の「築嶋」が、寛文 10 (1670) 年には築かれていたことを指摘。
- オ 寛永 13 (1636) 年の「薩州鹿児島衆中屋敷檢地帳」に「上」は「新堀より上」、「下」は「新堀より下」と書かれていることを指摘。ただし、「新堀」が幕末と同じ現在の名山小学校北東境なのか、それとも新橋堀ノ面なのか明確にしていない。

(6) 下鶴弘氏の研究 (下鶴 2008)

- ア 鹿児島 (鶴丸) 城の総構えは、唐鎌祐祥氏の考えと一致している。
- イ 唐鎌祐祥氏の城下プランを基に、千石馬場と豎馬場の延長線が 120 度で交わり、その角度を二等分する位置に鹿児島城の御楼門が築かれていることを

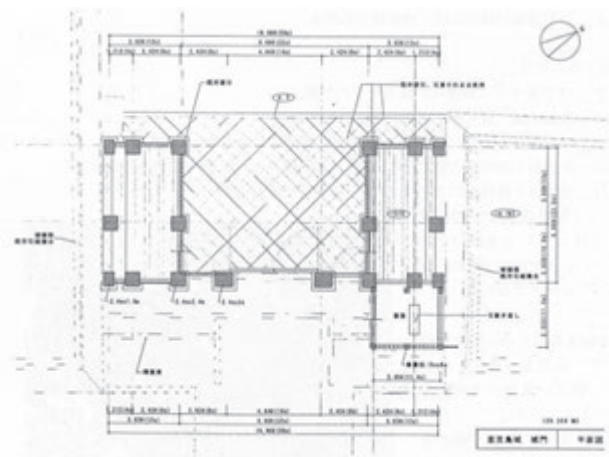
指摘。

(7) 徳永和喜氏の研究 (徳永 2008)

- ア 「義弘の城と支配は防禦的機能を優先するのは当然であるが、家久の新城構想は、新城築城が目的ではなく、新時代の起点となりうる構想を抱いていたかにかかっている。」
- イ 「鹿児島城築城にあたり、江夏 (黄) 友賢に城地を占わせ」「まさに鹿児島城は四神相応の地であるとの占いの結果でもあった。もう一つは屋形は「巽」の方向に向けて建設すること。巽とは、辰と巳の中間で東南向きに構えることを説いたものであり、この築城に最適な方角である「巽」を守れば「千年不拔の基」であると占いの結果を示している。」
- ウ 「結論的には義弘は戦国武将としての城認識であり、家久は近世大名としての城認識であるといえる。」
- エ 「鹿児島城は海岸からの防備という弱点が指摘されるが、それこそが鹿児島城が近世的な城郭であることを意味するといえる。」
- オ 「家久は秀吉や家康という統一政権の実力の有様を実体験した結果を集約した、鹿児島城及び城下町・港町の都市計画を企画・実践した。」

(8) 揚村固氏・守真和弘氏の研究 (揚村・守真 2010)

- ア 御楼門の桁行方向は、4 尺・8 尺・8 尺・16 尺・8 尺・8 尺・4 尺 (1 : 2 : 2 : 4 : 2 : 2 : 1) の整数比である。
- イ 御楼門の張間方向は、10 尺・13 尺である。
- ウ 「論理的な比例関係は類例である佐賀城「鯨の門」、熊本城「南大手門」などには確認できず、鹿児島城「御楼門」が潔癖とも言えるほど周到に計画・設計された平面寸法体系で建設されていたことが明らかとなったのである。」



第 2 図 御楼門の柱間寸法 (揚村・守真 2010)

3 鹿児島城下の状況

江戸時代初頭の町割が現在の道路と同じではないことは承知しているが、明治30年代の地図と比較しても一部の地区を除いて江戸期の町割を踏襲していることがわかる。また、現在の地図の方が場所をイメージしやすいことから、現在の地図を基に鹿児島城下を各地域に分けて、北の方から詳しくみていくこととする。

(1) 上町の状況

- ア 14世紀半ばに島津氏が拠点求めた所。
- イ 東福寺城、清水城、内城が築かれた。
- ウ 1550年に15代貴久が築いた内城は、東西南北を基軸としている。
- エ 内城は、標高10mを測る旧砂丘上の最も安定した場所に立地する。
- オ 内城近くに稲荷川河口があり、港として利用された。
- カ 歴代の当主が眠る本立寺と福昌寺が、一帯の地域に含まれる。
- キ 大口筋・高岡筋と豎馬場は、250mの距離において平行して南北に延びる。
- ク 豎馬場と館馬場の方向は、150°の角度で交わる。
- ケ 豎馬場と堀の間の筋は120°の角度で交わる。(城門前の筋とは150°の角度で交わる。)



第3図 上町周辺の状況

(2) 城山周辺の状況

- ア 土塁が高さ10m・幅25mの規模で、400mにわたってみられる。
- イ 土塁は盛り土ではなく、削り出しによってつくられている。
- ウ 削りだした土は、本丸で使われた可能性がある。
- エ 土塁内部は、南北方向に合っている。

- オ 一部分に空堀がみられる。
- カ 現在の展望台トイレ側にも、空堀が埋まっている可能性がある。
- キ 城山と草牟田に延びる台地は、切り離されたと考えられる。
- ク 谷の両側の途中には、枡形がみられる。

(3) 鹿児島城付近の状況

- ア 幅400mの最も狭い平地を利用して、城の中枢部を築く。
- イ 標高108mの尾根は、草牟田の台地と切り離して、上山城として利用。
- ウ 間近に迫る深い海は、大型船が着岸できる港として利用。(松尾千歳氏指摘)
- エ 鹿児島(鶴丸)城の軸は、尾根の方向に合わせている。
- オ 尾根の前面は急崖の部分もあり、面をそろえた可能性もある。
- カ 諸施設も城の軸に合った方向でつくられている。
- キ 城門前の筋と千石馬場からの筋の間隔は、130mである。
- ク 千石馬場からの筋と千石馬場は、枡形のところで150°の角度で屈曲している。
- ケ 堀と堀との距離は、900mである。
- コ 中町の海岸に平行する筋は、千石馬場からの筋と上町・下町を分ける線の交点を中心として、20°、30°、37°の方向に延びている。
- サ 城正面の石垣上部は御楼門を挟んで、100mと50m(2:1)である。
- シ 御楼門と両堀との間隔は、600mと300m(2:1)である。
- ス 御楼門中央部の柱間の距離は、32尺:23尺であり、 $\sqrt{2}:1$ の関係である。



第4図 鹿児島城付近の状況

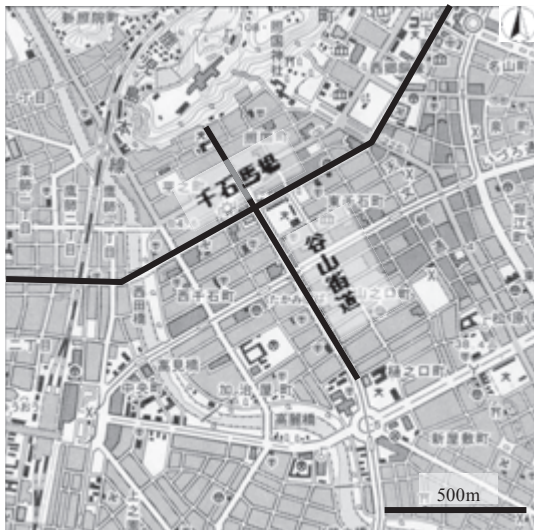
セ 御楼門中央部の石畳は、礎石に対して45°の角度で敷き詰められており、複雑な振動に対応したものと考えられる。

(4) 千石馬場周辺の状況

- ア 尾根の前面は急崖の部分もあり、面をそろえた可能性もある。
- イ 城山の地形に平行した方向に、「馬場」を通す。
- ウ 「馬場」同士の間隔は、130mを基本としている。
- エ 「馬場」間に筋を通す場合は、ちょうど二分する位置に設けている。
- オ 「馬場」に直交する方向に、「通」を設けている。
- カ 「通」同士の間隔は、130mと180mを基本としている。
- キ 谷山街道は、千石馬場をちょうど二分する位置に設けている。
- ク 谷山街道の両側は、130m×2と180mの区画から成っている。
- ケ 千石馬場は900mの直線である。

(6) 西田町の状況

- ア 西田本通りと千石馬場は、西田橋のところで150°の角度で屈曲している。
- イ 西田本通りは、西田橋から筋違橋まで900mの直線である。
- ウ 西田本通りは、東西方向である。
- エ 武岡台地へ通ずるには、地形的に水上坂が最も適している。
- オ 西田本通りと水上坂は、薩摩街道（出水筋）である。
- カ 西田本通りの両側には、50mの間隔で筋が平行している。



第5図 千石馬場周辺の状況

キ 西田本通りの北側は、東西南北130mを基準に町並みがある。



第6図 西田本通り周辺の状況

4 高度な計画性

(1) 地形の利用

鹿児島城下は典型的な火山地形であり、シラス台地が深い海まで迫って低地の面積は限られている。90mもの比高差をもつ尾根部は、削り出しによる長大な土塁や空堀で強固な防御用としている。また、深い海は大型船が着岸できる港に利用し、海洋都市としての拠点となった。これらに挟まれた最も狭い平地に中枢部を建設することで、四方全てが隙間無く守られることになる。平地部分は曲輪数も少なく天守閣をもたないことによって、表向きには徳川家に対する恭順を示すが、地形を巧みに利用し防衛機能を重視した強かさも窺える。また、商業区や居住区を南に広がる平地部にもってくることによって、将来の発展性を考えていたと推察される。

(2) 四神相応の地

鹿児島城の場所を選ぶにあたっては江夏（黄）友賢に占わせ、四神相応の地とされた。中国の風水思想に基づくもので、青龍（東）・白虎（西）・玄武（北）が山で囲まれ、南は青龍や玄武から流れてくる水を受ける朱雀であり、その先に水で運ばれた気が分散しないように案山・朝山と呼ばれる山があると良いとされる（曾我 2012）。鹿児島城下は三方を山やシラス台地に囲まれ稲荷川と甲突川が流れ、錦江湾の先に桜島があり、風水思想の理にかなっている。また、江夏（黄）友賢は屋形を巽（東南）の方向に向けることを説くが、これは城下を設計した後に御楼門がこの位置にくるように、後付けしたとも考えられる。なお、城の鬼門除けとしては北東側の石垣が隅欠けになっていることはよく知られており、寺院としての鬼門除けは稲荷町に所在した護国院である。

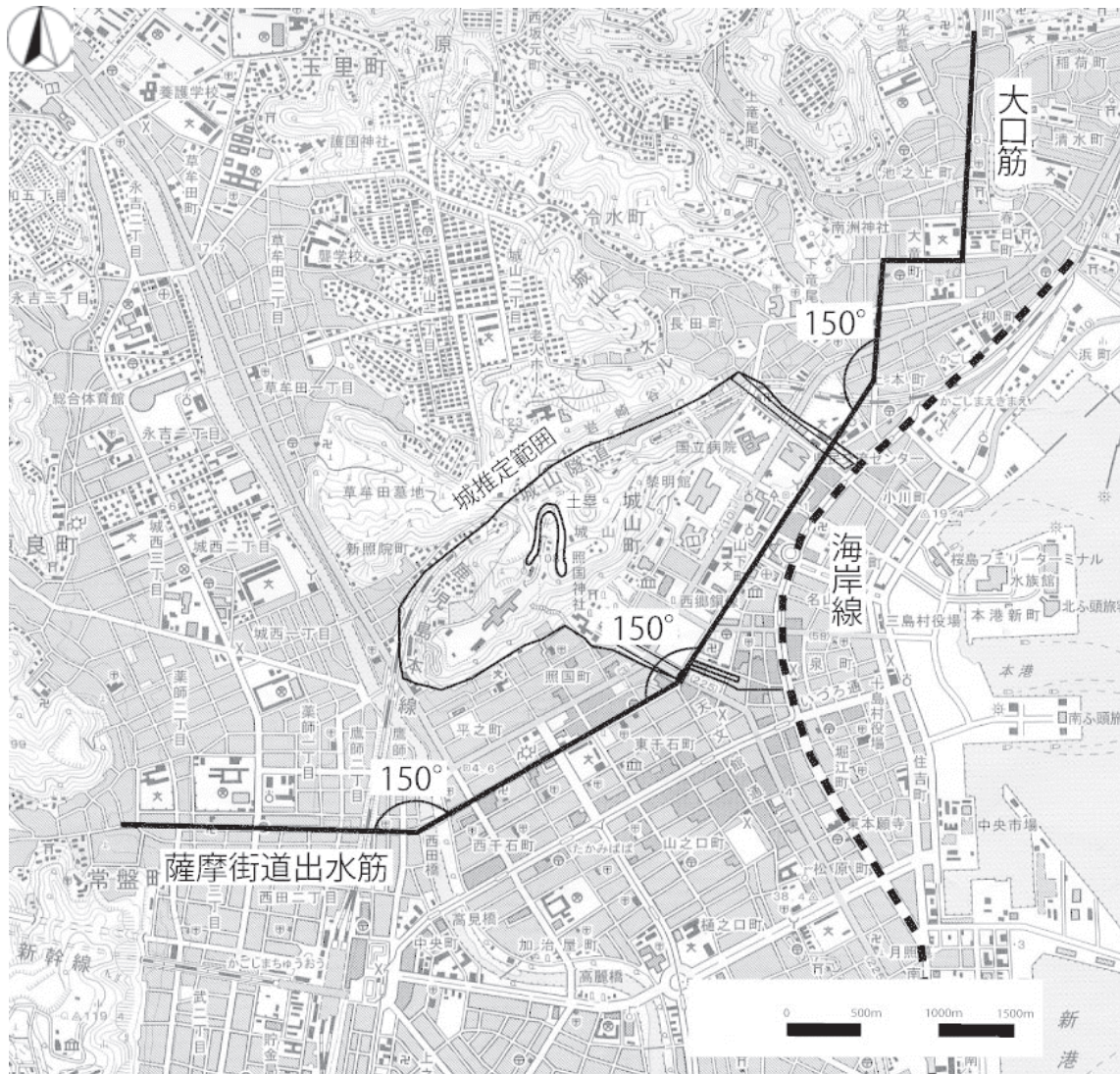
(3) 街道の方向と道の屈曲度

大口筋・高岡筋を南北に、出水筋を東西に設定している点は、古代以来の条里の思想が窺える。両方の筋の間を 150° の角度で3回屈曲させることによって、ぴったりと主要街道の東西南北 90° に合わせている。最も狭い現市役所裏に、直線道をもってきていることも見事である。現在の県立博物館前や平之橋を、車で走り抜けても曲がった感覚は少ないことから、佐多氏が述べるように、知らず知らずのうちに違った方向に向かわせようとしているかのようである。なお、現在の鹿児島地域振興局前の道は、海岸線に沿ったカーブを描いているが、鹿児島地域振興局裏と長田中学校境に直線道であった痕跡を留めている。それぞれの直線道は900mを基本とし、両側各面は整然とした方眼状の町割である。 150° の屈曲部は川や堀を利用しており、方形の区画からうまく除外している。谷山街道は、千石馬場を垂直二等分する位置に設定しており、城下の拡大に備えたかのようなようである。以前の甲突川は現在の清滝川であり、

これを改修して広げた敷地が「新屋敷」という地名になっていると考えられる。この河川改修を施行した時期が、松尾氏によると17世紀後半ということになる。また、西田本通りの北側は下級武士の居住区域であったが、南側は明治以降に鹿児島中央駅西口として水田から居住区に変わってきている。

(4) 御楼門の位置

御楼門の位置については、下鶴氏が指摘したように、千石馬場と豎馬場が交わる角度の二等分線上に位置する。これに加え、城内幅である大手橋の堀から吉野橋の堀および主郭部上段にある石垣幅の2:1の所に御楼門は設定している。揚村氏と守真氏が指摘するように、御楼門の位置についても周到な計画性が窺えるのである。また、この地点が当時の海岸線から最も近い位置であり、背後から攻められた時、いち早く船で脱出することも想定していたと考えられる。



第7図 鹿児島城下の町並み

(6) 基準とした寸法

地形に合わせた方向については上述の通りであるが、では130mや180mなどの距離はどこからきているのだろうか。最も多く使われている区画の距離が130mであり、130mに $\sqrt{2}$ を乗じたのが180mに近い。180mがおおよそ100間であることも、何らかの基準となったと考えられる。高見敏志氏によると(高見2009)、築城の際には $1:\sqrt{2}:\sqrt{3}$ の「大和三角形」が多用されているとのことであり、鹿児島城下においても御楼門の礎石位置をはじめ、町割に使われていたことが推察される。併せて、高見氏が指摘する「直線的な見通し(ヴィスタ)」と「一直線上の配置(視軸)」も築城や町割には重要な視点である。

5 おわりに

以上現在の市街地図を通してではあったけれども、地形を知り尽くした上で陸海交通網を意識し、近世都市機能の充実を図った400年前の壮大で緻密な計画性が浮かび上がってきたと考える。今後、発掘調査により400年前当時の確実な境や堀跡が確認できれば、当時の計画性が実証されると考える。今後の積極的な解明に期待するとともに、各種分野からのご教示を願いたい。本稿は、2013.06.09に行われた隼人文化研究会での発表を基にしている。出会った方々に様々な御教示を得た。また、上田耕氏には城についての御教示や文献入手の御協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

註1 引用に際しては、縦書きでは漢数字が使われているものの、横書きであるので算用数字とした。

註2 現在、館馬場あるいは屋形馬場は鹿児島(鶴丸)城前の通りと考えられているが、「今の県庁の門前通所謂屋形の馬場に新橋あり」とあることから、「館馬場・屋形馬場」の位置については再検討を要する。

【参考文献】

- 揚村固・守真和弘 2010「鹿児島城「御楼門」の復元的研究」『鹿児島県立短期大学紀要』第61号 鹿児島県立短期大学
- 唐鎌祐祥 1992『天文館の歴史』かごしま文庫⑤ 春苑堂出版
- 木島孝之 1995「鹿児島城の縄張り構造と島津氏権力との相関」『中世城郭研究』第9号 中世城郭研究会
- 佐多武彦 1937「戦略戦術上より観たる鹿児島城下」『陸軍中将 佐多武彦述回顧六十年』
- 下鶴弘 2008「鹿児島城の総構えについて」『2007年度

鹿児島国際大学生涯学習センター特別講演会報告書 鹿児島島の埋もれた歴史遺産に光を』鹿児島国際大学生涯学習センター

- 曾我とも子 2012「近世の城郭立地に関する風水思想からの考察」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第23号
- 高見敏志 2009『城と城下町 築城術の系譜』技報堂出版
- 徳永和喜 2008「鹿児島(鶴丸)城築城にみる思想 一家久の「城認識」と展開を中心に」『黎明館調査研究報告』第21集 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 中田勝康・秋山賢治 1992「城下町の比較と街づくりとの関連性」『土木史研究』第12号
- 東和幸 2013「鹿児島(鶴丸)城前後の城と町づくり」『研究紀要・年報 縄文の森から』第6号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 松尾千歳 2005「鹿児島県立図書館蔵「鹿児島城下町割図」について」『南九州城郭研究』第3号 南九州城郭談話会

志布志市高吉 B 遺跡出土品の分析結果について

調査課第一調査係, (株)パレオ・ラボ, (株)パリーノ・サーヴェイ

Results of scientific analysis on relics excavated from the Takayoshi-B site in Shibushi city

The first section of the research department , Paleo Labo Co., Ltd. , Palino Survey Co., Ltd.

要旨 志布志市志布志町安楽に所在する高吉 B 遺跡出土品について, 赤色顔料, 土器圧痕のレプリカ法による種実同定および施文具の推定を行った。弥生時代中期後半の赤色顔料はベンガラによるもの, 同時期の種実圧痕は稲であることが確認された。また, 施文具については貝殻腹縁によるものと, 植物によるものが見られた。さらに, 山ノ口式土器に固着した火山灰は, 開聞岳噴出の暗紫ゴラであることが明らかとなった。

キーワード 赤色顔料, レプリカ法, 種実同定, 施文具の推定, 暗紫ゴラ

1 はじめに

高吉 B 遺跡は鹿児島県志布志市志布志町安楽字宇都上に所在する遺跡で, 旧石器時代から近世にかけての生活跡が発掘調査された。特に, 縄文時代早期と弥生時代中期後半に注目すべき遺構や遺物があり, 2014 年 3 月に刊行された報告書にまとめられている(鹿児島県立埋蔵文化財センター 2014)。本稿では報告書に反映できなかったものの, 出土遺物について分析したものがあつたので補足して紹介することとする。

2 各分析と結果

(1) 土器付着赤色顔料の走査型電子顕微鏡観察

ア 試料と方法

分析対象は, 弥生土器に付着した赤色顔料の計 2 点である(表 1)。赤色部分を極少量採取して観察試料とした。

表 1 分析対象

分析 No.	観察試料	報告書掲載番号
1	弥生土器付着赤色顔料	1040
2	弥生土器付着赤色顔料	1162

採取した赤色顔料は, カーボンテープでステージに固定し, イオンスパッタで金コーティングを行った。観察には, 日本電子(株)製走査電子顕微鏡 JSM-5900LV を使用した。

イ 結果および考察

SEM 観察により得られた画像を添付写真に示す。

分析 No.1 からは, パイプ状粒子は認められなかったが, SEM に付属する X 線分析装置による元素分析では, 鉄 (Fe) が多く検出された。以上より, 赤色顔料は鉄

による発色, すなわちベンガラと考えられる。

分析 No.2 からは, 直径約 $1\mu\text{m}$ 、長さ数 μm ほどのパイプ状粒子が認められ, 赤色顔料はいわゆるパイプ状ベンガラと考えられる。

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

(2) レプリカ法による土器の種実圧痕の同定および土器施文具の推定

ア 資料と方法

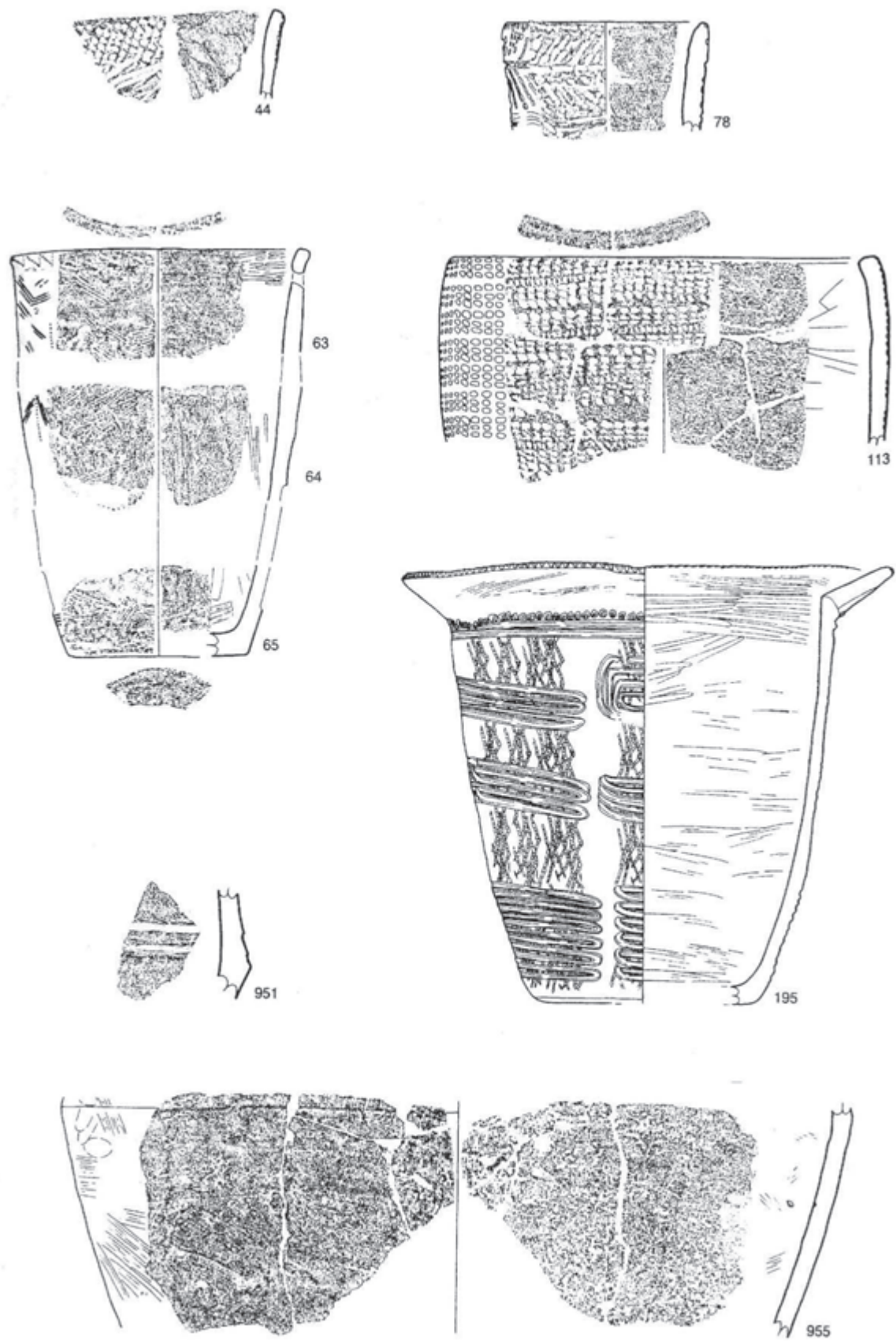
資料は, 鹿児島県埋蔵文化財センターによって抽出された土器で, 種実圧痕の候補とされた土器片(分析 No.3~No.6)が 4 点, 刺突圧痕の候補とされた土器片(分析 No.7~No.13)が 7 点の計 11 点である。これらについて以下の手順で圧痕のレプリカを作製した。

圧痕内を筆と流水で水洗し, 乾燥条件下でブローアを用いて付着物を除去した。レプリカ法は, 丑野・田川(1991)等を参考にして以下の手順で行った。資料の保護のため, パラロイド B72 の 5%アセトン溶液を離型剤にして土器に含浸させ, 印象剤に用いるシリコーン樹脂(株)ニッシン製 JM シリコン レギュラータイプもしくはアグサ・ジャパン(株)製ブルーミックスソフト)を医療用注射器に入れ, 圧痕部分に充填してレプリカを作製した。このレプリカを実体顕微鏡と一部について走査型電子顕微鏡(KEYENCE 社製 VE-9800)で観察および写真撮影を行った。なお, 採取したレプリカは, 鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

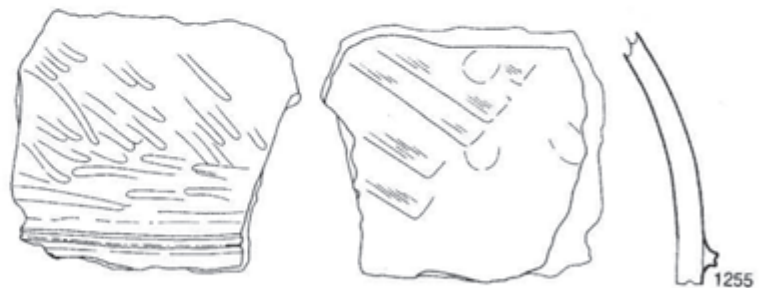
イ 結果

[種実圧痕]

同定した結果を表 1 に示す。種実では, 草本植物のイネ種子(玄米)が 1 点と不明種子?が 1 点同定され



第1図 分析を行った出土品(1)



第2図 分析を行った出土品(2)

た。このほかは、不明（コクゾウムシ属甲虫？）1点と不明2点、材片1点が得られた。

分析 No.3（中岳Ⅱ式）：楕円体の圧痕が得られた。写真左側に口吻のような細長い管が観察できるため、コクゾウムシ属の甲虫の可能性はある。ただし、前胸部と羽の境は明瞭ではなく、表面の点刻列も観察されない。このため、同定には至らなかった。

分析 No.4（上加世田式）：不明種子？と不明が得られた。このうち、不明種子？は残存長 4.35mm、残存幅 1.92mm で、長軸方向に2本の溝が観察でき、溝の間は盛り上がる。こうした特徴をもつ種子にはイネなどがある。ただし、圧痕の全体形は残っておらず不明である。

分析 No.5（弥生）：材片と不明が得られた。材片は中央部に比較的大きな道管が観察でき、広葉樹の可能性はある。

分析 No.6（弥生）：上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の2本の浅い溝がある。以上の特徴から、イネ（*Oryza sativa* L.）種子と同定した。

〔刺突圧痕〕

推定した施文具の結果を表2に示す。

分析 No.7（石坂式）：櫛歯状に並ぶ6個の突起が施文具1つの単位となっている。突起の形状は3.5×3.5mm程の正方形で、高さ3.3mm程である。6個の突起は直線状に並び、傾斜角度も類似している。突起の外側には溝が観

察されたため、櫛歯状に加工された材の可能性が推定された。一方、先端部の形状が螺旋状を呈する突起が観察されたため、貝殻の突起部分を利用した可能性も挙げられる。以上の特徴から、櫛歯状に加工された材あるいは貝殻の突起部と推定された。

分析 No.8（石坂式系）：8個の突起が直線状に並ぶ。突起一つの大きさは、大きくても直径1.33mm、高さ1.75mmである。楕円を呈した断面形状と突起の外面に見られる溝から、櫛歯状に束ねられた茎状の植物を割り裂き材と推定された。

分析 No.9（下剥峯式）：6個の突起が施文具1つの単位となっている。6つの突起の大きさは、片端から順に小さくなる。最も大きい突起は3.81×3.98mm、高さ1.34mm程で中心部には窪みが観察される。文様は施文具の両端を支点に交互に押し付けられている。6つの突起の並びは緩やかにカーブしており、貝殻の突起部を利用したと推定された。

分析 No.10（下剥峯式系）：大きい突起の隣に小さい突起が2つ連結して観察された。突起の先端は丸みを帯びており、最も大きい突起は、長さ7.42mm、高さ3.31mm、厚さ2.85mmである。また、最も大きい突起の表面には浅い溝が3本観察された。最も大きい突起の形状から、施文具は貝殻の突起部であると推定される。

分析 No.11（塞ノ神A式）：突起の形状はややつぶれた円形で、直径3.76mm程である。隣り合う圧痕の形状は類似しており、同じ施文具を使って施文されたと思われる。

表2 高吉B遺跡出土土器圧痕の同定結果（括弧内は破片値、単位（mm））

分析No.	時期	土器型式	報告書掲載番号	圧痕No.	圧痕位置	分類群	部位	備考	長径	短径	厚さ
3	縄文時代	中岳Ⅱ式土器	951	121-4	胴部内面	不明	-	コクゾウムシ属甲虫？	3.71	(1.26)	(1.41)
4		上加世田式土器	955	107-1	胴部内面	不明	-		(4.35)	1.43	(1.02)
				107-2		不明	種子？		(4.35)	(1.92)	(1.39)
5	弥生時代	弥生土器	1255	164-1	胴部外面	材片	-		(10.39)	(3.14)	(1.63)
				164-2	胴部内面	同定不能	-		(10.44)	(4.71)	(2.06)
6			1199	171	胴部外面	イネ	種子		6.47	2.80	(1.78)

表3 高吉B遺跡出土土器の刺突圧痕レプリカ

分析No.	時期	土器型式	報告書掲載番号	圧痕位置	推定した施文具
7	縄文時代	石坂式土器	44	胴部外面	櫛歯状に加工された材もしくは貝殻突起部
8		石坂式系土器	63	胴部外面	櫛歯状に束ねられた茎状の植物の割り裂き材
9		下剥峯式土器	113	胴部外面	貝殻突起部
10		石坂式土器	78	胴部外面	貝殻突起部
11		塞ノ神A式土器	195	胴部外面	茎状の植物
12	弥生時代	弥生土器	1034	口縁部外面	タケ・ササ類もしくはイネ科の稈
13		弥生土器	1162	頸部外面	茎状の植物

る。先端部は押しつぶされている。浅い突起の外面には溝が観察されるため茎状の植物と推定された。

分析 No.12 (弥生) : 突起の直径は 2.75 mm程でやや楕円を呈する。突起の中心部は中空である。突起の厚みは 0.3 mmで高さは最も高い部分で 0.86 mmであった。突起の内部と外部に規則的に溝が観察されたため、タケ・ササ類やイネ科の植物の稈と推定された。

分析 No.13 (弥生) : 突起の直径は 2.05 mmの円形で、高さは最も高い部分で 0.64 mmである。先端部は椀状の窪みを呈しており、中空ではない。突起の先端部分の断面には維管束?とみられる丸い突起が規則的に並ぶ様子が観察された。施文具は茎状の植物と推測された。

ウ 考察

種実圧痕では、弥生土器から栽培植物であるイネの種子が得られた。土器づくりの際にイネが付近にあり偶発的に混ざったか、意図的に混和された可能性がある。また土器の断面からイネ種子の圧痕の形状を観察すると、圧痕がオーバーハングしており、土器を成形後に押し付けてはいないと考えられる。縄文時代晩期前半の上加世田式土器からは、不明種子?が得られたが、科以上の詳細な同定はできなかった。

種実以外には、弥生土器から材片などの植物起源と考えられる圧痕や、縄文時代後期後葉の中岳Ⅱ式土器からは状態が悪く絞り込むことができなかった不明(コクゾウムシ属甲虫?)があった。

高吉 B 遺跡の土器 7 試料について表面に施された文様の施文具について検討した結果、貝殻や植物の茎、タケ・ササ類やイネ科の稈、材の利用が推定された。しかし、施文具についてレプリカ法で検討した類例が少なく、現段階では施文具を詳細に同定するには至らなかった。レプリカ法は、施文具を立体的に把握することが可能であるため、刺突具痕の検討には大変有効な手段である。今後、現生の植物や貝殻などを用いて粘土に施文して焼成を行い、施文具のレプリカを採取して比較試料を増やすことで、遺跡出土土器に利用された施文具についてより詳細に分析することが可能になると期待される。

米田恭子・佐々木由香 (パレオ・ラボ)

(3) 弥生土器付着の火山灰同定^(註1)

ア 試料と分析方法

火山灰同定の試料は、1245 の弥生時代中期後半の甕形土器脚部に付着したものである。

試料は、水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250 メッシュの分析篩にて水洗して粒径が 1/16 mmより小さい粒子を除去する。

水洗後に乾燥させた後、篩別して得られた 1/4 mm - 1/8 mmの砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム(比重

2.96 に調整)により重液分離し、得られた重鉍物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方、重液分離により得られた軽鉍物分については、火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の 3 つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分である Y 字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。ただし、永吉天神段遺跡においては、火山ガラスを含まずに、スコリアを多く含む特徴を持つ、開聞岳から噴出したテフラが検出される可能性もあると考えられる。そこでスコリアが認められた場合には、火山ガラスと同様に計数することにした。屈折率の測定は、処理後に得られた軽鉍物分から抽出した火山ガラスと重鉍物分から抽出した斜方輝石を対象とする。屈折率の測定は、古澤(1995)の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

イ 結果

重鉍物組成は、カンラン石が最も多く、次いで不透明鉍物が多く、他に少量の斜方輝石と単斜輝石が含まれる。火山ガラス比では中量のスコリアが含まれるが、火山ガラスは認められない。

粒径 1/4 mm以上の砂分では、多量のスコリアが確認された。スコリアは最大径約 1.0 mm、黒色で発泡不良のものがほとんどであり、他に黒色で発泡やや不良、灰褐色で発泡やや不良、赤色で発泡不良の各スコリアがいずれも微量混在する。

ウ 試料については、火山ガラスがほとんど含まれずスコリアが多量含まれることとカンラン石を主な重鉍物として含むことから、開聞岳のテフラに対比される。重鉍物組成では青コラと暗紫ゴラおよび灰コラに類似するが、角閃石を含まないことで青コラに対比される可能性は低い。斜方輝石の屈折率においても、その低屈折率のレンジは青コラよりも暗紫ゴラおよび灰コラのレンジに近い。さらに、スコリアの色調と発泡度においては、青コラに比較的多く含まれている灰褐色で発泡やや不良のスコリアは極めて微量しか認められず、青コラと灰コラの特徴である斜長石の斑晶を多く含むということも認められない。これらの特徴から、試料のスコリア質テフラは、暗紫ゴラに対比される可能性が高い。

なお、試料には、高屈折率の斜方輝石が含まれている

が、これは、その値から、入戸火砕流すなわちシラスに由来する斜方輝石である。おそらく、シラスに由来する砕屑物がテフラ層中およびテフラを挟む火山灰土層中に混在していると考えられる。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

3 若干の考察

前項の分析に使用した遺物の報告書掲載番号と実測図は、第1図及び第2図のとおりである。

(1) 赤色塗彩の弥生土器

1040と1162の土器に塗彩された赤色顔料は、いずれもベンガラであることが明らかになった。1040は北部九州の須玖Ⅱ式に該当する袋状口縁をもつ長頸壺形土器であり、搬入品と考えられる。1162は胴部と頸部境に突帯を巡らすもので、刺突連点文や鋸歯文を描くことから、南九州地域では見られないものであり、搬入品もしくは他地域土器を模倣したものであると考えられる。一般的に、南九州の弥生時代中期後半を代表する山ノロ式土器に赤色顔料を施すことはなく、土器に塗彩すること自体が外来の文化であると考えられる。高吉B遺跡では、宮崎平野を中心とする中溝式土器や愛媛県中予地方の凹線文土器も出土しており、山ノロ式土器を主体としながらも周辺地域の情報を取り入れた生活実態がみられる。高吉B遺跡の人々が積極的に周辺地域の情報を取り入れたのか、それとも周辺地域同士を取り巻く状況が高吉B遺跡に波及したのかで、全く異なる社会情勢がみえてくる。大隅半島のみならず、琉球列島や宮崎平野まで席卷した山ノロ式土器文化に、外来系の文化がどの様に影響し合ったのか明らかにすることが今後の課題である。

(2) レプリカ法による土器圧痕

1199の圧痕は、イネであることが確認された。形状に特徴のない土器片ではあるが、器壁の薄さや胎土の状況から、弥生土器と考えられるので問題はない。951の圧痕は、コクゾウムシ属甲虫?とされた。断定されたものではないことと、コクゾウムシが穀類以外も食べていたことが明らかになったことから(小畑2011)、縄文時代後期後半に位置付けられる中岳Ⅱ式土器にあってもおかしくはない。955の圧痕は、不明種子?とされた。土器片ではあるものの、研磨された技法や胴屈曲部に稜がみられることから縄文時代後期終末の上加世田式土器に該当する。分析の結果では、「不明種子?は残存長4.35mm、残存幅1.92mmで、長軸方向に2本の溝が観察でき、溝の間は盛り上がる。こうした特徴をもつ種子にはイネなどがある。ただし、圧痕の全体形は残っておらず不明である。」と述べている。

現在日本において土器圧痕のレプリカ法でイネと確認された事例は、刻目突帯文土器以降のもであり、縄文時

代に遡る確実なものはない(中沢2009)。鹿児島県さつま町水天向遺跡出土例は、靱痕であることは明らかであるものの(小畑・真邊2011)、土器片資料であることから時期を特定することができない(宮地2013)。胎土や色調からは、最も多く出土している入佐式土器古段階以前に相当するとも考えられるのであるが、特徴のある部位まで接合することしか年代を証明する手立てはない。もし、型式名が明らかになったとしても、その土器型式の付着炭化物による年代測定結果を踏まえなければ、縄文時代にイネが存在したことを明らかにしたことにはならない。今後、弥生時代開始期前後における出土土器を丹念に調べることによって、土器型式と穀物圧痕の相互関係を追究していく必要がある。これからも、南九州の該期の出土資料に注目していただければ幸いである。

(3) レプリカ法による土器施文具

44は石坂式土器、63と78は石坂式系土器としたもので、縄文時代早期前葉の中でも後半に位置付けられている。ただし、63と78はこれまで出土例がないものであり、石坂式系土器として位置付けてよいのかどうか検討を要する。44についても、典型的な石坂式土器とは若干異なり、標式遺跡から離れた志布志市域での石坂式土器の様相を追究しなければならない。典型的な石坂式土器が貝殻腹縁による施文であることに対し、44と63は植物性の工具の可能性も指摘されたことから、工具の変化が土器の型式変化に対して、どの様に関係するのか探る契機になると考える。

113は下剥峯式土器の中でも辻タイプと呼ばれており、縄文時代早期中葉の前半に位置付けられている。貝殻腹縁によるものであることと、相交弧文状に施文していることが明らかになった。

195は塞ノ神Aa式土器であり、縄文時代早期後葉の中間に位置付けられている。頸部の刺突文が茎状の植物であることが分かり、今後は、口唇部の刻目及び胴部の凹線についても同じ施文具であるのかどうか確認することが課題である。

1034と1162は弥生時代中期後半に位置付けられるものの、地元の山ノロ式土器では一般的でない施文方法である。施文具は植物によるものであり、土器製作場所の自然環境を明らかにすることができることや、同じ施文具でつくられた土器を特定できる可能性もある。

(4) 暗紫ゴラが付着した弥生土器

1245の脚部外面の付着物は、開聞岳噴出の暗紫ゴラであることが明らかとなった。甕形土器の脚部であり、弥生時代中期後半に位置付けられる山ノロ式土器に該当する。山ノロ式土器に暗紫ゴラが固着していることは、標式遺跡でもある錦江町山ノ口遺跡で知られていた(河口

1960) が、開聞岳から直線距離にして 60 km 離れた志布志市でも暗紫ゴラが固着した土器が出土したことに注目したい。この土器が元々高吉 B 遺跡にあったものであれば、当時の開聞岳噴火の規模を知る手掛かりになる。また、より開聞岳に近い場所で罹災した土器が、高吉 B 遺跡に持ち込まれたとしても興味深い。土器は人の手によって動く可能性があることから、土器の製作場所と罹災場所、それに最終的に廃棄された場所である高吉 B 遺跡が、それぞれ異なることも考えられる。

山ノ口遺跡は海岸の砂丘地にある遺跡で、眼前に対岸の開聞岳を望むことができるので、開聞岳爆発の影響をまともに受けたことがわかる。同じ錦江町轟木ヶ迫遺跡でも暗紫ゴラが 4 cm の層になって堆積していた(大根占町教育委員会 1988) ので、この地域では大きな被害があったことが明らかである。一方、志布志市松山町に所在する京ノ峯遺跡で、弥生時代中期の周溝内から検出された火山灰状の層があるが、これが暗紫ゴラであるかどうかは確認されていない(松山町教育委員会 1993)。今後、暗紫ゴラが大隅半島のどの地域まで直接的な影響を与えたかが分かれば、大隅半島において弥生時代後期前半から弥生時代後期後半までの間、遺跡数が急速に減少する現象の一因も理解することができる。

(文責 東和幸)

4 おわりに

以上、高吉 B 遺跡出土土器における各種分析結果を報告するとともに、若干の所見を述べてきた。発掘調査された遺跡の報告や研究は報告書刊行でおわりではなく、遺物に残った様々な当時のメッセージを随時引き出しながら、発信していかなければならない。報告書作成時にはやれなかったことをフォローすることが、本誌における役割の一つでもある。今後とも、各研究機関とも連携しながら活用していきたい。

註 1 本報告は、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが依頼して報告された、「永吉天神段遺跡出土試料の自然科学分析(テフラ分析)報告」の一部を抜粋したものである。

参考・引用文献

- 大根占町教育委員会 1988 『轟木ヶ迫遺跡』大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 小畑弘己 2011 『北東アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社
- 小畑弘己・真邊彩 2011 「レプリカ法による水天向遺跡出土土器の圧痕とその意義」『水天向遺跡』さつま町発掘調査報告書(4) さつま町教育委員会

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2014 『船迫遺跡・高吉 B 遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(180)

河口貞徳 1960 「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財調査報告書』第7集 鹿児島県教育委員会

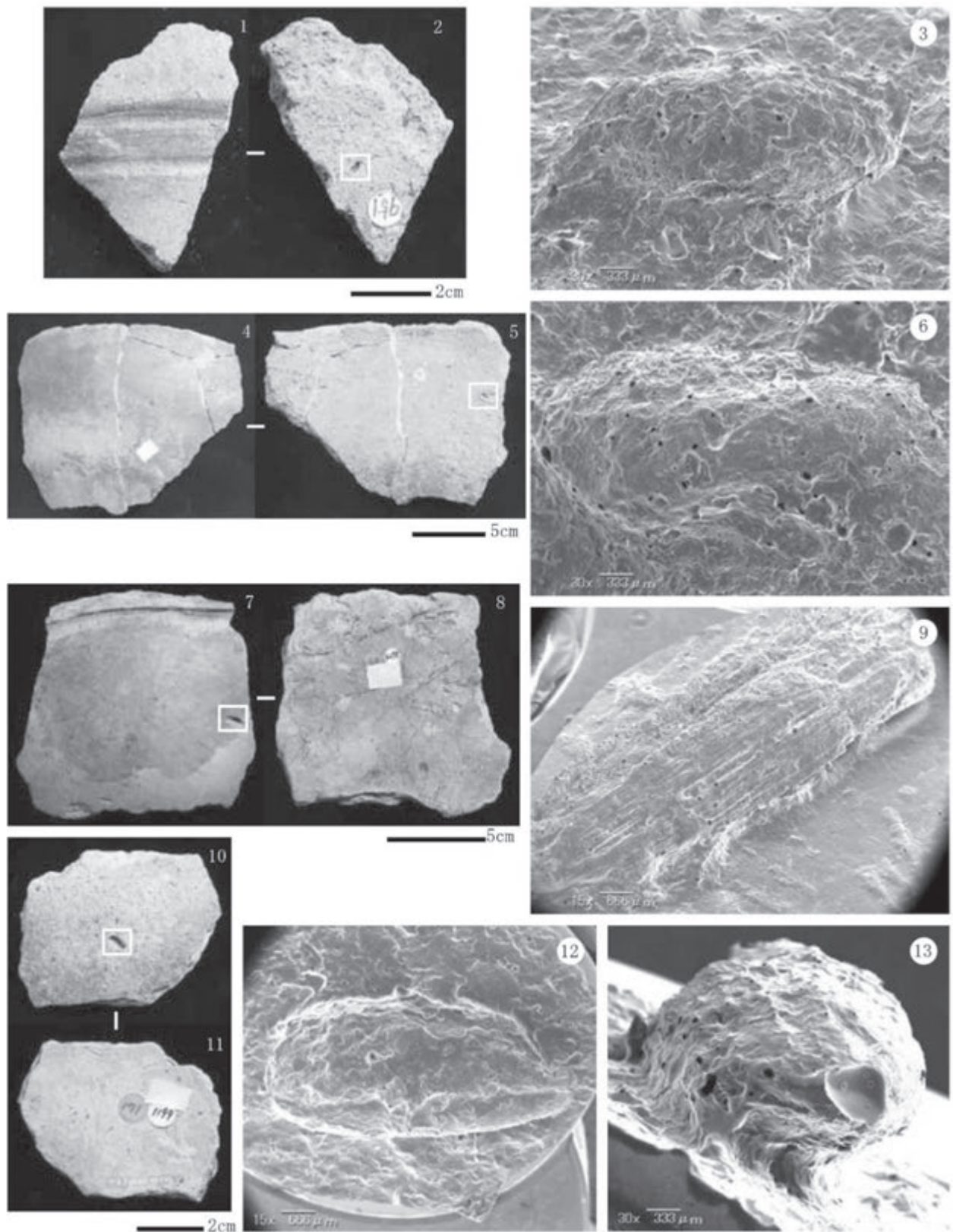
中沢道彦 2009 「縄文農耕論をめぐって ―栽培植物種子の検証を中心に―」『弥生時代の考古学5 食糧と獲得と生産』同成社

古澤明 1995 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』101

松山町教育委員会 1993 『京ノ峯遺跡』松山町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

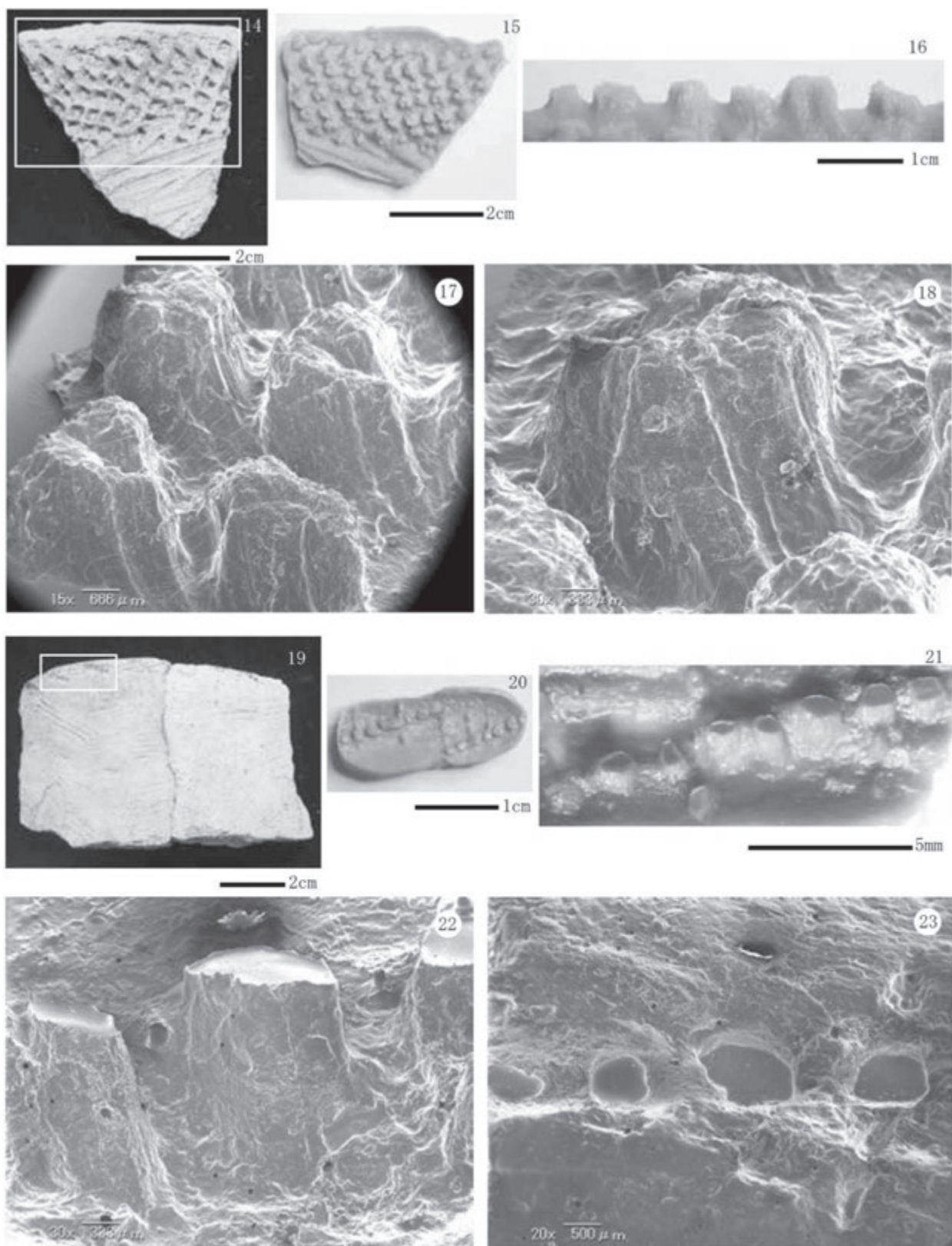
宮地聡一郎 2013 「縄文時代の稲をめぐって ―初圧痕研究のゆくえ―」『立命館大学考古学論集VI 和田晴吾先生定年退職記念論集』

丑野 毅・田川裕美(1991) レプリカ法による土器圧痕の観察. 考古学と自然科学, 24, 13-36.



図版1 高吉B遺跡出土土器および圧痕レプリカ(1)

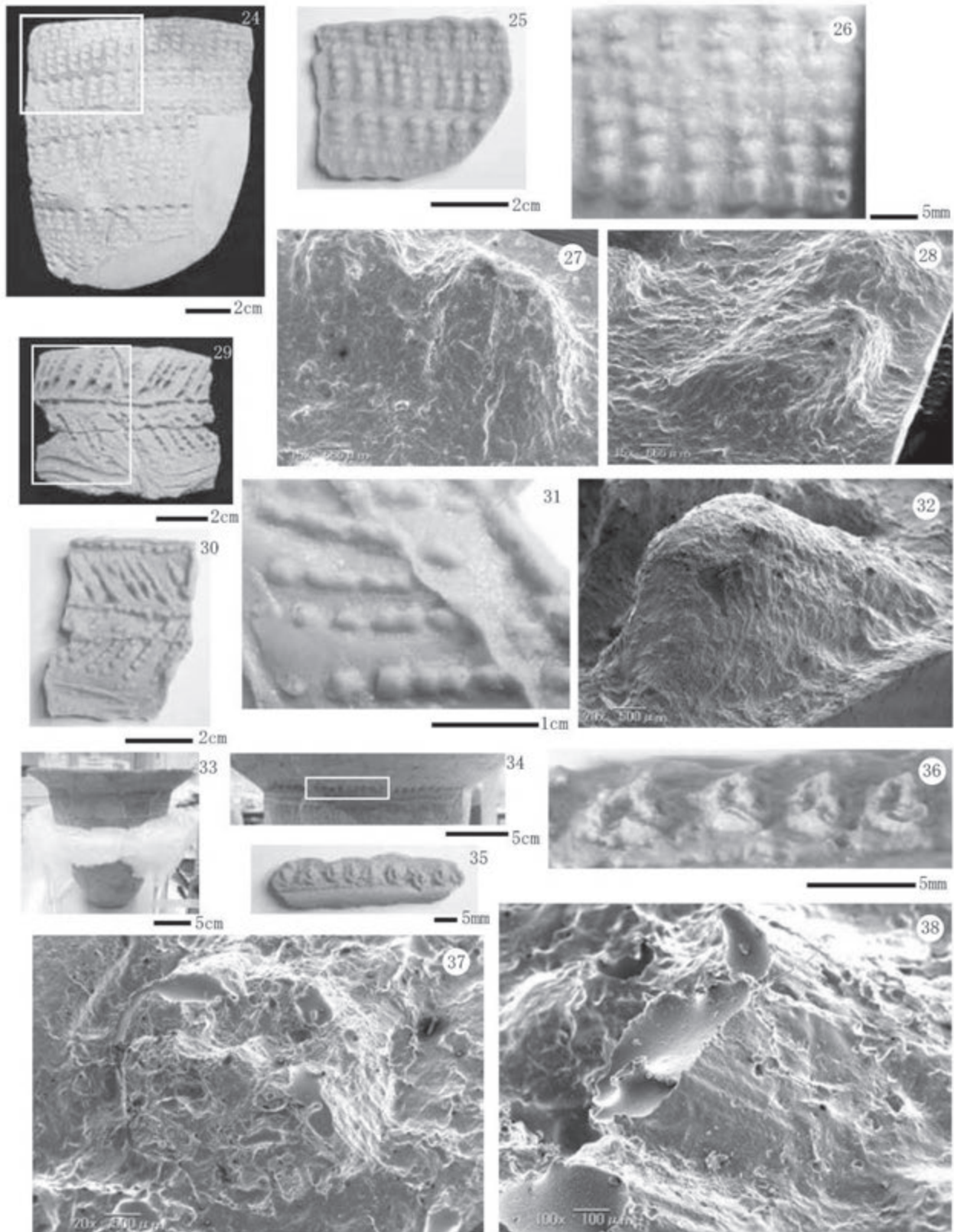
1. 土器外面(分析No.3)、2. 土器内面(分析No.3)、3. 不明(コクゾウムシ属甲虫?) (分析No.3)、4. 土器外面(分析No.4)、5. 土器内面(分析No.4)、6. 不明種子? (分析No.4)、7. 土器外面(分析No.5)、8. 土器外面(分析No.5)、9. 材片(分析No.5)、10. 土器外面(分析No.6)、11. 土器外面(分析No.6)、12. イネ種子側面観(分析No.6)、13. イネ種子上面観(分析No.6)、
土器写真内白枠は圧痕採取位置を示す



図版2 高吉B遺跡出土土器および圧痕レプリカ (2)

14. 土器外面 (分析 No. 7)、15. 圧痕レプリカ (分析 No. 7)、16. 圧痕レプリカ部分拡大 (分析 No. 7)、17. 突起部 (分析 No. 7)、18. 突起部拡大 (分析 No. 7)、19. 土器外面 (分析 No. 8)、20. 圧痕レプリカ (分析 No. 8)、21. 圧痕レプリカ部分拡大 (分析 No. 8)、22. 突起部拡大 (分析 No. 8)、23. 突起部の断面 (分析 No. 8)

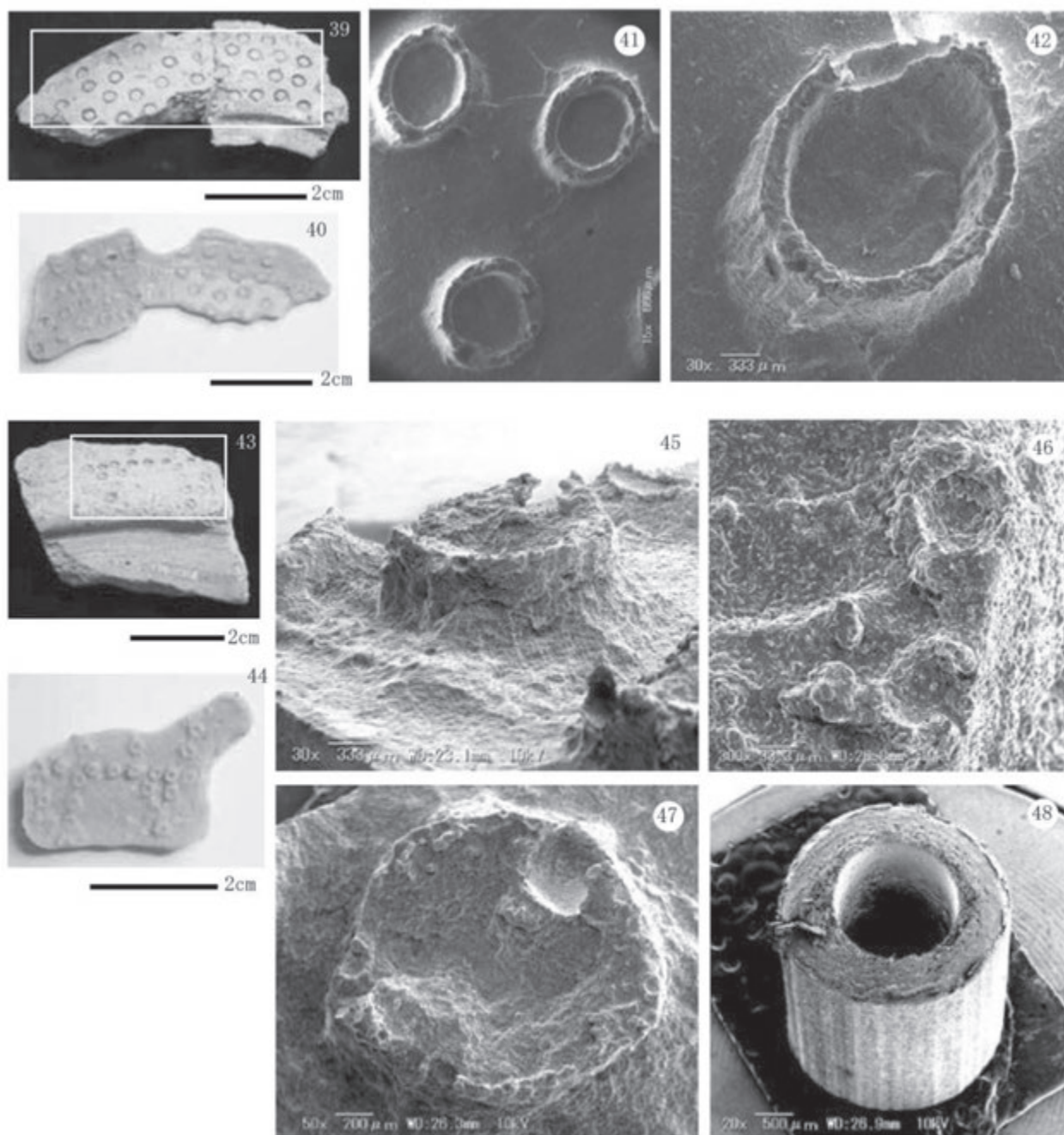
土器写真内白枠は圧痕採取位置を示す



図版3 高吉B遺跡出土土器および圧痕レプリカ (3)

24. 土器外面 (分析 No. 9)、25. 圧痕レプリカ (分析 No. 9)、26. 圧痕レプリカ部分拡大 (分析 No. 9)、27. 突起部拡大 (分析 No. 9)、28. 突起部側面拡大 (分析 No. 9)、29. 土器外面 (分析 No. 10)、30. 圧痕レプリカ (分析 No. 10)、31. 圧痕レプリカ部分拡大 (分析 No. 10)、32. 突起部拡大 (分析 No. 10)、33. 土器外面 (分析 No. 11)、34. 圧痕採取部拡大 (分析 No. 11)、35. 圧痕レプリカ (分析 No. 11)、36. 圧痕レプリカ部分拡大 (分析 No. 11)、37. 突起部断面拡大 (分析 No. 11)、38. 突起部側面拡大 (分析 No. 11)

土器写真内白枠は圧痕採取位置を示す



図版4 高吉B遺跡出土土器および圧痕レプリカ (4)

39. 土器口縁部外面 (分析 No. 12)、40. 圧痕レプリカ (分析 No. 12)、41. 突起部 (分析 No. 12)、42. 突起部拡大 (分析 No. 12)、43. 土器口縁部内面 (分析 No. 13)、44. 圧痕レプリカ (分析 No. 13)、45. 突起部 (分析 No. 13)、46. 突起部拡大 (分析 No. 13)、47. 突起部断面 (分析 No. 13)、48. 現生アズマネザサの稈
土器写真内白枠は圧痕採取位置を示す

鹿児島県内出土のガラス玉の化学分析

中井 泉^{※1}, 柳瀬和也^{※1}, 松崎真弓^{※1}, 澤村大地^{※1}, 永濱功治

Chemical Analysis of glass beads excavated from Kagoshima prefecture

Nakai Izumi, Yanase Kazuya, Matsuzaki Mayumi, Sawamura Daichi, Nagahama Koji

要旨

日本における弥生時代～古墳時代の出土ガラスはすべて海外の種々の地域からの搬入品であり、その化学組成は製造地域を反映する。本稿では鹿児島県出土の古代ガラスビーズ 30 資料について、ポータブル蛍光 X 線分析装置を用いて非破壊定量分析を行い、その化学組成を明らかにした。全資料を主成分組成に基づいて分類したところ、アルミナソーダ石灰ガラス (Na₂O-Al₂O₃-CaO-SiO₂ 系 : 3 点), カリガラス (K₂O-SiO₂ 系 : 22 点), カリ鉛ガラス (PbO-K₂O-SiO₂ 系 : 5 点) の 3 つのタイプに分類された。更にその化学組成を、熊本県や茨城県などの他地域の出土ガラスと比較し、鹿児島県の古代ガラスの起源や、流通の様相について考察した。

キーワード ガラス, 化学組成, ガラスの起源, 蛍光 X 線分析, 非破壊その場分析

1 分析資料

鹿児島県内の遺跡から出土した古代ガラス計 30 点を、今回の分析対象とした。これらの多くは、弥生時代や古墳時代のものであり、なかには近世、近現代などのものも見られた。今回の分析調査では、鹿児島県立埋蔵文化財センターに可搬型分析装置を持ち込み、非破壊オンサイト分析を行った。測定の際には、資料の中でも風化や汚れなどが少なく、蛍光 X 線分析によって、できるだけ正確に定量できると思われる部位を選択した。Table 1 に測定資料の出土遺跡と年代、分析点数、また Fig. 1 に出土遺跡のおおまかな位置関係を示す。

2 対象遺跡の概要

上水流遺跡は南さつま市金峰町に所在し、東シナ海に注ぐ万之瀬川下流域の自然堤防上に立地する。縄文時代前期から近世までの複合遺跡で、特に縄文時代前期～晩期、中世、近世の遺構・遺物が多く出土した。ガラス玉は中近世の遺構（大溝）から 1 点（掲載番号 261）出土した。他にも大溝からは 17 世紀を中心とした陶磁器が出土している。中国、東南アジア産の陶磁器としては漳州窯や景德鎮窯の青花、龍泉窯系青磁、徳化窯系の白磁、華南産陶器、ベトナム陶器などで構成されている。国産の陶磁器は苗代川系の薩摩焼、肥前系の陶磁器が出土している⁵⁻⁶⁾。

前畑遺跡は鹿屋市郷之原町に所在し、笠野原台地のほぼ中央部、標高約 70m の広大なシラス台地上に立地する。縄文時代早期から近世・現代までの複合遺跡で、特に縄文時代早期の平椀式土器が多量に出土し、弥生時代中期

から後期に位置づけられる竪穴住居跡と掘立柱建物跡で構成される集落跡が検出された。ガラスは近世の土坑墓 7 基の内の 1 基（7 号墓）から出土したものである。7 号

Table 1 出土遺跡および年代、測定点数

出土遺跡	年代	測定資料(点数)
上水流2	中近世	ビーズ(1)
前畑	近世	ビーズ(3)
大島	古代	ビーズ(1)
堂園B	弥生～古墳	ビーズ(9)
下ノ原B	古墳	ビーズ(3)
大坪	*	ビーズ(3)
鳴野原A	弥生～古墳	ビーズ(10)

* 古代初期のものが2点、近現代のものが1点



Fig. 1 出土遺跡の位置関係

※1 東京理科大学理学部

墓からは鉛玉1点とガラス玉6点が出土しており、他の6基からは人骨、寛永通宝、櫛等が出土している。上水流遺跡と前畑遺跡のガラスは中世より新しい資料であったため、分析結果の考察からは除外した⁷⁾。

大島遺跡は薩摩川内市東大小路町に所在し、川内川下流域の薩摩国分寺跡近く、標高約5mの自然堤防上に立地する。縄文時代から中世までの複合遺跡で、主に奈良・平安時代の遺構・遺物が出土した。弥生時代と古墳時代ではそれぞれ竪穴住居跡が検出され、古墳時代では大刀、剣、鉄鏃が副葬された土坑墓も検出された。ガラスは古代の包含層より出土した。同時期の遺構は竪穴住居跡23軒、掘立柱建物跡1棟、土坑62基、溝状遺構6条等が検出され、土師器や須恵器、硯、カマド、甌、緑釉陶器、越州窯青磁等が出土した⁸⁾。

堂園B遺跡は南九州市川辺町に所在し、薩摩半島のほぼ中央部に位置する。遺跡のある鳴野原台地は万之瀬川と神殿川に挟まれた長さ約3.5kmの細長い台地で、遺跡の標高は約110mである。南側に鳴野原遺跡が隣接する。縄文時代から中世までの複合遺跡で、ガラスは弥生～古墳時代の竪穴住居内より出土した。該期の遺構は竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡1棟、柵列状遺構31条等があり、中津野式土器、磨製石鏃、打製石斧、石包丁等の遺物が出土した⁹⁾。

下ノ原B遺跡は伊佐市大口に所在し、川内川中流域右岸の標高約190mの河岸段丘から丘陵にかけて立地する。遺跡は縄文時代から古代の複合遺跡で、ガラスは古墳時代の竪穴住居跡内より出土した。該期の主な遺構は竪穴住居跡8軒で、遺物は東原式土器、辻堂原式土器、古式須恵器、砥石、石製小玉等が出土した¹⁰⁾。

大坪遺跡は出水市美原町に所在し、矢筈岳の裾部から出水平野に広がる沖積地に立地している。八代海に注ぐ米ノ津川及び高柳川の右岸にあり、標高は約8mである。縄文時代後期～晩期、古代、中世の遺跡で、縄文時代の特徴は玉類の出土量の多さにある。上加世田土器（縄文時代後期後半）に伴う玉類は透明感のある良質な石材を用い、薄手で統一された感じに作られている。一方、入佐式土器に伴う玉類の石材は緑色が濃く、大きさも形もバリエーションを持っている。完成品は勾玉6点、管玉25点、丸玉5点、平玉3点、垂飾品1点である。製作途中のものや原石、剥片も出土しており、この場所で玉づくりが行われていたと考えられる。ガラスは古代初期のものが2点包含層より出土した。該期の遺構は竪穴住居跡や焼成土坑、溝状遺構等が検出され、須恵器、土師器、甌、土錘、鉄製品等の遺物が出土している¹¹⁾。

鳴野原A遺跡は南九州市川辺に所在し、薩摩半島のほぼ中央部に位置する。遺跡のある鳴野原台地は万之瀬川と神殿川に挟まれた長さ約3.5kmの細長い台地で、遺跡の標高は約110mである。北側に堂園遺跡が隣接する。

縄文時代から古墳時代までの複合遺跡で、ガラスは弥生～古墳時代の竪穴住居内より出土した。該期の遺構は竪穴住居跡が5軒検出され、内2軒よりガラス玉が出土した。住居内からは成川式土器、磨製石鏃、砥石等の遺物が出土している¹²⁾。

3 分析調査

今回の分析調査は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに可搬型分析装置を持ち込み、2013年7月16日（火）～17日（水）の期間に非破壊での分析を行った。

4 分析装置

化学組成分析には、ポータブル蛍光X線分析装置OURSTEX 100FA-IV（OURSTEX（株））を用いた（Fig. 2-1）。得られた蛍光X線スペクトルから、検量線法を用いて各元素の酸化物換算濃度を算出した。検量線用の標準試料には、認証値が与えられている標準ガラス、およびICP-OESによる定量化を行った合成ガラス計34点を用いた。

また、ガラス中に散在する顔料の同定には、最大40倍の顕微鏡倍率で観察および測定が可能なポータブル顕微ラマン分光分析装置MiniRam（B&W TEK Inc.）を用いた（Fig. 2-2）。次に2つの装置の測定条件を示す。

● ポータブル蛍光X線分析装置 OURSTEX 100FA-IV <測定条件>

- ・小型ポンプを使用し、試料室内を真空にして測定
- ・NIST製標準ガラス試料（SRM1831 および SRM612）により再現性と安定性を確認
- ・ガラス類は単色X線と白色X線の2種の波長で連続測定
- ・単色X線時：管電圧40 kV、管電流1.00 mA以下、DT（不感時間）30%以下、Live time 200 s
- ・白色X線時：管電圧40 kV、管電流0.25 mA以下、DT 30%以下、Live time 200 s

● ポータブル顕微ラマン分光分析装置 MiniRam <測定条件>

- ・励起源として、785 nmのレーザー光を使用
- ・顕微ビデオシステムを使用（倍率：20倍、40倍）
- ・露光時間1000ミリ秒、100回（測定時間100秒）を通常の測定条件とした
- ・通常の測定時間と同じ測定時間でDarkの測定を行った
- ・レーザー出力は試料によって異なるが、基本的には10～30%の低出力で行った

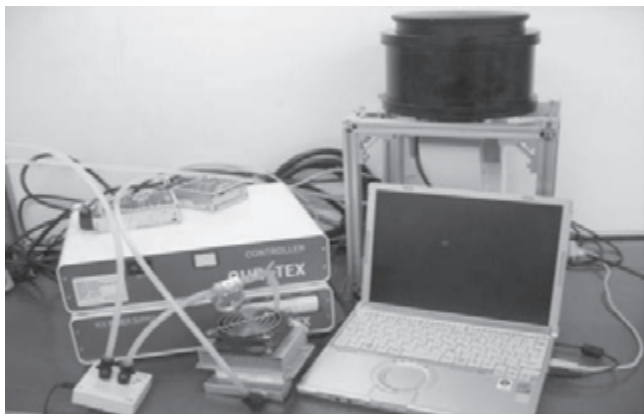


Fig. 2-1 蛍光X線分析装置



Fig. 2-2 顕微ラマン分光分析装置

5 分析結果および考察

分析したガラス全 30 点を化学組成に基づいて分類した結果、ガラスの融剤としてアルカリ分を用いたアルカリケイ酸塩ガラスと、鉛分を用いたカリ鉛ガラスに大別された。更にアルカリケイ酸塩ガラスは特徴的に含まれる元素により、カリガラス、アルミナソーダ石灰ガラスの 2 種類に分類された。Fig. 3 に分析資料の内訳を示す。

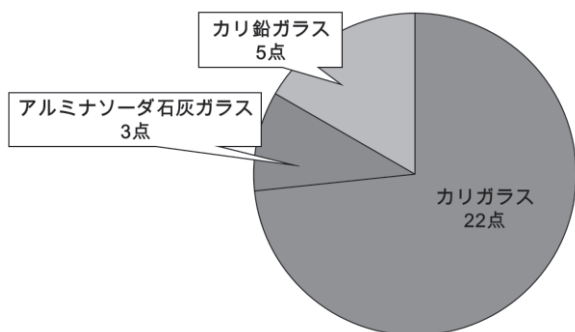


Fig. 3 分析資料の化学組成に基づく分類

Fig. 3に示すように、分析点数30点に対し、カリガラス 22点、アルミナソーダ石灰ガラス3点、カリ鉛ガラス5点が確認された。このうちカリ鉛ガラスはすべて中世～近現代に年代づけられ、それらの出土遺跡は前畑遺跡3点（近世）、上水流2遺跡1点（中近世）、大坪遺跡1点（近現代）である。次にアルカリケイ酸塩ガラスであるカリガラス、アルミナソーダ石灰ガラスについて種類ごとに結果をまとめて掲載する。付録1に測定した資料の写真、Table 2に分析資料の定量値一覧を示す。なおカリ鉛ガラスは平安時代以降、室町、江戸時代にいたるまで日本に広く普及したガラスの組成タイプ¹⁾であり、本研究の資料の年代と矛盾はない。いずれも中近世のガラスであり、本研究の主対象ではないことから、カリ鉛ガラスは密度の測定を行っていないため定量値は得ていない。鉛によるX線の吸収が著しく、カリ鉛ガラスの定量を行うには、密度のデータが不可欠である¹⁾。今後定量値が必要であれば、密度測定を実施したい。

5-1. カリガラス

カリガラス (K_2O-SiO_2 系) は酸化カリウム K_2O と酸化ケイ素 SiO_2 を主成分とするガラスであり、弥生時代から古墳時代前期を代表するガラスである²⁾。今回の分析調査において、カリガラスは最も多く、計 22 点見られた。カリガラスは酸化アルミニウム Al_2O_3 の含有量によって、高アルミナタイプと低アルミナタイプに分けられることが知られている²⁾。

カリガラスの色調はコバルト Co 由来の紺色 (10 点) と、鉄 Fe および銅 Cu 由来の青緑色 (9 点)、水色 (3 点) であった。紺色のカリガラスと水色のカリガラスは、すべて弥生時代～古墳時代の遺跡から出土したものであり、また、青緑色のカリガラスも詳細な年代が不明な古代の資料が 2 点 (資料番号: 4KAG1307g-032, 4KAG1307g-034) 含まれるものの、大部分は同じく弥生時代～古墳時代に年代づけられるものであった。青緑色と水色のカリガラスに関しては、酸化銅 CuO が 1% 程度含まれ、加えて酸化鉛 PbO と酸化スズ SnO_2 もわずかに含まれていることから、青銅の鍍を原料とした着色であると考えられる。

次にカリガラスに関して主要元素による特性化を行った結果 (Fig. 4) と微量重元素による特性化を行った結果 (Fig. 5) を示す。参考のため、当研究室で以前分析を行った熊本県と茨城県から出土した同時代のカリガラスも合わせて掲載している³⁻⁴⁾。

Fig. 4 より、主要元素である Al, Ca 含有量を用いた特性化によって、Co 着色による紺色のカリガラスと、Cu 着色による青緑色と水色のカリガラスは異なる 2 つの領域にプロットされ、いずれも熊本県や茨城県の遺跡から出土したカリガラスに近い値となった。上述したように、

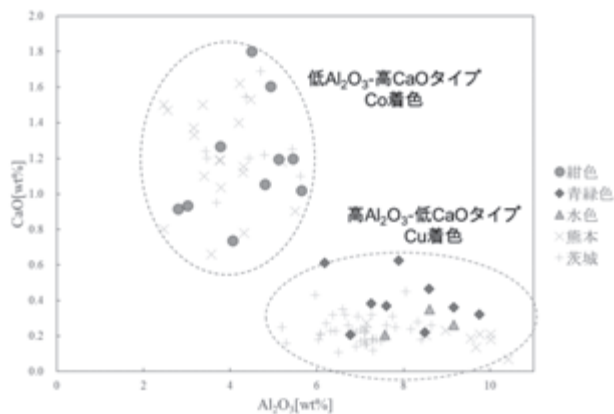


Fig. 4 カリガラスの主要元素による特性化

カリガラスは酸化アルミニウム Al_2O_3 の含有量によって、高アルミナタイプと低アルミナタイプに細分化され、それぞれ異なる地域から出土することが示されている。Fig. 4 の2つのグループのうち、紺色のカリガラスは低アルミナタイプに属し、インドから東南アジアを経て、日本列島や朝鮮半島に渡る広域的な分布が確認されており、一方 Cu 着色の青緑色や水色のカリガラスは高アルミナタイプに属し、中国南部からベトナム中部を中心に分布していることが知られている²⁾。

また、主要元素に比べて風化の影響を受けにくく、ガラスの特徴をより良く反映する微量重元素（ストロンチウム Sr、ジルコニウム Zr）に着目し、更なる特性化を試みた。その結果、先に示した Fig. 4 と同様、微量重元素を特性化に用いた場合においても、高アルミナタイプと低アルミナタイプの分類と対応してグループ化されることが示された (Fig. 5)。低アルミナタイプの紺色カリガラスは相対的にはあるが、高 SrO-低 ZrO_2 タイプに、高アルミナタイプの水色カリガラスと青緑色カリガラスは低 SrO-高 ZrO_2 タイプにそれぞれ分類され、Fig. 4 の主要元素による分類を裏付ける結果が得られた。

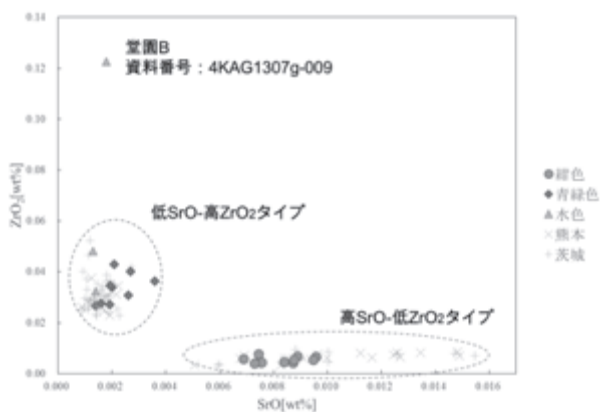


Fig. 5 カリガラスの微量重元素による特性化

すなわち、二つの領域のガラスは、それぞれ異なる地域からの搬入品ということがいえる。両者は、堂園 B 遺跡、鳴野原 A 遺跡とも、両タイプのガラスが出土していて、両遺跡の差は認められなかった。なお、堂園 B 遺跡から出土した水色のカリガラス 1 点 (資料番号: 4KAG1307g-009) については、高アルミナタイプで Cu 着色であるが、低 SrO-高 ZrO_2 タイプから大きく外れ、他の 2 点とは起源が異なる可能性も考えられるが、分析点数が 1 つと少ないのでこれ以上の議論は控えたい。

5-2. アルミナソーダ石灰ガラス

今回測定したアルミナソーダ石灰ガラス ($\text{Na}_2\text{O}-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{CaO}-\text{SiO}_2$ 系) は、下ノ原 B 遺跡から出土した水色ビーズ 2 点 (資料番号: 4KAG1307g-12, 4KAG1307g-013) と、大坪遺跡から出土した水色ビーズ 1 点 (資料番号: 4KAG1307g-036) の計 3 点であった。下ノ原 B 遺跡の 2 点は古墳時代のもの、大坪遺跡の 1 点は古代初期のものとされている。Fig. 6 にアルミナソーダ石灰ガラスに関してガラスの原料 (シリカ源) に付随する微量重元素 SrO, ZrO_2 による特性化を行った結果を示す。参考のため、当研究室で以前分析を行った熊本県と茨城県から出土したアルミナソーダ石灰ガラスを合わせて掲載している³⁻⁴⁾。

Fig. 6 からわかるように、今回分析を行ったアルミナソーダ石灰ガラスは酸化ストロンチウム SrO と酸化ジルコニウム ZrO_2 の値が低くなっており、当研究室が以前分析した熊本県や茨城県のアルミナソーダ石灰ガラスの領域からやや外れた位置にプロットされる。したがって、今回分析したアルミナソーダ石灰ガラス 3 点は、熊本県や茨城県のアルミナソーダ石灰ガラスとは異なる起源を有する可能性が高いと考えられる。なお、今回の調査ではアルミナソーダ石灰ガラスの分析点数が 3 点と少なかったため起源や流通についての詳細な議論は差し控えるが、今後鹿児島県内の分析点数を増やすことができれば、ガラスの流通における九州北部や関東地域との相違点・共通点がより明らかになると期待される。

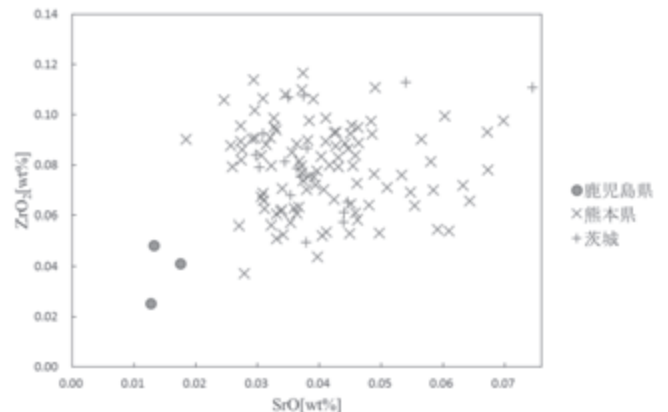


Fig. 6 アルミナソーダ石灰ガラスの微量重元素による特性化

謝辞

南九州地域のガラスの分析の機会をくださった、熊本県立装飾古墳館の坂口圭太郎様、池田朋生様、宮崎県埋蔵文化財センターの橋本英俊様、宮崎県教育庁の北郷泰道様に御礼申し上げます。

【参考文献】

- 1) 白瀧絢子, 中井 泉, Bull. Natl. Mus. Nat.Sci.,Ser.(国立科学博物館研修報告) E,34, 61-71 (2011) .
- 2) 肥塚隆保, 田村朋美, 大賀克彦: 月刊文化財 566 13-25 (2010) .
- 3) 白瀧絢子, 阿部善也, K.タンタラカーン, 中井 泉, 池田朋生, 坂口圭太郎, 後藤克博, 荒木隆宏: 考古学と自然科学 63 29 (2012) .
- 4) 松崎真弓, 白瀧絢子, 池田朋生, 中井 泉: X 線分析の進歩 43 437 (2012) .

- 5) 鹿児島県教育委員会: 先史古代の鹿児島 (資料編) (2005)
- 6) 鹿児島県立埋蔵文化財センター: 発掘調査報告書(121) 上水流遺跡 2 (2008)
- 7) 鹿児島県教育委員会: 発掘調査報告書(52)前畑遺跡 (1990)
- 8) 鹿児島県立埋蔵文化財センター: 発掘調査報告書(80) 大島遺跡 (2005)
- 9) 鹿児島県立埋蔵文化財センター: 発掘調査報告書(123) 堂園遺跡 B 地点 (2008)
- 10) 鹿児島県立埋蔵文化財センター: 発掘調査報告書 (137)下ノ原 B 遺跡 (2009)
- 11) 鹿児島県立埋蔵文化財センター: 発掘調査報告書(79) 大坪遺跡 (2005)
- 12) 鹿児島県立埋蔵文化財センター: 発掘調査報告書 (156)鳴野原遺跡 A 地点 (2011)

付録 1: 資料写真

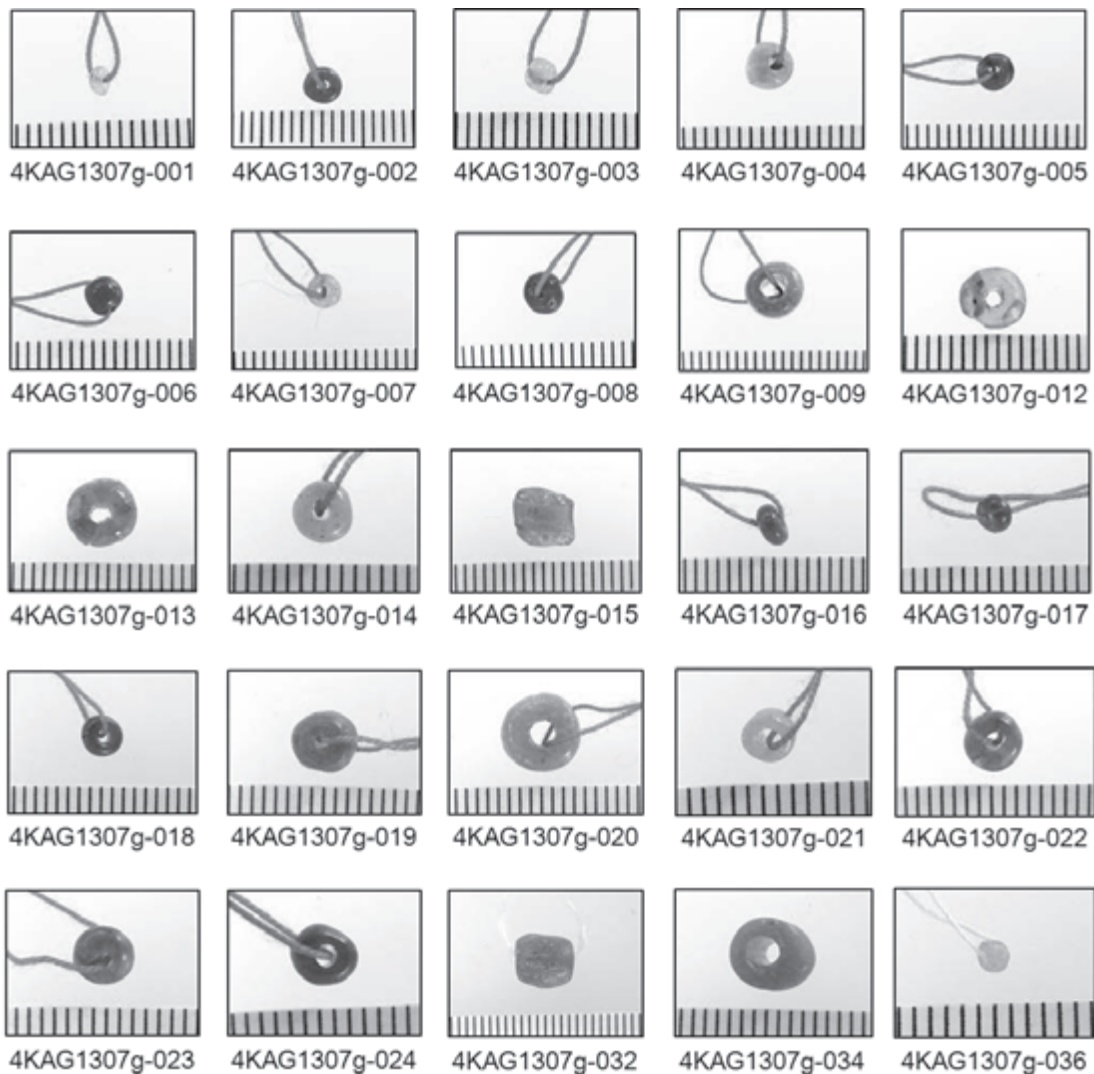


Table 2 組成一覧

出土遺跡	資料番号	色	形状	組成タイプ	各成分濃度[w%]										
					Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	PbO	SnO ₂
堂園遺跡B地点	4KAG1307g-001	青緑色	ビーズ	カリガラス	2.69	0.66	7.25	76.87	10.45	0.38	0.02	0.47	0.92	0.19	0.09
	4KAG1307g-002	紺色	ビーズ	カリガラス	2.12	1.03	4.50	78.53	9.95	1.80	1.08	0.95	0.01	0.00	0.02
	4KAG1307g-003	青緑色	ビーズ	カリガラス	1.63	0.73	6.77	78.66	9.76	0.21	0.04	0.44	1.29	0.35	0.11
	4KAG1307g-004	青緑色	ビーズ	カリガラス	2.13	0.90	9.16	72.04	12.69	0.36	0.03	0.53	1.58	0.42	0.15
	4KAG1307g-005	紺色	ビーズ	カリガラス	1.28	0.79	5.45	80.64	8.48	1.20	0.96	1.18	0.01	tr.	0.02
	4KAG1307g-006	紺色	ビーズ	カリガラス	2.27	1.06	4.93	74.28	13.16	1.60	1.30	1.37	0.01	tr.	0.02
	4KAG1307g-007	水色	ビーズ	カリガラス	2.36	0.88	9.16	73.83	11.36	0.26	0.02	0.43	1.20	0.39	0.11
	4KAG1307g-008	紺色	ビーズ	カリガラス	1.10	0.57	2.80	84.06	8.38	0.92	0.99	1.14	0.01	tr.	0.02
	4KAG1307g-009	水色	ビーズ	カリガラス	1.36	0.79	8.60	75.59	10.47	0.35	0.03	0.56	1.61	0.44	0.19
下ノ原遺跡	4KAG1307g-012	水色	ビーズ	アルミナソーダ石灰ガラス	2.18	2.11	8.92	79.85	1.86	2.96	0.09	1.46	0.56	tr.	0.02
	4KAG1307g-013	水色	ビーズ	アルミナソーダ石灰ガラス	2.14	1.72	6.46	83.78	1.61	2.31	0.06	0.90	0.99	0.01	0.02
	4KAG1307g-014	水色	ビーズ	カリガラス	1.63	0.98	7.57	78.37	9.62	0.21	0.02	0.40	0.82	0.27	0.11
鳴野原A遺跡	4KAG1307g-015	青緑色	ビーズ 破片	カリガラス	2.04	0.97	7.61	77.05	8.88	0.37	0.04	0.52	1.90	0.43	0.19
	4KAG1307g-016	紺色	ビーズ	カリガラス	1.67	0.73	4.06	81.42	9.40	0.74	0.95	1.01	0.01	tr.	0.02
	4KAG1307g-017	紺色	ビーズ	カリガラス	2.22	0.93	3.78	77.12	11.59	1.27	1.59	1.47	0.02	tr.	0.02
	4KAG1307g-018	紺色	ビーズ	カリガラス	1.95	0.50	3.02	80.95	9.92	0.93	1.54	1.14	0.03	tr.	0.02
	4KAG1307g-019	青緑色	ビーズ	カリガラス	2.03	0.58	7.89	78.78	7.23	0.63	0.03	0.49	1.67	0.41	0.25
	4KAG1307g-020	青緑色	ビーズ	カリガラス	1.01	0.90	9.75	73.42	11.57	0.32	0.03	0.62	1.73	0.45	0.20
	4KAG1307g-021	青緑色	ビーズ	カリガラス	2.19	1.15	8.49	74.41	11.51	0.22	0.04	0.39	1.11	0.33	0.14
	4KAG1307g-022	紺色	ビーズ	カリガラス	2.00	1.09	4.80	80.98	8.21	1.05	1.03	0.81	0.01	tr.	0.02
	4KAG1307g-023	紺色	ビーズ	カリガラス	2.28	1.34	5.65	78.51	9.28	1.02	0.99	0.91	0.01	tr.	0.02
	4KAG1307g-024	紺色	ビーズ	カリガラス	1.63	1.03	5.12	74.23	13.32	1.19	1.82	1.61	0.02	0.01	0.03
大島遺跡	4KAG1307g-032	青緑色	ビーズ	カリガラス	2.42	0.98	8.59	77.04	7.25	0.46	0.03	0.79	1.76	0.43	0.25
大坪遺跡	4KAG1307g-034	青緑色	ビーズ	カリガラス	1.39	0.57	6.19	77.45	10.43	0.61	0.04	0.64	1.97	0.47	0.24
	4KAG1307g-036	水色	ビーズ	アルミナソーダ石灰ガラス	2.93	1.10	5.93	84.13	1.78	2.21	0.08	0.84	0.97	0.01	0.02

tr.: 定量下限以下
n.d.: 検出下限以下
SiO₂は残渣として計算

出土遺跡	資料番号	色	形状	組成タイプ	各成分濃度[ppm]							
					TiO ₂	CoO	NiO	ZnO	As ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂
堂園遺跡B地点	4KAG1307g-001	青緑色	ビーズ	カリガラス	2134	56	n.d.	37	46	357	tr.	277
	4KAG1307g-002	紺色	ビーズ	カリガラス	1848	496	62	38	n.d.	138	87	42
	4KAG1307g-003	青緑色	ビーズ	カリガラス	1809	62	tr.	43	73	344	tr.	272
	4KAG1307g-004	青緑色	ビーズ	カリガラス	2327	92	48	57	tr.	444	tr.	429
	4KAG1307g-005	紺色	ビーズ	カリガラス	2823	445	59	42	n.d.	92	89	68
	4KAG1307g-006	紺色	ビーズ	カリガラス	2609	490	39	tr.	n.d.	158	76	45
	4KAG1307g-007	水色	ビーズ	カリガラス	1875	90	tr.	62	36	360	tr.	482
	4KAG1307g-008	紺色	ビーズ	カリガラス	2792	394	40	32	n.d.	139	73	41
	4KAG1307g-009	水色	ビーズ	カリガラス	1963	70	61	70	tr.	376	tr.	1226
下ノ原遺跡	4KAG1307g-012	水色	ビーズ	アルミナソーダ石灰ガラス	3954	99	n.d.	107	tr.	75	175	411
	4KAG1307g-013	水色	ビーズ	アルミナソーダ石灰ガラス	2491	88	n.d.	84	n.d.	63	132	483
	4KAG1307g-014	水色	ビーズ	カリガラス	1740	65	tr.	43	tr.	410	tr.	323
鳴野原A遺跡	4KAG1307g-015	青緑色	ビーズ 破片	カリガラス	1842	66	65	74	tr.	304	tr.	401
	4KAG1307g-016	紺色	ビーズ	カリガラス	2672	302	tr.	tr.	n.d.	86	69	59
	4KAG1307g-017	紺色	ビーズ	カリガラス	3449	407	63	42	n.d.	153	88	54
	4KAG1307g-018	紺色	ビーズ	カリガラス	1489	511	61	tr.	n.d.	171	84	45
	4KAG1307g-019	青緑色	ビーズ	カリガラス	2155	81	73	65	31	281	tr.	339
	4KAG1307g-020	青緑色	ビーズ	カリガラス	1887	84	75	74	93	392	tr.	307
	4KAG1307g-021	青緑色	ビーズ	カリガラス	1501	65	tr.	47	n.d.	336	tr.	267
	4KAG1307g-022	紺色	ビーズ	カリガラス	1099	342	40	34	n.d.	93	96	66
	4KAG1307g-023	紺色	ビーズ	カリガラス	2045	309	31	tr.	n.d.	88	74	78
	4KAG1307g-024	紺色	ビーズ	カリガラス	3118	587	77	31	n.d.	170	95	54
大島遺跡	4KAG1307g-032	青緑色	ビーズ	カリガラス	2176	63	37	66	59	283	tr.	346
大坪遺跡	4KAG1307g-034	青緑色	ビーズ	カリガラス	2224	108	60	86	45	347	36	363
	4KAG1307g-036	水色	ビーズ	アルミナソーダ石灰ガラス	2592	41	tr.	84	tr.	66	127	253

tr.: 定量下限以下
n.d.: 検出下限以下

地域の素材を活用した社会科の学習指導

—地域にある遺跡や遺物を活用した歴史の授業を通して—

宗岡 克英*

Guide in social studies by practical use of local materials

Muneoka Katsuhide

要旨

本稿では、地域の素材を活用した中学校社会科の授業の実践事例についてまとめた。筆者が在籍した志布志市立志布志中学校での実践を中心とした。地域の素材は、打製石斧・磨製石斧、飯盛山古墳、壺形埴輪、志布志新城、大慈寺である。学習方法は比較・分類やフィールドワークである。

キーワード 社会科学学習指導、遺跡、石斧、飯盛山古墳、志布志城、大慈寺、三国名勝図会

1 はじめに

筆者は、県立埋蔵文化財センターに8年間勤務した後志布志市立志布志中学校に赴任した。埋蔵文化財センターで得た知識や方法論は、社会科の学習において充分活用できると考えた。また、志布志中学校は志布志新城跡地にある。歴史の学習をする上でその事実を生徒に適切に伝えることができれば、歴史を身近に感じさせることができると考えた。本稿は志布志市にある遺跡や遺物を活用した歴史の授業の実践例をまとめたものである。

ところで5年ほど前に幕末の志士坂本龍馬の生涯を描いたNHK大河ドラマ『龍馬伝』が話題になった。坂本龍馬とゆかりのある西郷隆盛や小松帯刀などが登場したり、霧島が舞台となるシーンもあったため、私たちの鹿児島でも『篤姫』のときと同様に、鹿児島・薩摩の歴史に対する関心が高まった。生徒たちもドラマを通して幕末から明治維新にかけての歴史に興味をもち、この時代を授業で勉強する際には、様々な質問が出された。あらためてテレビの影響力の大きさを痛感した。『龍馬伝』の成功は、坂本龍馬という人物を魅力的に描き、活用することによって、幕末から明治維新の歴史をわかりやすく視聴者にイメージさせることができたからだと思う。

この手法は、社会科の授業を組み立てる上でも大変参考になる。地域にある素材を活用し、その素材を手がかりとして、社会的事象の具体的なイメージをもつことができれば、生徒たちは、社会科の学習に関心をもつのではないだろうか。その素材は地域に多くある。しかし十分に活用しきっていない。「地域の素材を掘り起こし、授業で活用し、郷土に目を向けさせる。」このことは社会科教師の大きな役割であると考えている。

2 研究主題設定の理由

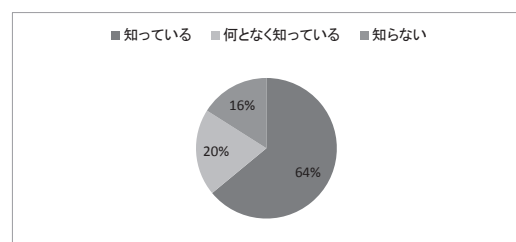
(1) 社会科教育の今日的課題から

平成18年に改正された教育基本法において、教育の目標の一つとして「伝統と文化を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と「郷土教育」の重要性が記され、日本の伝統や文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成がより求められている。また、鹿児島県も上の教育基本法に基づいて、①「郷土の自然や文化、伝統、歴史、産業等を知ることによって、郷土への理解を深める」②「郷土への愛情や誇りをもち、そのよさを守り伝え、郷土の発展に主体的に貢献しようとする」③「異なる文化の存在を知り、それを尊重する」ことを推進している。特にその中で、地域の素材を活用した学習指導は、歴史的事象や地理的事象をより身近に、そして具体的にとらえることができ、社会科学習への意欲を高める上で非常に有効であると考えている。そこで、志布志の地域素材を掘り起こす必要性を感じた。

(2) 生徒の実態から

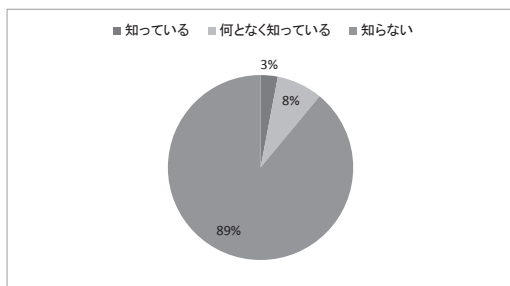
志布志市内にある寺や遺跡について以下のようなアンケートを実施してみた。(中2対象 155人)

① 宝満寺や大慈寺がどこにあるか知っていますか。

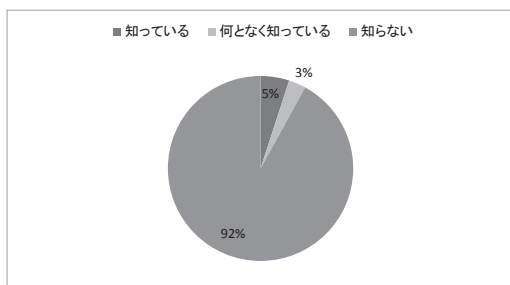


*公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

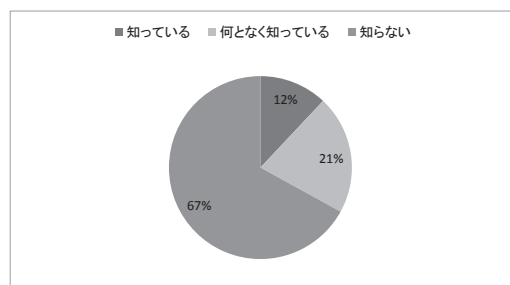
② 宝満寺や大慈寺がいつごろ建てられたか知っていますか。



③ 志布志市に古墳があることを知っていますか。



④ 志布志中学校は中世の城跡に建っていることを知っていますか。



平成 23 年 10 月 15 日実施

アンケートの結果によると、宝満寺や大慈寺は、その場所については知っている生徒が多い。お釈迦祭りなどでかかわりがあるからだと考えられる。一方、その寺がいつ頃建てられたのかなど歴史的な意義についてはほとんど知らない。また、志布志城跡や古墳など、現在その形をとどめていない遺跡については知らない生徒が多い。地域の歴史について、いかに知らないかを示す結果となった。まず、地域の遺跡について授業で紹介することの大切さを痛感した。身近にある遺跡は、授業で学んだ歴史的な事象を考える上で、大きな手がかりとなる。また、身近な遺跡のイメージを通して得られた知識はより定着する。志布志市には上記以外の遺跡も数多くある。それらの遺跡を生徒に紹介し、授業で活用する必要がある。

以上の二つの理由から、この研究主題を設定し、研究に取り組むことにした。

3 研究の仮説

地域にある遺跡や遺物を活用し、教材化することによって、歴史的な事象をより身近に、そして具体的にとらえることができ、社会科学習への意欲を高めることができるのではないかと。

4 研究の内容

- (1) 地域の素材を活用した社会科学習の意義
- (2) 地域の素材を活用できる単元（歴史的分野）
- (3) 地域にある遺跡や遺物を活用した歴史の授業

5 研究の実際

- (1) 地域の素材を活用した社会科学習の意義

地域の素材を活用し教材化することによって、生徒たちは社会科の学習において社会的な事象をより身近に、そして具体的にとらえ、学習への意欲を高めることができる。つまり、生徒たちは自分の五感を駆使して、地域の素材を活用し、調べ、思考することができ、そのことによって生き生きとした学習が成立する。そして、その過程で、生徒たちは、実証的、科学的にものごとをとらえ科学的にものごとを考えていく力をつけていくことができると考えられる。加えて、地域社会の一員としての自覚を促し、地域の現実を正しく見つめ、地域の発展に寄与しようとする態度を育てることができる。

志布志市には多くの遺跡が存在する。縄文時代を始めとし、古墳時代の古墳、中世の山城や寺院跡、近世の武家屋敷、近代の洋館などである。特に本校の校庭は、志布志城の一部の新城跡である。以上のような、地域にある遺跡を社会科学習の素材として活用することにより、学習内容を身近に感じ、意欲的に社会科学習に取り組むことができると考える。また、学習を通して地域のことを知ることができ、最終的には地域を愛する態度を養うことができると考える。

- (2) 地域の素材を活用できる単元（歴史的分野）

歴史的分野において、志布志市にある素材（特に遺跡や遺物）を活用できる単元を考察してみた。数多くの素材があり、教材化できることが分かった。（網掛け部分が本論文に掲載した単元）

月	単元名(小単元名)	志布志市の素材
4	人類の出現 (生き抜く知恵の発達)	志布志市で出土した打製石斧 や磨製石斧 (遺物)
	古代文明 (四大文明の成立と仏教の誕生)	宝満寺(遺跡) お釈迦祭り (遺跡と祭り)

5	古代国家の成立 (巨大な古墳) (大化の改新)	飯盛山古墳 安楽山宮神社の大クス (指定文化財)
6	武家政治のはじまり (武士と民衆の暮らし)	大慈寺
10	ゆれる武家政治 (南北朝の争乱と室町幕府)	志布志城跡 (遺跡)
	中世文化の広がり (禅宗と東山文化)	大慈寺
11	江戸幕府の成立と鎖国 (身分ごとに異なる暮らし)	平山氏庭園 天水氏庭園
12	明治政府の成立と改革 (明治と大正の文化)	東郷医院 (洋館)

(3) 地域にある遺跡や遺物を活用した歴史の授業

ア 校庭から出土した打製石斧や磨製石斧の活用

本校校庭から出土した打製石斧と磨製石斧を利用し、実際に手で触れることによって打製石斧と磨製石斧がどのように作られているのか、またどのような使われ方をしたのかを考えることによって、旧石器時代や縄文時代の人々の生活を想像することができる。

また、出土した場所に実際に立つことによって、当時の人々が高台の見晴らしの良いところで生活していたことや、当時の環境が森林であったことなどを知ることができる。



打製石斧と磨製石斧

(ア) 単元名「生き抜く知恵の発達 (人類の出現)

1年社会 歴史

(イ) 学習過程 (太字で波線部分が地域の素材)

過程	学習活動	指導上の留意点
5 分	1 打製石斧 を見て、これが何かであるか、何に用いられていたかを考える。	○ 打ち欠いて作ってあり、えぐりが入っていることに気づかせる。
	2 磨製石斧 を見て、これが何かであるか、何に用いられているかを考える。	○ 表面を磨いてあることに気づかせる。
展 開 30 分	1 打製石斧と磨製石斧を比較してどちらがそれを作るのに時間がかかるのかを考える 学習課題	○ 石器の製作の違いは生活が変化したことによるということを考えさせる。 ○ 打製石器と磨製石器がどのように使用されたのかを考える

	4 旧石器時代と縄文時代の生活の様子を比較してまとめよう。	ことをとおして、旧石器時代と縄文時代の生活の様子についてまとめる。
終 末 15 分	5 打製石斧と磨製石斧に実際に触れてみる。 6 石斧が出土した場所に行き。	○ 祖先が作った道具に手で触れ五感で私たちの祖先の智慧の結晶を感じさせる。 ○ 当時の人々がどのような場所に住んでいたのかを想像させる。

(ウ) 考察

「人類の出現と古代文明」は、中学校に入学した生徒が最初に出会う単元である。意欲にみちたこの時期の生徒に歴史に興味を持ってもらうためには、歴史を身近に感じさせる工夫が必要である。

この単元を学習する上でレプリカの土器や石器をよく用いる。幸い志布志中学校には校庭から出土した本物の打製石斧や磨製石斧があった。最初何の説明もせずに打製石斧を見せたときの生徒の反応は、ただの石という答えが多かった。しかし、次第に説明をするにつれ、人工的に打ち欠いて作られ、また、えぐりが意図的に作られていることに気づいた。次に磨製石斧を見せたところ、表面がツルツルと磨いてあるのでただの石とは明らかに異なるものであると感じたようである。加えて打製石器と磨製石器を比較させることによって石器の製作技術が異なること、石器の用途が異なることを考えさせることができた。いずれの石器も中学校の校庭から出土したものであり、生徒たちの遠い祖先が実際にこの場所に住んでいたことを実感させることができた。最後に生徒全員に石器を直接触れさせたところ、五感を使って古代人の心や技術を感じることができたようである。また、石斧が出土した場所に実際に行くことによって、日ごろは校庭として見ている場所を旧石器人や縄文人の生活の場所として捉え、日ごろ見慣れている風景を違った視点で見ることができた。このように身近にある本物の資料を用いることによって歴史の学習に興味・関心をもたせることができた。

イ 飯盛山古墳と壺形埴輪の活用

古墳は、豪族たちがその権威を示すために作った墓である。大和朝廷が成立する畿内地方に多く残っている。大和朝廷という古代国家がその勢力を拡大する過程を考える上で、古墳がどこに分布しているのかわかることは大切なことである。志布志市にもダグリ岬に飯盛山古墳が存在する。この飯盛山古墳の存在を考えることによって、志布志と中央の政権との関係を考察することができる。また、飯盛山古墳から出土した壺形埴輪は、身近で出土

した副葬品として古墳時代への興味関心を引き起こすことができる。



飯盛山古墳出土の壺形埴輪

畿内地方で出土した埴輪

画像提供：東京国立博物館

(ア) 「古代国家の成立 (巨大な古墳)」

1 年社会 歴史

(イ) 学習過程 (太字で波線部分が地域の素材)

過程	学習活動	指導上の留意点
導入 5分	1 大山古墳の写真を見て、この古墳の規模や所在などの既有知識を発表する。 2 国民宿舎ボルヴェリアダグリの写真を見てその建物の下に何があったのかを考える。	○小学校のときに習ったことを思い出させる。 ○日本地図を用い、志布志と畿内地方の地理的な位置関係を考えさせる。
展開 30分	3 飯盛山古墳 の形を考える。 学習課題 4 なぜ志布志に古墳があるのか を考えよう。 5 飯盛山古墳から出土した 壺形埴輪 の写真を提示し、畿内地方で出土する埴輪と見比べる。	○飯盛山の測量図を示し、それが円墳なのか方墳なのかそれとも前方後円墳なのか考えさせる。 ○大隅半島の古墳の分布を示し志布志以外にも多くの古墳が作られていることを示す。 ○志布志湾が畿内地方からの入り口であったことを理解する。 ○畿内地方の埴輪と見比べることによって志布志の埴輪の地域的な特徴を考えさせる。
終末 15分	6 志布志のダグリ岬に、前方後円墳を作った人々はどういう人々なのか想像してみる。	○畿内地方との密接な関係があったことをふまえて、自由に考えさせる。 ○何人かの生徒の考えを発表させる。

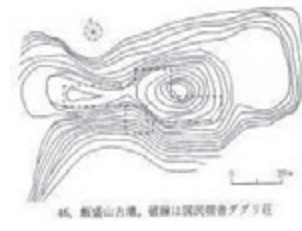
(ウ) 考察

大山古墳については、ほとんどの生徒が小学校で学習しているので、その場所や規模について答えることができた。しかし志布志のダグリ岬に古墳があったことを知っている生徒はほとんどいなかった。まずこの事実を示すことによって古墳の学習への関心が一挙に高まった。

飯盛山古墳の測量図を読み解くなかで、それが前方後円墳の形を表したとき、さらに関心は高まり、なぜ志布志に前方後円墳があるのかという本時の学習課題に結びつけることができた。

日本地図を見せることにより、黒潮を一つの道と考える視点をもたせることができ、畿内地方と志布志は意外と近いことを理解させることができた。畿内地方から渡ってきた人たちが最初に上陸するのが志布志や宮崎である。

大山古墳と飯盛山古墳を見比べることにより、そのいずれもが前方後円墳であるという共通性を見いだして、畿内地方と志布志の密接な関係を考えることができた。一方、飯盛山古墳から出土した壺形埴輪は、畿内地方にはあまりみられないものである。志布志の埴輪と畿内地方の埴輪を見比べることによって地域的な特色を考えることができた。志布志と畿内の古墳や埴輪を比較することにより、その共通性や差異が明らかになり、古墳時代に志布志に住んでいた人たちについて想像することができた。後日、西都原古墳で購入したと考えられる土産物の埴輪を本物の埴輪と思い、学校に持参してきた生徒もいた。授業で紹介し、その埴輪と志布志の埴輪を比較することができた。



志布志市の飯盛山古墳



畿内地方の大山古墳

ウ 校庭(新城)のフィールドワーク

本校校庭は中世の山城である新城跡である。自然の谷を利用した堀や土を盛って作った土塁等を現在でもみることができる。それらを実際に見学することによって、城が何のために作られたのか、またそのような城を必要とする時代背景はどのようなものだったのか考えさせることができる。

(ア) 単元名「南北朝の争乱と室町幕府 (室町幕府)」

1 年社会

(イ) 学習過程 (太字で波線部分が地域の素材)

過程	学習活動	指導上の留意点
	1 校庭自体が中世の山城であることを知る。校庭に残っている堀や 土塁 を見学する。	○校庭自体が山城であることを知らせる。見慣れている土手は実は土塁という山城の施設であることを知らせる。
	2 なぜこのような城や、城の	

導入 5分	内部の施設がつくられたのかを考える。 3 自然の地形を巧みに利用していることを知る。 学習課題 4 校庭内に落ちている遺物を採集しよう。	○ 南北朝時代は戦乱が続く世の中で、敵が容易に侵入できなくするためにこのような山城がつくられたことを気づかせる。 ○ 急勾配の崖や坂がうまく利用されていることに気づかせる。 ○ 中世の遺物が校庭にまだまだ多く落ちていることを実感させる。
展開 30分	5 教室に帰り、採集した遺物を分類し、似ているものを集める。	○ 似ている物同士を集め、分類することによっておぼろげながら当時の生活の一端が見えてくることに気づかせる。
終末 15分	6 志布志城跡 全景の航空写真を見る。	○ 志布志城を俯瞰することによって山城が自然の地形を利用して作られていたことなどを再確認する。

志布志中学校の校庭は志布志城の一つである新城跡である。主体となる曲輪部分は失われているが周囲に土塁が残っている。また、台地の北側に入り込む谷を利用した堀があり、台地と新城を切り離している。生徒にとってこのような事実は学習しなければわからないことであった。志布志城は、南北朝の争乱を中心とした中世の日本の様子を知る上で活用できる素材である。南北朝の争乱は、生徒にとって遠い京都や奈良での争いであると思われ、その様子を具体的にイメージすることが難しい。



志布志城跡の全景

そこで、学校の校庭に残る遺跡を活用して、南北朝の争乱を学習することができるのではと考えた。実際に校庭を歩きながら説明すると、最近つくられたと思っていた土手が実は600年以上も前に作られていたことや、急な崖が敵の侵入を防ぐためのものだったことなどの事実に驚いていた。当時の城が小高い台地に位置していることや敵の侵入を防ぐための様々な工夫を知ることによって、南北朝時代が争乱の世の中であったこと、志布志もそのような世の中の流れと無関係ではなかったことなどを考えることができた。

校庭には中世の陶磁器片などの遺物が多数落ちている。それらを一人で探し出すのは時間がかかるが、学級全員で探すことで短時間で多くの遺物が採集できる。採集し

た遺物を似たもの同士で集め、分類することによって、中世の生活の一端がおぼろげながら見えてくる。現代に残された茶碗のかけらなど過去の歴史のわずかな痕跡から中世の歴史像を再構築することができたのではないかと思う。

最後に、志布志城を俯瞰した航空写真をみせることによって、台地上に位置する山城の意義や急勾配の崖など今日学習したことを再確認することができた。また、空間的に遠くから距離を置いて見ることは、歴史を遠くから客観的に眺めるといった視点を獲得することにもつながるということを感じた。



志布志中学校内の土塁

志布志中学校で採集した遺物

エ 大慈寺と「三国名勝図会」に描かれた大慈寺の活用

大慈寺は、1340年、鎌倉時代に創建された臨済宗のお寺である。寺の門の仁王像や建造物は、中世に広まった禅宗文化の面影を現在まで伝えてくれる。



「三国名勝図絵」に描かれた大慈寺

また、この寺は江戸時代に薩摩藩によって編纂された「三国名勝図会」にも描かれている。

(ア) 単元名「中世文化の広がり（禅宗と東山文化）」

1年社会

(イ) 学習過程（太字で波線部分が地域の素材）

過程	学習活動	指導上の留意点
導入 5分	1 「三国名勝図会」中の 大慈寺 を見せる、この建造物が何であるのか予想する。	○ 志布志にある寺であることを説明する。
展開 30分	2 現在の地形図を配布し、「 三国名勝図会 」と見比べて江戸時代の大慈寺の範囲を考える。 3 大慈寺の、江戸時代の敷地の広さを知る。	○ 鉛筆で当時の寺の範囲を地形図に書き込ませる。 ○ 寺の敷地の広さから当時の寺がもっていた力の大きさを実感させる。

展開 30分	学習課題	○ 双方の像は完成度には大きな差があるが、両方とも中世特有の雰囲気をもっていることに気づかせる。 ○ 座禅の境地を体感する。 ○ 感じたことは何でも話すことができる雰囲気をつくる。
	4 大慈寺の門にある 仁王像 を見て、東大寺南大門の金剛力士像と比較しよう。	
終末 15分	5 静かに黙想し、座禅を体験してみる。	
	6 座禅したあとの気持ちを隣の人と話し合う。(シェアリング)	
	7 教科書を読んで、鎌倉・室町時代の文化についてまとめる。	○ 鎌倉・室町時代の文化は、禅宗の大きな影響を受けていることを理解する。

(ウ) 考察

大慈寺は、1340年(鎌倉時代)に創建された。京都の臨濟宗妙心寺の末寺である。江戸時代には16の寺院を有し、100名以上の僧侶がいた。寺の建造物や門の両側の仁王像は中世の面影を現在に伝えている。この寺は、市街地の中心部に位置していることもあり、ほとんどの生徒がこの寺については知っている。しかし、寺の中に足を踏み入れた生徒は少なく、寺の歴史的な意味や、現在の寺の機能について知っている生徒は少ない。授業では、「三国名勝図会」に描かれた大慈寺を、現在の志布志市の地形図の中に探させた。次に「三国名勝図会」を見ながら、江戸時代の大慈寺の範囲を考えさせた。大慈寺が現在の寺の範囲をはるかに超える敷地を有していたことがわかってくると、当時の寺の権勢の大きさを理解することができたようである。

各時代の学習の終わりに、その時代の文化についての学習がある。その時代の建造物、彫刻作品や絵画作品を学ぶことが多いが、なかなか実物に触れることができないため、文化の学習に関心を抱かない生徒も多い。大慈寺の門の両脇にある仁王像は、江戸時代に作成された石像だが、中世の文化の雰囲気を伝える。授業では、この石像を写真で見せ、東大寺南大門の運慶快慶作の仁王像と見比べさせることによって、中世の文化の雰囲気をとらえさせた。最後に黙想させることによって、座禅の境地を体感させてみた。中世は戦乱が多く起こった時代である。それだからこそ、自分の心を深く見つめ、落ち着いた静かな境地が求められた。そのことを理解する上で座禅体験は効果的な経験であった。



大慈寺の門前の仁王像



金剛力士像

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ア 教科書中心の学習では、語句の理解や暗記だけにとどまりがちであるが、地域にある遺跡や遺物を活用し、教材化することによって、歴史的事象をより身近に、そして、具体的にとらえることができた。
- イ 地域にある遺物や建造物に実際に手で直接触れることによって、五感を用いて歴史の変化について考えることができた。
- ウ 地域にある遺跡や遺物と、教科書に掲載されている遺跡や遺物を比較することによって、その共通性と差異を知ることができ、郷土の歴史について深い理解を得ることができた。
- エ 地域にある遺跡や遺物を活用することにより、歴史はどこか遠いところに存在するのではなく、足下に歴史世界が広がっており、現在の世界に脈々とつながっていることを実感することができた。また、地域の遺跡や遺物を通して、地域の歴史に目を向けることができた。

(2) 今後の課題

- ア 地域の学習は校外学習が伴うことが多いため、時間の確保が難しい。総合的な学習の時間と関連づけながら時間を見いだす必要がある。
- イ 地域にある遺跡や遺物を活用した学習の成果を発表できる場を、授業の中や掲示板、あるいは文化祭などで設けていきたい。

7 おわりに

地域の素材を活用した社会科の学習を、特に歴史的分野の授業において実践してみた。志布志市は、全時代を通して遺跡や遺物に恵まれている。これらの遺跡や遺物は、歴史の授業に十分活用することができる。しかしながら自分自身の勉強不足もあり、なかなか効果的に活用することができなかった。過去の出来事や事物は、光の当て方によっては、私たちが生きるこの現代に生き生きと蘇り、私たちによりよく生きるための示唆を与えてくれる。今回の研究を基礎に、今後も継続して地域の素材を掘り起こし、それを教材化していきたい。

【引用・参考文献】

- 鹿児島県総合教育センター『指導資料 郷土教育 第1号』平成21年10月
- 志布志町教育委員会『飯盛山古墳』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)2001年
- 志布志町教育委員会『志布志新城跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(29)1992年

万之瀬川下流の上水流遺跡出土東南アジア陶器の資料紹介

上床 真*

Introducing Chinaware from Southeast Asia excavated in Kamizuru site by the Manose river lower stream

Uwatoko Makoto

要旨

県内出土の中世における東南アジア産陶磁器の出土は比較的多く、本県の地理的位置や交易ルートが要因として注目されている。中でも、万之瀬川下流域遺跡群の資料は特に注目される。今回、既報告の上水流遺跡出土資料の中に新たにタイ・スパンブリ県のバンブーン産の無軸の短頸大壺（14～15世紀）が含まれていたことが明らかとなったので、追加報告を行う。あわせて、若干の検討を行い、本資料が現時点では国内でも数例目の発見であり、14世紀後半～15世紀前半における琉球を介した流通（南島路）を示す資料であることを指摘する。

キーワード 中世 14～15世紀 海域アジア史（アジア海域史） 万之瀬川下流域遺跡群 タイ（アユタヤ王朝）
バンブーン窯跡 コンテナ陶磁器

1 はじめに

平成25年3月末をもって万之瀬川下流域に関する遺跡（持躰松遺跡・渡畑遺跡・芝原遺跡・上水流遺跡）の整理作業・発掘調査報告書刊行が一旦終了した。上記の遺跡では、縄文時代から近世・近代にかけて多くの成果が挙がっており、その中でも中世に関しては、シンポジウムが開催されたり学会誌等で特集が組まれるほど注目を浴びている（金峰町シンポジウム実行委員会編1999・古代学協会2003など）。特に、持躰松遺跡の成果は、南九州の中世が注目されるきっかけとなったと言っても過言ではない。

筆者は上記の発掘調査報告書のほとんどに何らかの形で関わっているが、十分にその責を果たしているかどうかは甚だ疑問である。今回、續伸一郎氏（堺市博物館）と岩元康成氏（鹿児島県始良市教育委員会）からのご指摘で、上水流遺跡出土遺物の中に、あらたに東南アジアに関連する遺物があることが明らかとなった。ここでは、当該資料を紹介するとともに若干の考察を加えてみたい。

2 当該資料について

本資料は、口縁部・胴部・底部のそれぞれで同一個体であるとみられる。いずれも「大溝」とした大型の溝状遺構内からの出土である。以下に本資料の特徴を示す。

いずれも胎土中には砂粒を多く含む。内外面ともに無軸で、灰色である（第1図）。1（報告No.大溝-308）は耳とみられる部分があるが、欠損している。施文は、頸

部よりやや下に、横位に二条の並行する沈線を巡らし、その中に縄文に類似した文様が施される。この文様は、森本朝子氏が「縄簾（すだれ）文」と指摘したものと類似する文様（森本2004）である。なお、今回新たに実物にあたって再検討したところ、実は口縁部は欠損しており、それを石膏で補強したところを誤って口縁部として実測していたことが判明した。そこで、この機会に再実測を行ったところ、口縁部は上方に外反するのではなく、垂口縁状となる可能性が高いことが判明した。

2（報告No.大溝-309）は胴部であり復元径で60cmを測る。最大張り出し部より上位に数条の沈線を横位に施す。

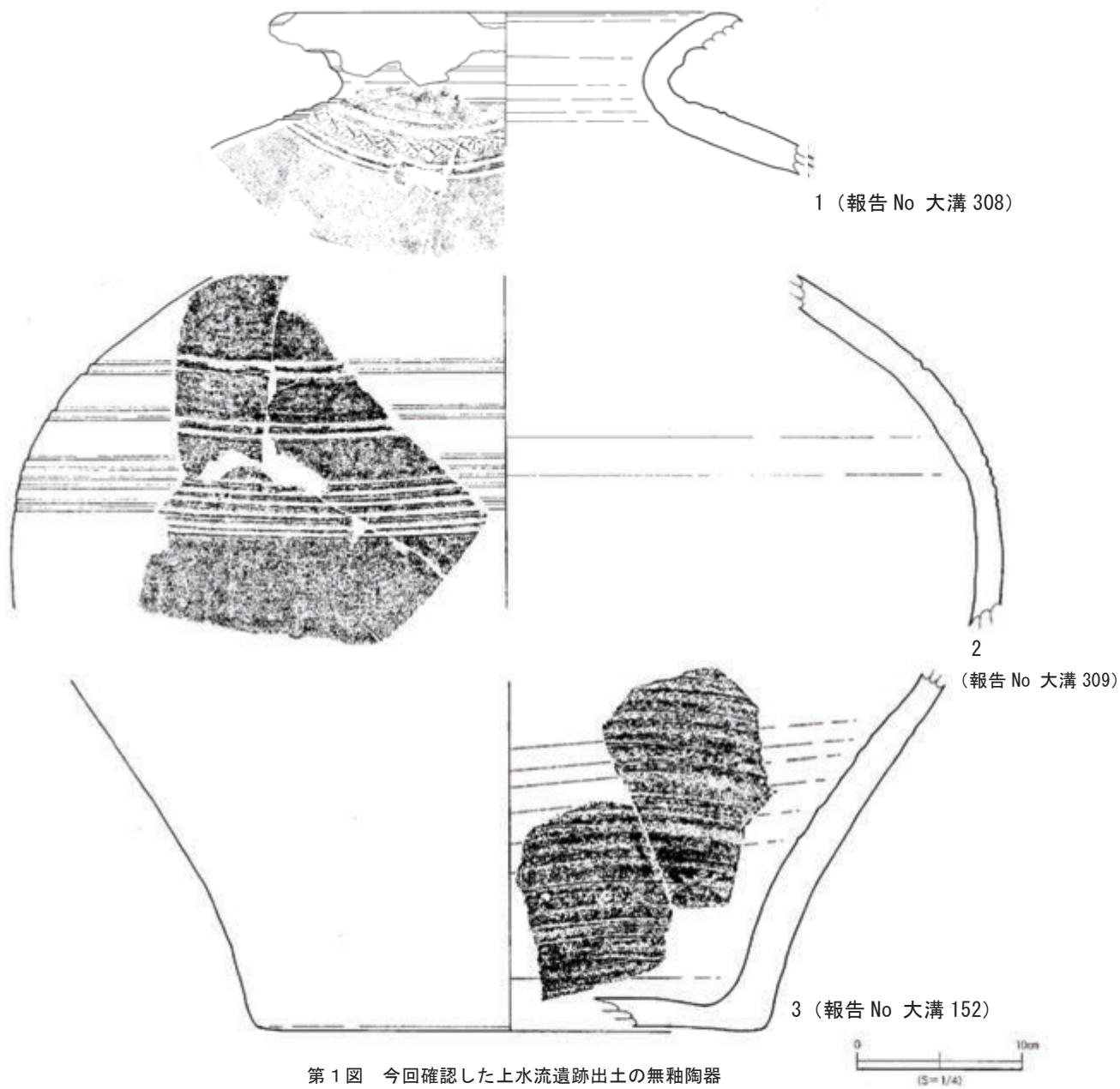
3（報告No.大溝-152）は底部で、底部外面に目跡とみられる白色部分がある。底部の復元径で31.6cmを測る。

当該資料は、報告書を作成している段階では、その質感から「瓦質土器」と考え、1と2については「壺?」、3については「火鉢」としていた。

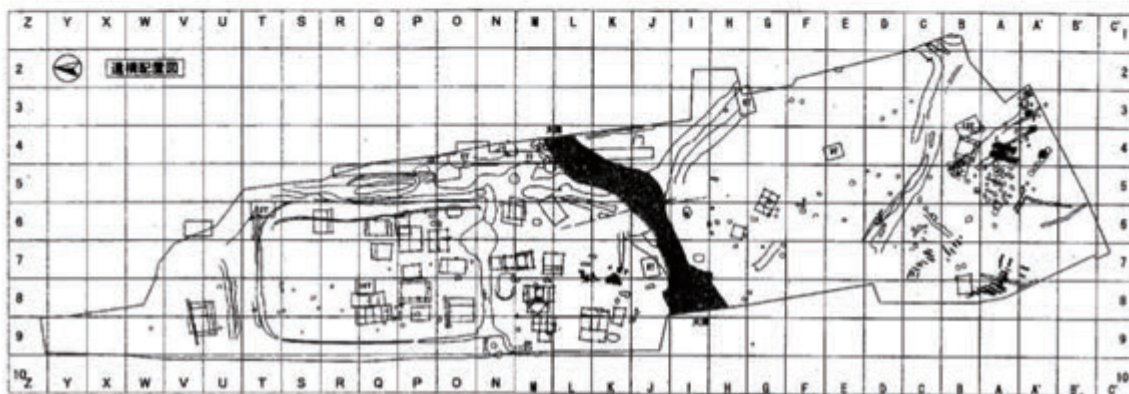
ただし、瓦質土器としても、若干の違和感を覚えつつも他地域での事例や類例について該当する資料を探し当てることができなかった。数人の研究者にも実見していただく機会があり、その際にも「西日本の瓦質土器とは思われない。強いて言うならば琉球の資料中であればもしかしたら存在するかもしれない」という意見もあった。しかしながら、それ以上の追跡を果たすことができずに日々だけが過ぎていき、いつしか記憶の彼方へと追いやられていたというのが正直なところである。

以上のような状況であったが、先述のとおり、本資料

*岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課（鹿児島県派遣）



第1図 今回確認した上水流遺跡出土の無釉陶器



第2図 上水流遺跡の中世遺構配置図



東シナ海



第3図 上水流遺跡の位置図(1/50,000)

は東南アジア産の陶器ではないかという指摘があったので、續氏に実見していただいたところ、「タイのバン・ブーン窯の製品」で、時期は14世紀後半～15世紀前半頃に該当することが明らかとなった(第5図)。

向井互氏によれば、バンブーン窯の製品の代表的なものとして、長頸壺と短頸(大)壺があり、そのうち短頸壺は「平底の底部から胴部下位は僅かに窄まるが、すぐに大きく膨らみ、胴部上位～肩部に最大径が位置する。頸部～口縁部はラップ形に外反し、口縁部はL字形に肥厚する。肩部には方形区画内に象や騎馬を表すスタンプ文や三角形の葉文を連続して押捺して巡らせる」という特徴を有する無釉の焼締陶器であるという(向井2012)。

今回新たに発見されたものは、文様に違いはあるものの、器形をはじめとした全体的な特徴はほぼ共通するものであるため、本資料については「タイのバンブーン窯」の製品である可能性が高いと考える。

なお、県内においては鹿児島神宮(霧島市隼人町)に所蔵されている陶磁器の中に、バンブーン窯産の無釉陶器がある(鹿児島神宮所蔵陶磁器調査団2013)。ただし、こちらは長頸壺(第5図左上)であり、本資料とは器種が異なる。

3 「大溝」と遺跡周辺の状況について

当該資料が出土した大溝は、調査範囲のほぼ中央部付近を東西に横断するものである(第2図)。安全上の配慮から、万之瀬川に接する部分については調査できなかったため確認していないが、本来はそのまま万之瀬川へとつながっていて注ぎ込むようなかたちであったことが想定される。溝の幅は6～8m程度であるが、最も川側に近い部分では15m程度に広がっている。

遺構内からは、縄文時代前期末から近世までの遺物が出土しており、「溝」という遺構の性格からも出土遺物は決して一括性が高いとはいえない状況である。遺物の中心は、17世紀を中心とした初期薩摩焼や中国・東南アジア産の輸入陶磁器、国産陶器である。特に、輸入陶磁器は多彩であり、古くは白磁碗Ⅳ類(玉縁白磁碗)、龍泉窯系碗Ⅰ類などや、ベトナムのミースエン・フックテイク産の可能性のある焼締陶器長胴壺、タイ産褐釉陶器壺等もみられる。

上水流遺跡の周辺に目を向けると、持躰松遺跡・渡畑遺跡・芝原遺跡をはじめとして、中小路遺跡や白糸原遺跡という中世でも特筆されるような遺構・遺物が発見されている遺跡が存在する(第3図)。

また、万之瀬川下流域である南さつま市の加世田平野からは最近になって、宋風獅子や薩摩塔などの新たな発見が数例あり(橋口2013④ほか)、ますます評価が高まりつつある。その中で、今回の資料は新たな発見となる。

4 各遺跡での事例(第4図)

ここでは、国内各地の類例について概要を述べて紹介したい。

○ヤッチのガマ(沖縄県具志川村字上江洲)

離島である久米島に所在する。「ガマ」は沖縄の方言で、自然洞穴のことである。自然洞穴の中につくられた集団墓地で、完形の壺等を用いた蔵骨器が数多く発見された。その中の1点が、本資料と同様のものであり、国内における唯一の完形資料である。近世の時期に、蔵骨器として転用されていた。

○ハナグスク(沖縄県那覇市若狭)

波上宮の一角について調査を行った際に、本資料と同様の遺物が発見されている。波上宮は、「琉球王国の総鎮守」と呼ばれており(谷川1987)、現在も沖縄総鎮守として信仰されている。

○博多遺跡群(福岡県福岡市博多区)

無釉の大壺が発見されている。頸部の破片で、本遺跡のものと同様と若干類似する。

以上の他に、佐敷グスク(沖縄県南城市佐敷)などでも類似する遺物の出土が確認されている。

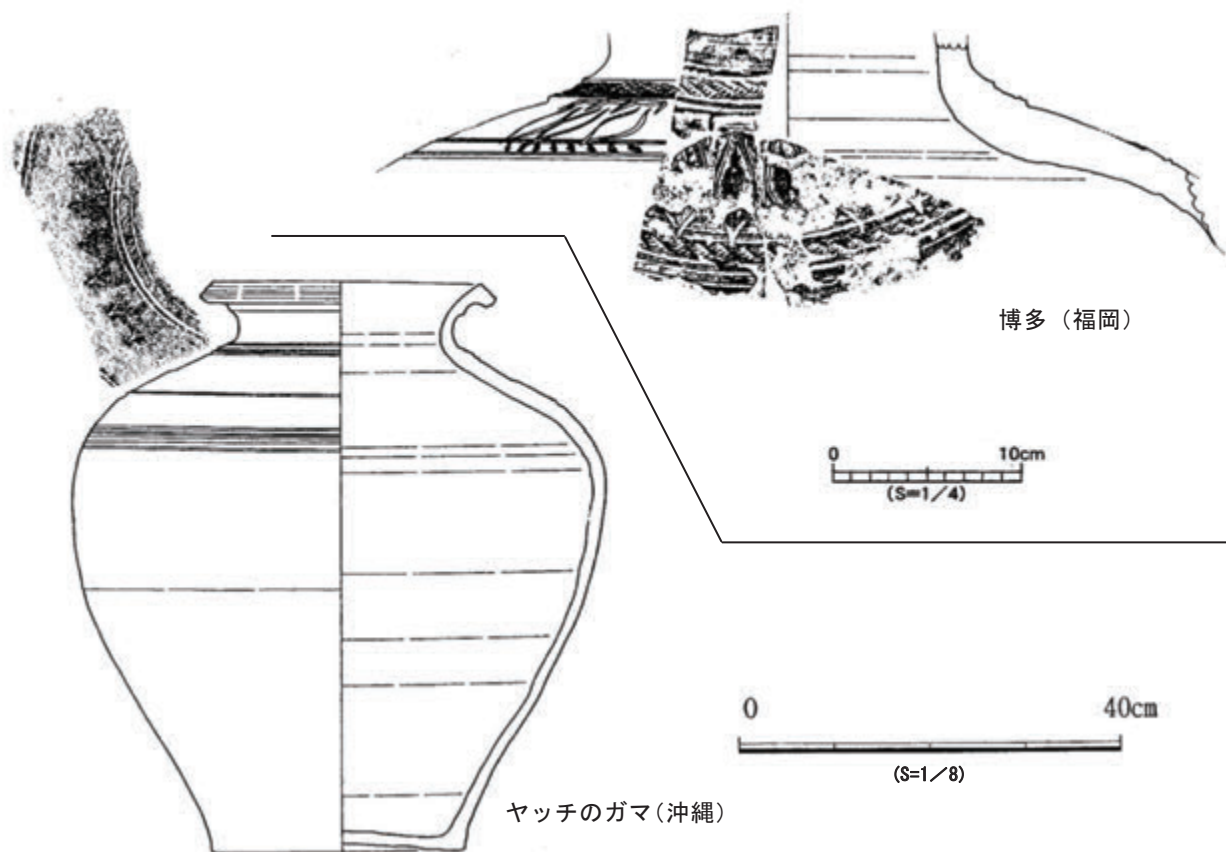
5 タイ産陶器について

筆者は、報告書中では指摘することができなかったが、上水流遺跡においてもタイ産の製品は出土している。「褐釉陶器壺」(第6図)がそれであり、重久淳一氏によれば、南九州における遺跡出土の東南アジア産陶器の中では最も出土例が多いという(重久2004)。向井氏によれば、15世紀中頃の時期で、「シーサッチャナライ」もしくは「メナムノイ」産(向井2013)であるため、本資料よりは若干新しい時期のものである。

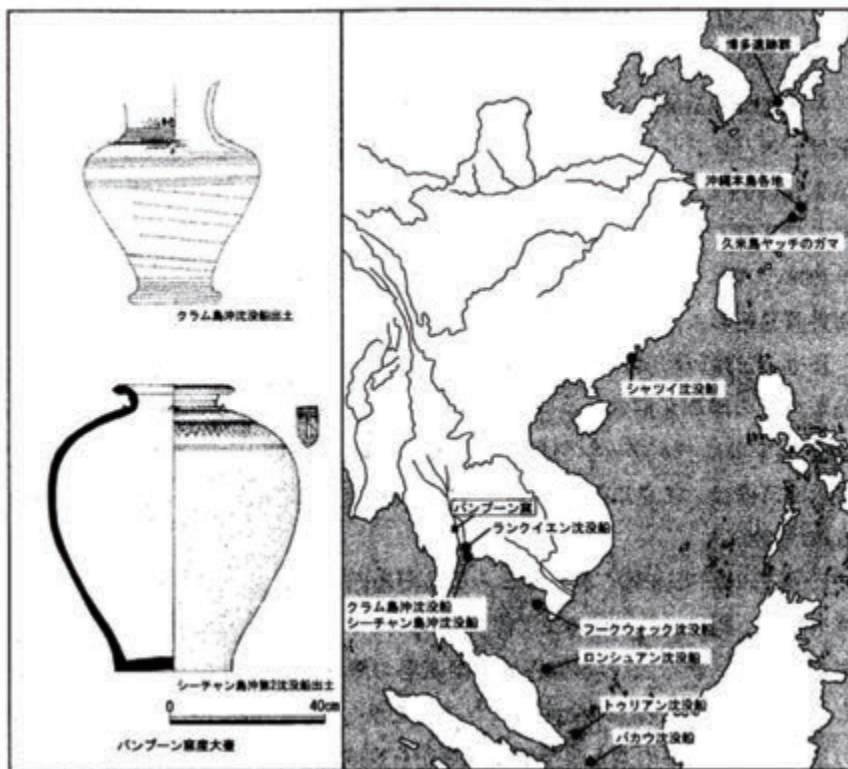
この褐釉陶器壺について、橋口互氏は「当初の用途とは異なる再利用(容器自体の需要により輸入された場合や、貿易品である内容物の容器として運ばれてきた後の再利用など)を含め、日用雑器(日用の「貯蔵・運搬」用容器)として再利用された可能性」を指摘している(橋口2011)。

新田栄治氏は、日本出土のタイ産陶器には、3つの性格があり、それらを①商品 ②商品の内容物の容器 ③貿易従事者の生活用具 であったと指摘している(新田1997・1999)。

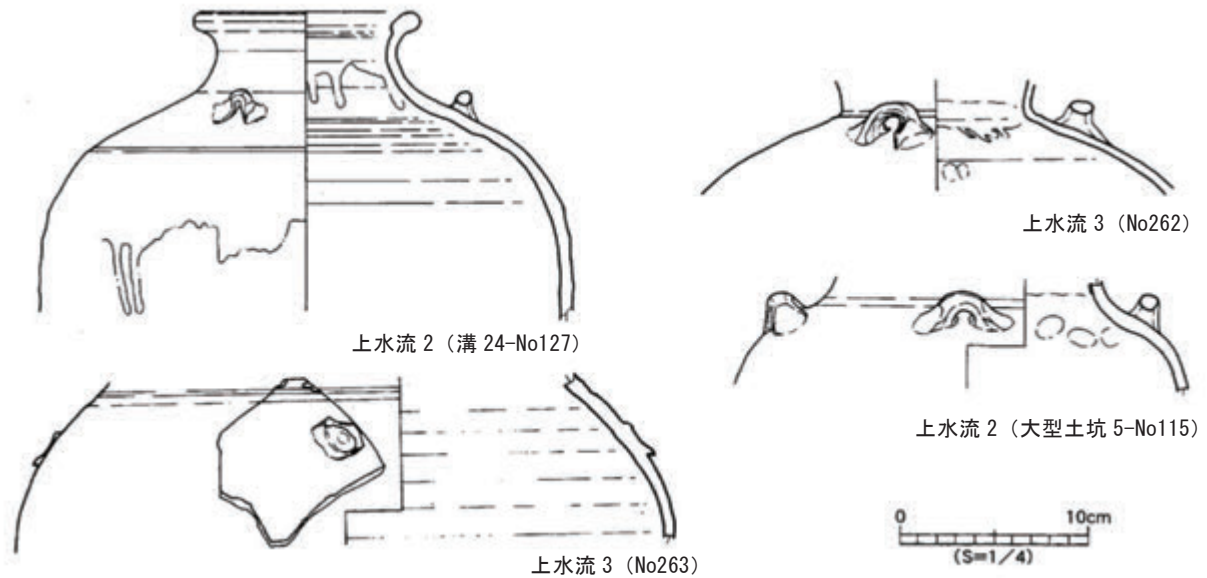
向井氏は、タイの中でも特にチャオプラヤ河川流域での窯跡群が、海外向けコンテナ陶磁器生産としての役割を担っていたことを明らかにしている。また、コンテナ陶磁器の海外搬出は14世紀後葉から開始され、在地向けの壺類を海外向けに振り分けていたとする。15世紀以降については、コンテナ陶磁器として特化したものを生産するようになるという(向井2012)。



第4図 各地から出土したタイ産無釉短頸（大）壺



第5図 バンブーン無釉壺の分布（向井 2013 からの引用）



第6図 上水流遺跡出土のタイ産褐釉陶器壺（シーサッチャナライもしくはメナムノイ産）

本資料は、チャオプラヤ川流域のものであり、14世紀後葉頃のものとするので、まさにタイで生産された海外向けコンテナ陶器としては初期のものとなる。

この時期のタイはアユタヤ王朝（1351～1569）であり、貿易で国力を増強し、その過程では1432年にはアンコールも攻撃して版図に加えている。また、日本とも貿易を行っている（石澤良昭・生田滋編 1998）。具体的には、アユタヤからは綿花・象牙・蜜蝋・香辛料・漆器が、日本からは銀と銅が貿易品として扱われている。本資料のこの中のものを入れる「コンテナ」としてもたらされた可能性がある。では、実際にどのようなルートで上水流遺跡までもたらされたのであろうか。次章では、この問題について検討したい。

6 琉球との関わりについて

亀井明德氏は、明（1368～1644年）の陶磁器の出土数が日本の中でも特に沖縄に集中することに注目し、薩摩以北についても琉球を介して陶磁器がもたらされていることを指摘した（亀井 1993）。

上里氏は、「琉球の朝貢開始の前提となったのは、14世紀中葉における日中間航路の変更である。元末内乱や倭寇活動の活発化により中国沿岸地域の治安が悪化し、従来の博多―明州ルート（大洋路）にかわり、琉球を経由する肥後高瀬―福建ルート（南島路）が一時的に利用されることになった」と指摘している（上里 2008）

ただし、15世紀前半における薩摩と琉球との交易を示す資料は存在しないということであるが、関周一氏は、14世紀末以降に島津氏が中央に対して「唐物」（中国のみでなく東南アジア産品を含む）を献上していることを理由として、島津氏と琉球の間に交易が行われていたことを推測している（関 2003）。

荒木和憲氏は、島津氏と琉球の関係について14世紀末～16世紀について注目して、Ⅶ時期に分類している。その中で、14世紀末～1430年代を「Ⅰ期：貿易関係の形成期」、1440年代～50年代を「Ⅱ期：貿易関係の停滞期」としている。15世紀前半については「島津から見た琉球は重要な貿易相手国ではあるが、必ずしも政治的に重要な存在ではなかった」と指摘している（荒木 2004）。このあたりに、万之瀬川下流域遺跡での出土状況（注1）のヒントが隠されている可能性があるのではないだろうか。

桃木氏は「14世紀後半から日本や朝鮮への東南アジア船来航記事が登場し、明朝へのチャンネルを握ることで成長した琉球やマラッカに東・東南アジア諸国の商船が集まり始めた。これまで中国大陸を介して間接的に繋がっていたふたつのシナ海の扉が開き、直接交流が盛んとなった」とまとめている（桃木編 2008）。

本遺跡の資料も、上記のような大きな流れの中で評価できる資料といえよう。

7 まとめ

本資料は、タイのチャオプラヤ川流域に位置するバン・プーン窯の製品であり、時期は14世紀後半～15世紀前半頃に該当することが明らかとなった。同遺跡からもタイ産の陶器が出土しており、また県内からもほぼ同時期のタイ産陶器も出土している。しかしながら、いずれも時期や器種が異なるので、本資料は県内では初めての例となった。また、琉球と北部九州から出土していることを確認したが、国内においても出土例はごく少数であるので、本資料の例は注目に値するといえよう。

流通については、現状からの推測ではあるが、琉球からの出土例が十数例ある（注2）ことを踏まえると、「琉

- 物館研究報告』92
- 谷川健一編 1987『日本の神々―神社と聖地―』13 南西諸島
白水社
- 那覇市教育委員会 1999「ハナグスク」『那覇市教育委員会文化
財調査報告書』第41集
- 新田栄治 1997「知覧城出土のタイ産陶片と薩摩の海外貿易」
『知覧文化』第34号 知覧町立図書館
- 新田栄治 1998「近世薩摩出土の東南アジア陶磁と薩摩の海外活
動」『海洋国家・薩摩―薩摩に鎖国はなかった―』鹿児島
県歴史資料センター黎明館
- 橋口亘 2002「鹿児島県域における16世紀～19世紀の陶磁器の
出土様相」『鹿児島地域史研究』No.1 『鹿児島地域史研究』
刊行会
- 橋口亘 2011「南九州出土の東南アジア産陶器についての一考
察」『陶磁器流通と西海地域』周縁の文化交渉学シリーズ4
関西大学文化交渉学教育研究拠点
- 橋口亘 2013①「南さつま市加世田益山の八幡神社現存の宋風獅
子―中世万之瀬川下流域にもたらされた中国系石獅子―」
『南九州文化財研究』No.18 『南九州文化財研究』刊行会
- 橋口亘 2013②「南さつま市加世田川畑残存の薩摩塔」『南九州
文化財研究』No.19 『南九州文化財研究』刊行会
- 橋口亘 2013③「南九州市川辺町宮の飯倉神社現存の宋風獅子」
『南九州文化財研究』No.19 『南九州文化財研究』刊行会
- 橋口亘 2013④「中世前期の薩摩国南部の対外交渉史をめぐる考
古新資料―南さつま市芝原遺跡出土薩摩塔と三島村硫黄島発
見の中国陶磁器を中心に―」『鹿児島考古』43号 鹿児島県
考古学会
- 橋口亘・松田朝由 2013①「南さつま市芝原遺跡出土の中国系石
塔(1)」『南九州文化財研究』No.16 『南九州文化財研究』刊
行会
- 橋口亘・松田朝由 2013②「南さつま市芝原遺跡出土の中国系石
塔(2)―万之瀬川下流域から発見された薩摩塔―」『南九州文
化財研究』No.17 『南九州文化財研究』刊行会
- 橋口亘・松田朝由 2013③「南さつま市加世田小湊『当房通』の
薩摩塔―万之瀬川旧河口『唐坊』比定地の中国系石塔―」
『南九州文化財研究』No.20 『南九州文化財研究』刊行会
- 續伸一郎 2012「堺環濠都市遺跡における『南蛮貿易』期の貿易
陶磁器」『貿易陶磁研究』No.32 日本貿易陶磁研究会
- 向井互 2012「タイ産コンテナ陶磁器の海外搬出様相」『貿易陶
磁研究』No.32 日本貿易陶磁研究会
- 向井互 2013「タイ・ミャンマーの陶磁生産と海外輸出」アジ
ア考古学四学会編『アジアの考古学1 陶磁器流通の考古学
日本出土の海外輸出』高志書院
- 桃木至朗編 2008『海域アジア史研究入門』岩波書店
- 森本朝子 2004「博多出土の東南アジア陶磁について」『陶磁器
が語る交流―九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器
―』東南アジア考古学会
- 森村健一 2008「東アジア世界を見た龍顔・薩摩における茶の湯
文化―上水流遺跡を定点として」『上水流遺跡』2 鹿児
島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)
- 吉岡康暢・門上秀叡 2011『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社

収蔵遺物保存活用化事業

一 豎野（冷水）窯跡の再整理を中心に

調査課第一調査係

Work for fair preservation and practical use of stored artifacts

The first section of the research department

要旨

収蔵遺物保存活用化事業において、薩摩焼の藩窯である豎野(冷水)窯跡の再整理を行った。その結果、型打ち成形で製作された、デザイン性に富んだ高品質の皿や鉢が製作されていることがわかった。これらの型打ち製品は、鹿児島(鶴丸)城本丸跡や二之丸跡では発見されず、江戸の薩摩藩上屋敷跡でしか確認されておらず、幕府の有力な家臣や諸大名、または将軍家等との外交行事(婚礼や特別な催事等)に用いられた器と考えることができ、重要な宴席等で使用されることを目的に製作された最高級品の「白薩摩」であったといえる。

キーワード 収蔵遺物保存活用化事業 薩摩焼 豎野(冷水)窯跡 型打ち製品 薩摩藩上屋敷跡 重要な宴席 最高級品の「白薩摩」

1 はじめに

収蔵遺物保存活用化事業は重点分野雇用創造事業により導入したもので、平成25年1月から平成25年10月まで実施した。劣化した遺物の復元や時間のない中で整理された遺物の再整理を行い、切り取ったままの遺構や剥ぎ取り資料などをパネル化し、活用に供することを目的とした事業である。

再整理では、36年前の1978年に刊行された鹿児島市冷水町にある豎野(冷水)窯跡の資料を最初に扱った。薩摩焼の中で活用できる白薩摩の資料が少なかったことと、ここ十数年のうちで鹿児島における考古学分野で最も研究が進んだのが薩摩焼の研究であり、県内外から豎野(冷水)窯跡の資料が注目されていたからである。豎野(冷水)窯跡出土品の再整理が進むにつれて後述するような特異性が明らかとなったことから、鹿児島(鶴丸)城跡の出土品と比較するために、鹿児島(鶴丸)城本丸跡と鹿児島(鶴丸)城二之丸跡の出土品再整理も手掛けることとなった。この作業を行った結果、新たな完形品が加わるとともに、本丸跡と二之丸跡の資料が接合した例も少なからずあったことなど、多くの成果が得られた。これらの資料の一部は、「上野原縄文の森」の第37回企画展「新発見!かごしまの遺跡2013」で展示を行った。

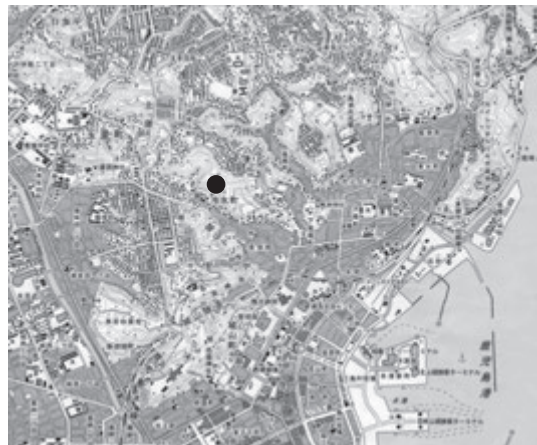
次に遺構や土層であるが、新たに剥取りを行ってパネル化したものは、志布志市下原遺跡における大正3(1914)年に桜島噴出の火山灰が堆積した大型道路跡と、大崎町荒園遺跡におけるアカホヤ火山灰噴火時に起こっ

た大地震による噴砂跡である。これらは、「上野原縄文の森」の第36回企画展「~桜島大正噴火100周年記念 巨大噴火と共に生きた人々」で展示を行った。

また、これまで剥ぎ取ったままで収蔵されていた資料や劣化した遺構切り取りの修復を行った。それには、市来貝塚貝層断面、終原貝塚貝層断面、榎崎B遺跡の旧石器時代礫群、桐木遺跡の旧石器時代礫群、前原和田遺跡の旧石器時代礫群などがあり、エントランスでの展示をおこなった。

以上のように、本事業によって多くの資料を活用できるようになり、さらに学術的な成果も得ることができた。特に、豎野(冷水)窯跡の資料については新たな知見も得られたので、以下に詳しく紹介することとする。

(文責 東 和幸)



第1図 豎野(冷水)窯跡位置図

2 豎野（冷水）窯跡出土資料の再整理について

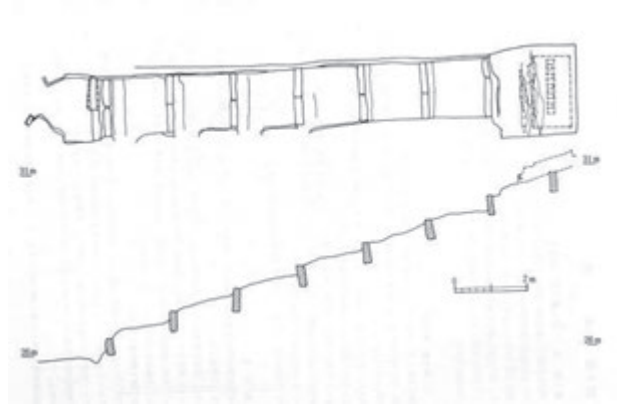
(1) はじめに

近年、薩摩焼諸窯の発掘調査が増加し、薩摩焼の考古学的成果はめざましく進展してきている。冷水窯については調査後、報告書は刊行されているが、膨大な量の出土遺物の中には諸制約により未整理な出土品が多く、その様相は十分に解明されているとはいえない。したがって、今回の再整理により、薩摩焼諸窯に強い影響を与えた藩窯・冷水窯跡の出土遺物について、今日的な視線で再整理を行うことは、薩摩焼の研究上絶好の機会である。

本稿では、再整理により明らかになった成果の中から特に注目すべきものについて述べるとともに、最新の薩摩焼研究からみえてきた冷水窯の新たな一面について、若干の考察を加えながら述べておきたい。

(2) 冷水窯跡の概要

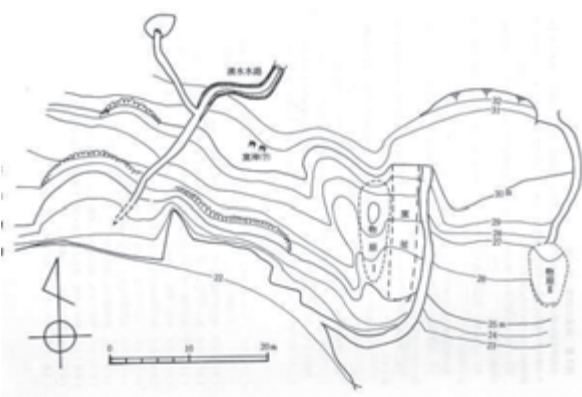
冷水窯跡は、鹿児島市冷水町（第1図）市街地を取り囲むように形成されたシラス台地の小谷の末端に所在した江戸時代の薩摩焼古窯の一つである。昭和53年（1978）に社団法人鹿児島共済会南風病院女子寮建設に伴い発掘調査が行われ、それまでは美術史上で語ることの多かった薩摩焼を、考古学上の基礎資料として捉える契機となった遺跡である。



第3図 冷水窯 実測図



物原 I 断面



第2図 豎野（冷水）窯跡周辺図



窯跡全景

豎野系窯場は、薩摩藩の藩窯で、一般的に「白薩摩」と呼ばれる白色陶胎の陶器を中心に、藩主やその一族などの上級武士層が使用する茶道具や日用品を製作した窯場である。

冷水窯は、島津義弘時代の豎野系窯場である宇都窯、御里窯（ともに始良市）を経て、義弘の跡を継いだ家久が鹿児島市の鶴丸城に移城した際、1620年（元和6）頃に開窯されたとされる。（田沢金吾・小山富士夫 1941）

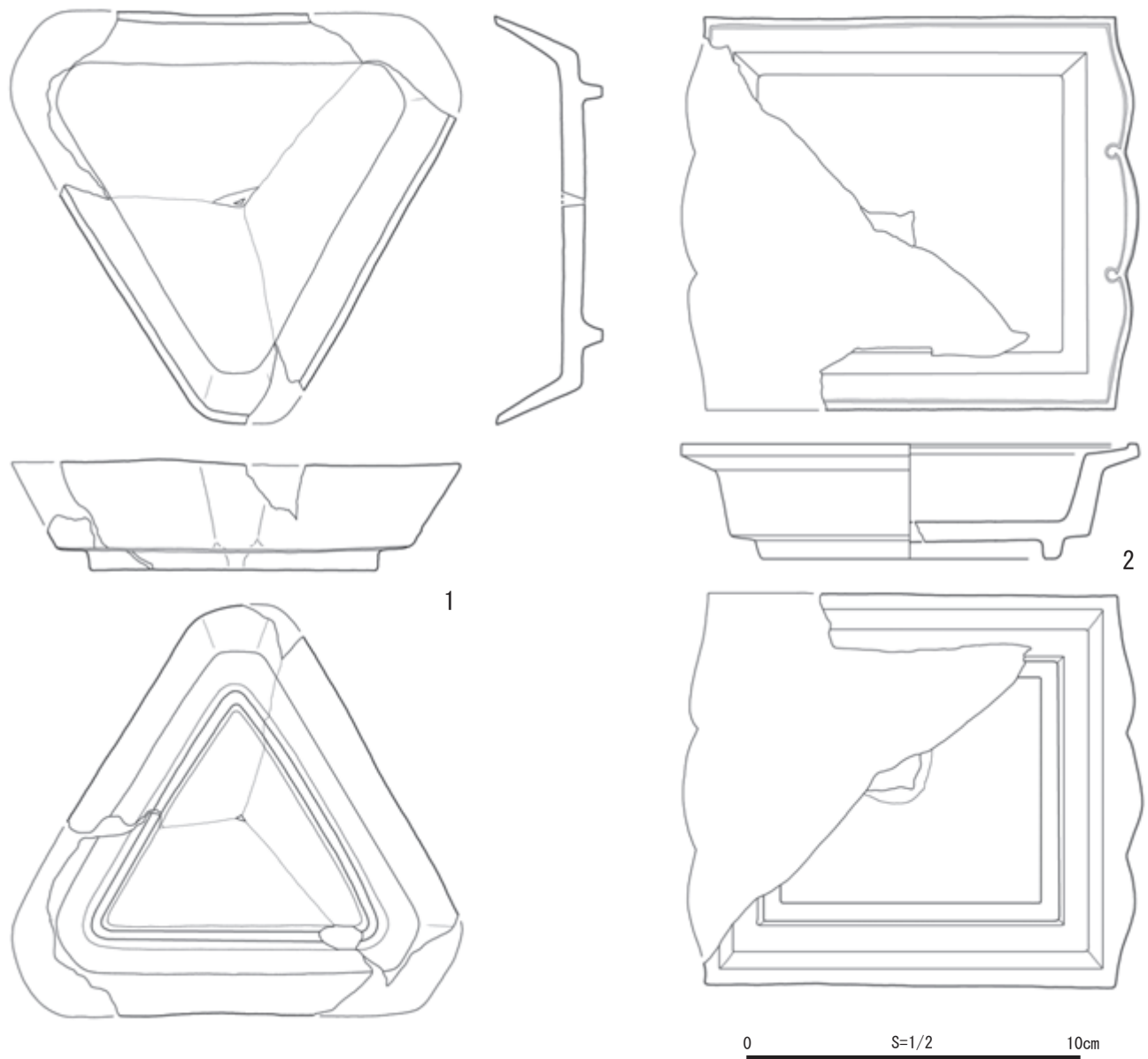
発掘調査では、窯跡1基と物原2か所が検出された（第2・3図）。窯は平面全長14.48mを測る連房式登り窯で、胴木間と7室の焼成室からなる。南向きの斜面に築かれており、標高は胴木間で約25m、窯尻で約30mを測る。物原からは大量の陶器片や窯道具が出土した。

(3) 再整理により明らかになった冷水窯の製品

出土品の再分類・接合の結果、冷水窯の製品は、茶入や茶碗等の茶道具、碗、皿、土瓶、仏具等が主であることがわかったが、その中でも特に注目される製品は、型打ち成形により製作された皿や鉢などであった。

これらは、丁寧な作りでデザイン性の高い製品である。胎土は、精緻で鉄微粒子の混ざらない緻密な純白の白土を使用している。型打ち成形により繊細な文様を表現するには、このような上質の白土を使用する必要があったであろう。

文様は繊細な陽刻の唐草文を施したものや、逆ハート型の透かし彫りなどもあるが、色絵などの上絵付けを施したものは見られない。



第4図 型打ち製品実測図(1)

形状は三角形や四角形，六角形，八角形，さらには鮑や月日貝，蛤，蕪，ミョウガや瓜を象ったものも見られる。高台も器の形状に合わせ三角形や四角形，菱形等を呈し，変形の高台も見られる。その他，高さ1cm程度の円柱状の小さい足が3か所もしくは4か所付けられるものもある。

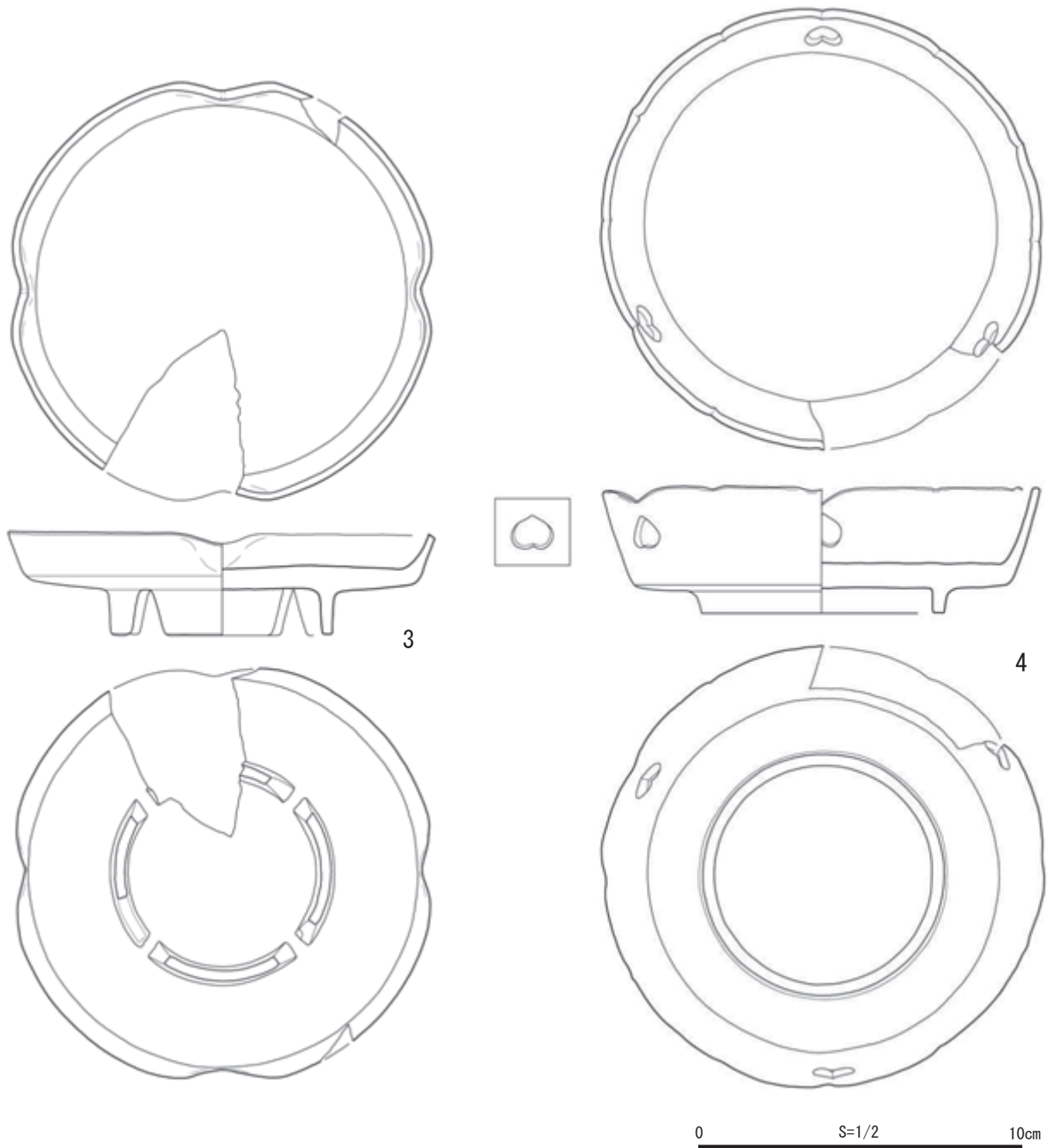
また，資料の中には，製品の底面を穿孔するものが観察できる。これは，焼成不良等で製品とならないと判断されたものを，その場で外底面から敲打し，確実に破壊してから廃棄したものと考えられる。以下，特徴的な型打ち製品（第4～7図，1～24）について説明する。（実測図は1～9のみである。10～24は，本報告では実測図

の掲載はできなかったが，今後図化していく予定の資料である。今回は写真を掲載する。）

1は正三角形の特異な形状をした皿で，角は尖らず丸く作られる。文様を施さないシンプルなデザインである。底部には焼成後，外側から穿たれた小孔と三方向に走るヒビが見られる。

2は短い折縁の端部に，陽刻の縁取り線がつく皿で，折縁の一対面は波状に形取る。底部には焼成後，内側から穿たれた小孔が見られる。

3はロクロ成形後，型押しにより口縁部を花卉状にする。高台は割高台をなす。



第5図 型打ち製品実測図(2)

4はロクロ成形後、型押しにより口縁部を花卉状に作り、3か所逆ハート型の透かし彫りが施された皿である。

5は逆ハート型の透かし彫りが施された鉢である。高台は円形で、体部は四角に変形させ、口縁部を大きく4か所弧状に挟り取る。胎土は白色を呈し、緻密で鉄分等の混ざりは見られない。透明釉は明度が高く、細かい貫入が入る。

6は内面に段を持ち、下段部に型打ちによる陽刻文が見られる。角張ったシャープなつくりで、他の製品に比べて器壁は厚く、重量感がある。報告書掲載番号121の資料と同じタイプのものであるが、再実測を行った。2と同様胎土は緻密で不純物を含まない。素焼き段階で廃棄されたものである。

7は円形の皿を隅丸方形に変形させ、円形の端部を対で2か所、内側に折り曲げて耳状のアクセントを作り、残りの2か所は鋭利な刃物等で平行に切り落として対比させた意匠を持つ。底部には焼成後、外側から穿たれた小孔が見られる。

8は体部が内傾する深みのある器形で、高台を持たず小さな4足が付けられる。底部には焼成後、外側から穿たれた小孔が見られる。

9は木の葉形の変形皿である。内面に葉脈状の文様も見られる。高台は形状に合わせ楕円形を呈する。

10は瓜を象った小皿である。底面には小さな円柱状の足が3か所付くが一部は欠損している。

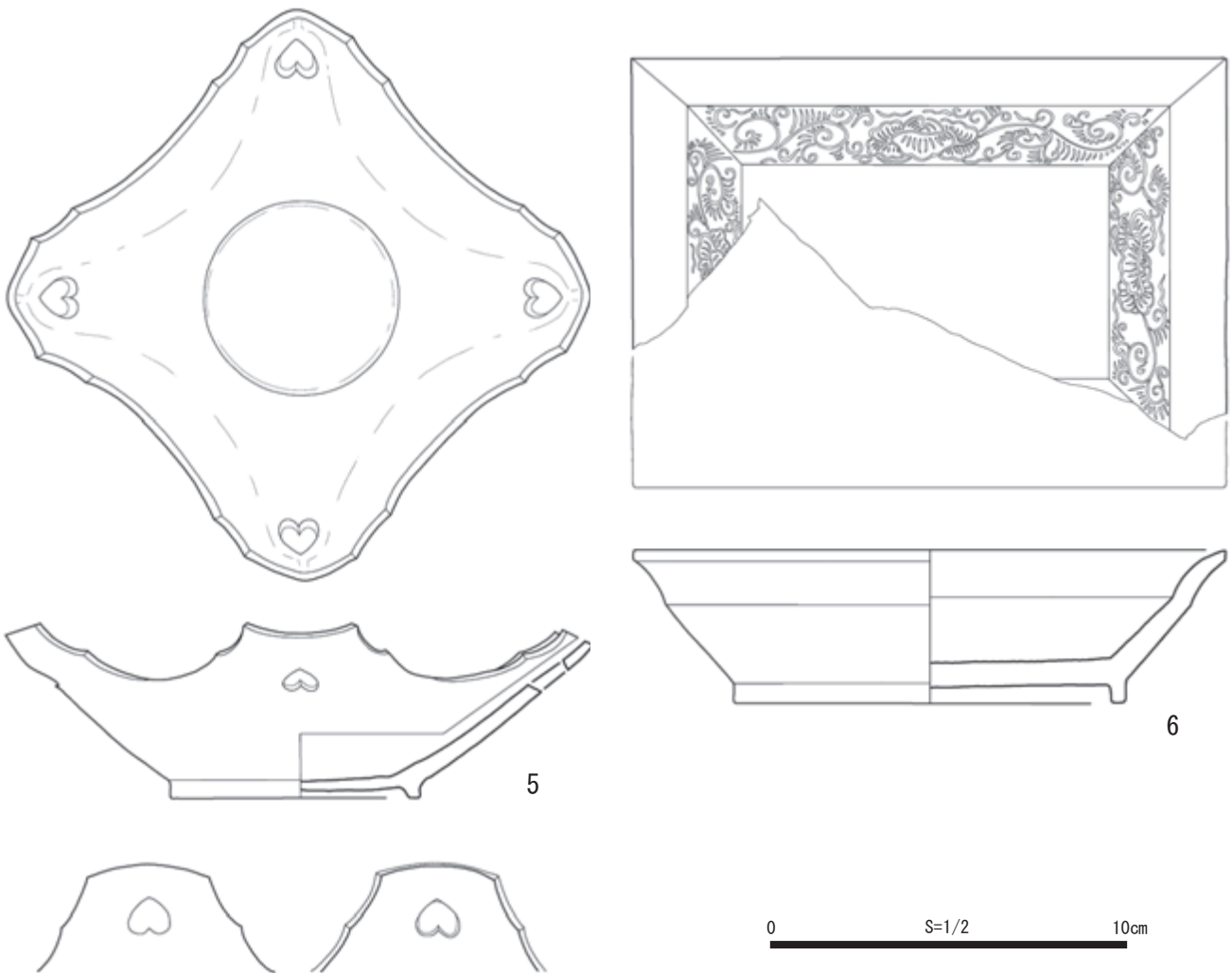
11はミョウガを象った小皿である。高台は皿の形状に合わせ変形高台を成す。

12は長方形の形状を呈する薄手の皿である。短い折縁の端部は、型押しにより縁取りのラインがつけられ、四隅の頂点部は内側へ入る。

13は折縁の先端が花卉状をなし、上面に型打ちの陽刻文見られる。腰部は丸く作られている。

14は体部は菱形で、口縁を折縁に広げ花卉状に成形する。上面には型打ちによる唐草文の陽刻が見られる。

15は桔梗形の薄手の小皿である。高台も花卉形に作る。



第6図 型打ち製品実測図(3)

16は折縁の端部には陽刻の縁取線がつく。他に装飾はなくシンプルなデザインである。

17は体部が円形で、折縁部を四角形に作る。折縁には陽刻の唐草文が入り四隅の頂部に透かし掘りを施す。掲載した2点は別個体である。

18は燕を象った小皿である。底面には小さな円柱状の足が3か所付くが一部は欠損している。

19は直方体の箱物で、長側面には陽刻による花文が施され、短側面にはその花文の上から型打ちされた蝶が貼り付けられる。

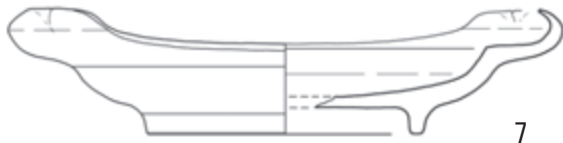
20は月日貝を象った皿である。写真には本物の月日貝も対比のため掲載したが、大きさや細部まで詳細に象っている。3足が付く。

21は鮑を象った皿である。掲載した2点は別個体である。外側には角状の突起も作られており、細部まで忠実に表現されている。突起の間とその反対側に3足が付く。

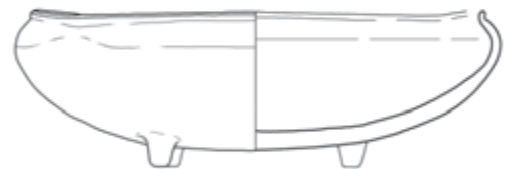
22は蛤を象った皿の一部で、蝶番部分もリアルに表現しており、裏面の写真は掲載していないが、3足と思われる。

23は2枚の羽を上下に組み合わせたような形を象ったデザインである。

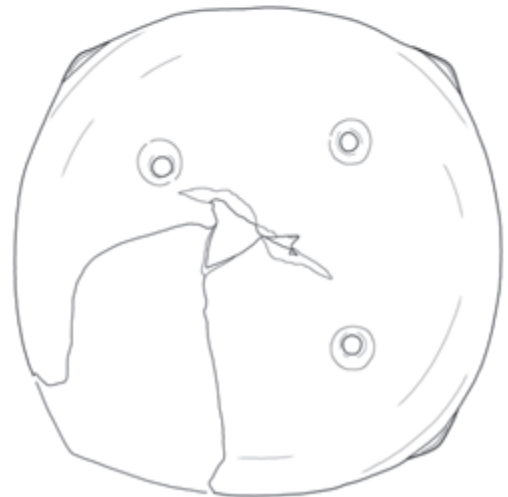
24は酒器である。報告書図版14(p.86)で写真のみ掲載されていたが、今回図化を行った。胎土は灰褐色を呈し、緻密であるが、素焼き段階で破棄された資料であるため、釉調等は不明である。底面を除き全面に型打ちによる繊細な文様が施される。



7



8



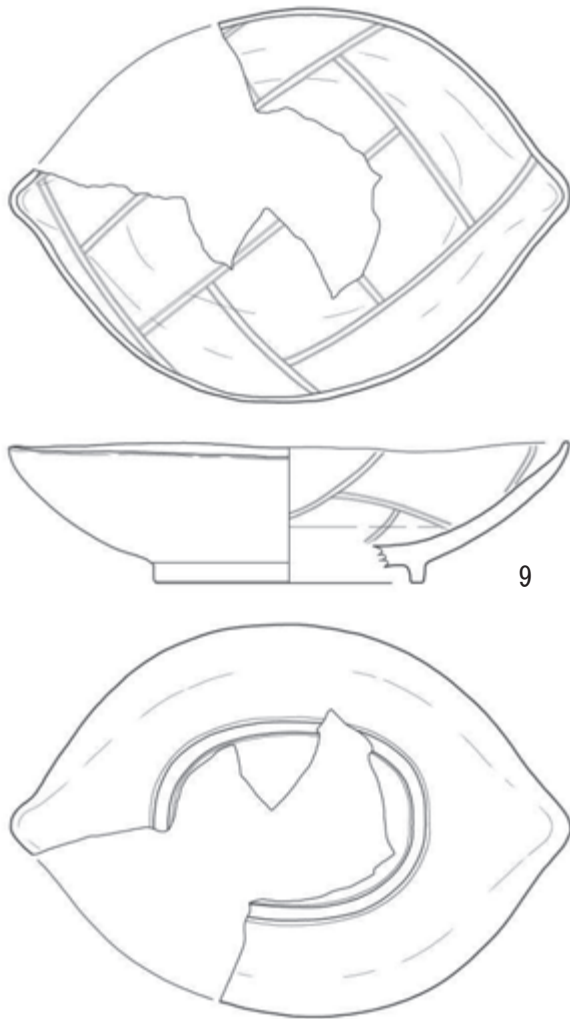
0 S=1/2 10cm

第7図 型打ち製品実測図(4)

(4) 型打ち製品についての若干の考察

これらの出土品は、型打ち成形にありがちな、陽刻や印刻文の不鮮明な輪郭や鈍い表現性を全く感じさせない高品質の製品である。細部まで丁寧な製作意識が見て取れ、洗練されたデザインは、芸術的な領域を示す資料ともいえよう。このような高品質で意匠性の高い製品は、何を目的に、どのように利用されるために作られたのであろうか。

県立埋蔵文化財センターでは、冷水窯跡出土品の再整理を行うとともに、鹿児島（鶴丸）城の二之丸跡と本丸跡の出土遺物の再整理も行ってきた。二之丸と本丸は、島津氏の本城であり、当然のことながら豎野系窯場で焼かれた白薩摩や宋胡録写し、三島手等の上質の製品が大量に出土しているが、これらの出土品の中には、型打ち製品はわずかに見られるものの、これまでに紹介した型打ち製品については確認されなかった。



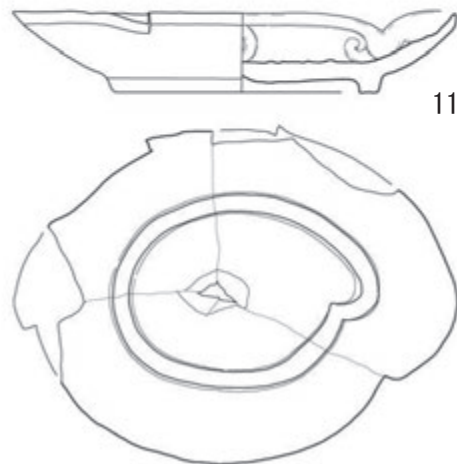
9



10

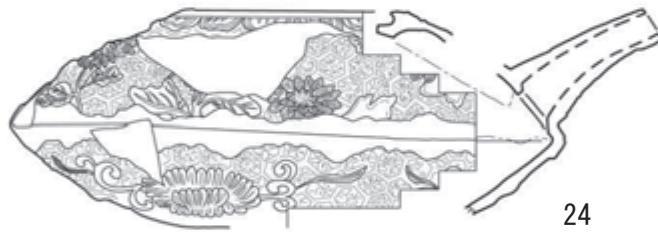
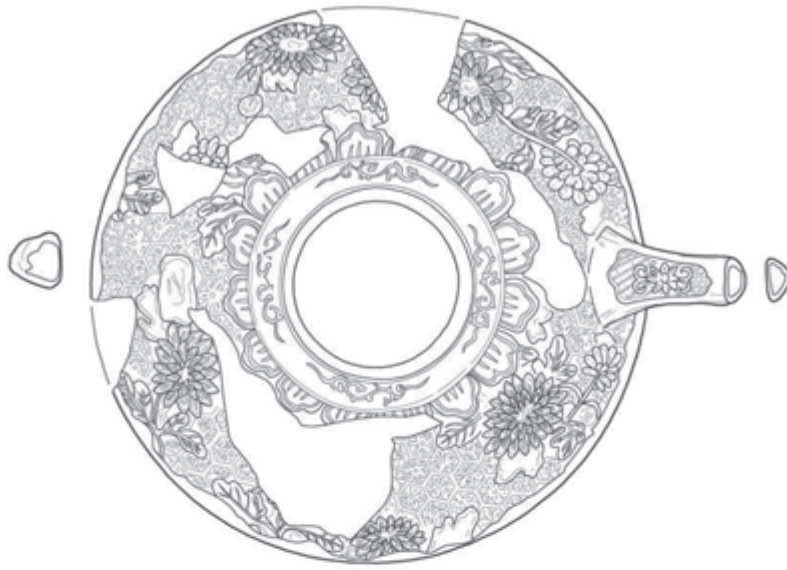


11

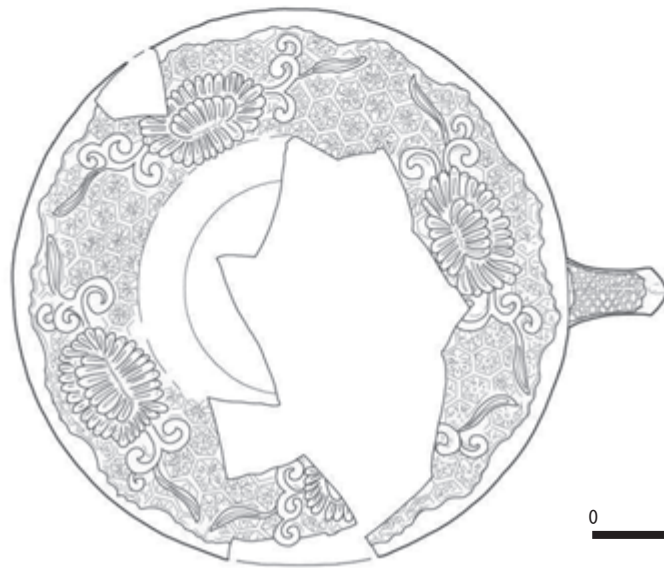


0 S=1/2 10cm

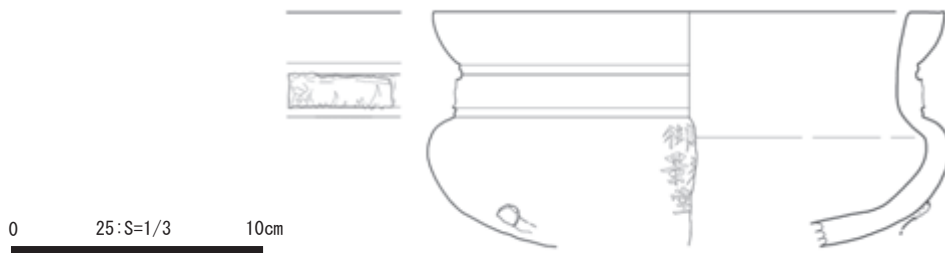
第8図 型打ち製品実測図(5)



24



0 24:S=1/2 10cm



0 25:S=1/3 10cm

25

第9図 型打ち製品実測図(6)

鹿児島（鶴丸）城跡のこのような出土状況は、島津氏や一部の上級武士層の調度品として定義付けられてきた「白薩摩」と、冷水窯跡の「型打ちの製品」が同じ用途の製品ではないことを示唆するものである。

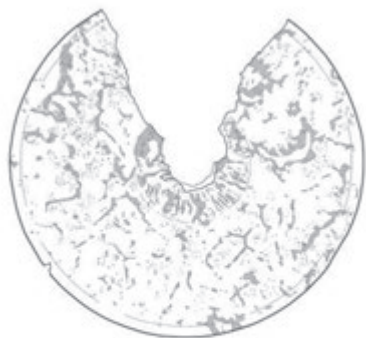
そのことを裏付ける資料として、江戸の薩摩藩島津家屋敷跡第2遺跡出土の薩摩焼が注目される。この遺跡は東京都港区芝3丁目に所在した薩摩藩の上屋敷とされる藩邸跡である。（以下、「薩摩藩上屋敷跡」とする。）報告書が刊行されていないため詳細は不明であるが、毎田佳奈子氏は、この遺跡検出のB区2号遺構（大型土坑）の中から出土した三島手の碗と、E区20号b遺構（大型方形土坑）の中から出土したロクロ成形後型打ち成形の鉢について、冷水窯跡出土遺物との類似性を指摘し、冷水窯の製品が江戸の薩摩藩上屋敷に持ち込まれている可能性を指摘している。（毎田 2007）

筆者はこの指摘を基に、今回の再整理により明らかとなった型打ち製品について、薩摩藩上屋敷跡E区20号b遺構内から出土した白薩摩の皿と比較・検討を試みた。その結果、少なくとも3点（第8図10・11、写真12）が、

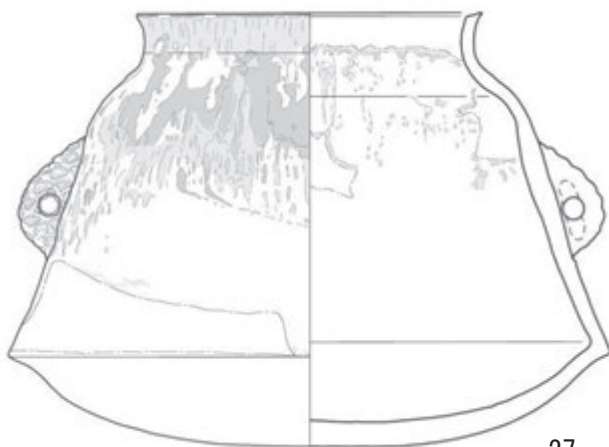


0 28:S=1/3 10cm

28



26



27

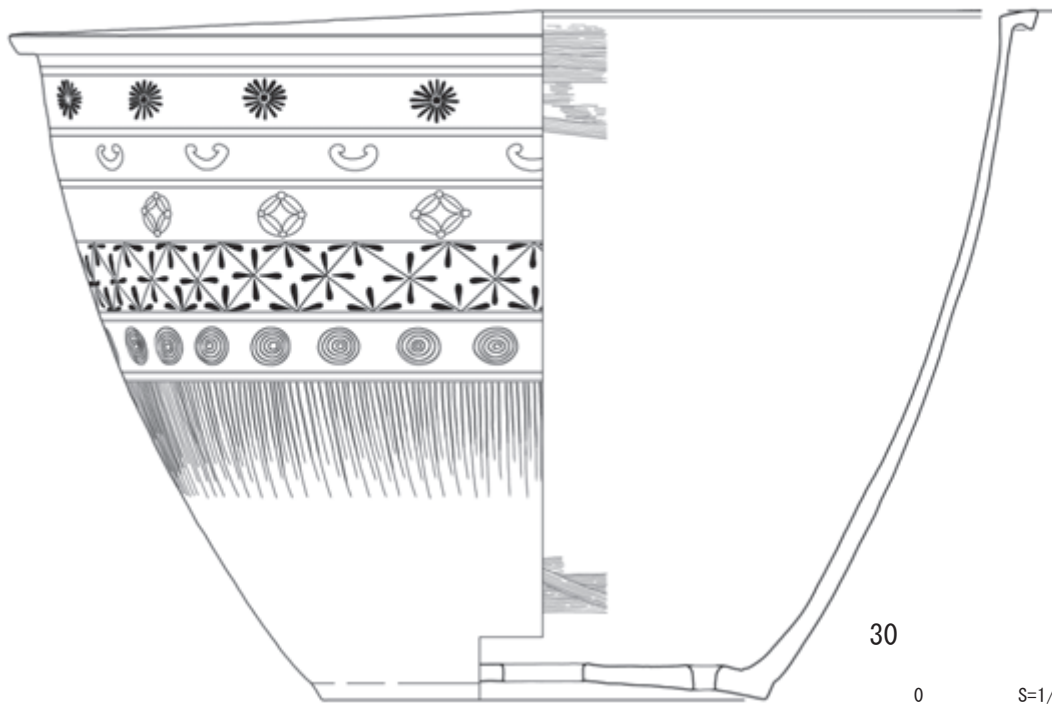
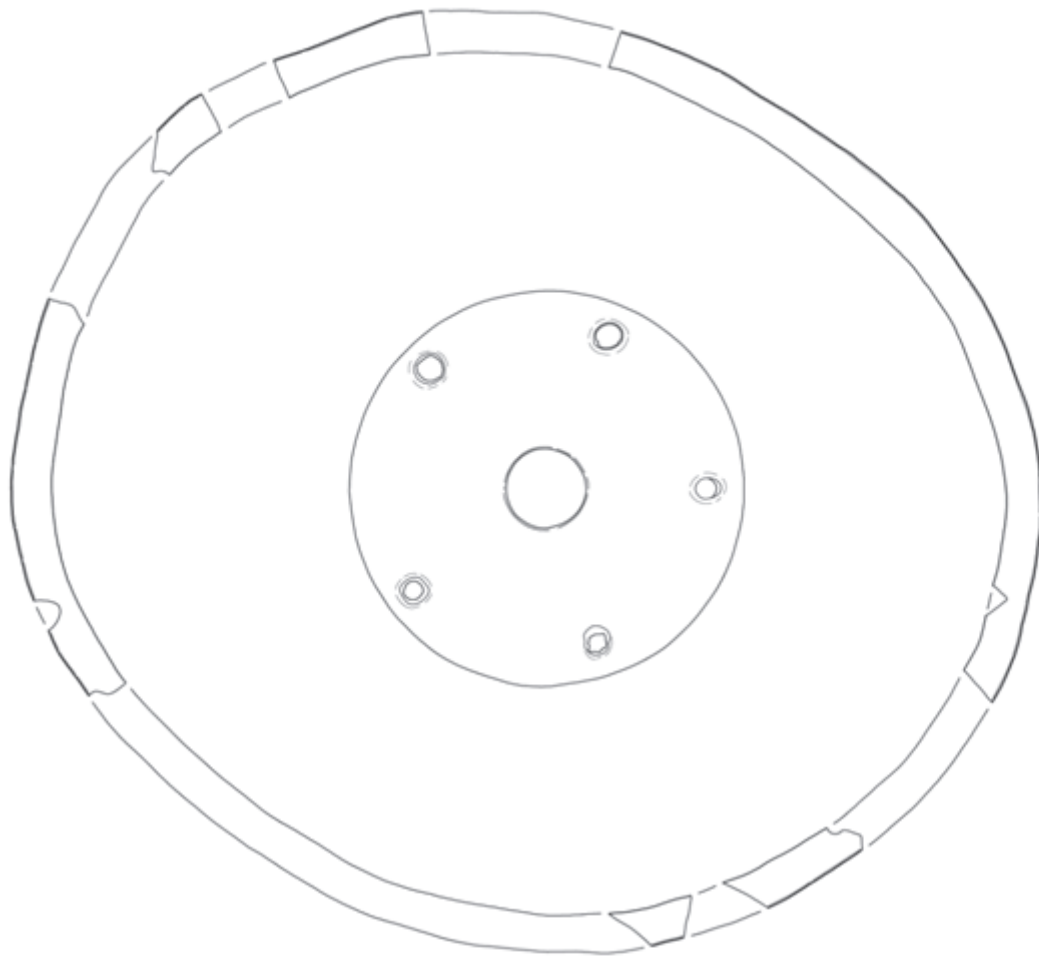


29

0 26, 27:S=1/3 10cm

0 29:S=1/2 10cm

第10図 豎野（冷水）窯跡・鹿児島（鶴丸）城跡出土遺物実測図



第 11 図 鹿兒島（鶴丸）城跡出土遺物実測図

薩摩藩上屋敷跡出土の資料（毎田 2007, p.130 68～70 及び p136 写真 80）と法量，デザイン等極似していることが判明した。冷水窯で生産された型打ち製品の一部分が，確実に江戸の薩摩藩上屋敷にもたらされていたことを確認したのである。

また，冷水窯跡出土の型打ち製品は，現在のところ，鹿児島（鶴丸）城本丸跡や二之丸跡からはほとんど出土していない。これらのことから，これらの製品を使用する対象は，薩摩藩内における藩主や上級武士層ではなく，江戸の将軍家や有力な家臣，諸大名などであり，薩摩藩上屋敷で開かれる外交行事（特別な接待や婚礼等）の宴席において使用された器と考えることができる。

(5) その他の資料について

再整理により形状が明らかとなった冷水窯跡の型打ち製品以外の資料と，鹿児島（鶴丸）城本丸跡・二之丸跡出土の資料について紹介しておきたい。

【冷水窯跡】

25 は白薩摩の仏具である。報告書掲載番号 185 の資料であるが，接合により外面に呉須により「御影堂」と記されていることが判明した。底部には獣足が3か所つくものと思われる。胎土は白色でやや荒くぱさついた感じがあり，不純物もわずかではあるが含まれる。釉は明度の高い透明釉がかかり，細かい貫入が入る。

26 は茶釜の蓋で，ボタン状のつまみがついていたと思われるが，欠損している。上面に蛇蝎風の釉薬が掛かる。胎土は灰褐色を呈し，微細な黄白色の不純物を含む。

27 は茶釜である。報告書掲載番号 177 の資料であるが，再整理によりほぼ完形に復元することができた。胎土及び釉薬ともに 26 と同様であることから，セットになる可能性も考えられる。胴部中位に松笠を象った鐔付が対で付けられる。釉は外面胴部には釉が掛かるが，炉に接する底部は露胎する。

28 は瓢箪形の徳利で，頸部は細く締まり，口縁部は頸部から短く直線的に伸びる。灰色の胎土に透明釉がかかり，胎土は緻密であるが鉄分と思われる微粒子を含み，器面にも浮き出て観察される。

【鹿児島（鶴丸）城跡本丸跡・二之丸跡】

29 は，二之丸城跡出土より出土した茶道具の杓立である。接合・復元作業により完形に復元することができた。胎土は，不純物がほとんど見られず緻密である。灰色の素地に白象嵌による三島手の文様が描かれる。

30 は本丸跡出土の植木鉢である。報告書掲載番号 601 の資料であるが，二之丸跡の一般遺物と接合でき，形状もほぼ完形に復元できたことから再実測を行った。胎土は暗緑色を呈し，29 と比べるとやや粗い。外面には白象嵌による三島手の文様が描かれる。底面には中央に1か所とその円周に5か所，水抜き孔があげられる。

29・30 とも薩摩藩の窯である堅野系窯場の製品であるが，具体的な窯場は不明である。年代観については，18世紀後半以降のものと考えたいが，断定には至らない。

3 今後の課題

収蔵遺物保存活用化事業に伴い行われた冷水窯，鹿児島（鶴丸）城跡本丸跡・二之丸跡の再整理により，今日までの薩摩焼研究の中で詳細が不明であった藩窯冷水窯について，わずかではあるがその様相が見えてきたことは貴重な成果である。

今後，鹿児島（鶴丸）城跡の出土品は，分類した陶磁器の統計から，本丸と二之丸の組成を検討する必要がある。また，堅野系窯場は冷水窯の他にもいくつかの窯場があったことが分かっているため，今回の冷水窯跡出土の製品と比較しながらその特徴を詳細に観察する必要があるだろう。

なお冷水窯跡については，おおよその開窯年代はわかっているものの，製品についての詳細な年代観等は未解明であるため，製品の主な供給先である鹿児島（鶴丸）城跡や江戸の薩摩藩上屋敷跡等の出土品の組成や供伴関係を綿密に調査する必要がある。また，幕末に京都に置かれ，現在同志社大学構内に所在する薩摩藩邸跡，贈答品や献上品を受け入れた将軍家や有力な幕臣の屋敷跡，薩摩藩と養子縁組もしくは婚姻関係にある大名家等の出土品や伝世品を調査するとともに，文献等も踏まえた総合的な調査を進めていく必要があるだろう。

再整理の成果については，今後も少しずつではあるが報告を続け，どこかの機会に再整理報告書をまとめることができると考えている。

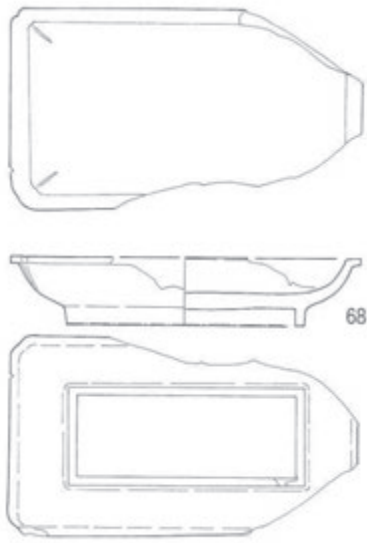
（文責 関 明恵）

【参考文献】

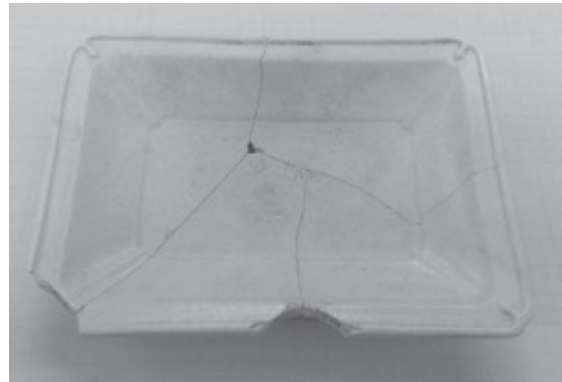
- 社団法人鹿児島県共済会南風病院 1978『堅野（冷水）窯址』南風病院女子寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（26）
- 1983『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（55）
- 1991『鹿児島（鶴丸）二之丸城跡（遺構編）』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（60）
- 1992『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡（遺物編）』田沢金吾・小山富士夫 1941『薩摩焼の研究』東洋陶磁研究所
- 関明恵 2012 「堅野冷水窯跡出土遺物の追加報告―物原 I を中心に一」『研究紀要・年報縄文の森から』第 5 号
- 毎田佳奈子 2007 「薩摩藩江戸屋敷の“薩摩焼”（2）」『東京考古』第 25 号

遺物観察表(※実測分のみ)

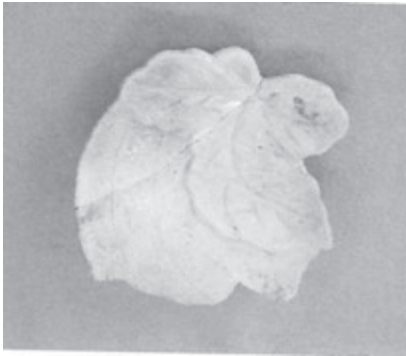
掲載 番号	遺跡名	出土区等	器種	胎土の 色調	釉薬	施釉部位	法量(cm)			備考
							口径	底径	器高	
1	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	12.2	7.6	3.3	
2	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	長辺 13.7	短辺 11.7	3.4	
3	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	13.2	6.7	3.2	
4	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	13.4	7.5	3.8	
5	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ南西	鉢	白色	透明釉	畳付以外施釉	16.3	7.0	4.9	
6	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ南西下	皿	白色	-	-	長径 16.6	短径 11.0	6.6	
7	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	長辺 14.6	7.2	3.3	短辺12.1
8	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ	皿	白色	透明釉	脚部以外施釉	12.9	-	4.1	
9	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	長型 14.9 短径 10.4	長径 7.2 短径 5.2	3.8	
10	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	脚部以外施釉	10.2	-	2.5	
11	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	7.0	-	2.1	
24	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ南西 南西下	酒器	灰褐色	-	-	5.6	5.6	5.7	最大径14.8
25	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ南西下	仏具	白色	透明釉	残存部全面施釉	20.4	-	-	
26	堅野(冷水)窯跡	不明	蓋	灰褐色	蛇蝸釉状	上面	12.0	底径 14.0	1.9	
27	堅野(冷水)窯跡	不明	茶釜	灰褐色	蛇蝸釉状	外面腰部まで施釉	13.7	腰部 24.0	17.3	
28	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅰ 物原Ⅰ南西	德利	灰色	灰色がかった 透明釉	外面は畳付以外 施釉	2.9	11.2	20.2	
29	鹿児島城二之丸	-	杓立	灰色	透明釉	畳付以外施釉	5.4	5.8	19.0	
30	鹿児島城本丸 ・二之丸	-	植木鉢	暗緑色	透明釉	外底面以外施釉	81.2	54.9	54.5	



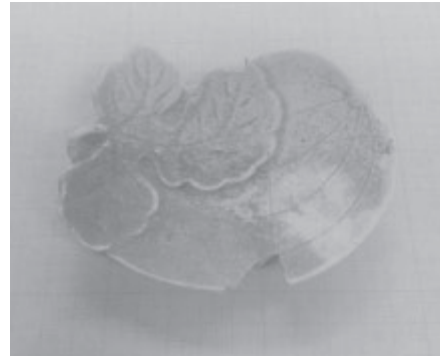
江戸薩摩藩上屋敷出土



冷水窯跡出土 (写真 12)

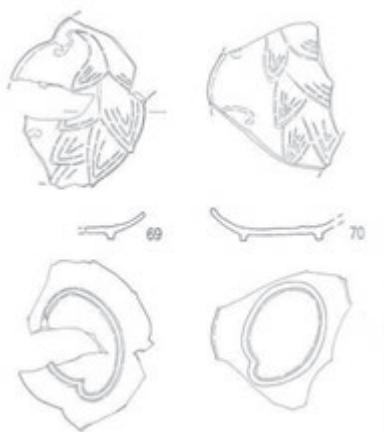


江戸薩摩藩上屋敷出土



冷水窯跡出土 (第 8 図 10)

~~~~~

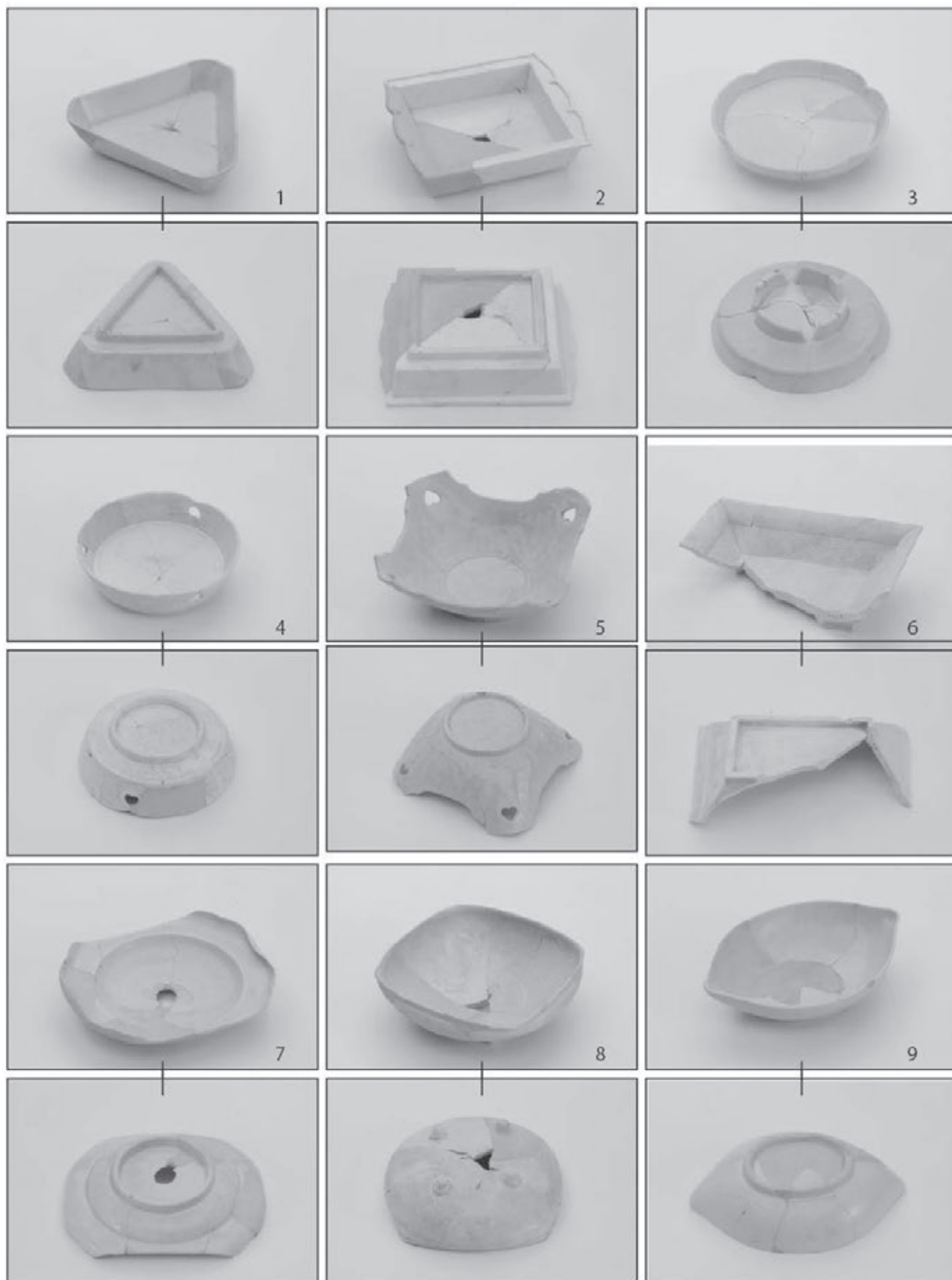


江戸薩摩藩上屋敷出土

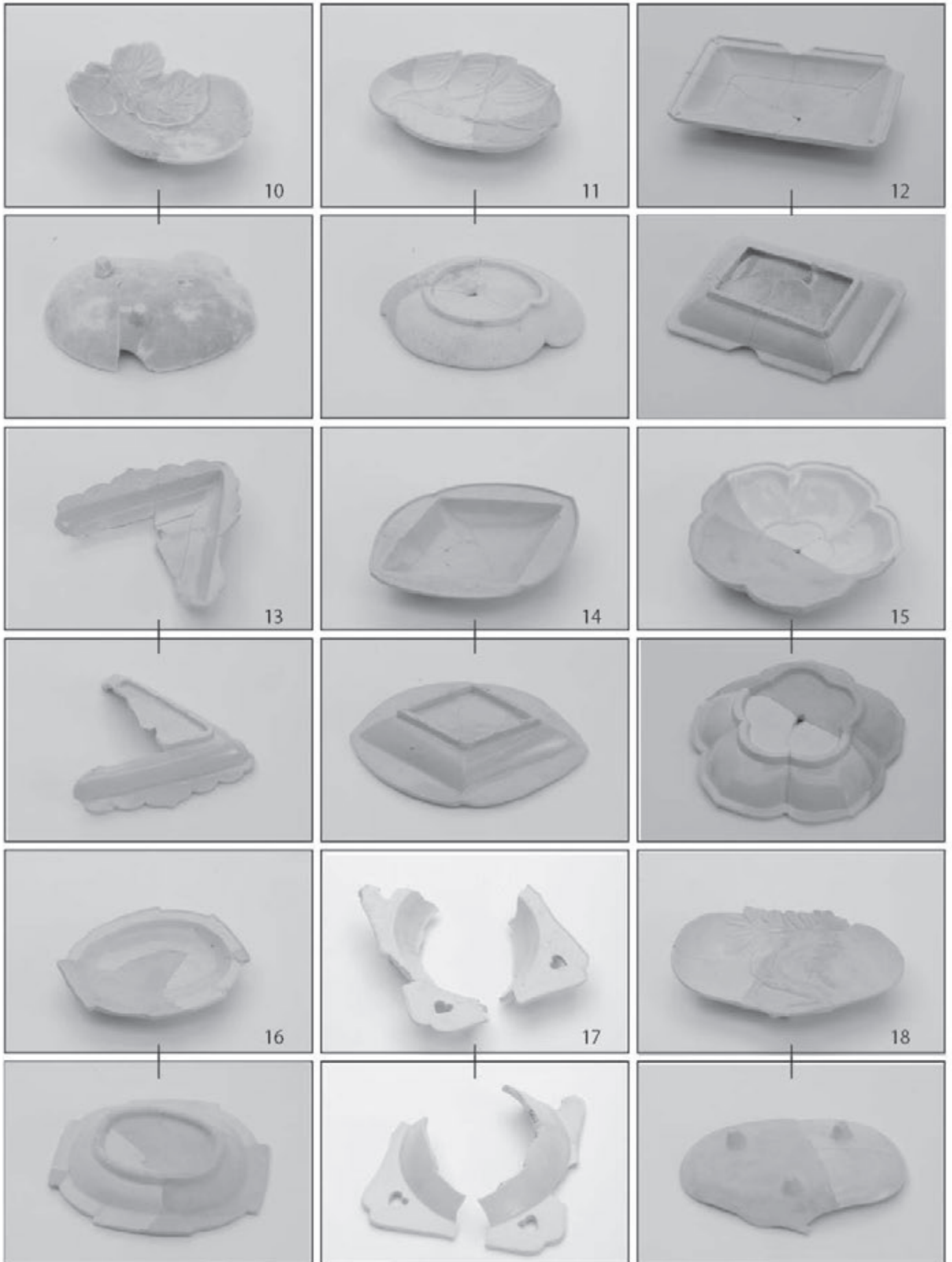


冷水窯跡出土 (第 8 図 11)

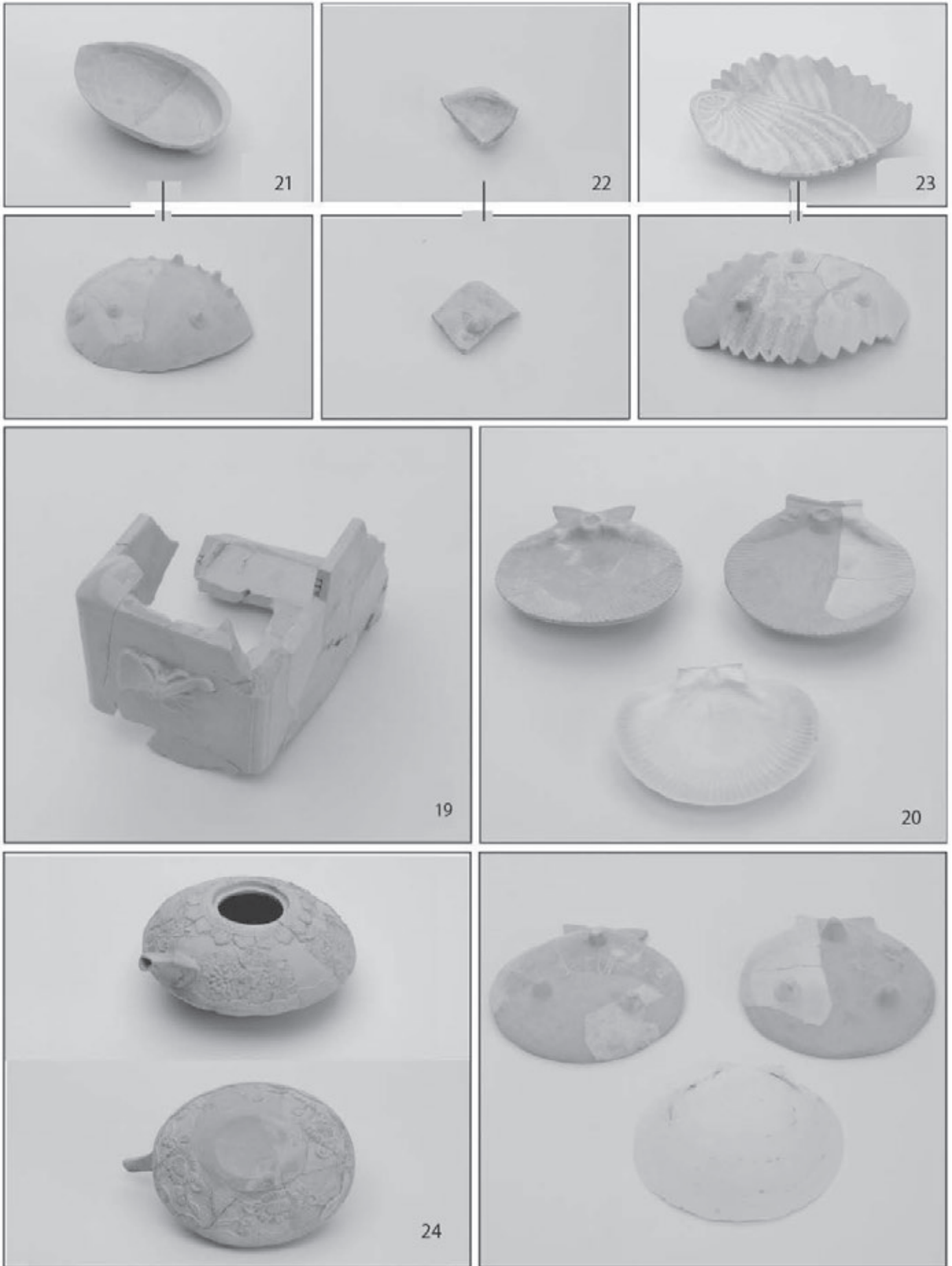
第 12 図 江戸出土品 (E 区 20 号 b 左) と冷水窯跡出土品 (右) の対比



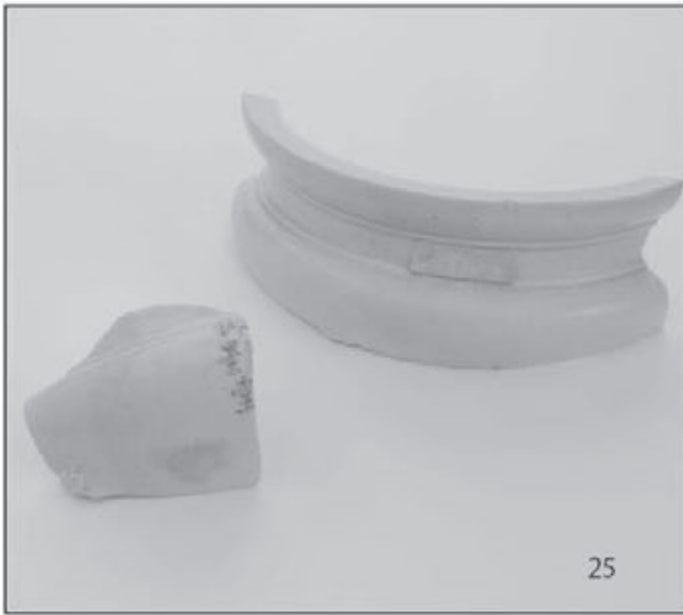
豎野（冷水）窯跡 型打ち製品 1



豎野（冷水）窯跡 型打ち製品 2



豎野（冷水）窯跡 型打ち製品 3



25



26



28



27



29



30

豎野（冷水）窯跡・鹿児島（鶴丸）城跡 出土遺物



# 京田遺跡出土木簡のレプリカ製作

－墨書の再検討と実測図の修正－

調査課第二調査係

Making a replica of wooden writing tablet excavated from Kyoden Site

The second section of the research department

## 要旨

京田遺跡から出土した棒状木簡のレプリカを製作するにあたり、保存処理後に撮影した最新の赤外線デジタル写真等を用いて墨書の再検討を行い、実測図を修正してレプリカへの転写を行った。またX線検査等により木簡自体が非常に脆い状態であることが判明したため、樹脂を塗布することにより強化を図った。また樹種同定も行い、ブナ科シイ属であることも判明した。

キーワード 京田遺跡, 棒状木簡, レプリカ, 墨書, 樹種同定

## 1 レプリカ製作の趣旨

京田遺跡（鹿児島県薩摩川内市中郷町）から出土した四面に墨書のある棒状木簡は、本県初の古代木簡としての価値はもとより、墨書の中に「嘉祥三年（850年）」という年紀が明記され、郡司の「大領薩麻公」が発給した告知札であることなどから、古代日本の地方行政のあり方などを考える上で非常に貴重な資料とされ、県指定の文化財（考古資料の第1号）ともなっている。

しかしながら紫外線等による墨書の劣化や脆弱な木簡の損壊を避けるため、これまでほとんど公開・展示することもできず、当センターの特別収蔵庫に保管されたままであった。よってこのように貴重な資料を公開していく方策の一つとして木簡のレプリカを製作し、広く展示・活用につなげていくこととした。

またこの機会に、木簡の外観を損ねない部分で試料を採取し、樹種同定も実施した。

## 2 レプリカ製作方針

レプリカの製作にあたっては、棒状という特殊な形状をそのまま表現するために、シリコンによる型取りを行い、その型を元にレプリカの本体を製作し、それに着色、墨書の転写を行った。

墨書については展示・活用する際のわかりやすさを重視して、読み取れている墨書や墨痕の濃度を上げて転写し、「読める木簡」として復元することとした。

尚、レプリカの製作は吉田生物研究所に委託した。

## 3 木簡の状態と強化処理について

平成13年に発掘された木簡は、墨書の検討や実測図の

作成の後、奈良文化財研究所保存科学研究室高妻洋成氏に依頼し、30%のPEG含浸と真空凍結乾燥法により保存処理されている（平成13～14年度）。

今回レプリカの製作にあたり木簡の状態を詳しく観察したところ、横方向のヒビ割れが数か所確認され、X線撮影による調査ではそのヒビが深部まで及んでいること、またほかにも細かなヒビが多数入っていることが認められた。木簡はかなり脆弱な状態にあることが判明したため、型取り等の工程に入る前に文化財専用の樹脂（アルタイン）を表面から塗布して強化処理を行った。

また、この樹脂を塗布した副次的な効果により、白木のようにであった木簡の色調が若干濡れ色を呈し、本来の木の色に近い状態となった。よってレプリカの木部の着色もこの強化処理後の色調を写すことにした。

## 4 墨書の再検討

木簡の墨書については、当時まだ木簡を保存処理する以前に、奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室（当時。室長渡辺晃宏氏）に積読を依頼し、合わせて同写真資料調査室（当時）の中村一郎氏による赤外線デジタル撮影を実施した。その結果を受けて作成された木簡の実測図が京田遺跡報告書1)の第92図に掲載されている。

当初はこの実測図をそのまま転写する予定であったが、今回のレプリカ製作にあたり先述の渡辺室長に問い合わせたところ、保存処理後に新たな文字が判別できる可能性があるとのことであった。よって最新の赤外線デジタルカメラ等を用いた再撮影と積読の再検討を渡辺室長に依頼した。

その結果、新たな文字の釈読などの進展はみられなかったものの、第三面に書かれている「大領薩麻公」の下に文字らしい墨痕が認められ、郡司である薩麻公の自著である可能性もあることが指摘された。またにじんでいたような墨跡が明瞭になった部分もあった。

この再検討をもとにして、渡辺室長の監修により木簡実測図の修正を行ったのが第1図である。全体的にすっきりとした印象である。報告書掲載の実測図には墨書の脇に添えた釈文に誤字もあり、この機会に訂正した。今後京田木簡の実測図を使用する際は、この図を利用してもらいたい。

## 5 樹種同定

樹種同定の結果は、ブナ科シイ属との報告であった。

## 6 今後に向けて

このような過程を経て完成したのが写真2に示したレ

プリカである。今後は上野原縄文の森展示館での展示のほか、出土地である薩摩川内市での里帰り展示、条里制などの律令制度を学習する際の具体的な郷土資料として、中学校・高校の授業での活用など、さまざまな場面での活用法を考えていきたい。

## 謝辞

奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室の渡辺晃宏室長には、御多忙のところ墨書の再検討を快く引き受けていただき、実測図の監修まで懇切丁寧に御指導いただいた。また、再撮影も前回同様に中村一郎氏（同研究所企画調整部写真室）にお手を煩わせた。記して感謝いたします。

- 1) 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 81  
京田遺跡 2005.3

（文責 大久保浩二）



写真1 実物（左）とレプリカ（右）の比較





写真2 京田遺跡出土木簡レプリカ（四面展開）

平成25年度  
年 報



平成25年度 発掘調査・整理作業・報告書作成を行った遺跡

県事業関係

| 番号            | 遺跡名                                   | 所在地                                              | 事業主体 | 起回事業名                 | 調査の種類             | 調査表面積(m <sup>2</sup> ) | 調査期間                        | 時代                                                                                           | 遺構                                    | 遺物                                               | 担当者                        |
|---------------|---------------------------------------|--------------------------------------------------|------|-----------------------|-------------------|------------------------|-----------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------|--------------------------------------------------|----------------------------|
| 1             | 山ノ口                                   |                                                  |      | 志布志福山線<br>(有明道路)改築    | 本調査               | 3,100                  | 8月<br>～<br>1月               | 旧石器細石刃                                                                                       |                                       | 剥片                                               | 浦<br>光<br>永<br>辻<br>長<br>崎 |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 縄文時代早期                                                                                       |                                       | 前平式土器、石皿、剥片石器、楕円押型文土器、下剥釜式土器、石鏃、obチップ            |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 縄文時代後期                                                                                       | 土坑 34基                                | 中岳Ⅱ式土器                                           |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 縄文時代晩期                                                                                       |                                       | 精製浅鉢                                             |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 弥生時代                                                                                         |                                       | 入来式土器                                            |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 古墳時代                                                                                         |                                       | 成川式土器                                            |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 近世                                                                                           | 畑畝跡、溝状遺構 2条                           |                                                  |                            |
| 時期不明          | 硬化面 34条                               | 敲石破片、打製石鏃、打製石斧                                   |      |                       |                   |                        |                             |                                                                                              |                                       |                                                  |                            |
| 2             | 見帰                                    | 志布志市                                             |      | 志布志福山線<br>(志布志道路)改築   | 本調査               | 2,600                  | 4月<br>～<br>9月               | 旧石器時代                                                                                        |                                       | 剥片、ハンマーストーン<br>叩石、打面調整剥片<br>磨石                   | 武<br>安<br>楸<br>田           |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 縄文時代早期                                                                                       | 集石 1基<br>土坑 10基                       | 土器片、石坂式土器、下剥釜式土器<br>石鏃、磨石、石皿                     |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 縄文時代前期<br>～中期                                                                                | 落とし穴状遺構 2基<br>土坑 1基                   | 石鏃                                               |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 縄文時代後期                                                                                       | 土坑 3基、溝状遺構 1条                         | 磨消縄文土器、西平式土器、丸尾式土器、中岳Ⅱ式土器、叩石、剥片(OB)              |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 時期不明                                                                                         | 溝状遺構 1条<br>土坑 2基                      |                                                  |                            |
| 3             | 下原                                    |                                                  |      | 志布志福山線<br>(有明志布志道路)改築 | 本調査               | 5,600<br>(延)           | 10月<br>～<br>2月              | 旧石器時代                                                                                        | ブロック 2基                               | マイクロブレード(ob)<br>チップフレイク(ob)<br>スクレーパー(?), 剥片(ob) | 武<br>安<br>楸<br>田           |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 縄文時代早期                                                                                       | 集石 4基<br>土坑 1基                        | 前平式土器、石坂式土器、押型文土器、磨石、礫器、剥片(ob)、石鏃、チャート、塞ノ神式土器    |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 縄文時代後期                                                                                       |                                       | 磨消縄文土器、市来式土器、中岳Ⅱ式土器、礫、石鏃、石斧                      |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 弥生時代                                                                                         | 竪穴住居                                  | 前期刻目突帯文土器、山ノ口式土器、剥片(ob)、石斧、磨石                    |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        |                             | 時期不明                                                                                         | 溝状遺構 1条                               | 古県道(明治期?)                                        |                            |
| 10            |                                       | 土木部道路<br>建設課                                     |      | 志布志福山線<br>(有明志布志道路)改築 | 整理                | H24                    | 旧石器時代                       | ブロック 1基                                                                                      | スポール、剥片                               | 東<br>長<br>崎                                      |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 縄文時代早期                      | 竪穴住居状遺構2軒、集石遺構12基、土坑11基                                                                      | 前平式土器、石坂式土器、押型文土器、打製石鏃、石匙、石鏢、磨石、敲石、石皿 |                                                  |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 弥生時代                        |                                                                                              | 前期刻目突帯縄文土器、山ノ口式土器、磨製石鏃、砥石             |                                                  |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 時代不明                        | 掘立柱建物跡2棟                                                                                     | 扁平打製石器                                |                                                  |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 近世以降時期<br>不明                | 大型道路状遺構1条、道跡12条、溝状遺構5条、土坑3基                                                                  | 土師質土器、薩摩焼、陶磁器、瓦、蹄鉄                    |                                                  |                            |
| 4             | 高付                                    | 南九州市                                             |      | 額娃川辺線<br>(知覧道路)改築     | 本調査               | 1,500                  | 縄文時代後期                      | 土坑1基                                                                                         | 指宿式土器、市来式土器                           | 浦<br>辻<br>尾<br>川                                 |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 縄文時代晩期                      |                                                                                              | 精製浅鉢、無文土器                             |                                                  |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 弥生時代                        |                                                                                              | 入来式土器?                                |                                                  |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 古墳時代                        | 土器集中土坑 1基                                                                                    | 成川式土器(東原段階)                           |                                                  |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 中・近世                        | 掘立柱建物跡 1棟                                                                                    | 土師器、カムイヤキ盤、青磁、白磁、東播磨系須恵器、輸入陶器、薩摩焼     |                                                  |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 時期不詳                        | ビット41基、炭化物集中、土坑1基、土坑7基                                                                       | 天草砥石、滑石製品、鞆羽口                         |                                                  |                            |
| 5             | 鞍曲                                    |                                                  |      |                       | 本調査               | 1,000                  | 旧石器時代                       | 礫群                                                                                           | 剥片尖頭器                                 | 切<br>通<br>辻<br>尾<br>川                            |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 縄文時代                        | 落とし穴か?                                                                                       |                                       |                                                  |                            |
| 9             | 船迫                                    | 志布志市                                             |      | 志布志福山線<br>(志布志道路)改築   | 報告書<br>(七<br>180) | H22<br>～<br>H24        | 縄文時代早期                      |                                                                                              | 下剥釜式土器、石鏃                             | 岡<br>本<br>堂<br>込<br>東<br>楸<br>田                  |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 縄文時代後期                      | 落とし穴状遺構2基                                                                                    | 中岳Ⅱ式土器、石鏃、敲石                          |                                                  |                            |
|               |                                       |                                                  |      |                       |                   |                        | 弥生時代中期                      | 掘立柱建物跡4棟                                                                                     | 山ノ口式土器、磨製石鏃、磨石、敲石                     |                                                  |                            |
|               | 江戸時代                                  |                                                  |      |                       |                   |                        | 带状硬化面                       | 二分金、陶磁器                                                                                      |                                       |                                                  |                            |
|               | 旧石器時代                                 |                                                  |      |                       |                   |                        | 礫群1基                        | 三稜尖頭器、剥片                                                                                     |                                       |                                                  |                            |
|               | 縄文時代早期                                |                                                  |      |                       |                   |                        | 集石141基、土坑8基、連穴土坑4基、土器埋設遺構1基 | 前平式土器、石坂式土器、押型文土器、手向山式土器、平柄式土器、塞ノ神式土器、苦浜式土器、小山タイプ、打製石鏃、局部磨製石鏃、石鏃、削器、搔器、異形石器、打製石斧、石匙、磨石、敲石、石皿 |                                       |                                                  |                            |
| 縄文時代前期<br>～後期 | 落とし穴状遺構6基、土坑4基                        | 深浦式土器、中岳Ⅱ式土器                                     |      |                       |                   |                        |                             |                                                                                              |                                       |                                                  |                            |
| 弥生時代中期        | 竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡5棟、土坑7基、横穴をもつ土坑1基、石集積1基 | 山ノ口式土器、中溝式土器、須玖式土器、凹線文土器、土製勾玉、磨製石鏃、砥石、凹石、台石、樹皮叩石 |      |                       |                   |                        |                             |                                                                                              |                                       |                                                  |                            |
| 中世～近世         | 溝状遺構1条、古道7条、土坑墓2基                     | 土師器、陶磁器                                          |      |                       |                   |                        |                             |                                                                                              |                                       |                                                  |                            |

県事業関係

| 番号 | 遺跡名    | 所在地   | 事業主体                    | 起因事業名              | 調査の種類     | 調査表面積(m <sup>2</sup> ) | 調査期間    | 時代           | 遺構                         | 遺物                                          | 担当者    |
|----|--------|-------|-------------------------|--------------------|-----------|------------------------|---------|--------------|----------------------------|---------------------------------------------|--------|
| 6  | 中津野    | 南さつま市 |                         | 国道270号(宮崎バイパス)道路改良 | 本調査       | 1,300                  | 6月～10月  | 縄文時代晩期～後期    | 集石1基                       | 指宿式土器、市来式土器、晩期の土器、石皿、磨石、石鏃、フレイク、チップ         | 光永尾川有馬 |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 弥生時代前期       | 土坑6基                       | 高橋式土器、入来式土器、石皿、磨石、石鏃、打製石斧、磨製石斧、石包丁          |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 弥生時代末～古墳時代前期 | 溝状遺構1条                     | 中津野式土器                                      |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 古代・中世        | 溝状遺構(1)、大型土坑(1)            | 青磁、白磁、土師器                                   |        |
| 7  | 弥十山    | 南さつま市 |                         | 県道阿多川辺線(知覧道路)改築    | 本調査       | 433                    | 6月      | 縄文時代後期       |                            | 納骨式、辛川式、北久根山式、磨消縄文系、石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿      | 有馬吉元   |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 時代不明         | 溝状遺構1条                     |                                             |        |
| 8  | 加治木堀   | 大崎町   | 土木部道路建設課                | 大崎輝北線(野方IC工区)改築    | 本調査       | 4,950                  | 4月～7月   | 縄文時代早期       |                            | 打製石鏃6、土器小片                                  | 吉元切通相美 |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 縄文時代中期       | 土坑2(1基は落とし穴状遺構)            |                                             |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 弥生時代         | 竪穴住居跡1軒、円形周溝2基             | 山ノ口式土器、凹線文土器、打製石鏃1、砥石                       |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 古墳時代         |                            | 成川式土器、鉄鏃                                    |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 中世           | 硬化面(古道)                    |                                             |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 時期不明         | 掘立柱建物跡1棟(1×1)、ピット          |                                             |        |
| 11 | 加治木堀   | 大崎町   | 土木部道路建設課                | 大崎輝北線(野方IC工区)改築    | 整理        | H24 H25                | H24 H25 | 縄文時代早期       |                            | 打製石鏃6、土器小片                                  | 大久保相美  |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 縄文時代中期       | 土坑2(1基は落とし穴状遺構)            |                                             |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 弥生時代         | 竪穴住居跡1軒、円形周溝2基             | 山ノ口式土器、凹線文土器、打製石鏃1                          |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 古墳時代         |                            | 成川式土器、鉄鏃                                    |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 中世           | 硬化面(古道)                    |                                             |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 時代不明         | 掘立柱建物跡1棟(1×1)、ピット          |                                             |        |
| 12 | 東大小路B  | 薩摩川内市 |                         | 川内河川改修             | 確認調査      | 25,000                 | 6月      | 近代           |                            | 明治の古銭、近代陶器                                  | 吉岡岡本   |
| 13 | 安良木森小牧 | 志布志市  | 鹿児島県教育委員会               | 県内遺跡事前調査           | 確認調査      | 18,600                 | 8月～10月  | 縄文時代早期       | 集石2基(木森) 集石1基、土坑1基(小牧)     | 加葉山式土器、前平式土器、下剥釜式土器、石鏃(木森) 下剥釜式土器、吉田式土器(小牧) | 吉岡切通   |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 縄文時代後期～晩期    | 集石1基、土器集中(小牧)              | 指宿式土器、円盤状土製品、黒川式土器、石皿、磨石、石鏃(小牧)             |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 古墳時代         |                            | 成川式土器(安良)                                   |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 近世           |                            | 陶磁器(安良)                                     |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 時代不明         | 溝状遺構1条、土坑2基(平良)、溝状遺構1条(小牧) |                                             |        |
| 14 | 前原和田   | 霧島市   | 土木部道路建設課(始良伊佐地域振興局)     | 大川原小村線改築           | 報告書セ(181) | H24                    | H24     | 旧石器時代        |                            | ナイフ形石器、マイクロブレード、石核、フレイク、ハンマー                | 有馬吉元   |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 縄文時代早期       |                            | 前平式(岩本タイプ)、押型文                              |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 縄文時代中期末～後期   | 竪穴住居跡1軒、土坑3基、OBブロック        | 並木式、大平式、阿高系、南福寺式、出水式                        |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 縄文時代晩期       |                            | 入佐式、黒川式、干河原式、石斧、磨石、石皿、石鏃                    |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 古墳時代         | 竪穴住居跡3軒                    | 成川式土器                                       |        |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 中世以降         | 畝状遺構、帯状硬化面                 |                                             |        |
| 15 | カメコ    | 伊仙町   | 土木部道路建設課(大島支庁徳之島事務所建設課) | 伊仙天城道路改築           | 報告書セ(182) | H24                    | H24     | 縄文時代後期       |                            | 犬田布式、喜念I式                                   | 有馬岡本   |
|    |        |       |                         |                    |           |                        |         | 弥生時代         | 焼土跡1基                      | 宇佐浜式、仲原式、磨製石斧、磨石、石皿、凹石、敲石                   |        |

市町村関係：市町村の機関による発掘調査

| 番号 | 遺跡名               | 市町村名 | 事業主体  | 起因事業           | 支援用件         | 調査表<br>面積(m <sup>2</sup> ) | 調査<br>期間   | 時代               | 遺構                      | 遺物                         | センター<br>担当     |
|----|-------------------|------|-------|----------------|--------------|----------------------------|------------|------------------|-------------------------|----------------------------|----------------|
| 1  | 小松原B遺跡            | さつま町 | 農地整備課 | 村内遺跡等<br>発掘調査  | 整理           | —                          | 11<br>(随時) | 旧石器              |                         | 細石刃, 細石核                   | 堂込             |
| 2  | 宗功寺跡              |      | さつま町  | 宗功寺公園<br>トイレ改修 | 整理           | —                          | 6<br>(随時)  | 近世               |                         | 完形に近い薩摩焼壺                  | 東              |
| 3  | 西下原遺跡             |      | 農地整備課 | 中山間地域<br>総合整備  | 本調査          | 540                        | 1<br>(随時)  | 縄文晩期<br>古代<br>中世 | 溝状遺構                    | 縄文晩期の埋設土器                  | 有馬<br>今村       |
| 4  | 田尾原遺跡             | 湧水町  |       |                | 本調査          | 1,500                      | 4<br>(随時)  | 縄文早・<br>後期<br>中世 | 溝状遺構, 集石遺構              | 土器, 石鏃                     | 東<br>馬籠        |
| 5  | 唐仁古墳群             | 東串良町 | 東串良町  | 重要遺跡範<br>囲確認調査 | 測量調査<br>試掘調査 | 22,282                     | 11<br>(随時) | 古墳               |                         |                            | 馬籠<br>今村       |
| 6  | 手久津久地区<br>遺跡群(川寺) | 喜界町  | 農地整備課 | 畑地帯総合<br>整備事業  | 本調査          | 54,400                     | 11<br>(随時) | 古墳<br>～<br>近代    | 兼久式期の貝溜まり<br>土壌墓        | 兼久式, 青磁, 土師器, 鉄製<br>品, 貝製品 | 井ノ上<br>東<br>今村 |
| 7  | 手久津久地区<br>遺跡群(川尻) |      |       |                | 本調査          | 3,900                      | 随時         | 縄文晩期<br>中世       | 溝状遺構<br>掘立柱建物跡, 炉跡, 土壌墓 | 青磁, 土師器, 鉄製品, 面縄<br>西洞式    | 井ノ上<br>東<br>今村 |
| 8  | 小田ノ中野遺跡           |      |       |                | 本調査          | —                          | 3<br>(随時)  | 縄文早期             |                         | 塞ノ神B式                      | 東<br>今村        |
| 9  | 立切・長野崎遺<br>跡      | 中種子町 | 中種子町  | 中山間地域<br>総合整備  | 確認調査         | 500                        | 1<br>(随時)  | 旧石器<br>～<br>縄文早期 |                         | 細石刃核, 平袴式                  | 東<br>今村        |
| 10 | 戸森の線刻画            | 天城町  | 天城町   | 重要遺跡範<br>囲確認調査 | 確認調査         |                            | 2<br>(随時)  | 不明               |                         |                            | 今村             |
| 11 | 麦田下遺跡             | 大崎町  | 農地整備課 | 県営農村総<br>合整備事業 | 報告書          | —                          | 10<br>(随時) | 弥生中期<br>～<br>古代  | 土器溜まり                   | 高付式土器, 東九州系土<br>器, 西南四国系土器 | 今村             |
| 12 | 高久田A遺跡            |      |       |                | 整理           | —                          |            | 縄文晩期<br>～<br>古墳  | 竪穴住居跡                   | 刻目突帯文<br>中津野式<br>東原式       | 今村             |

平成25年度 発掘調査・整理作業を行った遺跡

(公財)埋蔵文化財調査センター 東九州自動車道関係

| No | 遺跡名 | 所在地                    | 起回事業      | 事業主体                                      | 調査の種類      | 調査対象<br>表面積(m <sup>2</sup> ) | 調査<br>期間        | 時代                                                                                                                                                                                                                                                                       | 遺構                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         | 遺物                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                | 担当者                                                  |
|----|-----|------------------------|-----------|-------------------------------------------|------------|------------------------------|-----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 1  | 天神段 | 曾於郡大崎町<br>野方7233<br>ほか | 東九州自動車道建設 | 国土交通省<br>九州地方<br>整備局<br><br>大隅河川<br>国道事務所 | 記録保存<br>調査 | 19,042                       | 4月<br>～<br>10月  | 旧石器<br>(XI層)<br>縄文早期<br>(VII層)<br>縄文早期<br>(VI層)<br>縄文前期<br>(V層)<br>縄文晩期<br>(IVb層)<br>弥生中期<br>(IVa層)<br>古代(IIIb層)<br>中世(IIIa層)<br>近世以降                                                                                                                                    | 集石2基, 土坑3基, 連穴<br>土坑1基<br>集石10基, 石器集積遺構1<br>基<br>集石1基<br>土坑13基<br>土坑6基, 住居状遺構2<br>基, 柱穴25基<br>土坑24基, 溝状遺構10条,<br>柱穴97基<br>土坑2基                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | フレイク, チップ<br>加葉山式土器, 磨製石鏃,<br>打製石鏃<br>下剥峯式土器, 桑ノ丸式土<br>器, 押型文土器, 手向山式<br>土器, 平椀式土器, 塞ノ神<br>式土器, 打製石鏃, 磨製石<br>斧, 石皿, 磨石・敲石<br>管畑式土器, 条痕文土器<br>入佐式土器, 扁平打製石<br>斧, 打製石鏃, 石皿, 敲<br>石・磨石<br>入来式土器<br>土師器, 須恵器, 鉄滓<br>土師器(皿), 青磁, 白磁<br>中国産陶器, 東播系須恵<br>器, 滑石製品<br>薩摩焼, 染付                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              | 平木場<br>田畑<br>岩元<br>深川                                |
|    |     |                        |           |                                           | 整理         |                              | H19<br>～<br>H25 | 旧石器(ナイフ<br>形石器文化期)<br>(XV・XVI層)<br>旧石器<br>(小型ナイフ形<br>石器文化期)<br>(XI・XII層)<br>旧石器(細石刃<br>文化期)(IX・X<br>層)<br>縄文草創期(IX<br>層)<br>縄文早期<br>(前半)<br>(VII層)<br>縄文早期<br>(後半)<br>(VI層)<br>縄文前中期<br>(V層)<br>縄文後晩期<br>(IV層)<br>弥生<br>(III・IV層)<br>古代<br>(III層)<br>中世(III層)<br>近世(II層) | 礫群2基, 炭化物集中部1<br>か所<br>礫群10基, 石核集積1基,<br>ブロック15か所以上<br>ブロック30か所以上<br>縦穴状遺構9基, 落し穴3<br>基, 連穴土坑33基, 集石遺<br>構152基, 土器埋納遺構6<br>基, 土坑136基, 土器集中<br>区2か所, チップ集中区1<br>か所<br>集石176基, 土坑38基,<br>チップ集中区2か所, 石器<br>集積遺構2基, 土器埋納遺<br>構1基<br>落し穴2基, 集石遺構23<br>基, 土坑15基, 石斧集積遺<br>構1<br>縦穴住居跡1軒, 落し穴6<br>基, 集石遺構22基, 土坑<br>157基, チップ集中区1か<br>所, ビット4基<br>縦穴住居跡2軒<br>掘立柱建物跡7棟, 土坑94基, ビット<br>663基, 焼土跡2基, 炉跡2<br>基, 土器集中2か所<br>掘立柱建物跡48棟, 土壇<br>墓8基, 溝・古道40条, 炉跡<br>1基, 鍛冶炉1基, 土坑111<br>基, ビット485基, 畝状遺構<br>1基<br>土坑7基, ビット1基, 畝状<br>遺構1基 | 小型ナイフ形石器, 小型台<br>形石器, 尖頭器, 石核, ハ<br>ンマー<br>細石刃, 細石刃核, 剥片,<br>ハンマー<br>土器片, 石鏃<br>前平式, 志風頭式, 加葉山<br>式, 石坂式, 倉園B式, 中<br>原式, 円筒条痕文土器, 種<br>子炭化物, 鱗茎状炭化物,<br>石鏃, 石斧, 礫器, 石錘,<br>磨石, 石皿, 軽石製品<br>下剥峯式, 辻タイプ, 桑ノ<br>丸式, 押型文, 変形擦糸<br>文, 手向山式, 妙見・天<br>童ヶ尾式, 平椀式, 塞ノ神<br>式, 苦浜式, 早期末条痕<br>文, 耳栓状土製品, 土製加<br>工品(メンコ), 石鏃, 尖頭<br>状石器, 石匙, 楔形石器,<br>トトロ石器, 石斧, 磨石,<br>石皿, 礫器, 軽石製品<br>管畑式, 深浦式, 船元式,<br>春日式, 石鏃, 石匙, 石<br>剣, 石斧, 磨石, 石皿, 削<br>器, 装飾品, 楔形石器<br>入佐式, 黒川式, 干河原段<br>階, 石鏃, 扁平打製石斧,<br>削器, 楔形石器<br>刻目突蒂文土器, 入来式<br>土器, 松木菌式土器, 磨製<br>石鏃, 磨石, 軽石加工品<br>土師器, 土師甕, 墨書土<br>器, 刻書土器, 須恵器, 焼<br>塩土器, 紡錘車, 鍛造剥<br>片, 砥石, 軽石加工品<br>青磁, 白磁, 青白磁, 土師<br>器, 東播系須恵器, 黒色土<br>器, 陶器, 瓦器, 鏡, 鉄製<br>品, 鉄片, 古銭, 滑石製石<br>鍋, 滑石製品<br>陶器, 磁器, 煙管(キセル) | 平木場<br>田畑<br>松下<br>井手上<br>花園<br>岩元<br>花田<br>江神<br>深川 |



## (公財)埋蔵文化財調査センター 東九州自動車道関係

| No   | 遺跡名          | 所在地                        | 起回事業      | 事業主体                                  | 調査の種類      | 調査対象<br>表面積(m <sup>2</sup> ) | 調査<br>期間      | 時代                                  | 遺構                                                                                                                             | 遺物                                                                                                                         | 担当者       |
|------|--------------|----------------------------|-----------|---------------------------------------|------------|------------------------------|---------------|-------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| 6    | 永吉<br>天神段    | 曾於郡<br>大崎町永吉<br>34-5ほか     | 東九州自動車道建設 | 国土交通省<br>九州地方<br>整備局<br>大隅河川<br>国道事務所 | 記録保存<br>調査 | 37.100                       | 6月<br>～<br>1月 | 旧石器                                 | 礫群1基・ブロック4か所                                                                                                                   | 剥片尖頭器, ナイフ形石器, 三稜尖頭器, 台形様石器, 叩石, 石核, 剥片                                                                                    | 湯場崎<br>彌栄 |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              |               | 縄文早期                                | 集石68基, 土器集中2か所                                                                                                                 | 前平式土器, 加栗山式土器, 下剥峯式土器・手向山式土器, 塞ノ神B式土器, 苦浜式土器, 条痕文土器, 轟A式土器, 石鏃, 打製石斧, 磨製石斧, 石皿, 台石, 敲石, 磨石, 石匙                             |           |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              |               | 縄文晩期                                | 落し穴2基, 土坑1基                                                                                                                    |                                                                                                                            |           |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              |               | 弥生                                  | 掘立柱建物跡13棟, サークル状柱穴遺構4基, 溝状遺構1条, 竪穴住居跡16軒                                                                                       | 入来式土器, 凹線文土器, 山ノ口式土器, 丹塗り土器, 磨製石鏃, 磨製石製品(石剣), 石包丁, 敲石, 土製勾玉3個, 鉄製品, 石英, 剥片, 破片                                             |           |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              |               | 古墳                                  | 土坑4基, 竪穴住居跡3基                                                                                                                  | 成川式土器(東原期)                                                                                                                 |           |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              |               | 中世                                  | 土坑墓3基, 掘立柱建物跡3軒・溝状遺構3条                                                                                                         | 白磁, 湖州六花鏡, 青磁, 羽釜ミニチュア土器, 土師器, 軽石製石製品, 備前焼, 東播系須恵器, 刀子, 滑石製石鍋                                                              |           |
| 時代不明 | 土坑3基, 溝状遺構1条 | 管玉, 打製石斧                   |           |                                       |            |                              |               |                                     |                                                                                                                                |                                                                                                                            |           |
| 7    | 荒園           | 曾於郡<br>大崎町<br>仮宿3484<br>ほか | 東九州自動車道建設 | 国土交通省<br>九州地方<br>整備局<br>大隅河川<br>国道事務所 | 記録保存<br>調査 | 16.047                       | 6月<br>～<br>1月 | 縄文早期                                | 土坑1基, 集石4基<br>フレイク・チップ集中1カ所                                                                                                    | 吉田式土器, 下剥峯式土器, 押型文土器, 平椀式土器, 塞ノ神Aa式土器, 塞ノ神Ab式土器, 塞ノ神B式土器, 苦浜式土器, 早期未条痕文土器, 壺形土器, 打製石鏃, 磨製石鏃, 異形石器, 磨製石斧, 磨石, 石皿, フレイク, チップ | 黒川        |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              |               | 縄文後期                                |                                                                                                                                | 市来式土器, 西平系土器, 石鏃, 打製石斧                                                                                                     |           |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              |               | 弥生中期後半                              | 竪穴住居跡3軒, 土坑2基                                                                                                                  | 山ノ口式土器, 磨製石鏃未製品, 砥石                                                                                                        |           |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              |               | 古墳時代                                |                                                                                                                                | 東原式土器, 須恵器                                                                                                                 |           |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              |               | 中世                                  | 掘立柱建物跡3棟, 土坑16基, 溝状遺構5条, 帯状硬化面5条, ビット                                                                                          | 土師器(皿), 東播系須恵器, 陶器, 青磁, 華南三彩?                                                                                              |           |
| 近世以降 | 帯状硬化面9条      |                            |           |                                       |            |                              |               |                                     |                                                                                                                                |                                                                                                                            |           |
| 8    | 立小野堀         | 鹿屋市<br>串良町<br>細山田字<br>立小野堀 | 東九州自動車道建設 | 国土交通省<br>九州地方<br>整備局<br>大隅河川<br>国道事務所 | 整理         | H20<br>・<br>H22<br>～<br>H24  | 縄文前期～晩期       | 土坑1基                                | 土器片(深浦・指宿・西平・市来)・石鏃・石錐                                                                                                         | 関<br>藤島<br>隈元<br>岩下<br>新屋敷<br>榎本                                                                                           |           |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              | 弥生            |                                     | 土器片(山ノ口)                                                                                                                       |                                                                                                                            |           |
|      |              |                            |           |                                       |            |                              | 古墳            | 地下式横穴墓178基(調査終了152基), 土坑墓5基, 溝状遺構1条 | 成川式土器(壺・高坏・小型丸底壺), 初期須恵器, 鉄器(剣(47振), 素環頭太刀(76号墓), 刀(10振), 鏃, 大型鏃(286本), 釧(1点), 刀子(8振), 鐔(13点), 鉞(1点), 鋌(1点)青銅製鈴(10点), 人骨(約20体) |                                                                                                                            |           |

平成25年度 発掘調査・整理作業・報告書作成を行った遺跡

(公財)埋蔵文化財調査センター 南九州西回り自動車道, 国道226号事業関係

| No                     | 遺跡名                                                                                                         | 所在地                                                                                                               | 起因事業                     | 事業主体                                     | 調査の種類            | 調査対象<br>表面積(m <sup>2</sup> ) | 調査<br>期間               | 時代                        | 遺構                                                                             | 遺物                                           | 担当者            |
|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|------------------------------------------|------------------|------------------------------|------------------------|---------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|----------------|
| 1                      | 中尾                                                                                                          | 出水市<br>福ノ江町                                                                                                       | 南九州<br>西回り<br>自動車道<br>建設 | 国土交通省<br>九州地方<br>整備局<br><br>鹿児島<br>国道事務所 | 記録保存<br>調査       | 2,600                        | 5月<br>~<br>9月          | 縄文晩期                      | 土坑1基                                                                           | 入佐式土器, フレーク, チップ                             | 抜水<br>川俣<br>稲垣 |
|                        |                                                                                                             |                                                                                                                   |                          |                                          | 整理               |                              | H25                    | 縄文晩期<br>古墳~中世             | 土坑1基                                                                           | 黒川式土器, 黒曜石剥片<br>等<br>土器, 陶磁器                 |                |
|                        | 前原                                                                                                          | 出水市<br>下知識町                                                                                                       |                          |                                          | 記録保存<br>調査       | 1,550                        | 5月<br>~<br>9月          | 縄文後期<br>~弥生後期<br>時代不明     | 土坑3基<br>集石1基<br>礫集中遺構1基, 溝状遺構<br>4条                                            | 市来式, 磨消縄文, 黒川<br>式, 松木園式土器, 磨石,<br>磨製石斧, チップ |                |
|                        |                                                                                                             |                                                                                                                   |                          |                                          | 整理               |                              | H25<br>~               | 縄文<br>古墳<br>古代~中世<br>時代不明 | 集石1基<br>土坑3基<br>溝跡4条, 礫集中遺構1基                                                  | 後期土器, 黒川式土器<br>中津野式土器<br>土器, 陶磁器             |                |
| 2                      | 岩本麓                                                                                                         | 指宿市岩本                                                                                                             | 国道226号<br>岩本交差点<br>改良    | 記録保存<br>調査                               | 230              | 8月                           | 縄文晩期<br>~弥生中期<br>古代~中世 | 溝状遺構1条, ビット3基             | 入佐式, 黒川式, 突帯文,<br>高橋Ⅰ・Ⅱ式, 入来Ⅰ式土<br>器, 石皿, 磨石, 敲石, 石<br>鏃<br>土師器, 須恵器, 陶磁器      | 藤島<br>黒木<br>寺原                               |                |
| 3                      | 中郡<br>遺跡群                                                                                                   | 出水市野田町<br>下名・屋地                                                                                                   | 南九州<br>西回り<br>自動車道<br>建設 | 報告書<br>調セ<br>(1)                         | 報告書<br>調セ<br>(2) | H21<br>H24                   | 旧石器時代<br>ナイフ形石器<br>文化期 | 礫群1基                      | ナイフ形石器, 台形石器,<br>チップ                                                           | 長野<br>黒木<br>原森                               |                |
| 縄文早期                   | 土坑6基<br>集石11基<br>落とし穴状遺構5基<br>横転内礫集中3基                                                                      | 石坂式, 中原式, 押型文,<br>塞ノ神式土器, 磨石, 敲<br>石, 石皿, 打製石斧, 磨製<br>石斧, 打製石鏃ほか                                                  |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 縄文前期<br>~晩期<br>弥生・古墳時代 |                                                                                                             | 縄式, 入佐式, 黒川式土器<br>ほか<br>弥生, 成川式土器, 須恵器<br>ほか                                                                      |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 古代                     | 埋納土器遺構1基                                                                                                    | 土師器(碗, 坏, 甕), 須恵<br>器(甕, 壺), 布目瓦ほか                                                                                |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 中世                     | 掘立柱建物跡5棟, 竪穴建<br>物跡5基, 竪穴状遺構1<br>基, 土坑20基, 土坑状遺構<br>7基, 大型土坑状遺構3<br>基, 堀跡2条, 溝状遺構12<br>条, 杭列跡1条, 道状遺構<br>1条 | 土師器(坏, 皿), 須恵器,<br>瓦質土器(捏鉢, 捏鉢), 青<br>白磁龍首水注, 白磁(碗・<br>皿, 四耳壺), 青磁(碗,<br>皿, 水注等), 褐釉壺, 黄<br>褐釉盤, 中国陶器, 国産陶<br>器ほか |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 近世                     | 溝状遺構3条                                                                                                      | 陶磁器等                                                                                                              |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 4                      | 堀之内                                                                                                         | 薩摩川内市<br>青山町                                                                                                      | 南九州<br>西回り<br>自動車道<br>建設 | 報告書<br>調セ<br>(2)                         | 報告書<br>調セ<br>(2) | H21<br>~<br>H24              | 旧石器時代                  |                           | 石核, ブランク, ナイフ形石<br>器, 石刃, 細石刃核, 細石<br>刃, 切断剥片, 三稜尖頭<br>器, スクレイパー類, 使用<br>痕剥片ほか | 森<br>長野<br>川俣                                |                |
| 縄文早期                   | 【検出面】<br>Ⅵ~Ⅳ層<br>集石3基<br>土坑(落とし穴状遺構含む)6<br>基                                                                | 前平式, 吉田式, 石坂式,<br>中原式, 手向山式土器, 石<br>鏃, 石匙, 打製石斧, 磨製<br>石斧, 磨石・敲石類, 石<br>皿, 台石類ほか                                  |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 縄文前期<br>~晩期            | Ⅲa層<br>集石3基<br>土坑11基<br>柱穴                                                                                  | 縄式, 菅畑式, 深浦式, 阿<br>高式, 松山式, 市来式土<br>器, 打製石斧, 磨製石斧,<br>石匙, 石鏃, スクレイパー<br>類, 磨石・敲石類ほか                               |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 弥生時代                   | Ⅱ層<br>炉跡を伴う大型土坑状遺<br>構1基<br>溝跡6条<br>柱穴                                                                      | 黒髪式, 松木園式土器                                                                                                       |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 古墳時代                   |                                                                                                             | 成川式土器(中津野~東<br>原)                                                                                                 |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 古代                     |                                                                                                             | 土師器, 須恵器ほか                                                                                                        |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 中世                     |                                                                                                             | 土師器, 陶磁器ほか                                                                                                        |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |
| 近世                     |                                                                                                             | 薩摩焼, 陶器ほか                                                                                                         |                          |                                          |                  |                              |                        |                           |                                                                                |                                              |                |

平成25年度 資料調査、貸出等

・資料調査受け入れ数

| 大学等(件) | 行政(件) | 学生(件) | 企業(件) | 一般(件) | 合計(件) |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 11     | 8     | 5     | 0     | 4     | 28    |

調査遺跡数 約60遺跡  
調査遺物数 約3,700点

・写真・図版貸出数

| 博物館等(件) | 行政(件) | 大学(件) | 小学校(件) | 出版社(件) | 新聞社(件) | 企業(件) | 一般(件) | 合計(件) |
|---------|-------|-------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|
| 6       | 8     | 1     | 1      | 13     | 2      | 6     | 4     | 41    |

遺跡数 50遺跡  
点数 170点

・遺物等資料貸出数(年度更新(継続借用)資料13件を含む)

| 博物館等(件) | 大学等(件) | 件数合計 | 遺物合計 | 主な貸出先                                |
|---------|--------|------|------|--------------------------------------|
| 17      | 4      | 21件  | 866点 | 国立歴史民族博物館、九州国立博物館、九州歴史資料館、黎明館、県立博物館等 |

平成25年度 ホームページ(<http://www.jomon-no-mori.jp>)アクセス数

| 月     | 4月    | 5月    | 6月    | 7月    | 8月    | 9月    | 10月   | 11月   | 12月   | 1月    | 2月    | 3月    | 合計     |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| アクセス数 | 3,626 | 5,261 | 2,657 | 3,025 | 3,481 | 2,936 | 3,431 | 2,784 | 2,000 | 2,466 | 2,245 | 3,058 | 36,970 |

平成25年度 データベース登録数

| No       | 登録遺跡名 | 登録遺物    |         | 登録遺構  |      |     |
|----------|-------|---------|---------|-------|------|-----|
|          |       | 登録実測図   | 登録写真    | 登録実測図 | 登録写真 |     |
| 1        | 川上城跡  | 656     | 127     | 29    | 19   |     |
| 2        | 稲荷山遺跡 | 386     | 190     | 17    | 12   |     |
| 3        | 宇都上遺跡 | 85      | 45      | 2     | 1    |     |
| 4        | 早山遺跡  | 0       | 0       | 0     | 0    |     |
| 5        | 鎮守山遺跡 | 314     | 94      | 25    | 24   |     |
| 6        | 芝原遺跡4 | 1093    | 433     | 65    | 36   |     |
| 7        | 山口遺跡  | 1110    | 479     | 125   | 26   |     |
| 平成25年度合計 |       | 遺跡数：7   | 3,644   | 1,368 | 263  | 118 |
| 累計       |       | 遺跡数：406 | 532,462 |       |      |     |

平成25年度 分析・保存処理点数(処理が完了した遺物数)

| No | 処理名       | 処理点数 | 遺跡名                            |
|----|-----------|------|--------------------------------|
| 1  | 金属器処理     | 265  | 川上城跡、芝原遺跡、山口遺跡ほか               |
| 2  | 木器処理      | 169  | 虎居城跡、南下遺跡ほか                    |
| 3  | 分析(赤色顔料等) | 87   | 立小野堀遺跡、永吉天神段遺跡、加治木堀遺跡、前原和田遺跡ほか |

平成25年度 研修等

・埋蔵文化財専門職員養成講座

| No | 講座名                  | 実施日              | 対象者                                        | 参加者                |
|----|----------------------|------------------|--------------------------------------------|--------------------|
| 1  | 初級講座(考古学講座と体験学習)     | 平成25年8月22日～8月23日 | 市町村教育委員会の専門職員以外の職員                         | 4市町村5名             |
| 2  | 中級講座(長研者フォローアップ研修講座) | 平成25年8月8日～8月9日   | 市町村教育委員会の職員で、長期研修講座を修了した職員及び(公財)調査センター職員   | 5市町村11名、公財2名、計13名  |
| 3  | 上級講座(技術研修講座)         | 平成26年1月16日～1月17日 | 市町村教育委員会の埋蔵文化財の発掘調査に従事する専門職員及び(公財)調査センター職員 | 17市町村37名、公財9名、計46名 |
| 合計 |                      |                  |                                            | 26市町村53名、計64名      |

・教員の研修講座

| No | 講座名                                | 実施日                                | 対象者    | 参加者                   |
|----|------------------------------------|------------------------------------|--------|-----------------------|
| 1  | フレッシュ研修「鹿児島考古体験講座」                 | 平成25年8月22日～8月23日                   | 初任者    | 2名                    |
| 2  | パワーアップ研修(10年経験者研修)「見て触って活用する埋蔵文化財」 | 平成25年7月25日～7月26日<br>平成25年8月1日～8月2日 | 10年経験者 | 小・特・養・栄：9名<br>中・高：10名 |
| 合計 |                                    |                                    |        | 21名                   |

平成25年度 普及・啓発関係

・かごしま遺跡フォーラム2013「北と南の縄文文化」開催

| 日付          | 会場       | 参加者数 | 内容                                 |
|-------------|----------|------|------------------------------------|
| 平成25年10月26日 | 鹿児島県立図書館 | 120  | 北と南の縄文文化(北と南の発掘調査報告、北と南の縄文文化、質疑応答) |

・サテライト展

| 日付              | 会場             | 内容                                         |
|-----------------|----------------|--------------------------------------------|
| 平成25年5月17日～6月6日 | かごしま県民交流センター2階 | 県立埋蔵文化財センターの業務紹介、(公財)埋蔵文化財調査センター発足などのパネル展示 |

・発掘調査現地説明会((公財)埋蔵文化財調査センター実施)

| 日付          | 遺跡名         | 場所  | 参加者数 | 内容                         |
|-------------|-------------|-----|------|----------------------------|
| 平成25年10月12日 | (公財)町田堀遺跡   | 鹿屋市 | 400名 | 遺跡概要説明、遺跡見学、パネル・遺物の展示      |
| 平成25年11月9日  | (公財)永吉天神段遺跡 | 大崎町 | 310名 | 遺跡概要説明、遺跡見学、パネル・遺物の展示、発掘体験 |

合計 710名

・発掘体験等

| No | 遺跡名   | 場所   | 期 日        | 学 校 名 等          | 内 容       | 員 数 |
|----|-------|------|------------|------------------|-----------|-----|
| 1  | 高付遺跡  | 南九州市 | 平成25年5月14日 | ホームステイ事業(京都府中学生) | 発掘体験      | 3名  |
| 2  | 見帰遺跡  | 志布志市 | 平成25年5月16日 | 志布志中学校           | 見学、測量体験   | 4名  |
| 3  | 高付遺跡  | 志布志市 | 平成25年5月17日 | ホームステイ事業(岡山県中学生) | 発掘体験      | 9名  |
| 4  | 見帰遺跡  | 志布志市 | 平成25年6月20日 | 宇都中学校            | 発掘体験      | 2名  |
| 5  | 見帰遺跡  | 志布志市 | 平成25年7月5日  | 串良商業高校           | 発掘体験・測量体験 | 3名  |
| 6  | 見帰遺跡  | 志布志市 | 平成25年8月6日  | 協和小学校            | 発掘体験      | 6名  |
| 7  | 山ノ口遺跡 | 志布志市 | 平成25年11月7日 | 伊崎田小学校           | 発掘体験      | 40名 |
| 8  | 高付遺跡  | 南九州市 | 平成26年1月14日 | 川辺史談会            | 見学        | 20名 |

合計 8件 87名

(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター実施分

|    |            |     |             |                        |           |     |
|----|------------|-----|-------------|------------------------|-----------|-----|
| 1  | 天神段遺跡      | 大崎町 | 平成25年5月21日  | 大崎町立野方小学校              | 遺跡見学、発掘体験 | 33名 |
| 2  | 田原迫ノ上遺跡    | 鹿屋市 | 平成25年6月6日   | 鹿屋市立細山田中学校             | 遺跡見学      | 36名 |
| 3  | 天神段遺跡      | 大崎町 | 平成25年7月17日  | 野方いきいき講座               | 遺跡見学      | 18名 |
| 4  | 永吉天神段遺跡    | 大崎町 | 平成25年6月8日   | チャレンジ遺跡発掘体験&キャンプ泊(始良市) | 遺跡見学・発掘体験 | 34名 |
| 5  | 荒園遺跡       | 大崎町 | 平成25年8月2日   | キッズセミナーおおさき子歴史探検隊      | 遺跡見学・発掘体験 | 15名 |
| 6  | 田原迫ノ上遺跡    | 鹿屋市 | 平成25年8月6日   | 鹿屋市文化財ウォッチング           | 遺跡見学・発掘体験 | 20名 |
| 7  | 永吉天神段遺跡    | 大崎町 | 平成25年8月6日   | 霧島市文化財少年団              | 遺跡見学・発掘体験 | 15名 |
| 8  | 永吉天神段遺跡    | 大崎町 | 平成25年8月8日   | 熊本大学社会教育主事講習           | 遺跡見学      | 15名 |
| 9  | 永吉天神段遺跡    | 大崎町 | 平成25年8月9日   | 喜界町教育委員会               | 遺跡見学      | 7名  |
| 10 | 天神段遺跡      | 大崎町 | 平成25年8月19日  | 小能いきいきサロン              | 遺跡見学      | 20名 |
| 11 | 田原迫ノ上遺跡    | 鹿屋市 | 平成25年8月28日  | 宮田親子会                  | 遺跡見学・発掘体験 | 23名 |
| 12 | 永吉天神段遺跡    | 大崎町 | 平成25年10月1日  | 湧水町田尾原遺跡作業員            | 遺跡見学      | 24名 |
| 13 | 永吉天神段遺跡    | 大崎町 | 平成25年10月4日  | 志布志市有明地区高齢者学級          | 遺跡見学      | 24名 |
| 14 | 永吉天神段遺跡    | 大崎町 | 平成25年10月29日 | 大隅教育事務所社会教育行政研修会       | 遺跡見学      | 15名 |
| 15 | 町田堀遺跡      | 鹿屋市 | 平成25年11月19日 | 鹿屋市公民館講座               | 遺跡見学      | 16名 |
| 16 | 永吉天神段遺跡    | 大崎町 | 平成25年11月27日 | 曾於地区文化協会               | 遺跡見学      | 14名 |
| 17 | 荒園・永吉天神段遺跡 | 大崎町 | 平成26年1月17日  | 埋蔵文化財専門職員養成講座上級講座現地研修  | 遺跡見学      | 23名 |

合計 17件 352名

・職場体験学習・インターンシップ等

| 期日                 | 体験者    | 内容                 | 参加者数 |
|--------------------|--------|--------------------|------|
| 平成25年10月22日～10月24日 | 国分南中学校 | 職場体験学習(水洗い、注記、接合等) | 5名   |

・まいぶんキット貸出事業

|   | 貸出期間             | 市町村名  | 学校名等       | 対象 |     |     | 内容                                |
|---|------------------|-------|------------|----|-----|-----|-----------------------------------|
|   |                  |       |            | 学年 | 学級数 | 児童数 |                                   |
| 1 | 平成25年4月17日～4月24日 | 曾於市   | 柳迫小学校      | 6  | 1   | 6   | 市ノ原5地点出土品など(旧石器・縄文・弥生)、縄文土器・石器セット |
| 2 | 平成25年4月30日～5月2日  | 霧島市   | 日当山小学校     | 6  | 3   | 115 | 十三塚遺跡出土品など(縄文・弥生)、縄文土器・石器セット      |
| 3 | 平成25年4月25日～5月10日 | 薩摩川内市 | 可愛小学校      | 6  | 3   | 105 | 市ノ原5地点出土品など(旧石器・縄文・弥生)、縄文土器・石器セット |
| 4 | 平成25年4月30日～5月8日  | 鹿児島市  | 鹿児島大学附属中学校 | 1  | 1   | 40  | 縄文土器・石器セット、縄文土器レプリカ               |
| 5 | 平成25年5月8日～5月10日  | 始良市   | 加治木小学校     | 6  | 2   | 62  | 縄文土器・石器セット                        |
| 6 | 平成25年5月15日～5月22日 | 志布志市  | 田浦中学校      | 1  | 1   | 4   | 稲荷迫遺跡出土品など(縄文・弥生)、縄文土器・石器セット      |
| 7 | 平成25年5月17日～5月31日 | 喜界町   | 早町小学校      |    |     | 18  | 縄文土器・石器セット                        |

|    |                   |         |            |          |       |     |                        |
|----|-------------------|---------|------------|----------|-------|-----|------------------------|
| 8  | 平成25年5月17日～7月22日  | 瀬戸内町    | 俵中学校       | 1～3      | 3     | 8   | 縄文土器・石器セット             |
| 9  | 平成25年5月18日～5月25日  | 鹿児島市    | 鹿児島大学附属中学校 | 1        | 1     | 40  | 縄文土器・石器セット、縄文土器レプリカ    |
| 10 | 平成25年4月12日        | 出水市     | 下水流小学校     | 6        | 2     | 44  | 縄文土器・石器セット             |
| 11 | 平成25年4月19日        | 垂水市     | 協和小学校      | 6        | 1     | 15  | 縄文土器・石器セット             |
| 12 | 平成25年4月23日        | 出水市     | 米ノ津東小学校    | 6        | 2     | 71  | 縄文土器・石器セット、大坪遺跡出土品(縄文) |
| 13 | 平成25年4月25日        | 鹿児島市    | 武岡小学校      | 6        | 2     | 32  | 縄文土器・石器セット             |
| 14 | 平成25年4月26日        | いちき串木野市 | 生福小学校      | 6        | 1     | 30  | 縄文土器・石器セット             |
| 15 | 平成25年5月14日        | 南さつま市   | 玉林小学校      | 5,6      | 2     | 15  | 縄文土器・石器セット             |
| 16 | 平成25年5月18日        | 長島町     | 城川内小学校     | 6        | 1     | 15  | 縄文土器・石器セット             |
| 17 | 平成25年5月16日～5月17日  | 霧島市     | 牧ノ原小学校     | 6        | 1     | 34  | 縄文土器・石器セット             |
| 18 | 平成25年5月25日～6月2日   | 鹿児島市    | 宮小学校       | 6        | 1     | 14  | 縄文土器・石器セット             |
| 19 | 平成25年6月4日～6月11日   | 霧島市     | 舞鶴中学校      | 1        |       | 284 | 縄文・弥生土器・石器             |
| 20 | 平成25年7月3日～7月10日   | 霧島市     | 霧島高校       | 2,3      |       | 125 | 縄文・弥生土器・石器             |
| 21 | 平成25年7月30日        | 始良市     | 始良市働く女性の家  |          |       | 30  | 縄文土器・石器セット             |
| 22 | 平成25年8月20日～8月30日  | 鹿児島市    | 甲南高校       | 2        | 2     | 75  | 縄文土器・石器セット             |
| 23 | 平成25年9月7日         | 鹿児島市    | 松原海の子教室    |          |       | 20  | 縄文土器・石器セット             |
| 24 | 平成25年11月5日～11月18日 | 天城町     | 天城中学校      | 1        | 1     | 37  | 縄文土器・石器セット             |
| 25 | 平成26年1月10日～1月16日  | 曾於市     | 柳迫小学校      |          |       | 9   | 石器セット                  |
| 合計 |                   |         |            | 23校, 2団体 | 1248名 |     |                        |

平成25年度 刊行物等

・鹿児島県立埋蔵文化財センター発行 発掘調査報告書(各300部刊行)

| No | シリーズ番号 | 発掘調査報告書名   | 所在地      | 執筆担当                              | 発行月     |
|----|--------|------------|----------|-----------------------------------|---------|
| 1  | 180    | 船迫遺跡・高吉B遺跡 | 志布志市志布志町 | 井口俊二, 岡本貢一, 小林晋也, 堂込秀人, 東和幸, 楸田岳志 | 平成26年3月 |
| 2  | 181    | 前原和田遺跡     | 霧島市福山町   | 有馬孝一, 吉元輝幸                        | 平成26年3月 |
| 3  | 182    | カメコ遺跡      | 大島郡伊仙町   | 有馬孝一, 岡本貢一                        | 平成26年3月 |

・(公財)埋蔵文化財調査センター発行 発掘調査報告書(各300部刊行)

|   |   |       |        |                                             |         |
|---|---|-------|--------|---------------------------------------------|---------|
| 1 | 1 | 中郡遺跡群 | 出水市野田町 | 長野眞一, 寺原徹, 森幸一郎, 黒木梨絵                       | 平成26年3月 |
| 2 | 2 | 堀之内遺跡 | 薩摩川内市  | 森幸一郎, 長野眞一, 川俣唱子<br>(株)九州文化財研究所(稲富陽子, 鮫島伸吾) | 平成26年3月 |

・埋文日より(各2400部発行)

| No | シリーズ番号 | 内容                                                                                                                                                      | 発行日         |
|----|--------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 1  | 61号    | 遠方からもたらされた弥生時代の土器(高吉B遺跡), 平成24年度かごしまの遺跡情報, 本物で学ぼう!「まいぶんキット貸出事業」, 気仙沼便り～東日本大震災復興支援調査支援員から～, 平成25年度発掘調査予定遺跡位置図                                            | 平成25年6月14日  |
| 2  | 62号    | 不思議な埋め方(町田堀遺跡), 発掘速報!, ふれる・感じる・体験する～考古学の世界～フレッシュ研修, パワーアップ研修, 文化財研修講座, 埋蔵文化財専門職員養成講座(中級・初級), 発掘現場によこそ!, 職場体験学・職場見学, 縄文の森不思議探検, 第37回企画展, かごしま遺跡フォーラム2013 | 平成25年10月23日 |
| 3  | 63号    | 竪穴住居と連穴土坑の切り合い発見, 平成25年度遺跡の発掘調査, ふれて・学んで・感じた埋蔵文化財, まいぶんキット貸出事業ほか, 若手だより②～北の縄文文化にふれて～, かごしま遺跡フォーラム2013ほか                                                 | 平成26年2月14日  |

・かごしま遺跡フォーラム2013「北と南の縄文文化」資料集

| 内容                                                                                                                                                                                                                     | 発行日         |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| ・南の発掘調査報告(見婦遺跡:武安雅之文化財主事, 中津野遺跡:光永誠文化財主事, 報告書等の成果:永瀧功治文化財主事)<br>・北の発掘調査報告(宮城県気仙沼市における震災復興支援:気仙沼市教育委員会生涯学習課文化振興係主査(鹿児島県派遣) 西園勝彦)<br>・北と南の縄文文化(北の縄文文化:岩手県教育委員会事務局文化財専門員(鹿児島県派遣) 平美典, 南の縄文文化:鹿児島県立埋蔵文化財センター調査課第一調査係長 東和幸) | 平成25年10月26日 |

平成25年度 鹿児島県立埋蔵文化財センター来所者数

|    |     | 4月  | 5月  | 6月  | 7月  | 8月  | 9月  | 10月 | 11月 | 12月 | 1月  | 2月  | 3月  | 計     |       |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-------|
| 個人 | 小学生 | 24  | 17  | 5   | 52  | 220 | 9   | 45  | 10  | 10  | 10  | 1   | 29  | 432   |       |
|    | 中学生 | 4   | 1   | 0   | 4   | 25  | 5   | 2   | 1   | 1   | 0   | 0   | 0   | 43    |       |
|    | 高校生 | 8   | 1   | 0   | 1   | 9   | 11  | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 30    |       |
|    | 一般  | 289 | 215 | 169 | 317 | 354 | 244 | 230 | 266 | 228 | 231 | 254 | 343 | 3,140 |       |
|    | その他 | 32  | 0   | 0   | 21  | 52  | 0   | 15  | 0   | 0   | 43  | 0   | 0   | 163   |       |
|    | 計   | 357 | 234 | 174 | 395 | 660 | 269 | 292 | 277 | 239 | 284 | 255 | 372 | 3,808 |       |
| 団体 | 小学生 | 人員  | 0   | 460 | 0   | 60  | 125 | 76  | 428 | 61  | 0   | 0   | 0   | 1,210 |       |
|    |     | 団体  | 0   | 5   | 0   | 2   | 5   | 2   | 7   | 1   | 0   | 0   | 0   | 0     | 22    |
|    | 中学生 | 人員  | 0   | 48  | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0     | 48    |
|    |     | 団体  | 0   | 1   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0     | 1     |
|    | 高校生 | 人員  | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0     | 0     |
|    |     | 団体  | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0     | 0     |
|    | 一般  | 人員  | 0   | 18  | 34  | 26  | 24  | 64  | 98  | 161 | 0   | 0   | 23  | 0     | 448   |
|    |     | 団体  | 0   | 0   | 2   | 1   | 1   | 3   | 3   | 6   | 0   | 0   | 1   | 0     | 17    |
|    | 計   | 人員  | 0   | 526 | 34  | 86  | 149 | 140 | 526 | 222 | 0   | 0   | 23  | 0     | 1,706 |
|    |     | 団体  | 0   | 6   | 2   | 3   | 6   | 5   | 10  | 7   | 0   | 0   | 1   | 0     | 40    |
| 計  | 小学生 | 24  | 477 | 5   | 112 | 345 | 85  | 473 | 71  | 10  | 10  | 1   | 29  | 1,642 |       |
|    | 中学生 | 4   | 49  | 0   | 4   | 25  | 5   | 2   | 1   | 1   | 0   | 0   | 0   | 91    |       |
|    | 高校生 | 8   | 1   | 0   | 1   | 9   | 11  | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 30    |       |
|    | 一般  | 289 | 233 | 203 | 343 | 378 | 308 | 328 | 427 | 228 | 231 | 277 | 343 | 3,588 |       |
|    | その他 | 32  | 0   | 0   | 21  | 52  | 0   | 15  | 0   | 0   | 43  | 0   | 0   | 163   |       |
|    | 計   | 357 | 760 | 208 | 481 | 809 | 409 | 818 | 499 | 239 | 284 | 278 | 372 | 5,514 |       |

平成25年度(公財)鹿児島県上野原縄文の森との連携

・企画展・特別展関係

| No        | 開催期間                           | 企画展テーマ                                | 講演会日            | 職名・講師                                | 講演会テーマ                                       | 会場     | 講演会参加者数     | 総来函数           |
|-----------|--------------------------------|---------------------------------------|-----------------|--------------------------------------|----------------------------------------------|--------|-------------|----------------|
| 第36回企画展   | 平成25年4月19日<br>～<br>平成25年9月1日   | ～桜島大正噴火100周年記念～<br>巨大噴火と共に生きた人々       | 平成25年<br>5月11日  | NPO法人桜島ミュージアム代表<br>福島 大輔氏            | みんなに話したくなる桜島のヒミツ                             | 多目的ホール | 43          | 12,198         |
|           |                                |                                       | 平成25年<br>8月10日  | (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団<br>主任調査研究員 杉山 秀宏   | 古墳時代の火山災害により埋もれた甲と人骨<br>～群馬県渋川市金井東裏遺跡の調査例から～ | 多目的ホール | 57          |                |
| 第37回企画展   | 平成25年9月13日<br>～<br>平成25年12月1日  | 新発見！かごしまの遺跡2013<br>～県立埋蔵文化財センター発掘速報展～ | 平成25年<br>9月28日  | 埋蔵文化財センター調査課長<br>堂込 秀人               | 奄美諸島における最新の発掘調査成果                            | 多目的ホール | 39          | 6,572          |
|           |                                |                                       | 平成25年<br>11月16日 | (公財)鹿児島県埋蔵文化財調査センター<br>文化財専門員 平木場 秀男 | 速報！天神段遺跡発掘調査のあゆみ                             |        | 57          |                |
| 第38回企画展   | 平成25年12月13日<br>～<br>平成26年3月23日 | すべてはマンローからはじまった<br>～かごしま発掘調査のあゆみ～     | 平成26年<br>1月25日  | 鹿児島県考古学会 副会長<br>池畑 耕一                | 鹿児島県の発掘調査史                                   | 多目的ホール | 50          | 3,045          |
| <b>合計</b> |                                |                                       |                 |                                      |                                              |        | <b>246名</b> | <b>21,825名</b> |

・考古学講座

| No        | 開催日        | タイトル                      | 講師                               | 場所      | 参加者数        |
|-----------|------------|---------------------------|----------------------------------|---------|-------------|
| 第1回       | 平成25年5月25日 | 南九州の縄文・弥生時代               | 県立埋蔵文化財センター<br>有馬 孝一 文化財主事       | 多目的ホール  | 77          |
| 第2回       | 平成25年7月13日 | 大隅国建国と古代隼人                | 霧島市教育委員会<br>坂元 祐己 主査             | 多目的ホール  | 63          |
| 第3回       | 平成25年8月31日 | 中世山城の世界                   | 県立埋蔵文化財センター<br>永濱 功治 文化財主事       | 多目的ホール  | 56          |
| 第4回       | 平成25年11月9日 | 遺跡を見学しよう(永吉天神段遺跡 現地説明会見学) | (公財)埋蔵文化財調査センター<br>湯場崎 辰巳 文化財専門員 | 永吉天神段遺跡 | 42          |
| 第5回       | 平成26年2月8日  | 巨大噴火と共に生きた人々              | 鹿児島大学法文学部教授 森脇 広                 | 多目的ホール  | 51          |
| <b>合計</b> |            |                           |                                  |         | <b>289名</b> |

・かごしま県民大学連携講座「鹿児島島の遺跡に学ぶ」

| No        | 開催日         | タイトル         | 講師                       | 場所       | 参加者数       |
|-----------|-------------|--------------|--------------------------|----------|------------|
| 第1回       | 平成25年8月2日   | 縄文アートに挑戦     | 上野原縄文の森事業課長 内山 伸明        | 県民交流センター | 16         |
| 第2回       | 平成25年11月30日 | かごしまの歴史をたどる  | 県立埋蔵文化財センター調査課第一調査係長 東和幸 | 県民交流センター | 23         |
| 第3回       | 平成26年1月12日  | 桜島26,000年の記録 | 上野原縄文の森事業課長 内山 伸明        | 県民交流センター | 12         |
| <b>合計</b> |             |              |                          |          | <b>51名</b> |



---

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 縄文の森から 第7号

発行年月 2014年6月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <http://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久 627-1

---



Bulletion of Kagoshima  
Prefectural Archaeological Center

# From JOMON NO MORI

## No.7 CONTENTS

---

---

### 《Study Note》

Siliceous rocks from Okawara as materials for stone implements  
Kurokawa Tadahiro

Basic study of medieval embedded-pillar building in Kagoshima Prefecture  
Sagami Ikuo

A systematic designing of Kagoshima (Tsurumaru) castle town  
Higashi Kazuyuki

Results of scientific analysis on relics excavated from the Takayoshi-B site in Shibushi city  
The first section of the research department, Paleo Labo Co., Ltd. Palino Survey Co., Ltd.

Chemical Analysis of glass beads excavated from Kagoshima prefecture  
Nakai Izumi, Yanase Kazuya, Matsuzaki Mayumi, Sawamura Daichi, Nagahama Koji

Guide in social studies by practical use of local materials  
Muneoka Katsuhide

### 《Materials of Archaeological Research》

Introducing Chinaware from Southeast Asia excavated in Kamizuru site by the Manose river lower stream  
Uwatoko Makoto

Work for fair preservation and practical use of stored artifacts  
The first section of the research department

Making a replica of wooden writing tablet excavated from Kyoden Site  
The second section of the research department

---

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the 25th year in Heisei

---

---

Kagoshima Prefectural Archaeological Center  
June 2014